

蔵王町文化財調査報告書 第6集

六角遺跡

—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—

2008年（平成20年）3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

序 文

蔵王山麓の豊かな自然に恵まれた私たちの蔵王町は、大昔から大変住み良い土地だったのでしょう。私たちの足もとに埋もれている多くの遺跡が、悠久の時をこえてそのことを力づよく物語っています。

蔵王町の北東部に位置する円田盆地では、平成8年度に大規模なほ場整備事業が計画されました。事業の計画区域には多くの遺跡が含まれていたことから、文化財の保存協議が重ねられました。この結果、水田となる部分は盛土によって遺跡を保存し、道路や水路などの工事によってやむを得ず削平される部分について、平成13年度より記録保存のための発掘調査を行なうことになりました。

本書において皆さまにご報告するのは、平成18・19年度に行なった六角遺跡の発掘調査成果です。今回の調査では縄文時代の狩猟場や、古墳時代と奈良・平安時代の集落跡などが発見され、円田盆地に居住した人びとの暮らしぶり的一端が明らかになりました。また、奈良時代の初め頃には関東地方から移住してきた人びとの集落も営まれていたようです。本書にまとめられた学術的成果が、広く皆さまに活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡保存へのご理解とご協力をいただきました地元地権者の皆さま、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区、発掘調査の実施にあたりご指導をいただきました宮城県教育委員会、また発掘作業にあられました地元の皆さまに厚く御礼申し上げます。先人の残した文化遺産を町民の宝として永く後世に継承していくことは、これからのまちづくりには欠かせない大切なことです。今後とも、町民各位のご理解とご協力を念願して序といたします。

平成20年3月

蔵王町教育委員会
教育長 山田 紘

例 言

1. 本書は、蔵王町大字小村崎字六角地藏地内に所在する六角遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、経営体育成基盤整備事業の円田2期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）に伴う事前調査として宮城県大河南地方振興事務所より委託を受け、平成18・19年度に実施した。
3. 発掘調査は蔵王町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係が担当した。職員体制は下記のとおりである。

教 育 長 山田 紘

教育総務課長 我妻 一 課長補佐 平間 茂子 (H18) 阿部 宏 (H19)

文化財保護係長 佐藤洋一 主 事 鈴木 雅

文化財臨時職員 庄子善昭 小泉博明 齋藤史佳 庄子裕美 一條 隼 重森直人

4. 本書の作成は蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係が実施し、調査員全員の協議のもと佐藤洋一の協力を得て鈴木 雅が執筆・編集した。
5. 本遺跡の発掘調査および資料整理と本書の作成に際し、以下の諸氏・諸機関よりご指導・ご助言ならびにご協力を賜った。ここに記して謝意を表する（敬称略）。
菊地逸夫・佐久間光平・千葉直樹・佐藤貴志（宮城県教育庁文化財保護課）
菅原祥夫（財団法人福島県文化振興事業団）・佐藤敏幸（東松島市教育委員会）
安倍奈々子・大久保弥生（東北学院大学大学院文学研究科）
宮城県教育庁文化財保護課・宮城県大河南地方振興事務所・蔵王町土地改良区
6. 本書に掲載した遺構実測図のトレース、遺物実測図の作成およびトレース、遺物拓本、遺物写真撮影、図版レイアウトは鈴木 雅・庄子善昭・小泉博明・齋藤史佳・庄子裕美・一條 隼・重森直人が中心となり、我妻英子・岩佐若奈・近江真利子・會田亮介・小杉佐和子・小林四郎・小林美智子・佐藤貴美子（文化財整理作業員）がこれを助けた。
7. 本書の内容は、これまでに公表した本発掘調査に関わるすべての資料・報文等の内容に優先する。
8. 本発掘調査で出土した遺物および写真・図面等の記録資料については、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

凡 例

1. 本遺跡の測量原点の座標値は、日本測地系に基づく国家座標第X系による。各調査区の測量基準点の座標値は第1表に示した。なお、方位は座標北を表している。
2. 本書第3図「遺跡位置図」は、国土地理院発行の1/25,000地形図「村田」を複製して使用した。
3. 本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」（小川・竹原 2005）を参照した。
4. 本書で使用した遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
5. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
S I：竪穴住居跡、S B：掘立柱建物跡、S A：柱穴列、S D：溝跡・河川跡、S E：井戸跡、
S K：土坑・落ち穴状土坑、S X：性格不明遺構
6. 遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりで、それぞれスケールを付して示した。
遺構実測図 遺構配置図：1/600、S B・S A・S D平面図：1/100、
S I・S E・S K・S X平面図・断面図およびS B・S A・S D断面図：1/60
遺物実測図 土器：1/3、石器・石製品・金属製品：2/3
遺物集成図 土器：1/6
7. 遺物観察表および考察における土師器の説明では、成形にロクロを使用しているものを「ロクロ土師器」、使用していないものを「土師器」と表記した。
8. 本遺跡では、複数の竪穴住居跡で掘方底面に土坑状の落ち込みが確認された。これらは住居床面より下層で確認されたことから、本書ではこれを「床下土坑」と表記した。
9. 遺構実測図および遺物実測図における網点の凡例は以下のとおりである。
遺構実測図 焼面  柱・壁材痕跡  貼床 
遺物実測図 黒色処理  赤  彩 
10. 遺物観察表および遺構観察表で（ ）内の数値は残存値である。
11. 遺構観察表のカマドの説明では、付設される壁面の方位により「北カマド」のように表記した。
12. 遺構の説明および遺構観察表の方位の説明では、例えば北を基準として東に10度傾いている場合、「N - 10° - E」のように表記した。
13. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献については巻末に一括して掲載した。

調 査 要 項

遺 跡 名：六角遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号：05112 遺跡記号：U E）

所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字六角地蔵地内

調 査 原 因：経営体育成基盤整備事業 円田 2 期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）

調 査 主 体：蔵王町教育委員会

調 査 担 当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係

調 査 協 力：宮城県教育委員会

調 査 期 間：平成 18 年（2006 年）5 月 15 日～ 11 月 24 日

平成 19 年（2007 年）8 月 21 日～ 9 月 4 日

調 査 面 積：約 25,800 m²（事前調査分 16,700 m² 確認調査分 9,100 m²）

調 査 員：佐藤洋一 鈴木 雅（蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係）

庄子善昭 小泉博明 齋藤史佳 庄子裕美 一條 隼 重森直人（同文化財臨時職員）

協力調査員：菊地逸夫 佐久間光平 千葉直樹 佐藤貴志（宮城県教育庁文化財保護課）

発掘作業員：我妻英子 芦立 清 岩佐若奈 太田忠義 大庭慶志郎 會田亮介 加藤初子

加藤洋一 亀井勇二 菊地 茂 熊坂信子 小杉佐和子 後藤扶美江 小林四郎

小林美智子 佐藤和子 佐藤貴美子 佐藤恵子 佐藤照子 佐藤福治 佐藤義晴

眞貝誠一 鈴木光一 鈴木 昇 鈴木初江 鈴木 勝 竹内侑子 樋口豊一

樋口良子 福田保次 堀内 博 山岸 崇 山家次郎 横山清蔵 吉田三郎

整理作業員：我妻英子 我妻 大 岩佐若奈 近江真利子 會田亮介 小杉佐和子 小林四郎

小林美智子 佐藤かおる 佐藤貴美子

協 力：宮城県大河原地方振興事務所 蔵王町土地改良区 蔵王町小村崎区

目 次

序 文	
例言・凡例	
調査要項	
目 次	

第1章 調査にいたる経緯	1
第2章 遺跡の概要	2
1. 遺跡の位置と地理的環境	2
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	4
第3章 調査の方法と経過	7
第4章 調査の結果	10
1. 基本層序	10
2. 発見された遺構と遺物	10
(1) S1区・・ 11 (5) N2区・・ 67 (9) N6区・・ 111 (13) N10区・・ 149	
(2) S2区・・ 50 (6) N3区・・ 104 (10) N7区・・ 126 (14) その他の出土遺物・・ 150	
(3) S3区・・ 50 (7) N4区・・ 104 (11) N8区・・ 127	
(4) N1区・・ 63 (8) N5区・・ 109 (12) N9区・・ 133	
第5章 考 察	162
1. 遺物	162
2. 遺構	172
3. 旧地形と集落形成の様相	181
第6章 まとめ	183

引用・参考文献	
遺構観察表	
写真図版	
解 説	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	青麻山展望台より北東に円田盆地を望む	1	第54図	SK619土坑	46
第2図	遺跡の位置と周辺の地形	2	第55図	SK625土坑	47
第3図	六角遺跡と周辺の遺跡	3	第56図	SK626土坑	47
第4図	遺跡遠景(南東から)	8	第57図	SK628土坑	48
第5図	表土除去作業	8	第58図	SK628土坑出土遺物	48
第6図	発掘作業	8	第59図	SX623性格不明遺構	49
第7図	現地説明会	8	第60図	S2北・S3西・中・東区遺構配置図	51
第8図	仙南地域の農業農村めぐり	8	第61図	SI91竪穴住居跡	53
第9図	整理作業	8	第62図	SI91竪穴住居跡出土遺物	54
第10図	調査区配置図	9	第63図	SB66掘立柱建物跡	55
第11図	S1東区遺構配置図	11	第64図	SB67掘立柱建物跡	56
第12図	SI1・SI9竪穴住居跡	12	第65図	SB68掘立柱建物跡	57
第13図	SI1竪穴住居跡出土遺物	12	第66図	SB72掘立柱建物跡	57
第14図	SI中・西・南区遺構配置図	13	第67図	SB95掘立柱建物跡	58
第15図	SI2竪穴住居跡	15	第68図	SA96柱列跡	59
第16図	SI2竪穴住居跡出土遺物	15	第69図	SK56土坑	60
第17図	SI9竪穴住居跡出土遺物	17	第70図	SK61土坑	60
第18図	SI601竪穴住居跡(1)	18	第71図	SK64土坑	60
第19図	SI601竪穴住居跡(2)	19	第72図	SK81土坑	60
第20図	SI601竪穴住居跡出土遺物	20	第73図	SD55溝跡	62
第21図	SI602竪穴住居跡	22	第74図	SD73・SD74・SD75溝跡	62
第22図	SI602竪穴住居跡出土遺物	22	第75図	N1北・南、N2西・中・南区遺構配置図	65
第23図	SI603竪穴住居跡	23	第76図	SI305竪穴住居跡出土遺物	64
第24図	SI603竪穴住居跡出土遺物	23	第77図	SB306掘立柱建物跡	64
第25図	SI609竪穴住居跡	25	第78図	N2東区遺構配置図	68
第26図	SI609竪穴住居跡出土遺物	25	第79図	SI201a竪穴住居跡・SD205溝跡	69
第27図	SI621竪穴住居跡	26	第80図	SI201b竪穴住居跡(1)	70
第28図	SI621竪穴住居跡出土遺物	27	第81図	SI201b竪穴住居跡(2)	71
第29図	SI633竪穴住居跡	29	第82図	SI201b竪穴住居跡出土遺物	71
第30図	SI633竪穴住居跡出土遺物	29	第83図	SI201b竪穴住居跡(3)	72
第31図	SI634竪穴住居跡(1)	31	第84図	SI209竪穴住居跡	74
第32図	SI634竪穴住居跡(2)	32	第85図	SI210・SI261竪穴住居跡	75
第33図	SI634竪穴住居跡出土遺物	32	第86図	SI210竪穴住居跡出土遺物	76
第34図	SI635竪穴住居跡	33	第87図	SI212竪穴住居跡	77
第35図	SI645竪穴住居跡	34	第88図	SI222竪穴住居跡	79
第36図	SB11掘立柱建物跡	35	第89図	SI222竪穴住居跡出土遺物	80
第37図	SB12掘立柱建物跡	36	第90図	SI223竪穴住居跡	81
第38図	SB615掘立柱建物跡	37	第91図	SI223竪穴住居跡出土遺物	83
第39図	SB616掘立柱建物跡	38	第92図	SI225竪穴住居跡出土遺物	83
第40図	SB636掘立柱建物跡	39	第93図	SI230竪穴住居跡	84
第41図	SB643掘立柱建物跡	39	第94図	SI230竪穴住居跡出土遺物	84
第42図	SB650掘立柱建物跡	40	第95図	SI231竪穴住居跡	85
第43図	SB655掘立柱建物跡	41	第96図	SI231竪穴住居跡出土遺物(1)	86
第44図	SB657掘立柱建物跡	41	第97図	SI231竪穴住居跡出土遺物(2)	87
第45図	SA10柱列跡	42	第98図	SB235a・b掘立柱建物跡	89
第46図	SK29落し穴状遺構	43	第99図	SB239掘立柱建物跡	89
第47図	SK30落し穴状遺構	43	第100図	SB251a・b掘立柱建物跡	90
第48図	SK33落し穴状遺構	43	第101図	SB256掘立柱建物跡	91
第49図	SK38落し穴状遺構	43	第102図	SA203柱列跡	91
第50図	SK36土坑	45	第103図	SA253柱列跡	92
第51図	SK610土坑	46	第104図	SA254柱列跡	92
第52図	SK624土坑	46	第105図	SK216落し穴状遺構	93
第53図	SK610土坑出土遺物	46	第106図	SK217落し穴状遺構	93

第107回	SK258落し穴遺構	94	第154回	SI755竪穴住居跡	131
第108回	SK224土坑	95	第155回	SI755竪穴住居跡出土遺物	131
第109回	SK224土坑出土遺物	95	第156回	SK759土坑	132
第110回	SK236土坑	96	第157回	SD754大溝跡	132
第111回	SK243土坑	96	第158回	SK759土坑出土遺物	132
第112回	SD202溝跡	97	第159回	N9南区遺構配置図	133
第113回	SD206大溝跡	97	第160回	N9北・中区遺構配置図	134
第114回	SD206大溝跡出土遺物	98	第161回	SI553竪穴住居跡	135
第115回	SD228大溝跡	99	第162回	SI554a竪穴住居跡(1)	136
第116回	SD228a大溝跡出土遺物	100	第163回	SI554a竪穴住居跡(2)	137
第117回	SD228b大溝跡出土遺物	100	第164回	SI554a竪穴住居跡(3)	138
第118回	SD228a・b大溝跡、SD801大溝跡(1)	101	第165回	SI554b竪穴住居跡(1)	139
第119回	SD228a・b大溝跡、SD801大溝跡(2)	102	第166回	SI554b竪穴住居跡(2)	140
第120回	SD228a・b大溝跡出土遺物	103	第167回	SI554c竪穴住居跡(1)	142
第121回	SI811竪穴住居跡出土遺物	104	第168回	SI554c竪穴住居跡(2)	143
第122回	N4中・南区遺構配置図	105	第169回	SI554a・c竪穴住居跡出土遺物	143
第123回	SI701竪穴住居跡(1)	106	第170回	SB569掘立柱建物跡	145
第124回	SI701竪穴住居跡出土遺物	107	第171回	SB570掘立柱建物跡	145
第125回	SI701竪穴住居跡(2)	107	第172回	SK501土坑	146
第126回	SA707柱列跡	108	第173回	SK547土坑	146
第127回	SK703落し穴状土坑	109	第174回	SA568柱列跡	146
第128回	SD354大溝跡	109	第175回	SK548土坑	147
第129回	N5北・南区、N6東区遺構配置図	110	第176回	SK567土坑	147
第130回	N6西区遺構配置図	110	第177回	SD555・556・557溝跡	148
第131回	SI424竪穴住居跡(1)	112	第178回	N10区遺構配置図	149
第132回	SI424竪穴住居跡(2)	113	第179回	S1区遺構外出土遺物	151
第133回	SI424竪穴住居跡(3)	114	第180回	S3区遺構外出土遺物	151
第134回	SI424竪穴住居跡出土遺物(1)	115	第181回	N2区遺構外出土遺物	151
第135回	SI424竪穴住居跡出土遺物(2)	116	第182回	N2南区遺構外出土遺物	152
第136回	SI443竪穴住居跡	117	第183回	N5区遺構外出土遺物	152
第137回	SB402掘立柱建物跡	118	第184回	N9区遺構外出土遺物	152
第138回	SB414掘立柱建物跡	119	第185回	瓦、陶磁器	154
第139回	SB432掘立柱建物跡	120	第186回	金属製品	155
第140回	SB434掘立柱建物跡	120	第187回	転用砥、砥石(1)	156
第141回	SB440掘立柱建物跡	121	第188回	砥石(2)	157
第142回	SB436掘立柱建物跡	121	第189回	縄文・弥生土器	159
第143回	SA431柱列跡	122	第190回	石器(1)	160
第144回	SA435柱列跡	122	第191回	石器(2)	161
第145回	SE403井戸跡	123	第192回	土師器分類図	163
第146回	SK409・SK419落し穴遺構	125	第193回	土師器・ロクロ土師器分類図	167
第147回	SK418土坑	125	第194回	須恵器分類図	168
第148回	SK423土坑	125	第195回	第1群土器・第2群土器	170
第149回	SX406円形周溝跡	126	第196回	第3群土器	171
第150回	N8東・西区遺構配置図	127	第197回	第4群土器	172
第151回	SI751竪穴住居跡	128	第198回	主な遺構の分布と変遷	177
第152回	SI753竪穴住居跡	129	第199回	関東系土師器	179
第153回	SI753竪穴住居跡出土遺物	130	第200回	関東系土師器を伴う竪穴住居跡	180

表 目 次

第1表	測量基準点一覧	8	第7表	土坑観察表(1)	187
第2表	各遺構出土土器一覧	169	第8表	土坑観察表(2)	188
第3表	竪穴住居跡観察表	185	第9表	大溝跡観察表	188
第4表	掘立柱建物跡観察表	186	第10表	溝跡観察表	189
第5表	柱列跡観察表	186	第11表	井戸跡・円形周溝跡・性格不明遺構観察表	189
第6表	落し穴状遺構観察表	187			

第1章 調査にいたる経緯

蔵王町北東部の円田盆地に広がる水田地帯を対象とした経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）では、昭和63年度に盆地南部（円田1期地区）の事業計画が策定され、同年に埋蔵文化財保存協議が実施された。この結果を受け、同年から平成2年度にかけて事業実施区域内に存在する埋蔵文化財包蔵地の遺構確認調査および事前調査が宮城県教育庁文化財保護課により実施されている（宮城県教委1989・1990・1991・1992）。

一方、盆地中・北部（円田2期地区）の事業計画は平成8年度に策定され、平成12年度には事業年次計画が提示された。事業実施予定区域内には多数の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、平成8年度より文化財保護課の宮城県教育委員会、蔵王町教育委員会と原因者側の宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区の四者による埋蔵文化財保存協議が開始された。

平成11年度の協議において事業実施区域内における埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布調査が必要であるとの判断がなされ、平成12年度に蔵王町教育委員会が分布調査を実施した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく広がることが判明した。この結果を基に再協議を実施し、埋蔵文化財包蔵地の破壊される面積をできるだけ少なくするよう事業計画を大幅に見直すことが決定した。平成13年度には大河原地方振興事務所より、水田および畑地となる部分については、地下の遺構を保護するよう適宜盛土を行なうとともに、幹線農道以外の作業用道路については未舗装の砂利道として事前調査対象範囲をできるだけ減少させる見直し案が提示され、合意に達した。

平成13・14年度には宮城県教育庁文化財保護課と蔵王町教育委員会によって事業実施区域内の遺構確認調査が実施され（宮城県教委2002・2003）、この結果を踏まえた協議により、遺構の存在する部分については基本的に盛土による現状保存を行ない、計画田面が遺構面よりも下がる切土部分と、道路・水路の建設に伴って遺構面が掘削される部分について事前調査を実施することが決定した。平成14年度には事業実施区域のうち県道の南側部分を平成15・16年度に、北側部分を平成17～21年度に順次施工する最終的な事業計画が提示され、これに先立って平成15年度に南側部分を、平成17～20年度に北側部分を対象とする計14遺跡の事前調査計画が策定された。

蔵王町教育委員会は宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、平成15年度に都遺跡、窪田遺跡、しんじょう新城館跡（蔵王町教委2005）、平成17年度に車地藏遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡（蔵王町教委2006）の事前調査を実施してきた。本書で報告するのは、平成18・19年度に実施した六角遺跡の調査成果である。なお、平成19年度以降は戸の内遺跡、窪田遺跡、十郎田遺跡、前戸内遺跡、西屋敷遺跡、磯ヶ坂遺跡の事前調査を実施し、本事業計画にかかわる遺跡の事前調査を終了する計画である。



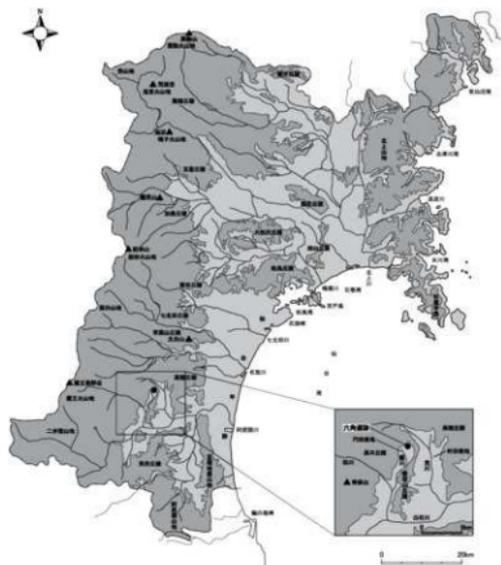
第1図 青森山展望台より北東に円田盆地を望む

第2章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

六角遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字六角地蔵に所在する。蔵王町役場の北東約4.3kmに位置し、町北東部に広がる円田盆地北縁の丘陵上に立地する。

円田盆地は松川の支流である藪川をはじめとする複数の中小河川によって形成された沖積地である。藪川は盆地中央部から東縁に沿って緩やかに蛇行しながら南流し、盆地周囲の丘陵からは無数の小規模な沢が流入している。盆地は南をのぞく三方を丘陵で囲まれており、盆地底面の範囲は東西約1.2km、南北約3.5kmにおよぶ。藪川流域は自然堤防が未発達で、盆地底部に湿地帯を形成しており、盆地の南側は松川との合流地点に向かって開けている。

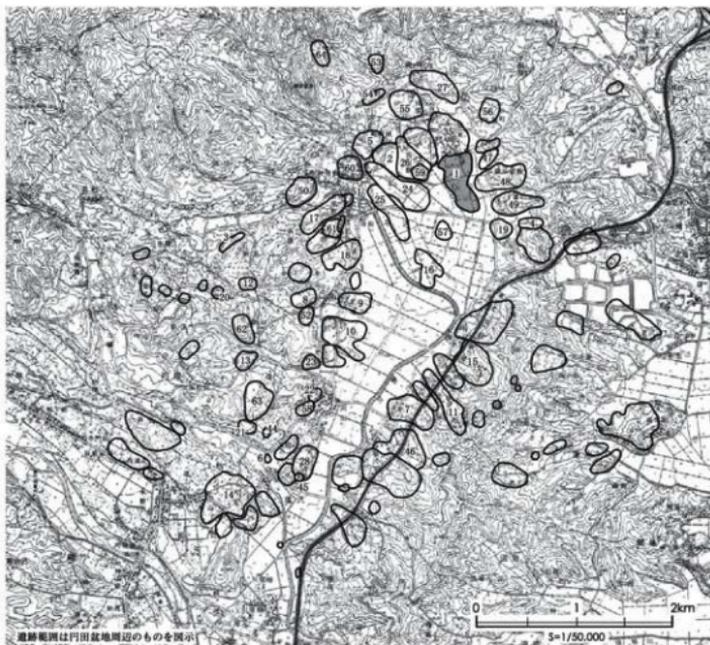


第2図 遺跡の位置と周辺の地形

円田盆地を三方から囲む丘陵のうち、北側から西側にかけては高木丘陵と呼ばれ、蔵王山系の東麓部にあたる。東側は高木丘陵から細長く派生した愛宕山丘陵と呼ばれる小丘陵が南へ延び、さらに東側の村田盆地との地形的な境界をなしている。標高は高木丘陵東端部で約130m、愛宕山丘陵頂部で約170m、盆地南端で約80mである。

愛宕山丘陵はやや急な傾斜をもつ丘陵地で、小規模な沢によって開析された比高差の大きい舌状の小丘陵が連続的に連なっている。盆地東側に分布する遺跡の多くがこの舌状小丘陵状に立地する。一方、高木丘陵は比較的なだらかな傾斜をもち、丘陵端部は緩やかに標高を減じつつ盆地中央部まで達している。この低平な丘陵上には多数の遺跡が分布し、今回の県営ほ場整備事業（円田2期地区）に伴って調査してきた盆地中・北部の遺跡もこれに含まれる。

近代以降に行なわれた耕地整理や藪川堤防改修工事の結果、盆地中・北部は平坦な水田地帯となり地形的な変化に乏しい景観を呈しているが、本来は遺跡が立地する微高地と小規模な沢状の低地とが複雑に入り組んだ景観であったと考えられる。



№	遺跡名	種別	時代	№	遺跡名	種別	時代
1	六角遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代	33	龜形土遺跡	集落	弥生、古墳、古代
2	新戸内遺跡	包含地	旧石器?、縄文後、古代	34	赤土上遺跡	包含地	弥生、古代、中世
3	二本塚遺跡	包含地	縄文早期	35	原遺跡	水田・包含地	弥生、古代
4	山崎遺跡	包含地	縄文早期	36	大杉内遺跡	包含地	弥生
5	稲舟林遺跡	包含地	縄文早期、古代	37	戸ノ内遺跡	集落	弥生、古代、中世
6	戸の内塚遺跡	包含地	縄文早・中期、弥生、古墳~中世	38	堂の内遺跡	包含地	弥生、古代、中世
7	中沢A遺跡	包含地	縄文早期、弥生、古墳~中世	39	白山遺跡	包含地	弥生、古墳
8	北津遺跡	包含地	縄文早期、弥生、古代、中世	40	陶器前遺跡	包含地	弥生、古墳
9	中津遺跡	集落・包含地	縄文早・中期、弥生、古代、中世	41	土ヶ市遺跡	包含地	弥生、古代
10	本厨前遺跡	集落・包含地	縄文早期、弥生、古代、中世	42	三の輪遺跡	包含地	古墳、古代
11	立石塚遺跡	包含地	縄文、弥生、古墳	43	陶器部横穴墓群	横穴墓	古墳
12	新見遺跡	包含地	縄文中期	44	八崎山古墳群	古墳	古墳
13	舟山遺跡	包含地	縄文中期、古代	45	宋渡堂古墳	方墳	古墳
14	上野遺跡	包含地	縄文中期、弥生、古代	46	伊原沢下遺跡	集落	古墳
15	大橋遺跡	集落・包含地	縄文後期、弥生、古墳、平安	47	草地塚遺跡	包含地	古代
16	郡遺跡	集落	縄文後期、弥生、古墳、古代	48	巖台原敷遺跡	水田・包含地	古代
17	高野前経遺跡	集落・包含地	縄文後期、弥生、古墳群・中世、古代	49	上栗の木沢遺跡	包含地	古代
18	小浜遺跡	集落・包含地	縄文、弥生、古代、中世	50	沢ノ内遺跡	包含地	古代
19	中栗の木沢遺跡	包含地	縄文、弥生、古代	51	早沢遺跡	包含地	古代
20	角山B遺跡	包含地	縄文	52	沢渡遺跡	包含地	古代
21	貝塚遺跡	包含地	縄文	53	藤野遺跡	包含地	古代
22	船の内遺跡	集落・包含地	縄文、弥生、古墳、古代	54	大久保遺跡	包含地	古代
23	清水遺跡	包含地	縄文、弥生、平安	55	後原遺跡	包含地	古代
24	十郎山遺跡	集落	縄文、古墳、古代	56	清上遺跡	包含地	古代
25	塚中遺跡	集落	縄文、古墳、古代	57	新城野遺跡	集落、城跡	古代、中世
26	高野敷遺跡	集落・包含地	縄文、古墳~中世	58	守山遺跡	包含地	平安
27	鎌ヶ包遺跡	包含地	縄文、古代	59	西小塚遺跡	城跡	中世
28	宋渡堂遺跡	包含地	弥生、古墳、平安	60	平沢遺跡	城跡	中世
29	谷遺跡	水田・包含地	弥生、古墳、古代、中世	61	高野野遺跡	城跡	中世
30	粟刈山遺跡	包含地	弥生	62	龜形野遺跡	城跡	中世
31	尾木戸内遺跡	包含地	弥生	63	花輪野遺跡	城跡	中世
32	中沢B遺跡	包含地	弥生、古墳、古代	64	兵衛野遺跡	城跡	中世

第3図 六角遺跡と周辺の遺跡

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

蔵王町における周知の遺跡は約200か所を数える。その多くは町域の東半部を占める円田盆地とその周辺、および脊梁山脈東麓に連なる丘陵地帯に立地する。大略的にみて縄文時代の遺跡は蔵王山東麓部から延びる高木丘陵上と青麻山東麓部の標高150～250m付近に、弥生時代以降の遺跡は円田盆地とその周辺の丘陵辺縁部の標高80～100m付近に立地する傾向がみられる。

こうした様相の違いは、概ね当時の人びとの生業形態の変化に伴うものと考えられる。縄文時代の食糧獲得の場は主に丘陵地に繁茂した森林であり、弥生時代以降の食糧生産の場は低湿地に作られた水田であったと考えられる。後述するが、蔵王町内における稲作の開始を裏付けるものとしては、粉殻の圧痕がある弥生土器片や、古墳時代の水田跡がある。なお、縄文時代の集落が低湿地の周辺に作られることはなかったが、低平な丘陵と湿地の入り組んだ円田盆地北部の一角は、縄文時代には狩猟の場として利用されていた。以下、各時代・時期における蔵王町内の考古学的様相を概観する。

旧石器時代

宮地区の持長地遺跡、鉄砲町遺跡、明神裏遺跡、小村崎地区の前戸内遺跡が知られている。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層の下部よりナイフ形石器が単独出土している。石刃を素材として基部の両側縁に刃潰し加工を施しており、いわゆる茂呂型ナイフ形石器の範疇に含まれるものである。鉄砲町遺跡では彫刻刀形石器が採集されている。大型の石刃の末端側に施した急角度剥離面を打面として側縁に種状剥離面を作出しており、いわゆる小坂型彫刻刀形石器の範疇に含まれるものである。明神裏遺跡では細石刃と槍先形尖頭器が採集されたというが、詳細は不明である。また、円田盆地北西部の前戸内遺跡では槍先形尖頭器が採集されている。剥片を素材として両面調整が施されており、平面形はやや左右非対称な木葉形を呈する。このほか、宮地区の二屋敷遺跡では石刃状の縦長剥片に基部加工を施したナイフ形石器の可能性のある石器が出土しているが、本遺跡では同様の縦長剥片を素材とする縄文時代の石器も散見されることから、旧石器であるかどうかの判断は難しい。

以上のことから、持長地遺跡と鉄砲町遺跡については後期旧石器時代、明神裏遺跡と前戸内遺跡については後期旧石器時代終末～縄文時代草創期に属する可能性が考えられる。しかし、いずれも単独出土しないしは採集資料のため、明確な時期や遺跡の性格については不明点が多い。

なお、円田盆地の東側に隣接する村田盆地の東縁をなす高館丘陵西麓部では玉髓が産出し、これを利用して石器製作を行なった原産地遺跡が点在している（新川流域遺跡群、大場2004）。このうち、村田町小泉地区の質蔵沢遺跡では2003～2006年度にかけて東北学院大学による学術発掘調査が行なわれ、後期旧石器時代の在地原産地遺跡の様相が明らかにされた（佐川・鈴木・安倍2005）。今のところ蔵王町内における旧石器時代の人びとの暮らしぶりは明らかになっていないが、このような原産地遺跡に関連して残された遺跡が今後発見される可能性は十分に考えられる。

縄文時代

草創期については前述のとおり明確な遺跡が発見されていない。周辺地域でも白石市福岡深谷地区の高野遺跡で槍先形尖頭器が、同大蔵沢地区の小菅遺跡、戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されてい

る程度で、具体的な様相は明らかでない。早期の遺跡には宮地区の明神裏遺跡、沢入D遺跡、円田地区の手代木遺跡、三本榎A遺跡、遠刈田地区の北原尾遺跡、前期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、八幡平遺跡、円田地区の入山遺跡、愛宕山遺跡、中期の遺跡には宮地区の上原田遺跡、円田地区の高木遺跡、新堂山遺跡、湯坂山B遺跡、後期の遺跡には宮地区の二屋敷遺跡、山田沢遺跡、一本木遺跡、円田地区の西浦遺跡、晩期の遺跡には宮地区の下別当遺跡、沢北遺跡、曲竹地区の鍛冶沢遺跡などがある。

早期の遺跡は小規模なものが多く、高木丘陵から青麻山東麓部にかけての広範囲に点在し、遠刈田地区から白石市福岡深谷地区にかけての不忘山東麓部にまとまった分布域を形成する。前期の遺跡数はやや少なくなるが、高木丘陵上と青麻山東麓部に点在する。中期から後期にかけては高木丘陵上に大きな集落が形成され、集中的な遺跡分布域となっている。一方、青麻山東麓部では後期になると多くの集落が形成され、晩期まで継続する大規模な集落がみられる。

このように、時期による分布域の移動と、微地形選択の志向性に変化は見られるものの、縄文時代のおよそ1万年千年間を通して彼らの生活の中心は葦山東麓部から延びる高木丘陵上と、青麻山東麓部にあったと言って良い。なお、円田盆地北部の小村崎地区にある都遺跡、窪田遺跡、原遺跡では縄文時代のもと考えられる落し穴状土坑が見つかっており、低湿地に面した低平な丘陵裾部が狩猟の場として利用されていたことが分かっている。

弥生時代

縄文時代晩期から継続する宮地区の沢北遺跡、これに後続する樹形囲式期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、円田地区の清水遺跡、西浦遺跡、塩沢地区の宋厩堂遺跡、東根地区の立目場遺跡、円田式期の遺跡には東根地区の大橋遺跡、塩沢地区の台遺跡、上野遺跡、塩沢北遺跡、小村崎地区の都遺跡、円田地区の西浦遺跡、十三塚式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、立目場遺跡、天王山式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、塩沢地区の天王遺跡、平沢地区の赤鬼土遺跡などがある。

樹形囲式期以前の遺跡は、縄文時代の立地を踏襲しながら、一部円田盆地周縁部の丘陵に立地している。円田式期になると円田盆地周縁部に急速に展開し、遺跡数も急増する。遺構が調査された例は皆無であるが、稲作が受容されたと考えするのに十分な変化と言える。しかし、十三塚式期から天王山式期にかけてはこうした流れを引き継ぐ一方、標高の高い丘陵上に立地する遺跡も見られる。なお、都遺跡で出土した円田式土器の破片と、大橋遺跡で出土した天王山式土器の破片、中沢A遺跡で出土した弥生土器の破片の表面に靱殻の圧痕が観察されている。

古墳時代

前期（壺釜式期）の遺跡には東根地区の大橋遺跡、伊原沢下遺跡、円田地区の堀の内遺跡、中期（南小泉式期）の遺跡には小村崎地区の都遺跡、東根地区の中沢A遺跡、台遺跡、後期（栗田式期）の遺跡には東根地区の塩沢北遺跡などがある。また、高塚古墳には宮地区の明神裏古墳、東根地区の夕向原古墳群、古峯神社古墳、塩沢地区の宋厩堂古墳、天王古墳、西脇古墳、中屋敷古墳、八幡山古墳、横穴古墳には諏訪館横穴墓群がある。

古墳時代の遺跡は、弥生時代の立地を踏襲し、円田盆地周縁部に集中している。前期の大橋遺跡、伊原沢下遺跡は宮城県内における壺釜式最古段階の、中沢A遺跡は南小泉式最古段階の遺跡として知

られ、当該地域が周辺地域に先駆けて新しい文化要素を受容していたことが窺われる。また、盆地を取り囲む丘陵上にいくつもの高塚古墳が築かれている。古墳のほとんどは未調査であるが、宋勝堂古墳は直径約30mの円墳で、埴輪が採集されている。明神裏古墳は昭和31年に発掘調査され、凝灰岩板石によって築造された箱式石棺が確認されている。

古代

奈良・平安時代の遺跡としては100か所以上が知られているが、このうち発掘調査が行われた遺跡としては宮地区の二層敷遺跡、矢附地区の東山遺跡、塩沢地区の塩沢北遺跡、円田地区の堀の内遺跡、平沢地区の都遺跡、赤鬼上遺跡などがある。

奈良・平安時代の遺跡は、弥生時代以降の立地を踏襲し、円田盆地周辺に多く分布する一方、町東部の丘陵麓部の広い範囲に分布するようになり、生活領域が拡大したことが窺われる。堀の内遺跡、都遺跡では当時の在地の土師器とは異なる特徴を持った関東系土師器が少数ながら出土している。また、都遺跡では多賀城創建期のもつと類似した軒平瓦が採集されているのをはじめ、遺跡の立地する残丘状の微高地を取り囲むような区画溝と堀跡が確認されており、当時の円田盆地を中心とする地域の経営に関する拠点的な施設が営まれていた可能性がある。東山遺跡からは、石組みのカマドを持つ平安時代の竪穴住居跡と土器溜遺構が確認され、灰軸陶器、転用碗のほか、「万田」、「子田」などの墨書土器が多量に出土している。

中世以降

中世の遺跡としては、宮地区の宮城館跡、山家館跡、館の山城跡、曲竹地区の曲竹小屋館跡、円田地区の花楯館跡、榎村館跡、小村崎地区の西小屋館跡、兵衛館跡、平沢地区の平沢館跡、諏訪館跡、矢附地区の矢附館跡などがあり、町東部の丘陵麓部に多くの城館が築かれている。また、宮地区の持長地遺跡では中世の掘立柱建物跡群が確認され、常滑系陶器、馬具、鉄鈴、刀子などが出土している。このほか、平沢地区の保昌寺境内に現存する丈六阿弥陀如来坐像は平安時代末期の作風とされ、当時の平沢地区と奥州藤原氏との関係性を示唆している。遠刈田地区の岩崎山金窟址では戦国末期には採掘が開始されていたとみられ、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。

近世の遺跡として確認されているものは少ないが、小村崎地区の車地藏遺跡、鍛冶屋敷遺跡では近世の有力者層の屋敷地の一部と考えられる掘立柱建物跡、区画溝跡、水場遺構などの遺構群が確認された。現存する近世の建造物としては、曲竹地区の我妻家住宅、小村崎地区の奥平家住宅、宮地区の刈田嶺神社本殿・拜殿・隨身門などがある。我妻家住宅は江戸中期に建てられた大規模な茅葺民家で、国重要文化財に指定されている。奥平家住宅は江戸後期に建てられた茅葺入母屋造の民家である。刈田嶺神社は江戸期には刈田郡総鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。本殿は江戸中期に建てられたもので、県指定文化財に指定されている。

近代の遺構としては遠刈田製鉄所高炉跡、軽便鉄道跡などがある。遠刈田製鉄所高炉は明治後期に当時最先端の設計で建てられたもので、残存するのは基礎及び地下部分のみだが、国内に現存する唯一の近代製鉄遺構である。明治後期から大正にかけて大河原―遠刈田間を結んだ軽便鉄道は、現在の道路あるいは路地として、その路線敷きの名残を留めるのみである。

第3章 調査の方法と経過

遺跡の立地する丘陵は盆地北側から中央部に向かって南東方向に延びている。丘陵の西斜面は比較的急な傾斜をもち、東斜面および丘陵先端部の南斜面ではきわめてなだらかな傾斜をもって盆地底面と接している。調査前の現況は丘陵の尾根筋から西斜面にかけては主に畑地、東斜面から南斜面にかけては主に水田として利用されていた。

埋蔵文化財保存協議により遺跡範囲の全域が事業計画範囲に含まれることが判明したため、遺跡範囲における遺構分布状況と遺構面深度の把握を目的とした綿密な遺構確認調査を平成14年度に実施した。これに基づく最終的な事業設計案が平成17年度に提示され、田面となる部分は原則として盛土によって遺構面を保護し、やむを得ず切土が発生する道路・水路の予定範囲について平成18年度に事前調査を実施する運びとなった。なお、田面となる部分について膨大な盛土量を少しでも削減し、法面の落差を安全な高さに抑えたい旨の要望を受け、遺跡範囲の辺縁部の調査区において遺構密度が低いことが確認され、隣接する田面予定部分を削平しても遺跡の保存に大きな影響を与えないと判断された場合、事前調査範囲に追加することとした。

発掘調査は平成18年5月15日から11月24日までの約6ヶ月間を要した。今回の発掘調査は、道路・水路の整備によって遺構面が削平される範囲を対象としたものであり、遺跡範囲の全域に主に東西・南北方向の調査区が配置されたことになる。遺跡中央部を東西に横断する農道より南側をS区、北側をN区とし、それぞれ南からS1・2・3区、N1・2・3・4・5・6・8・9区として順次調査を実施した(第10図)。なお、未舗装の砂利道となる道路部分で、施工時に遺構面まで掘削が及ばない範囲については遺構確認調査を実施して遺構の分布状況を記録した。また、調査の過程で遺跡範囲辺縁部に位置するS1西区、N4中区、N9中区では遺構の分布状況が比較的散漫であることが把握され、これに隣接する丘陵辺縁部の切土が可能となれば盛土量の大幅な削減が可能となることから、宮城県教育委員会との協議を経てS1南区およびN4中区東側、N9区西側を事前調査対象範囲に追加した。さらに、調査終了後に設計の一部変更により延長約100mの道路が追加となったため、これをN10区として平成19年8月21日～9月4日に遺構確認調査を実施した。これらを含めた最終的な調査面積は、事前調査分約16,700㎡、確認調査分約9,100㎡の合計約25,800㎡に及んだ。

調査の方法は重機による表土除去の後、手作業による遺構確認と遺構精査を行なった。確認した遺構は竪穴住居跡52軒、掘立柱建物跡29棟、柱列跡10条、落し穴状土坑39基、大溝跡4条、溝跡44条、土坑71基、柱穴多数である。遺構は必要に応じて1/20縮尺の平面図・断面図を作成し、調査区ごとに1/100縮尺の平板実測による遺構配置図を作成した。また、35mmモノクロームフィルムとデジタルデータにより、必要に応じて遺構の検出状況と土層断面、完掘状況、遺物の出土状況および調査区全景などの記録写真を撮影した。出土遺物は調査区および遺構、出土層別別に取り上げた。なお、測量基準点は各調査区付近に打設された工用基準杭2点を機械設置点および方位視準点として使用し、測量基準線に平行・直行する3mグリッドを設定した。各調査区の測量基準点の位置と国家座標値は第1表に示した。

調査期間中の平成 18 年 7 月 29 日には一般町民を対象とした現地説明会を開催し、約 50 名の参加があった。調査が進行中であった N 2 西区で確認した遺構群を中心とした解説を行なった。また、9 月 21 日には宮城県大河原地方振興事務所が主催する「仙南地域の農業農村めぐり」の一環として町内の平沢小学校の児童とその保護者ら約 20 名が発掘作業を見学した。

第 1 表 測量基準点一覧

基準点	調査区	経緯座標系	方向	点名	X 座標	Y 座標
T1	S1	N-O.S W-O.E	N-63°-E	155	-208271.327	-12195.834
T2		S-9 W-O.E		164	-208321.045	-12201.136
T3		N-O.S W-40		154	-208267.085	-12235.608
T4	S2 (南)	-	-	011	-208230.485	-12252.792
T5		-		023	-208187.126	-12267.324
T6	S3	N-O.S W-98	N-63°-E	K-70	-208118.588	-12297.456
T7	S2 (北)	N-O.S W-O.E		K-73	-208129.114	-12198.766
T8	N1	N-O.S W-O.E	N-63°-E	K-74	-208017.745	-12186.887
T9	N2	N-O.S E-89		058	-208027.290	-12097.394
T10	N4	N-O.S W-O.E	N-63°-E	091	-207921.526	-12122.557
T11	(中・南)	N-O.S E-41		092	-207925.899	-12081.551
T12	N4 (北)	-	-	110	-207864.708	-12113.090
T13		-		109	-207818.073	-12108.115
T14	N5	S-105 W-O.E	N-63°-E	K-68	-207997.117	-12380.290
T15	N6	N-O.S W-O.E		K-65	-207892.212	-12369.101
T16	N9	N-O.S E-178	N-132°-W	K-64	-207910.878	-12194.093
T17	N8	N-O.S W101		131	-207867.466	-12356.947
T18	N8	N-O.S W-O.E	133	-207843.892	-12258.879	

※方向は国家座標第 X 系における北方向を基準にしたときの経緯座標系北偏北との角度。



第 4 図 遺跡遠景 (南東から)



第 5 図 表土除去作業



第 6 図 発掘作業



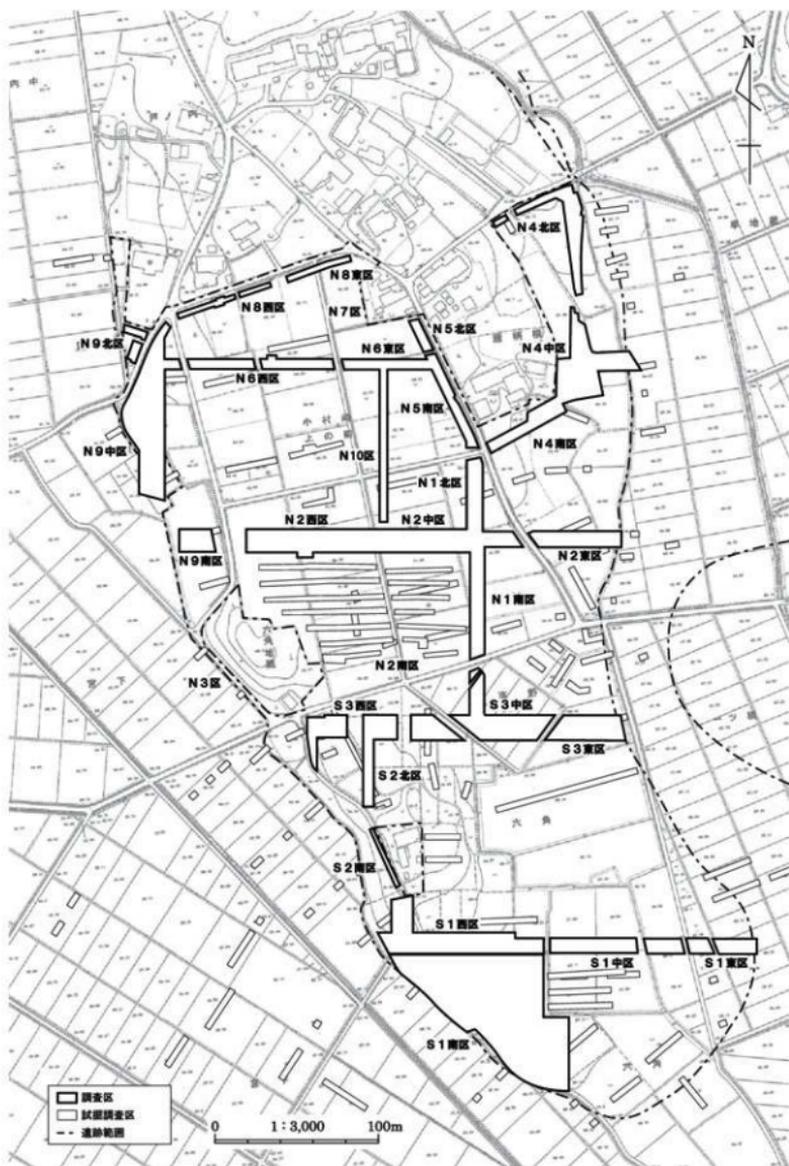
第 7 図 現地説明会



第 8 図 仙南地域の農業農村めぐり



第 9 図 整理作業



第10図 調査区配置図

第4章 調査の結果

1. 基本層序

調査区により立地条件と土層の堆積状況に違いが見られるが、基本層序はⅠ～Ⅶ層に大別される。Ⅰ層は表土ないしは現耕作土で、層厚は10～20cm程度である。Ⅱ層は旧表土ないしは旧耕作土で、層厚は15～30cm程度である。近代の陶磁器片などを含む。Ⅲ層は黒ボクと称される黒色火山灰土で、層厚は20～40cm程度である。縄文土器片などを含む。丘陵東斜面を中心に厚く堆積し、丘陵斜面の下部では複数の再堆積層が形成されている。Ⅳ層はⅢ層下部とⅤ層上部に形成された漸移層で、層厚は20cm程度である。Ⅴ層は黄褐色ローム層、Ⅵ層は白色粘土層、Ⅶ層は狼岩と称される凝灰質シルトで、川崎スコリア層に相当するとみられる。遺構はⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層上面で確認しているが、丘陵頂部から斜面上部にかけては削平などによりⅠ層ないしはⅡ層の直下がⅤ層となっている場合がある。このため、本来の遺構掘り込み面はすべてⅢ層上面であったと考えられる。

Ⅰ層：表土	a：現耕作土 b：現水田耕作土 c：現代の盛土
Ⅱ層：旧表土・旧耕作土	(近代の陶磁器片を含む)
Ⅲ層：黒色火山灰土	(斜面下部では複数の再堆積層を形成)
Ⅳ層：暗褐色シルト	(Ⅲ層とⅤ層の漸移層)
Ⅴ層：黄褐色粘土	(黄褐色ローム層) a：黄褐色シルト b：黄褐色粘質シルト
Ⅵ層：白色粘土	(水成堆積層)
Ⅶ層：凝灰質シルト	(川崎スコリア層)

2. 発見された遺構と遺物

確認した遺構は、竪穴住居跡52軒、掘立柱建物跡29棟、柱列跡10条、井戸跡1基、落し穴状土坑39基、土坑71基、大溝跡6条、溝跡44条、円形周溝跡1基、性格不明遺構1基、柱穴多数である。このうち、主体を占める竪穴住居跡には古墳時代前期のものと古墳時代後期～奈良・平安時代のものがある。落し穴状土坑は縄文時代のものと考えられる。掘立柱建物跡や土坑・溝跡などには中・近世以降や時期不明のものがある。

出土した遺物は、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器・ロクロ土師器・須恵器・鉄製品・石製品などである。また、表土および基本層から縄文・弥生時代の土器・石器、中・近世の陶磁器などが出土した。出土遺物の総量は遺物収納コンテナで約35箱分である。

以下、調査区ごとに主要な遺構と遺物の説明を行なう。なお、遺構の重複関係について、AよりBが新しい場合「A→B」、掘立柱建物跡などで重複関係にあるが新旧関係が不明な場合「A-B」のように記載した。

(1) S1区

遺跡の立地する丘陵の南端部に位置する。東・南側はなだらかに傾斜して黒ボク土が厚く堆積するのに対し、西側は黄褐色ローム層ないしは白色粘土が露出し比較的急傾斜となる。東区、中区、西区、南区を設定して調査を行なった(第11・14図)。遺構は西区、南区の東向き斜面を中心に分布し、竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡9棟、柱列跡1条、落し穴状土坑14基、土坑23基、溝跡5条、性格不明遺構1基のほか、柱穴多数が確認された。以下、主要な遺構と遺物について説明する。

A. 竪穴住居跡

【S11 竪穴住居跡】(第12・13図、図版3-7、4-1・2)

〔位置・確認面〕S1西区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕S19 → 《S11》

〔規模・形状〕西側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西1.2m以上、南北約3.5mの方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：E-4° - N

〔壁面〕IV層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い東壁で床面から10cmである。

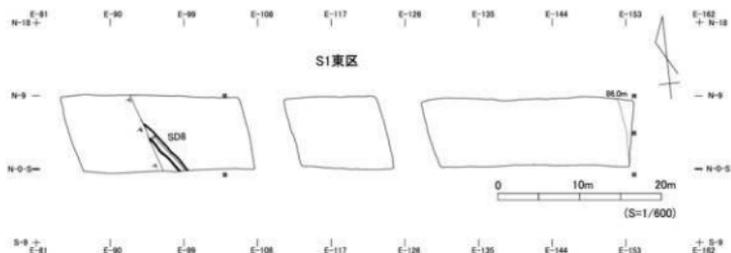
〔床面〕IV層を床面とし、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居東壁中央に設置されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ80cm、幅76cmで、焚口幅は50cmである。燃焼部底面は幅50cm、奥行72cmで、床面より5cmほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は左側壁で長さ70cm、幅16cm、高さ15cm、右側壁で長さ66cm、幅15cm、高さ13cmが残存する。白色粘土と暗褐色シルトで構築されており、内側は被熱による赤色化がみられる。側壁先端には角柱状の凝灰岩切石が据えつけられており、焚口部を構成している。奥壁は住居東壁と一致する。

〔貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は2層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土なしいしは自然堆積



第11図 S1東区遺構配置図

土である。

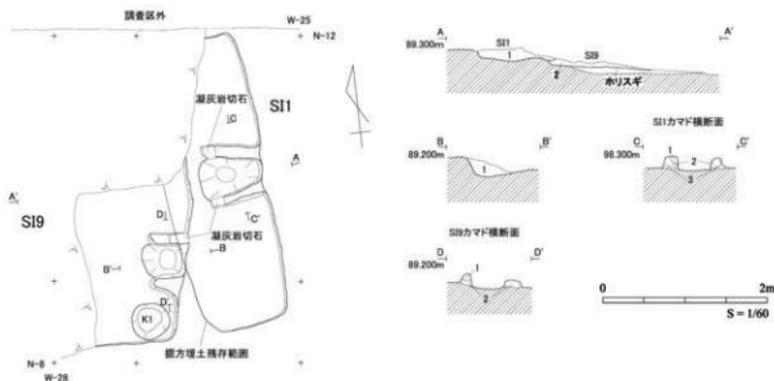
〔出土遺物〕床面よりロクロ調整の土師器環（第13図1）・甕（第13図3）須恵器環（第13図2）、
が出土した。1は内面に黒色処理が施されている。1・3とも外底面に回転糸切痕がみられる。

このほか、床面よりロクロ調整で内面に黒色処理が施された土師器高台環の破片が出土した。

〔S12 竪穴住居跡〕（第15・16図、図版4-3・4）

〔位置・確認面〕S1西区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし



S11・9竪穴住居跡

No	土色	土性	備考
1	10Y4/8 赤褐色	シルト	粘土ブロックを多量に、暗褐色土ブロックを含む S11埋積土
2	10Y2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、粘土粒を含む S19埋積土

S19竪穴住居跡東西断面

No	土色	土性	備考
1	10Y2/8 暗赤褐色	シルト	粘土ブロックを多量に、暗褐色土ブロックを含む

S11竪穴住居跡カマド横断面

No	土色	土性	備考
1	10Y2/4 暗赤褐色	シルト	粘土粒を含む 焼酎により赤色化 カマド製煉燻土
2	10Y2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、小礫を含む カマド製煉燻土
3	10Y2/3 黒褐色	シルト	カマド製煉燻土

S19竪穴住居跡カマド横断面

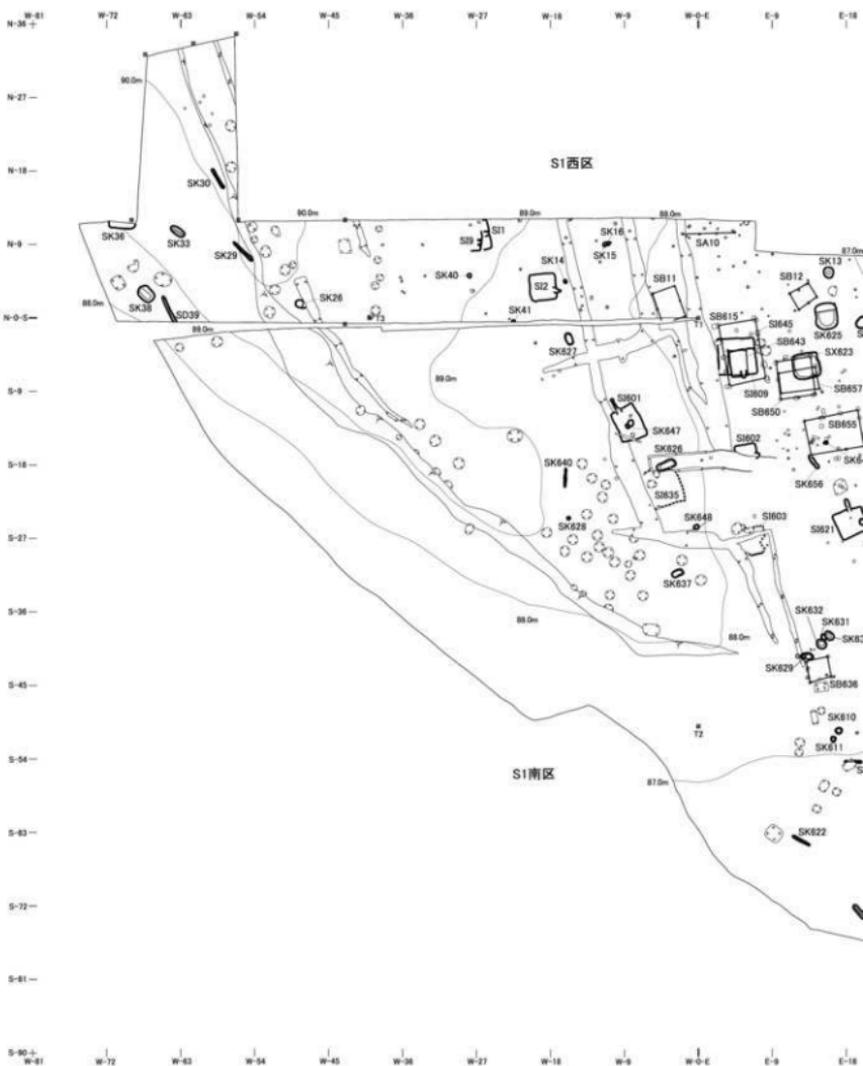
No	土色	土性	備考
1	10Y2/3 黒褐色	シルト	粘土ブロックを多量に含む 焼酎により赤色化 カマド製煉燻土
2	10Y2/3 黒褐色	シルト	カマド製煉燻土

第12図 S11・S19 竪穴住居跡



No	層位	種類	器種	分類	調査調整・特徴	径長 (cm)		残存	登録	写真		
						口径	底径					
1	床	70土師器	環	B	外：2079F → 手持5022F (〔底面〕回転糸切 → 手持5099F) 内：4518F → 黒色処理	11.0	7.0	6.5	1/2	06092	28-1	
2	確認面	70土師器	甕	D	外：2079F → 4518F (〔底面〕回転糸切) 内：2079F	—	—	8.2	(7.8)	一部	06090	28-2
3	床	須恵器	環	A	外：2079F (〔底面〕4518F無調整) 内：2079F 外面に重む繞きの痕跡	12.95	7.0	3.6	9/10	06002	28-3	

第13図 S11 竪穴住居跡出土遺物



第 14 图 S1 中·西·南区遗构配置图

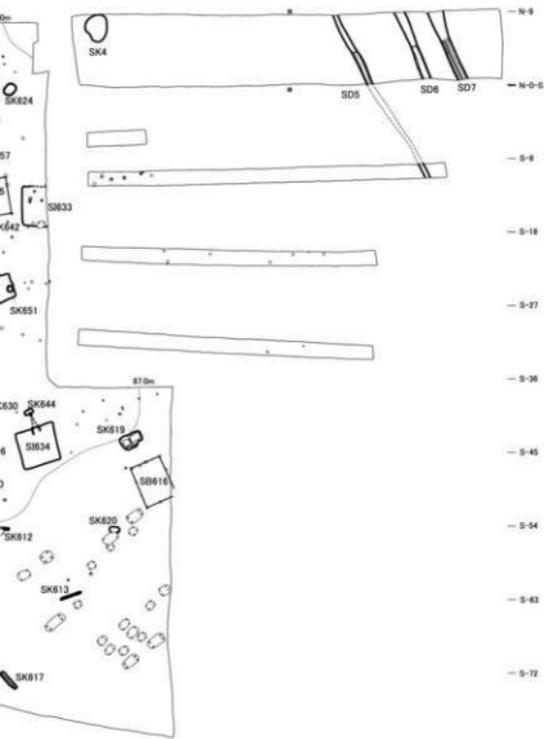
E-27 E-38 E-45 E-54 E-63 E-72 E-81



-N-27

S1中区

-N-18



-N-9

-N-0-5

-S-8

-S-18

-S-27

-S-36

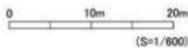
-S-45

-S-54

-S-63

-S-72

-S-81



E-27 E-38 E-45 E-54 E-63 E-72 E-81

+S-90

E-81

〔規模・形状〕東西約3.1m、南北約3.2mの方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E-13°-S

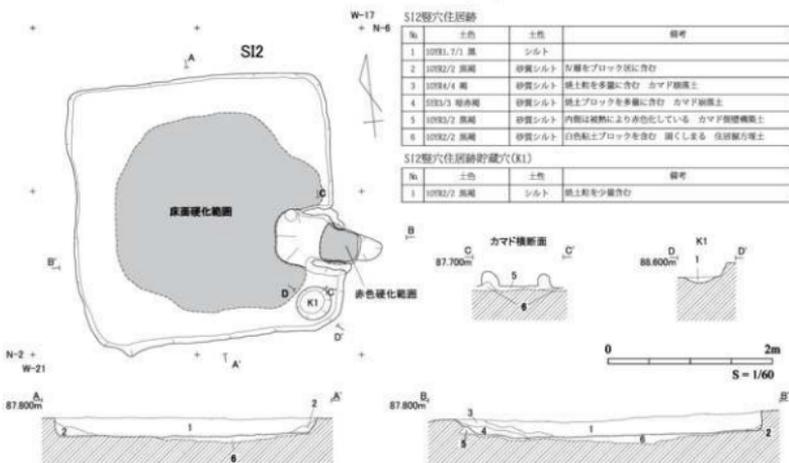
〔壁面〕IV層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い北壁で床面から26cmである。

〔床面〕白色粘土ブロックを含む掘方埋土を床面とする。東に向かってわずかに傾斜し、カマド焚口から住居中央部にかけての東西約2.5m、南北約2.4mの範囲で床面の硬化が認められた。

〔支柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕東壁中央南寄りに設置されている。燃烧部と煙道の一部が残存する。燃烧部は長さ75cm、幅85cmで、焚口幅は側壁先端間で65cmである。燃烧部底面は幅46cm、奥行74cmで、奥壁から焚口に向かってスロープ状に傾斜する。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は左側壁で長さ40cm、幅15cm、高さ24cm、右側壁で長さ48cm、幅18cm、高さ20cmが残存する。白色粘土と黒褐色砂質シルトで構築されており、内側は被熱による赤色化がみられる。奥壁は住居東壁より20cmほど張り出し、奥壁上部からスロープ状に立ち上がる煙道の一部が残存する。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東コーナー部で土坑1基(K1)が確認された。平面形は直径40～



第15図 SI2 竪穴住居跡



No	部位	種類	器種	分類	器面特徴・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	埴3餅	遺器類	杯	C	外：10YR7/1→10YR6/1(底面) 10YR6/1(内) 10YR7/1	14.4	8.6	3.7	1/5	06091	28-4

第16図 SI2 竪穴住居跡出土遺物

45cmの不整形円形を呈し、深さは6cmで底面は皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は1層で、自然堆積土と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居内堆積土より須恵器環（第16図）、ロクロ調整の土師器環・甕の破片が出土した。須恵器環は外底面に回転ヘラケズリ調整が、土師器環は内面に黒色処理が施されている。

〔SI9 竪穴住居跡〕（第12・17図、図版3-7）

〔位置・確認面〕S1西区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕《SI9》→SI11

〔規模・形状〕北・西側が残存しないため全体の形状は不明である。東西1.9m以上、南北1.3m以上の方角を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：E-5°-S

〔壁面〕IV層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い東壁で床面から10cmである。

〔床面〕IV層を床面とし、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居東壁の南寄りに設置されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ55cm、幅70cmで、焚口幅は側壁先端間で55cmである。燃焼部底面は幅34cm、奥行50cmで、床面より8cmほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は左側壁で長さ50cm、幅15cm、高さ15cm、右側壁で長さ40cm、幅32cm、高さ8cmが残存する。黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルトで構築されており、内側は被熱による赤色化がみられる。左側壁では角柱状の凝灰岩切石が骨材として使用されている。奥壁は住居東壁と一致する。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東コーナー部で土坑1基(K1)が確認された。平面形は長軸46cm、短軸40cmの楕円形を呈し、深さは10cmで底面は皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は1層で、自然堆積土と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は1層で、住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器甕（第17図1～3）が出土した。いずれも口縁部ヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ調整が施されており、2は底面に木葉痕がみられる。

〔SI601 竪穴住居跡〕（第18・19・20図、図版4-5～7）

〔位置・確認面〕S1南区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

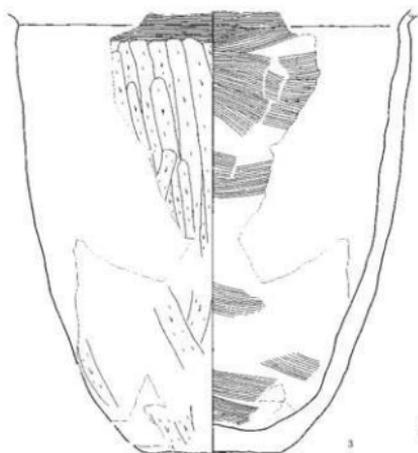
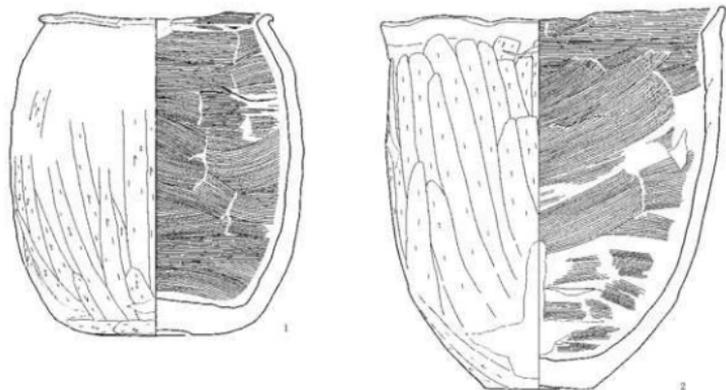
〔重複〕SK647 →《SI601》

〔規模・形状〕東西約3.0m、南北約4.3mの長方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N-25°-W

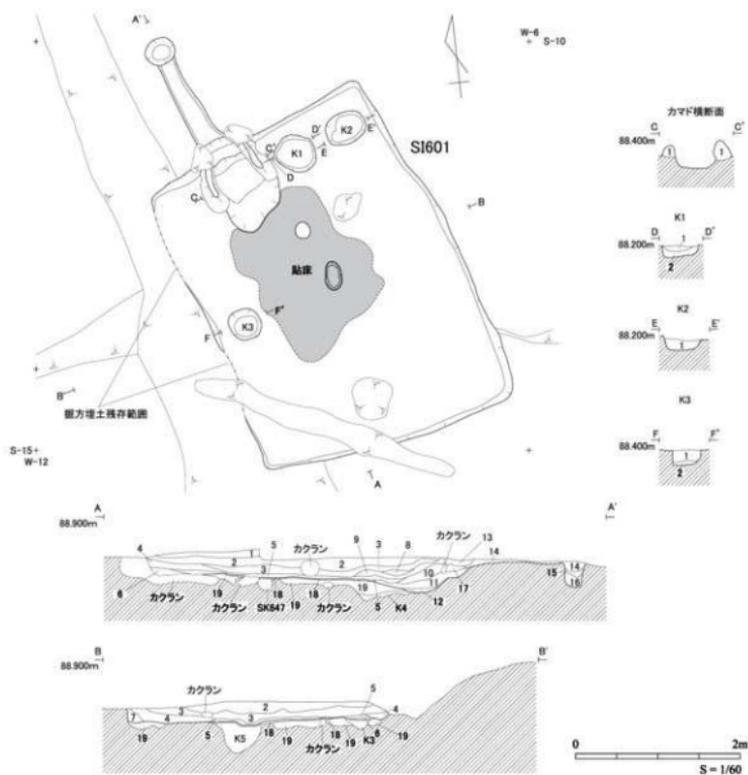
〔壁面〕IV層およびV層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い東壁で床面から27cmである。

〔床面〕V層起源の黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を主体に、一部でV層を床面とする。北に向かって僅かに傾斜する。中央部の東西約1.4m、南北1.8mの範囲に黒褐色シルトを主体とする硬



No.	部位	種類	器種	分類	断面圖物・特徴	法線 (cm)		残存	登録	写真	
						口徑	底徑				
1	坑	土器器	甕	B・Z	外: (圖) 49X9 (底面) 49X9 内: (口) 32FF (圖) 9F	(14.1)	8.5	1/5	06094	26-7	
2	坑	土器器	甕	E	外: (口) 32FF → (圖) 49X9 (底面) 本層直 内: (口) 32FF → (圖) 49FF	(20.7)	6.6	1/3	06093	28-5	
3	坑	土器器	甕	E	外: (口) 32FF → (圖) 49X9 (底面) 49X9 内: (口) 32FF (圖) 11F	—	7.9	(26.9)	1/5	06095	28-6

第 17 图 S19 竖穴住居跡出土遺物



SI601竪穴住居跡

No	土色	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	炭化物を少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	炭褐色ローム状。炭化物を少量含む
3	10YR2/3 黒褐	シルト	炭褐色ローム状。焼土粒を含む
4	10YR2/3 黒褐	シルト	
5	10YR2/3 黒褐	シルト	炭化物、焼土粒を多量に。炭褐色ローム状を含む
6	10YR2/3 黒褐	シルト	炭褐色ロームブロックを含む
7	10YR2/2 黒褐	シルト	
8	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、焼土粒を含む
9	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土ブロックを多量に。焼土を含む カマド跡層土
10	5YR3/6 暗褐	シルト	焼土粒を多量を含む カマド跡層土
11	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を含む
12	10YR2/1 黒	シルト	
13	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を少量含む
14	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を含む
15	10YR2/1 黒	シルト	焼土粒を少量含む
16	10YR2/1 黒	シルト	炭褐色ロームブロックを少量含む
17	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を多量を含む カマド天井面土
18	10YR2/3 黒褐	シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む 深くしまる 住居跡床
19	10YR2/3 黒褐	シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む 住居跡方塘土

SI601竪穴住居跡カマド横断面

No	土色	土質	備考
1	10YR4/4 暗	粘質シルト	白色焼土粒を少量含む 陶器により赤色化 カマド後壁構築土

SI601竪穴住居跡貯蔵穴 (K1)

No	土色	土質	備考
1	7.5YR 2/3 暗黄褐	シルト	焼土粒を多量を含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を少量。炭褐色ローム状を含む

SI601竪穴住居跡貯蔵穴 (K2)

No	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	炭褐色ロームブロック。焼土粒を含む 人為的塚上

SI601竪穴住居跡住居内土坑 (K3)

No	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	炭褐色ロームブロック。焼土を含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	焼土を多量に含む

第 18 図 SI601 竪穴住居跡 (1)

化層が形成されており、貼床と考えられる。

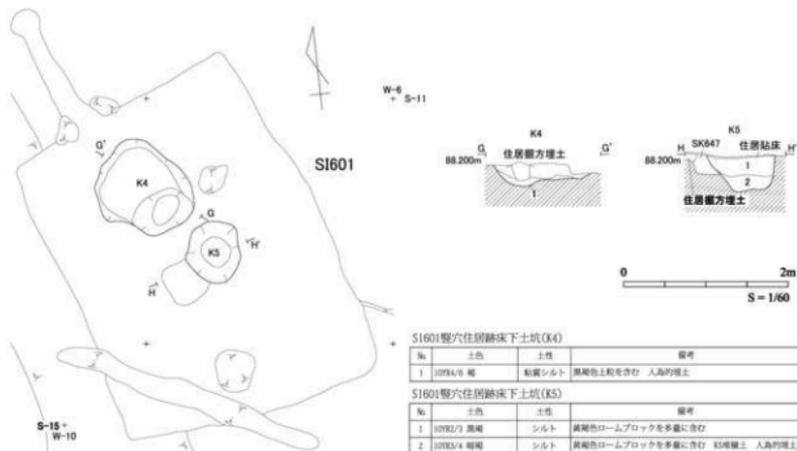
〔支柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居北壁中央やや西寄りに設置されている。燃焼部と煙道、煙出しピットが残存する。燃焼部は長さ120cm、幅93cmで、焚口幅は側壁先端間で70cmである。燃焼部底面は幅48cm、奥行84cmで、床面より10cmほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化はみられない。側壁は左側壁で長さ65cm、幅26cm、高さ14cm、右側壁で長さ58cm、幅20cm、高さ25cmが残存する。黄褐色ロームで構築されており、内側は被熱により赤色化している。奥壁上部には山形の天井部が原形を留めたまま落ち込んでいる状況が確認された。奥壁は住居の北壁より15cmほど張り出し、奥壁から北側へ延びる煙道は長さ140cmで、幅20～30cm、深さ約2～9cmが残存する。底面は奥壁との接続部からスロープ状に立ち上がり、中ほどから先はほぼ平坦である。煙道の先端部には長軸38cm、短軸30cm、深さ32cmの煙出しピットが確認された。

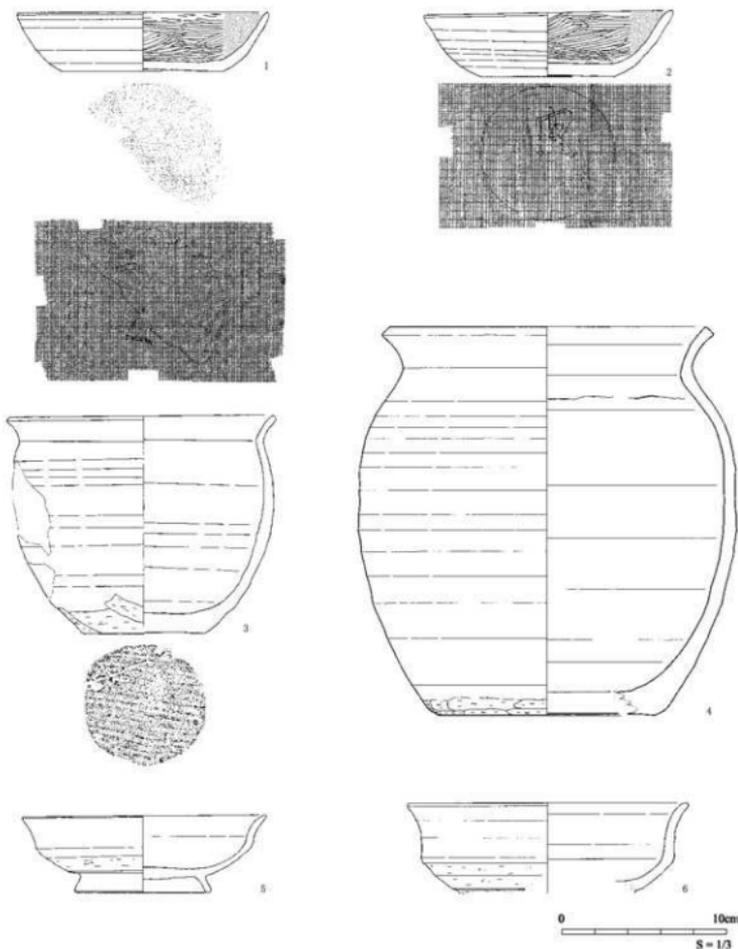
〔貯蔵穴〕カマド右側で土坑2基(K1、K2)が確認された。K1は長軸50cm、短軸44cm、深さ12cm、K2は長軸50cm、短軸40cm、深さ17cmである。いずれも平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。いずれも床面から掘り込まれており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。K1の堆積土は2層に細分され、黄褐色ローム・焼土粒を含む暗褐色・極暗褐色シルトで自然堆積土と考えられる。K2の堆積土は1層で黄褐色ロームブロックと焼土粒を含む暗褐色シルトである。K2の堆積土は人為的埋土の可能性が高く、住居廃絶時にはK1のみが開口していたと考えられる。

〔その他〕住居西壁際中央部の床面で土坑1基(K3)を確認した。径40cmの不整形円形を呈し、深さ18cmで断面形は逆台形を呈する。

〔床下土坑〕住居貼床の直下で土坑2基(K4、K5)を確認した。K4は住居北側中央部で確認された。平面形は長軸120cm、短軸90cmの不整形楕円形を呈する。断面形は底面に段をもつ逆台形を呈し、



第19図 SI601竪穴住居跡(2)



No	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	寸法 (cm)			残存	登録	写真
						口徑	底徑	器高			
1	埴	切土器器	杯	D	外：0707F (底面) 磨止糸切→手持ちA97X F 内：4512 F →黒色処理 外底面に磨漆「上」	15.2	9.7	3.65	1/4	06013	29-2
2	埴	切土器器	杯	E	外：0707F (底面) 切り磨し不明→手持ちA97X F 内：4512 F →黒色処理 外底面に磨漆「内」	15.0	8.1	3.9	5/6	06010	29-1
3	埴下層	切土器器	甕	A	外：0707F →手持ちA97X F (底面) 切り磨し不明→ (底面) 磨代値？ 内：0707F	15.4	7.0	12.55	2/3	06099	29-4
4	埴下層	切土器器	甕	B	外：0707F →手持ちA97X F (底面) 切り磨し不明→手持ちA97X F 内：0707F	18.0	13.0	23.7	1/3	06096	29-3
5	埴下層	須恵系	高杯	A	外：0707F →切取A97X F (底面) 切り磨し不明→切取A97X F 内：0707F	14.65	8.2	4.65	9/10	06008	29-5
6	埴	須恵系	高杯	A	外：0707F →切取A97X F 内：0707F	17.6	—	(5.5)	一部	06097	—

第20図 SI601 竪穴住居跡出土遺物

深さ 31cm である。K5 は住居中央部で確認された。平面形が長軸 72cm、短軸 60cm の楕円形で、断面形は深さ 40cm の U 字状を呈する。埋土はいずれも住居掘方埋土に類似する人為堆積土である。K5 の上面に床面の沈下が観察される。

〔堆積土〕住居内堆積土は 20 層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕カマド内堆積土より須恵器高台坏（第 20 図 5）、ロクロ調整の土師器甕（第 20 図 3）が、堆積土より須恵器高台坏（第 20 図 6）、ロクロ調整の土師器坏（第 20 図 1・2）・甕（第 20 図 4）・砥石（第 188 図 1）が出土した。3・4 はいずれも外底面に回転ヘラケズリ調整が施されている。1・2 はいずれも内面に黒色処理が施されており、1 は外底面に静止糸切痕がみられる。また、外底面に 1 は「土」、2 は「内」の墨書がみられる。5 は外底面に網代痕がみられる。

このほか、カマド崩落土よりロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。外面に回転ハケ調整が施されている。内外面とも強い被熱による剥落がみられ、カマドの構築材であった可能性がある。また、堆積土より土師器甕の破片と須恵器坏・甕の破片が出土した。土師器甕は外底面に木葉痕が、須恵器甕は内面に同心円状押さえ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。

【SI602 竪穴住居跡】（第 21・22 図、図版 4-8、5-1・2）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層およびⅣ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南半部が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西約 2.6m、南北 2.2m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：E-2°-N

〔壁面〕Ⅲ層およびⅣ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い東壁で床面から 8cm である。

〔床面〕残存範囲の全面に黒色粘質シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。ほぼ平坦で、このうちカマド焚口から住居中央部にかけての東西約 2.0m、南北約 1.2m の範囲では、より顕著な硬化面が形成されている。

〔支柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居東壁に設置されており、燃焼部のみが残存する。燃焼部は長さ 86cm、幅 80cm で、焚口幅は側壁先端間で 66cm である。燃焼部底面は幅 62cm、奥行 74cm で、床面より 7cm ほど皿状に窪んでいる。底面は被熱による若干の赤色化がみられる。側壁は住居東壁に設けられた張り出し部の内側に取り付けられており、左側壁で長さ 44cm、幅 16cm、高さ 12cm、右側壁で長さ 38cm、幅 13cm、高さ 6cm が残存する。白色粘土で構築されており、内側は被熱により赤色化している。奥壁は住居の東壁より 25cm ほど張り出す。

〔貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は 4 層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面より須恵器坏（第 22 図 3）が、カマド内堆積土より非ロクロ調整の土師器鉢（第 22 図 1）が、堆積土よりロクロ調整の土師器甕（第 22 図 2）が出土した。1 は外底面に木葉痕が、2 は回転糸切痕がみられる。

このほか、住居掘方埋土・カマド内堆積土・住居内堆積土より土師器環・甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で、土師器環は外面に段を有し、内面に黒色処理が施されている。土師器甕は体部に縦位のハケメがみられ、頸部に段を有さないものである。

【SI602 竪穴住居跡】(第 23・24 図、図版 5-3・4)

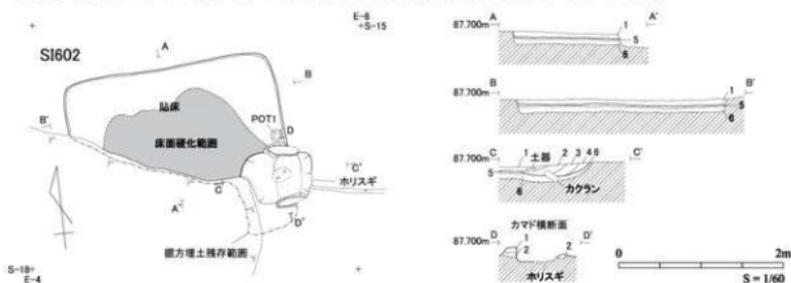
〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層およびⅣ層で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 残存状況が良好でないため全体の形状は不明であるが、南北約 3.3m、東西 3.4m 以上の方角を呈していたとみられる。

〔方向〕 カマド中軸線：N-0°-E

〔壁面〕 南壁の一部のみ残存し、Ⅳ層を壁とする。残存壁高は床面から 4cm である。



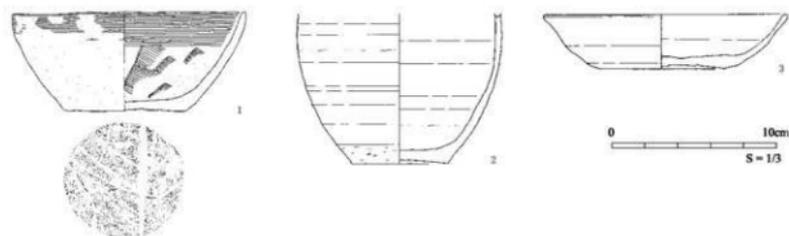
SI602 竪穴住居跡

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黄	シルト	
2	7.5YR4/5 褐	粘質シルト	焼土ブロック・粒、炭化物粒を多量に、白色粘土を少量含む
3	7.5YR3/4 暗褐	粘質シルト	焼土ブロック・粒、炭化物粒を多量に含む
4	10YR2/2 濃褐	粘質シルト	焼土ブロックを少量含む
5	10YR2/1 黄	粘質シルト	白色粘土を少量含む 住居跡床
6	10YR2/2 濃褐	粘質シルト	住居跡方埋土

SI602 竪穴住居跡カマド横断面

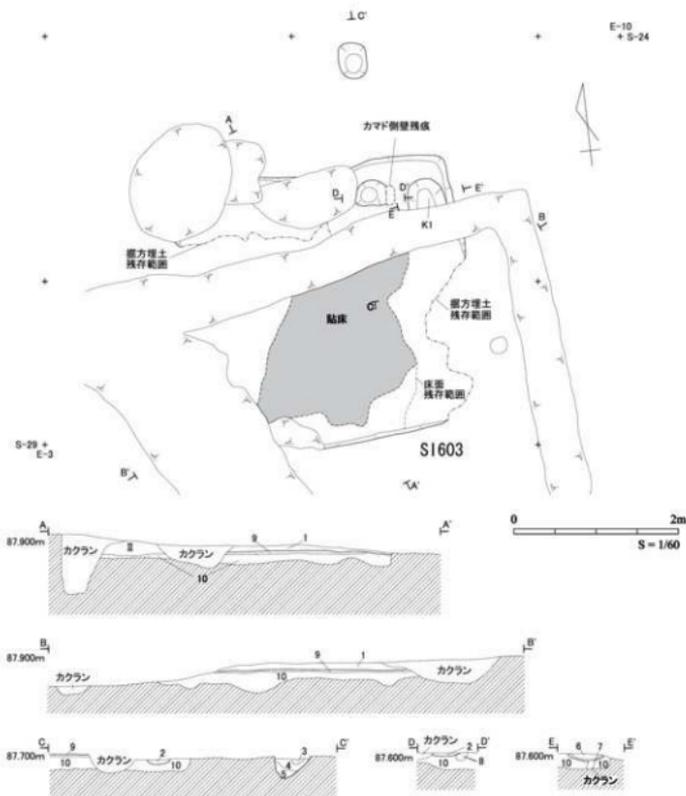
No.	土色	土質	備考
1	10YR4/4 に近い黄褐色	粘土	焼土粒を少量含む 焼物により赤色化 カマド断面焼成土
2	10YR2/2 濃褐	粘質シルト	白色粘土粒を少量、焼土粒を含む カマド断面焼成土

第 21 図 SI602 竪穴住居跡



No.	部位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			現存	登録	写真
						□径	底径	器高			
1	8Y7 内底	土師器	鉢	B	外：(□) 22Y7 (底面) 木炭痕 内：(体) 4Y7Y7→(□) 22Y7	(14.0)	7.4	7.5	2/3	06084	30-1
2	埴	土師器	甕	D	外：20Y7Y7→(底面) 黒色処理 内：20Y7Y7	—	7.8	(9.1)	一部	06085	30-2
3	底	土師器	環	A	外：20Y7Y7 (底面) 4Y7Y7無調整 内：20Y7Y7	14.7	7.6	3.15	9/10	06001	30-3

第 22 図 SI602 竪穴住居跡出土遺物



SI603竪穴住居跡

No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム状を含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	白色粘土粒を多量に含む
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム状、白色粘土粒を多量に含む
4	10YR3/2 黒褐	シルト	白色粘土粒を含む
5	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム状、白色粘土粒を多量に含む
6	10YR2/2 黒褐	シルト	白色粘土ブロックを多量に、炭化物を少量含む K3層礫土

No.	土色	土質	備考
7	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを含む K1層礫土
8	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粘土ブロック、炭化物粒を多量に含む カマド製煉礫土
9	10YR3/2 暗褐	シルト	住居跡床
10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居跡方土

第 23 図 SI603 竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	断面測物・特徴	法量 (cm)		残存	登録	写真	
						口径	底径				
1	埋	土師器	杯	D 2	外:(口) 32.7 → (体) 4.7 × 8.1 内:(口) 4.0 × 7.1 → 黒色処理	—	—	(2.9)	一部	06192	—

第 24 図 SI603 竪穴住居跡出土遺物

〔床面〕V層起源の黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、中央部に黒褐色シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居北壁の東寄りに設置されている。燃焼部底面と右側壁の基部、煙道の煙出しピットが残存する。燃焼部底面は幅38cm、奥行30cmの範囲で残存し、床面より6cmほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は右側の基部のみ残存する。掘方埋土を掘り込んで構築されており、床面より下の長さ24cm、幅10cm、深さ8cmが残存する。構築土には白色粘土と黄褐色ロームを含む。奥壁および煙道は残存しないため不明であるが、燃焼部の北側125cmの位置に長軸45cm、短軸34cm、深さ27cmのピットが確認された。位置関係と埋土に白色粘土粒と黄褐色ロームブロックを多量に含むことから煙道ピットと考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居北東コーナー部で土坑1基(K1)が確認された。南半部が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸45cm以上、短軸45cmの楕円形を呈していたとみられる。底面は皿状を呈し、深さ15cmである。床面から掘り込まれており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は2層に細分され、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は7層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器坏の破片(第24図)が出土した。体部外面に稜を持ち、内面に黒色処理が施されている。

このほか、貯蔵穴堆積土・住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器裏の破片が出土した。

〔SI609 竅穴住居跡〕(第25・26図、図版5-5・6)

〔位置・確認面〕S1南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕SI645 → 《SI609》 → SB643 → SB615

〔規模・形状〕東西約3.1m、南北約3.0mの方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：S-1°-E

〔壁面〕Ⅲ層およびⅣ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で床面から33cmである。

〔床面〕Ⅳ層およびⅤ層を床面とし、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居南壁中央に設置されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ103cm、幅96cmで、焚口幅は側壁先端間で65cmである。燃焼部底面は幅49cm、奥行53cmで、床面より10cmほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は左側壁で長さ62cm、幅27cm、高さ21cm、右側壁で長さ66cm、幅27cm、高さ18cmが残存する。白色粘土と黄褐色ロームで構築されており、内側は被熱による若干の赤色化がみられる。奥壁は住居南壁より20cmほど張り出す。なお、燃焼部底面の窪みに7～10cmの厚さで焼土を主体とする堆積層がみられ、カマド機能時の堆積土と考えられる。

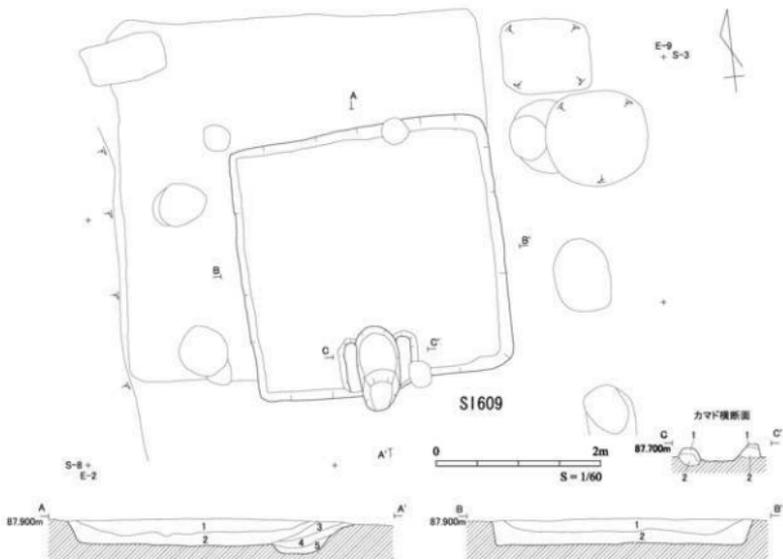
〔貯蔵穴〕なし

〔堆積土〕住居内堆積土は5層に細分される。1～4層は住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆

積土、5層はカマド機能時の堆積土である。

〔出土遺物〕住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器鉢（第26図）が出土した。内面にヘラミガキが施され、外底面に木葉痕がみられる。

このほか、床面・カマド構築土・住居掘方埋土・住居内堆積土よりロクロ調整の土師器環・甕の破片が出土した。土師器環は内面に黒色処理が施され、外底面に回転ヘラ切痕がみられる。土師器甕は外底面に回転糸切痕がみられる。



S1609竪穴住居跡

No	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	焼土層を少量含む
2	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土ブロック・粘、炭化物粒を少量含む
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック・粘を含む カマド構築土
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック・粘を少量含む カマド構築土
5	2.5YR5/4 に近い黄褐	シルト	焼土を主体とする 黄褐色土ブロックを含む カマド構築時堆積土

S1609竪穴住居跡カマド横断面

No	土色	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を少量、黄褐色ロームブロックを含む 焼土によりめく化、カマド構築時堆積土
2	10YR5/3 に近い黄褐	粘土	黄褐色ロームを主体とする 焼土粒を少量含む カマド構築時堆積土

第25図 S1609 竪穴住居跡



No	層位	種類	形種	分類	断面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	層之層	土師器	鉢	B	外: 9F (底面) 木葉痕 内: A13F	11.8	6.6	4.0	2/3	06098	30-4

第26図 S1609 竪穴住居跡出土遺物

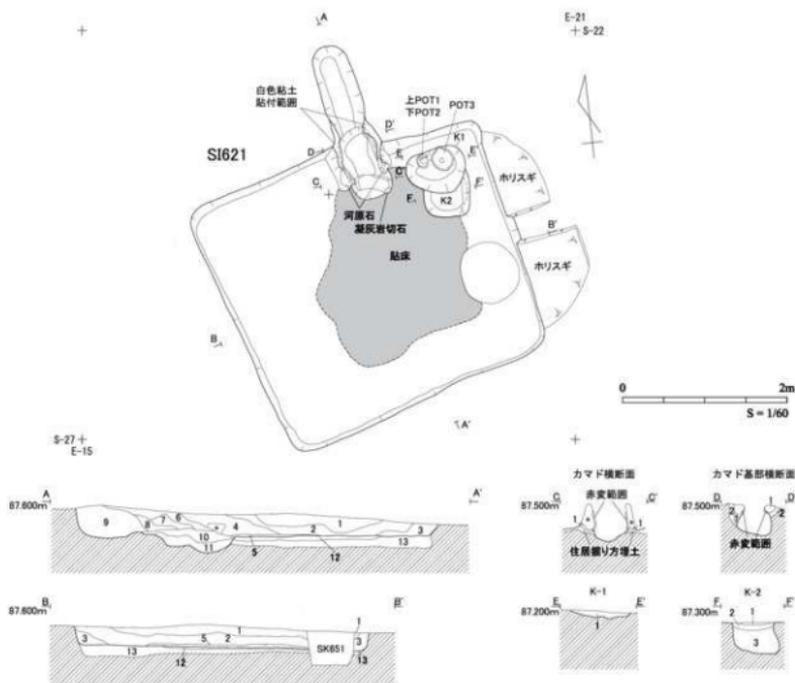
【SI621 竪穴住居跡】(第 27・28 図、図版 5・7・8、6-1)

[位置・確認面] S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層およびⅣ層で確認した。

[重複] 《SI621》→ SK651

[規模・形状] 東西 3.6m、南北 3.1m の方形を呈する。

[方向] カマド中軸線：N - 13° - W



SI621 竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	焼土粒を少量含む
2	10YR3/6 暗褐色	シルト	焼土粒を少量含む
3	7.5YR2/1 黒	シルト	
4	10YR2/1 黒	シルト	白色粘土粒、焼土粒を含む
5	10YR2/1 黒	シルト	焼土ブロックを多数に含む
6	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	白色粘土ブロック、焼土粒を多数に含む
7	10YR2/4 暗褐色	シルト	白色粘土ブロック、焼土粒を多数に含む
8	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	白色粘土粒、焼土粒を多数に含む
9	10YR3/6 暗褐色	シルト	焼土主塊 白色粘土ブロック、暗褐色土ブロックを含む
10	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	焼土を多数に含む
11	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	焼土粒を少量含む
12	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 住居跡床
13	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 住居跡外埋土

SI621 竪穴住居跡カマド横断面(C-C')

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/6 暗褐色	シルト	白色粘土、焼土を多数に含む

SI621 竪穴住居跡カマド基部横断面(D-D')

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 紅い黄褐色	粘土	焼土粒を少量含む カマド製煉焼粘土
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	白色粘土ブロック、焼土ブロックを多数に含む カマド製煉焼粘土

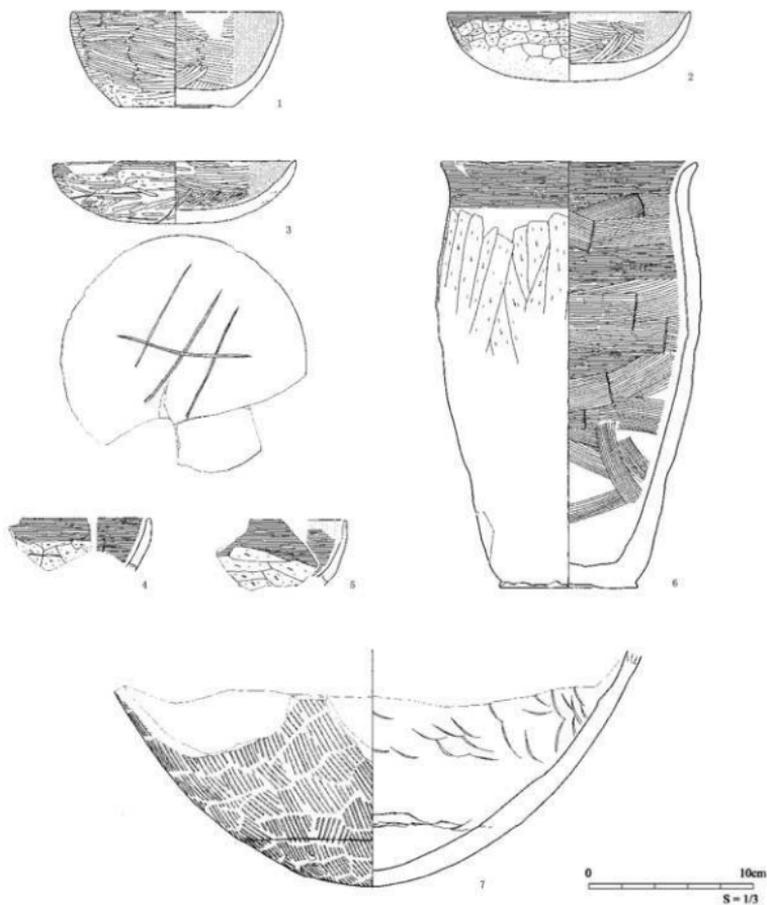
SI621 竪穴住居跡竈穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	白色粘土ブロック、焼土ブロックを多数に含む 人為的埋土

SI621 竪穴住居跡竈穴(K2)

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR1.7/1 黒	シルト	暗褐色土ブロックを少量含む 人為的埋土
2	10YR3/2 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 人為的埋土
3	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 人為的埋土

第 27 図 SI621 竪穴住居跡



No	層位	種類	器種	分類	器面圖様・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口徑	底径	器高			
1	床	土師器	杯	F	外: (体下部) ㊦㊦㊦ → (口~体) ㊦㊦㊦ (底面) ㊦㊦㊦ 内: ㊦㊦㊦ → 黒色起理 (底面并断状)	(12.9)	7.0	5.8	2/5	06016	30-5
2	床 POT1	土師器	杯	E 1	外: (口~体) ㊦㊦㊦ → ㊦㊦㊦ 内: ㊦㊦㊦ → 黒色起理 外周厚縁、内面口縁部磨減	14.6	4.2	—	3/5	06015	30-6
3	床	土師器	杯	E 2	外: (口) ㊦㊦㊦ → (口~底) ㊦㊦㊦ → ㊦㊦㊦ 内: ㊦㊦㊦ → 黒色起理 外底面: ㊦㊦	14.7	—	3.8	4/5	06011	30-7
4	床	土師器	杯	I 9	外: (口) ㊦㊦㊦ → ㊦㊦㊦ 内: (口) ㊦㊦㊦ → ㊦㊦㊦	—	—	(5.2)	一部	06081	—
5	床	土師器	杯	I 9	外: (口) ㊦㊦㊦ → ㊦㊦㊦ 内: (口) ㊦㊦㊦	—	—	(4.3)	一部	06082	—
6	床	土師器	甕	D 2	外: (口) ㊦㊦㊦ (胴) ㊦㊦㊦ (底面) 木炭灰 内: (口) ㊦㊦㊦ → (胴) ㊦㊦㊦ → ㊦㊦	(14.5)	8.3	26.0	1/3	06077	30-8
7	床	須恵器	甕	C	外: 平行斜线 内: 無文様土呂敷 内外面に接合痕	—	—	(31.8)	一部	06014	31-1

第 28 図 S1621 竪穴住居跡出土遺物

〔壁面〕Ⅲ層およびⅣ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い北壁で床面から27cmである。

〔床面〕黄褐色ロームをわずかに粒状に含む掘方埋土を床面としている。西側に向かってわずかに傾斜し、カマド焚口から中央部にかけての東西約2.0m、南北約2.2mの範囲に黒色シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居北壁の中央やや東寄りに設置されている。燃焼部と煙道が残存する。燃焼部は長さ90cm、幅72cmで、焚口幅は35cmである。燃焼部底面は幅45cm、奥行88cmで、床面より10cmほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化はみられない。南半部では燃焼部底面を切っただけでさらに10cmほど皿状に窪んでおり、住居廃絶時にカマド内の機能時堆積土を取り去った際の痕跡と考えられる。側壁は左側壁で長さ53cm、幅21cm、高さ24cm、右側壁で38cm、15cm、高さ33cmが残存する。白色粘土で構築されており、内側は被熱により赤色化している。側壁先端には扁平な河原石が据えつけられており、焚口部では長さ45cm、幅18cm、厚さ10cmの角柱状の凝灰岩切石が確認された。凝灰岩切石は左右側壁先端の河原石の上に据えられ、焚口部を構成していたと考えられる。奥壁はカマド左側の住居北壁より10cm、右側の住居北壁より30cmほど張り出し、奥壁から北側へ延びる煙道は105cmで、幅48cm、深さ26～30cmが残存する。底面は奥壁との接続部からスロープ状に立ち上がり、中ほどで浅く落ち込む。煙道の先端部に煙出しピットは確認されない。

〔貯蔵穴〕カマド右側で土坑2基(K1、K2)が切り合い関係を持って確認された。いずれも床面から掘り込まれているが、K1はK2の埋め戻し後に掘り込まれている。K1は長軸75cm、短軸55cm、深さ8cm、K2は長軸70cm、短軸56cm、深さ38cmである。いずれも平面形は楕円形で、断面形はK1が浅い皿状、K2がU字状を呈する。K1の埋土は1層、K2の埋土は3層に細分され、いずれも人為的埋土と考えられる。位置と形状からこれらの土坑は貯蔵穴と考えられるが、床面と同一面を形成するK1埋土の上面には土師器坏と須恵器坏、須恵器甕が置かれた状態で確認されたことから、住居廃絶直前にはK1・K2とも機能していなかったと考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は11層に細分される。いずれも住居廃絶時以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面より須恵器甕(第28図7)、非ロクロ調整の土師器坏(第28図1・2・3)・甕(第28図6)が、住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器坏(第28図4・5)が出土した。1・3はカマド右脇の床面に重ね置かれた状態で、7はその右側に置かれた状態で出土した。1～3は丸底で体部外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。2は内底面に井桁状のヘラミガキが施されている。4・5は口縁部破片であるが、内外面とも横ナデ調整で内面に黒色処理が施されていない。6は胴部にケズリ調整が施され、外底面に木葉痕がみられる。7は内面に無文押さえ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。

〔S1633 竪穴住居跡〕(第29・30図、図版6・2)

〔位置・確認面〕S1南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

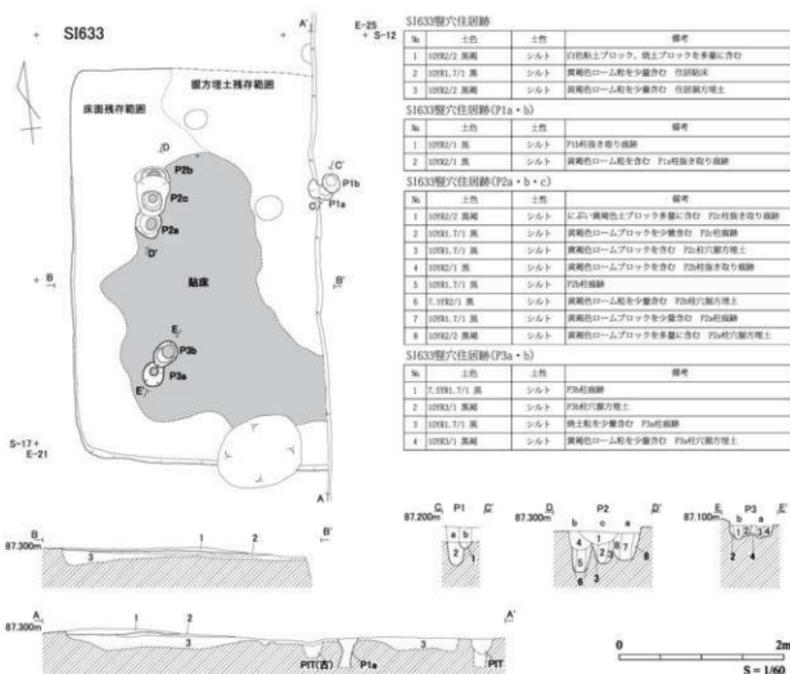
〔重複〕なし

〔規模・形状〕東半部が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西3.8m以上、南北約4.6mの方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N-5°-E

〔壁面〕Ⅲ層を壁とする。床面からやや外傾気味に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い南壁で床面から9cmである。

〔床面〕黄褐色ロームをわずかに粒状に含む掘方埋土を床面としている。東側に向かってわずかに傾



第29図 S1633 竪穴住居跡



No.	層位	種類	源種	分類	測定調整・特徴	法量 (cm)			登録	写真
						口徑	底徑	高さ		
1	P4c埋	遺棄物	骨	A 1	外：環状板状文 内：凹凸?	—	—	(B) 一節	06080	31-2

第30図 S1633 竪穴住居跡出土遺物

斜し、中央部の東西2.6m以上、南北約3.4mの範囲に黒色シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕住居コーナー部より内側に120～150cmの位置で柱穴3基(P1a・b、P2a・b・c、P3a・b)を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。柱穴の切り合い関係から2～3時期の変遷がみとめられるが、対応関係については明らかにできなかった。柱穴の掘方の平面形は長軸32～36cm、短軸20～32cmの隅丸方形ないしは楕円形で、床面からの深さは16～50cmである。P2・P3ではいずれも平面形が直径10～16cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の床面からの深さは16～50cmで、いずれも掘方底面に達する。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉・貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は1層で、住居廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕P2c掘方埋土より須恵器製の破片(第30図)が出土した。外面に櫛描波状文がみられる。

このほか、P2c抜き取り痕跡よりロクロ・非ロクロ調整の土師器環の破片、P2a掘方埋土より内外面にハケメのみられる土師器製の破片、住居掘方埋土・住居内堆積土よりロクロ・非ロクロ調整の土師器環・製の破片が出土した。いずれも小破片であるが、非ロクロ調整の土師器環は体部外面に段を持ち、内面に黒色処理が施されている。

【SI634 竪穴住居跡】(第31・32・33図、図版6-3・4)

〔位置・確認面〕S1南区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕SK644→〔SI634〕

〔規模・形状〕東西約4.7m、南北約4.5mの方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N-11°-W

〔壁面〕IV層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で床面から12cmである。

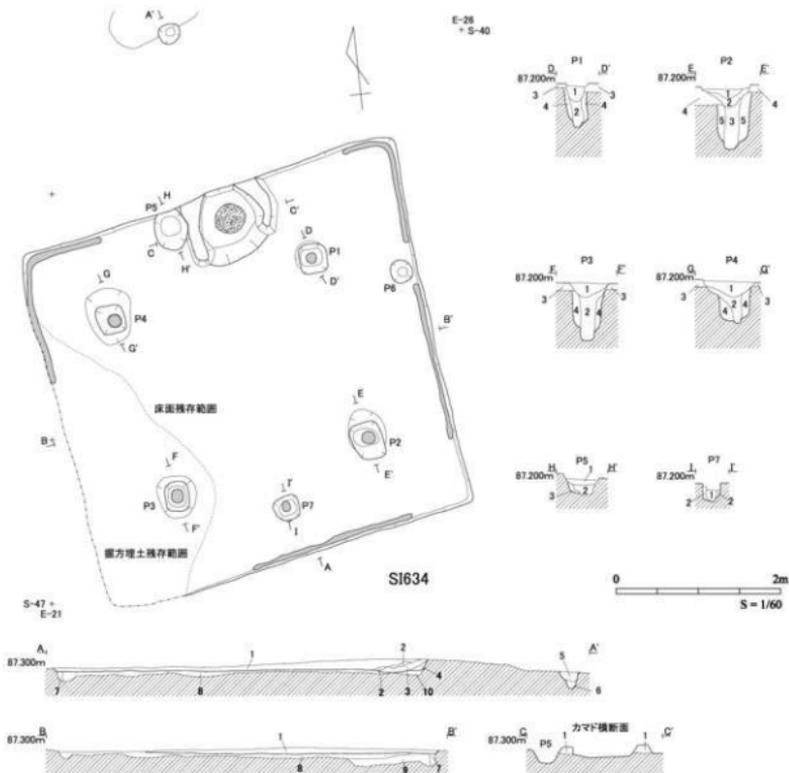
〔床面〕V層起源の黄褐色ロームを多く含む掘方埋土を床としている。ほぼ平坦である。

〔主柱穴〕住居平面形の推定対角線上でコーナー部より内側に100～150cmの位置で柱穴4基(P1～4)を確認した。掘方の平面形は長軸38～48cm、短軸30～38cmの隅丸方形を呈し、床面からの深さは48～72cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認し、抜き取り痕跡の底面で平面形が直径13～18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の床面からの深さは50～78cmで、掘方底面より3～13cmほど深く落ち込んでいる。

〔壁柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅22cm、下端幅10cm、床面からの深さ10cmで断面形がU字形を呈する周溝がカマド部分と住居南東・南西コーナー部をのぞいて全周し、部分的に幅8cm、深さ12cm程度の壁材痕跡が認められる。周溝の堆積土は住居掘方埋土と同一であることから、壁材の設置と床面の構築が同時に行なわれたと考えられる。

〔カマド〕住居北壁中央に設置されている。燃焼部と煙出しピットが残存する。燃焼部は120cm、奥行90cmが残存し、焚口幅は側壁先端間で90cmである。燃焼部底面は幅70cm、奥行90cmが残存し、床面より3cmほど皿状に窪んでいる。側壁は左側壁で長さ80cm、幅18cm、高さ8cm、右側壁で



S1634竪穴住居跡

No	土色	土性	備考
1	10YR5/1 黒褐	シルト	焼土・炭化植物を少量。黄褐色ロームブロック・粘を含む
2	10YR5/2 に赤い黄褐	粘土	焼熱により赤色化 カマド天井跡原土
3	7.5YR3/2 黒褐	シルト	焼土ブロック・粘を多量に含む
4	7.5YR3/2 黒褐	シルト	焼土ブロック・粘を多量に含む
5	10YR5/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
6	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
7	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム塊を少量含む 住居跡方礎土
8	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居跡方礎土
9	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居跡方礎土
10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム塊を少量含む 住居跡方礎土

S1634竪穴住居跡カマド横断面

No	土色	土性	備考
1	10YR5/4 に赤い黄褐	粘土	焼土を少量含む 焼熱により赤色化 カマド側壁構造土

S1634竪穴住居跡(P1)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粘を少量含む 柱抜き取り面跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱抜き取り面跡
3			住居跡方礎土
4	10YR4/1 黒灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴壁方礎土

S1634竪穴住居跡(P2)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粘を少量含む 柱抜き取り面跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘を多量に含む 柱抜き取り面跡
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱抜き取り面跡
4			住居跡方礎土
5	10YR4/1 黒灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴壁方礎土

S1634竪穴住居跡(P3)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粘を少量含む 柱抜き取り面跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱抜き取り面跡
3			住居跡方礎土
4	10YR4/1 黒灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴壁方礎土

S1634竪穴住居跡(P4)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粘を少量含む 柱抜き取り面跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱抜き取り面跡
3			住居跡方礎土
4	10YR4/1 黒灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴壁方礎土

第 31 図 S1634 竪穴住居跡 (1)

長さ 73cm、幅 30cm、高さ 10cm が残存する。白色粘土で構築されており、内側は被熱による赤色化がみられる。奥壁は住居北壁に一致する。煙道部は残存しないが、奥壁の北側 164cm の位置に長軸 25cm、短軸 20cm、深さ 22cm のピットが確認された。位置関係と埋土の特徴が住居内堆積土と類似することから煙道ピットと考えられる。

〔貯蔵穴〕なし

〔その他〕カマド左側 (P5)、住居東壁やや北寄り (P6)、住居南側中央 (P7) で柱穴 3 基が確認された。P5 はカマド左側壁外側と住居北壁に接し、柱材の抜き取り痕跡が認められる。掘方の平面形は不明であるが、長軸 50cm、短軸 40cm の楕円形を呈する抜き取り痕跡の範囲に収まる。掘方の床面からの深さは 23cm である。柱痕跡は確認されない。P6 は住居東壁に接し、P6 の周囲で壁材痕跡が途切れる。掘方の平面形は直径 28cm の円形を呈し、床面からの深さは 22cm である。柱痕跡は確認されない。P7 は南側主柱穴 P2・3 の中間やや南寄りに立地する。掘方の平面形は一辺が 30cm の隅丸方形を呈し、床面からの深さは 22cm である。平面形が直径 13cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。いずれも床面から掘り込まれており、住居に伴うものと考えられるが、性格は不明である。

〔堆積土〕住居内堆積土は 6 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕カマド内堆積土より非ロクロ調整の土師器坏 (第 33 図) が出土した。体部外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。

このほか、住居掘方埋土・カマド内堆積土・住居内堆積土より土師器坏・甕、須恵器甕の破片が出土した。いずれも小破片であるが、土師器甕は外面にハケメがみられる。

【SI635 竪穴住居跡】(第 34 図、図版 6 - 5)

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。IV 層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕残存状況が良好でないため全体の形状は不明だが、南北 4.4m 以上、東西 3.0m 以上の方角を呈していたとみられる。

〔方向〕東辺：N - 12° - W

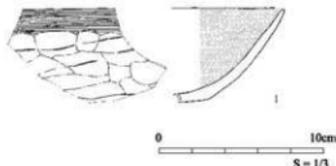
〔壁面・床面〕残存しない。

SI634 竪穴住居跡 (P5)

層	土色	土質	備考
1	10903/1 黄褐色	シルト	黄褐色ローム粒、黄土粒を少量含む 柱跡抜き取り痕跡
2	10903/2 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱跡抜き取り痕跡
3	10903/3 黄褐色	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む 柱穴掘方埋土

SI634 竪穴住居跡 (P7)

層	土色	土質	備考
1	10903/2 黄褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱跡
2	10903/3 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴掘方埋土

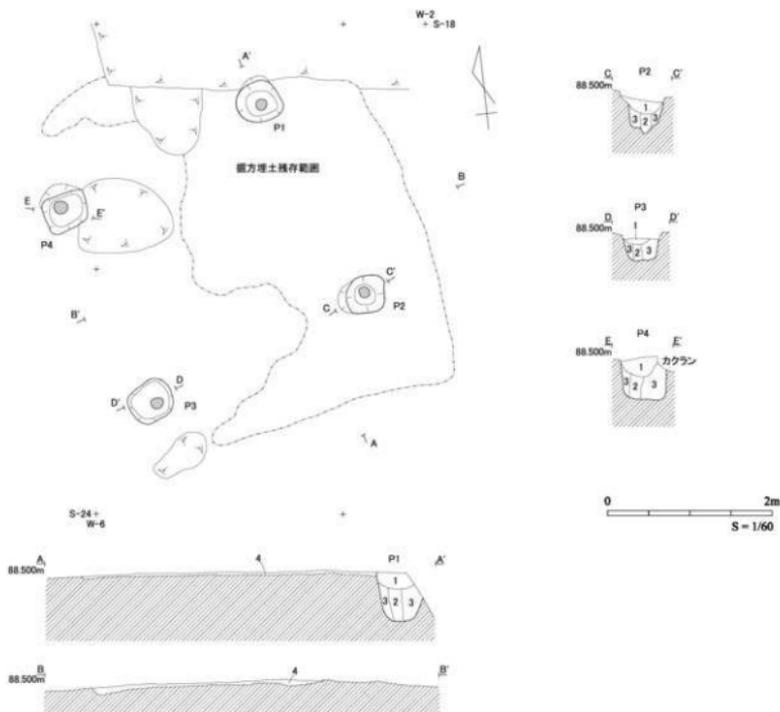


第 32 図 SI634 竪穴住居跡 (2)

No.	層位	種類	距離	分類	断面調整・特徴	径量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	断面			
1	掘方内埋	土師器	坏	E 3	外：(口)ヨリガ→(体)ナシ 内：(口→体)ハシナ→黒色処理	—	—	(5.7)	一部	06190	—

第 33 図 SI634 竪穴住居跡出土遺物

〔主柱穴〕住居平面形の推定対角線上でコーナー部より内側に100cm程度の位置で柱穴4基(P1～P4)を確認した。掘方の平面形は長軸45～50cm、短軸40～45cmの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは30～55cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認し、抜き取り痕跡の底面で平面形が直径10～15cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の床面からの深さは30～55cmで、いずれも掘方底面に達する。P3では柱痕跡直下の掘方底面に10cmほどの凝灰岩が据えられていた。〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし



S1635 壁穴住居跡

№	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム状、粘土質。炭化物粒を多数に含む 片柱抜き取り痕跡
2	10YR2/3 黄褐	シルト	黄褐色ローム状を少量含む 片柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ローム状を多数に含む 片柱穴掘方土
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粘土質。炭化物粒を少量含む 住居掘方土

S1635 壁穴住居跡 (P2)

№	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム状、粘土質。炭化物粒を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/3 黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む 柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック少量含む 柱穴掘方掘土

S1635 壁穴住居跡 (P3)

№	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム状、粘土質。炭化物粒を多数に含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/3 黄褐	シルト	黄褐色ローム状を少量含む 柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多数に含む 柱穴掘方掘土

S1635 壁穴住居跡 (P4)

№	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム状、粘土質。炭化物粒を多数に含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ローム状を多数に含む 柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多数に含む 柱穴掘方掘土

第 34 図 S1635 壁穴住居跡

〔カマド・炉・貯蔵穴〕 不明

〔堆積土〕 残存しない。

〔出土遺物〕 住居掘方埋土より非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。いずれも小破片であるが、土師器坏は内面に黒色処理が施されている。土師器甕は体部にハケメがみられる。

〔SI645 竪穴住居跡〕 (第 35 図、図版 6 - 6)

〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕 (SI645) → SI609 → SB643 → SB615

〔規模・形状〕 SI609 との重複により南東部が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西約 4.2m、南北約 4.4m の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕 西辺：N - 2° - E

〔壁面〕 Ⅲ層およびⅣ層を壁面とし、残存壁高は最も残存状況の良い北壁で床面から 8cm である。

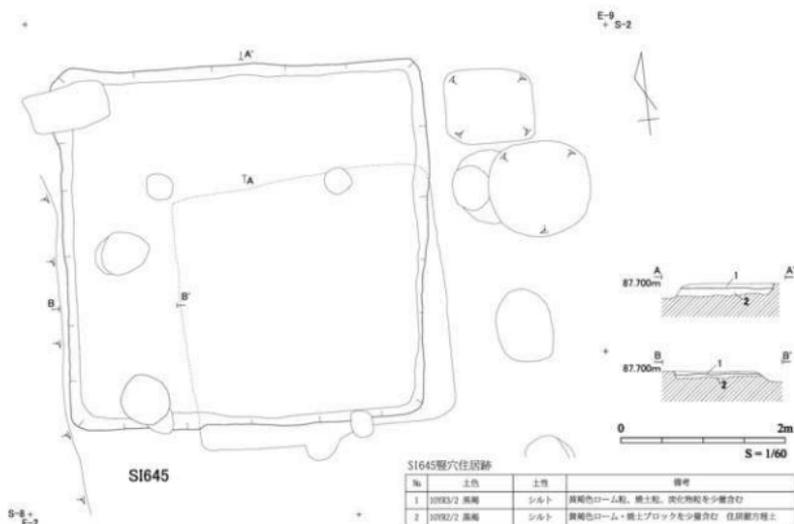
〔床面〕 黄褐色ロームをブロック状に若干含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕 なし

〔カマド・炉・貯蔵穴〕 不明

〔堆積土〕 住居内堆積土は 1 層で、住居廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕 住居掘方埋土・住居内堆積土よりロクロ調整の土師器破片、非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。いずれも小破片であるが、土師器坏は体部に屈曲を持ち、内面に黒色処理が施されている。



第 35 図 SI645 竪穴住居跡

B. 掘立柱建物跡

【SB11 掘立柱建物跡】(第36図、図版6-7)

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南西部の一部が調査区外に延びているが、南北2間(桁行総長3.95m)、東西1間(梁行総長2.95m)の南北棟である。

〔柱穴〕5基確認した。掘方の平面形は長軸20~38cm、短軸15~35cmの楕円形ないしは隅丸方形を呈し、深さは18~48cmである。いずれも平面形が直径10~15cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列で北から195-200cm、北側柱列で295cmである。

〔方向〕東側柱列：N-13°-W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

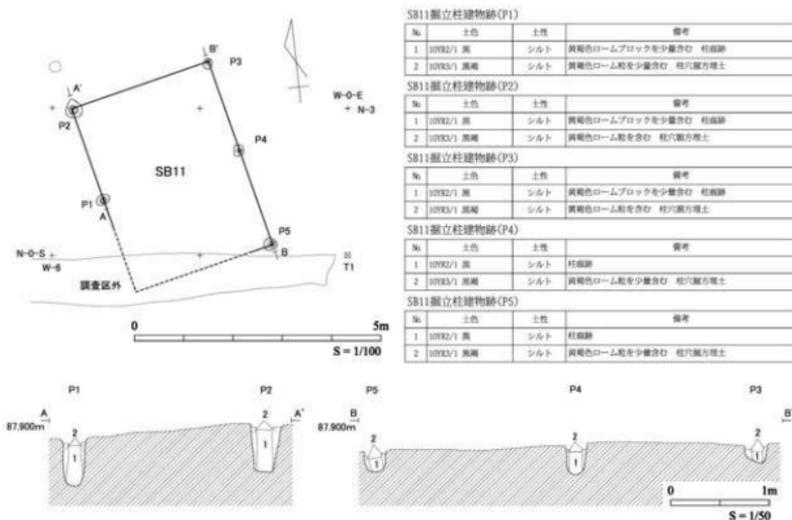
【SB12 掘立柱建物跡】(第37図、図版6-8)

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西2間(桁行総長2.7m)、南北1間(梁行総長2.3m)の東西棟である。

〔柱穴〕6基確認した。掘方の平面形は長軸23~35cm、短軸20~30cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは13~25cmである。いずれも平面形が直径12~18cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。また、1基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。



第36図 SB11 掘立柱建物跡

〔柱間寸法〕 南側柱列で東から 130 - 140cm、西側柱列で 230cm である。

〔方向〕 南側柱列：E - 30° - N

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【SB615 掘立柱建物跡】（第 38 図、図版 5 - 5）

〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕 SI645 → SI609 → SB643 → 《SB615》

〔規模・形状〕 南北 4 間（桁行総長 7.2m）、東西 1 間（梁行総長 4.5m）の南北棟である。

〔柱穴〕 10 基確認した。掘方の平面形は長軸 60 ~ 100cm、短軸 50 ~ 65cm の隅丸方形ないしは楕円形を呈し、深さは 15 ~ 45cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡はすべて掘方底面に達し、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕 西側柱列で北から 200 - 200 - 160 - 160cm、南側柱列で 4.5m である。

〔方向〕 西側柱列：N - 4° - W

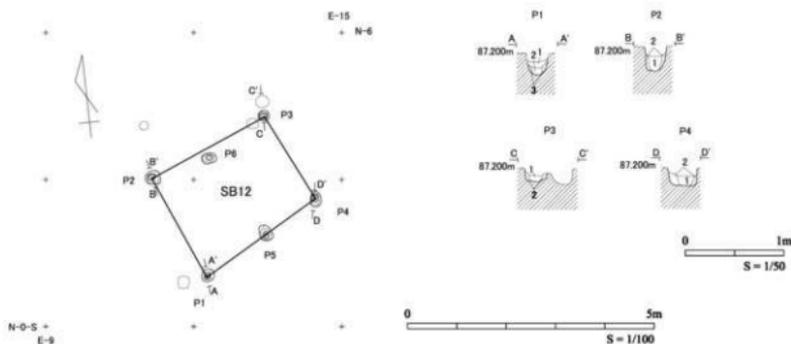
〔出土遺物〕 柱穴掘方埋土より近世陶磁器、ロクロ・非ロクロ調整の土師器杯・甕の破片が、抜き取り痕跡より須恵器高台杯・土師器杯の破片が出土した。

【SB616 掘立柱建物跡】（第 39 図、図版 7 - 1）

〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 南東部の一部が調査区外に延びているが、南北 3 間（桁行総長 5.2m）、東西 2 間（梁行総長 3.9m）の南北棟である。



SB12掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多数に含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/7 黒	シルト	柱痕跡
3	10YR2/7 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱穴掘方埋土

SB12掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多数に含む 柱痕跡
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む 柱穴掘方埋土

SB12掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR1/7 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	柱穴掘方埋土

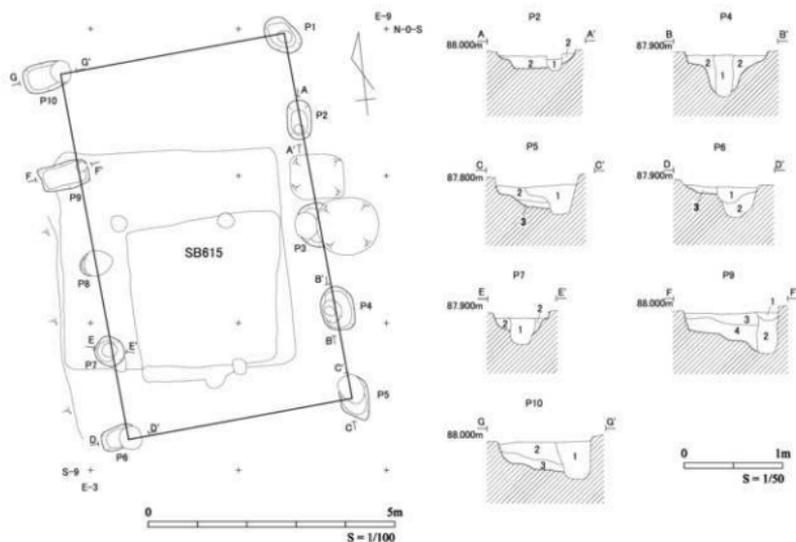
第 37 図 SB12 掘立柱建物跡

〔柱穴〕 8基確認した。掘方の平面形は長軸 18～38cm、短軸 17～22cmの隅丸方形ないしは楕円形を呈し、深さは 5～26cmである。北東コーナー部の P1 では柱材の抜き取り痕跡を確認し、抜き取り痕跡の底面で平面形が直径 12cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 26cmで、掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕 西側柱列で北から 180・170・170cm、北側柱列で西から 210・180cmである。

〔方向〕 西側柱列：N・16°・W

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



SB615 掘立柱建物跡 (P2)

No	土色	土性	備考
1	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	小礫を多量に、黒褐色土ブロックを少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴壁方土

SB615 掘立柱建物跡 (P4)

No	土色	土性	備考
1	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	小礫を多量に、黒褐色土ブロックを含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴壁方土

SB615 掘立柱建物跡 (P5)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴壁方土
3	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む 柱穴壁方土

SB615 掘立柱建物跡 (P6)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱抜き取り痕跡
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む 柱穴壁方土

SB615 掘立柱建物跡 (P7)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱穴壁方土

SB615 掘立柱建物跡 (P9)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/3 に近い黄褐色	シルト	黄褐色ロームを主体とする 小礫を含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱抜き取り痕跡
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む 柱穴壁方土
4	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒、粘土粒を少量含む 柱穴壁方土

SB615 掘立柱建物跡 (P10)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒、粘土粒を少量含む 柱穴壁方土
3	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱穴壁方土

第 38 図 SB615 掘立柱建物跡

【SB636 掘立柱建物跡】 (第40図、図版7-2)

〔位置・確認面〕S1南区の東斜面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕SK629 → 《SB636》

〔規模・形状〕南北1間(総長2.7m)、東西1間(総長2.6m)の建物跡である。規模・方向などからみて竪穴住居跡の主柱穴の可能性はある。

〔柱穴〕4基確認した。掘方の平面形は長軸33～47cm、短軸26～40cmの隅丸方形を呈し、深さは28～38cmである。P1・2・4では平面形が直径14～20cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。P3では柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡は掘方底面に達し、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で270cm、北側柱列で260cmである。

〔方向〕西側柱列：N-5°-W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB643 掘立柱建物跡】 (第41図、図版6-6)

〔位置・確認面〕S1南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕SI645 → SI609 → 《SB643》 → SB615

〔規模・形状〕東西1間(総長2.1m)、南北1間(総長3.0m)の建物跡である。

〔柱穴〕4基確認した。掘方の平面形は長軸30～38cm、短軸27～32cmの不整円形を呈し、深さは60～70cmである。P1・2・4では平面形が直径12～14cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。P3では柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡は掘方底面に達し、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で150cm、北側柱列で110cmである。

〔方向〕西側柱列：N-8°-W

〔出土遺物〕柱材の抜き取り痕跡より土師器鉢の小破片が出土した。

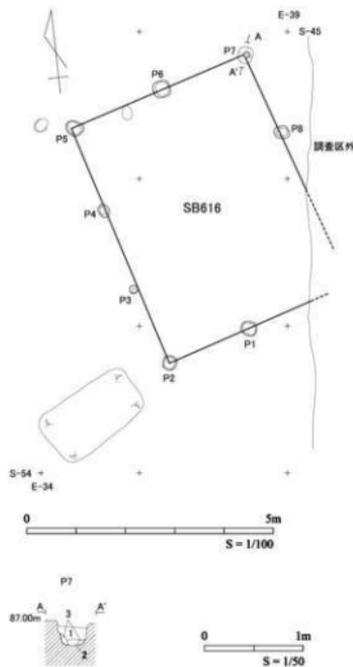
【SB650 掘立柱建物跡】 (第42図、図版7-3)

〔位置・確認面〕S1南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕《SB650》— SB657 → SX623

〔規模・形状〕東西2間(総長4.2m)、南北2間(総長4.7m)の建物跡である。

〔柱穴〕8基確認した。掘方の平面形は長軸58



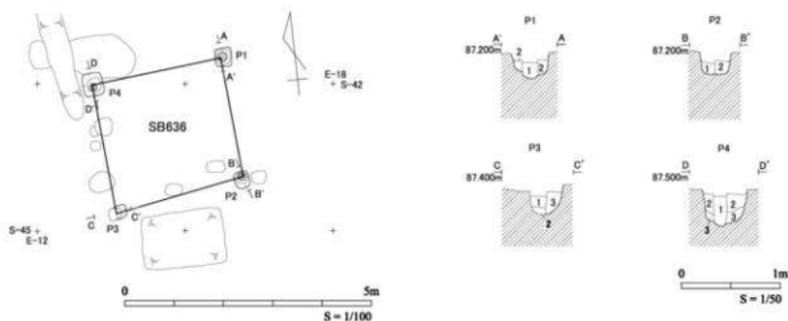
SB616掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土物	備考
1	209K/1 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・瓦を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	209R/1 黒	シルト	黄褐色ローム粘土少量含む 柱抜き取り痕跡
3	209A/1 黒灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多数に含む 柱穴掘方埋土

第39図 SB616 掘立柱建物跡

～66cm、短軸46～62cmの楕円形ないしは不整形を呈し、深さは24～50cmである。このうち3基で平面形が直径14～20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは40cmで、いずれも掘方底面に達する。このほかの5基では柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡はいずれも掘方底面に達し、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で北から230・240cm、北側柱列で西から210・210cmである。



SB636掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層上

SB636掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層上

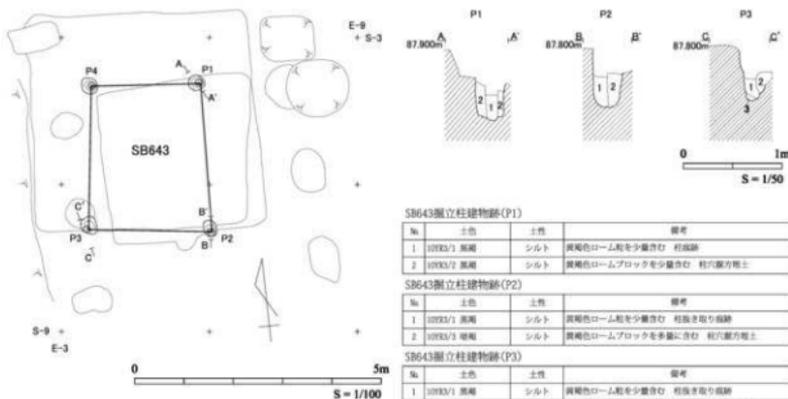
SB636掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱抜き取り痕跡
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層上

SB636掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱痕跡
2	10YR3/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 掘方土層面含む 柱穴掘方層上
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴掘方層上

第40図 SB636 掘立柱建物跡



SB643掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層上

SB643掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層上

SB643掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層上

第41図 SB643 掘立柱建物跡

〔方向〕 東側柱列：N - 2° - W

〔出土遺物〕 柱穴堆積土および抜き取り痕跡より須恵器甕の破片と非ロクロ調整の土師器甕の小破片が出土した。須恵器甕は外面に平行タタキ目が、土師器甕は外面にハケメがみられる。

〔SB655 掘立柱建物跡〕 (第 43 図、図版 7 - 4)

〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。IV 層で確認した。

〔重複〕 SK656 → 《SB655》

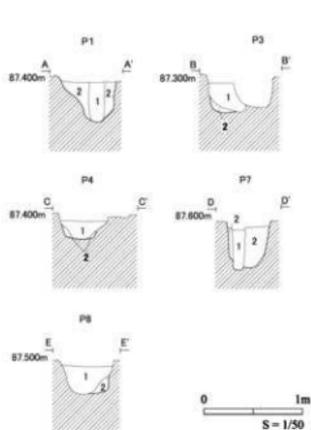
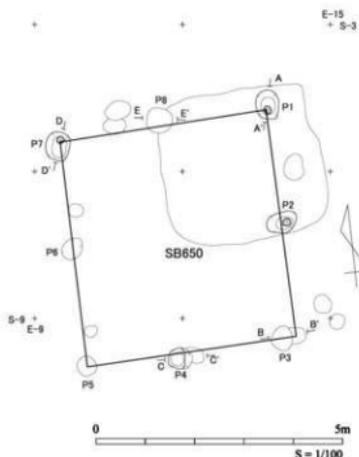
〔規模・形状〕 東西 3 間 (桁行総長 6.5m)、南北 1 間 (梁行総長 4.5m) の東西棟である。

〔柱穴〕 7 基確認した。掘方の平面形は長軸 36 ~ 50cm、短軸 28 ~ 40cm の不整形円形ないしは楕円形を呈し、深さは 9 ~ 28cm である。このうち 5 基で平面形が直径 10 ~ 14cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。また、3 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 北側柱列で西から 200 - 250 - 200cm、東側柱列で 450cm である。

〔方向〕 北側柱列：E - 5° - N

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



SB650掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱穴掘方埋土

SB650掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・殻を少量含む。柱抜き取り痕跡
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB650掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱穴掘方埋土
3	10YR2/1 黒	シルト	
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む

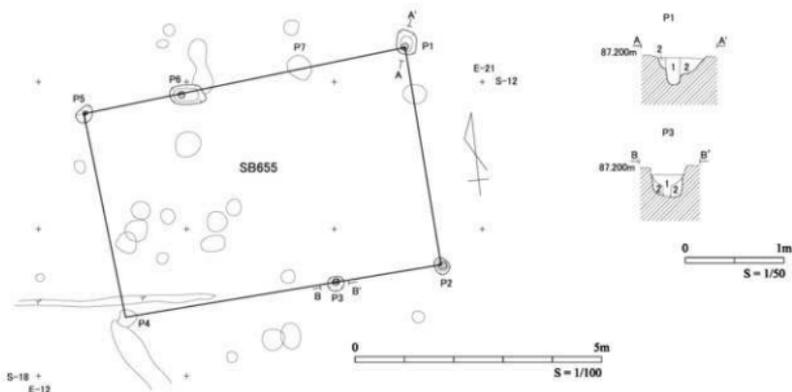
SB650掘立柱建物跡(P7)

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴掘方埋土

SB650掘立柱建物跡(P8)

No.	土色	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱穴掘方埋土

第 42 図 SB650 掘立柱建物跡



SB655掘立柱建物跡(P1)

No	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱基礎
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴壁方壁土

SB655掘立柱建物跡(P3)

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴壁方壁土

第 43 図 SB655 掘立柱建物跡

【SB657 掘立柱建物跡】(第 44 図、図版 7 - 3)

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。IV 層で確認した。

〔重複〕SB650 — 《SB657》→ SX623

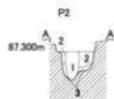
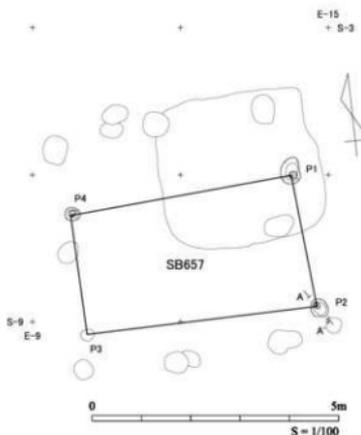
〔規模・形状〕東西 1 間 (総長 4.6m)、南北 1 間 (総長 2.7m) の建物跡である。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 26 ~ 55cm、短軸 24 ~ 48cm の楕円形を呈し、深さは 33 ~ 47cm である。このうち 3 基で平面形が直径 14 ~ 16cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。また、1 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列で 460cm、西側柱列で 270cm である。

〔方向〕東側柱列：N - 2° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB657掘立柱建物跡(P2)

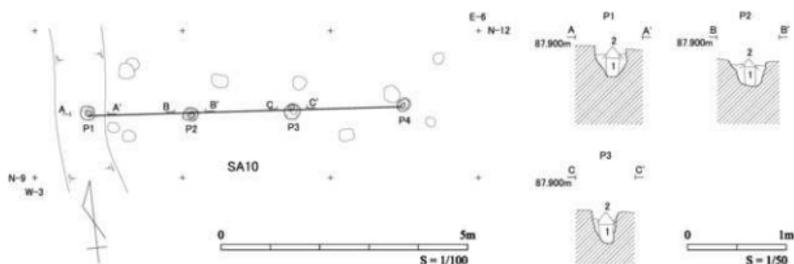
No	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱基礎
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粘土を含む 柱穴壁方壁土
3	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多数を含む 柱穴壁方壁土

C. 柱列跡

【SA10 柱列跡】(第 45 図)

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。IV 層で確認した。

第 44 図 SB657 掘立柱建物跡



〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西3間（総長6.2m）以上の柱列跡である。

〔柱穴〕4基確認した。掘方の平面形は長軸28～33cm、短軸23～30cmの不整形を呈し、深さは26～33cmである。いずれも平面形が直径10～14cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。柱痕跡は南寄りのものと北寄りのものが交互にみられる。

〔柱間寸法〕東から230・200・210cmである。

〔方向〕E-4°-S

〔出土遺物〕柱穴堆積土より非ロクロ調整の土師器製の小破片が出土した。

SA10柱穴列跡(P1)

No	土色	土性	備考
1	10R2/1 黄	シルト	ほぼ均質 柱痕跡
2	10R2/2 黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴掘方堆土

SA10柱穴列跡(P2)

No	土色	土性	備考
1	10R2/1 黄	シルト	ほぼ均質 柱痕跡
2	10R2/2 黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴掘方堆土

SA10柱穴列跡(P3)

No	土色	土性	備考
1	10R2/1 黄	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱痕跡
2	10R2/2 黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴掘方堆土

第45図 SA10 柱列跡

D. 落し穴状土坑

落し穴状土坑は14基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第6表に特徴を示す。

〔SK29 落し穴状土坑〕（第46図、図版7-5）

〔位置・確認面〕S1 西区の丘陵頂部に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸320cm、短軸27cmの溝状を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは110cmである。

〔底面〕ほぼ平坦である。

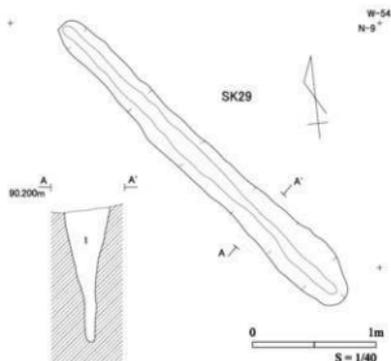
〔方向〕南東-北西方向

〔堆積土〕堆積土は1層で、黄褐色ロームブロックを多く含む褐色シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔SK30 落し穴状土坑〕（第47図、図版7-6）

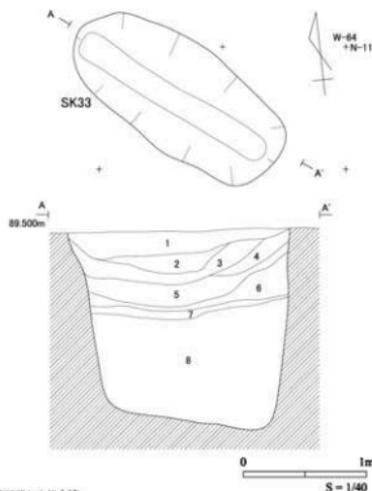
〔位置・確認面〕S1 西区の丘陵頂部に立地する。V層で確認した。



SK29 落ち穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粘を多量に含む

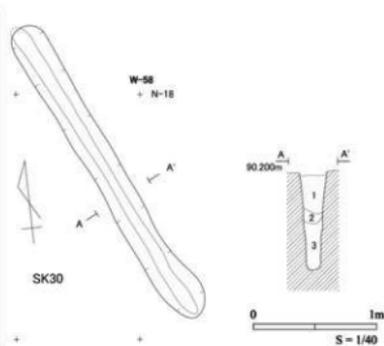
第 46 図 SK29 落ち穴状土坑



SK33 落ち穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
4	10YR4/4 黒	シルト	小礫を含む
5	10YR3/4 暗褐	シルト	ほぼ均質
6	10YR4/4 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
7	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
8	10YR4/4 黒	シルト	ほぼ均質

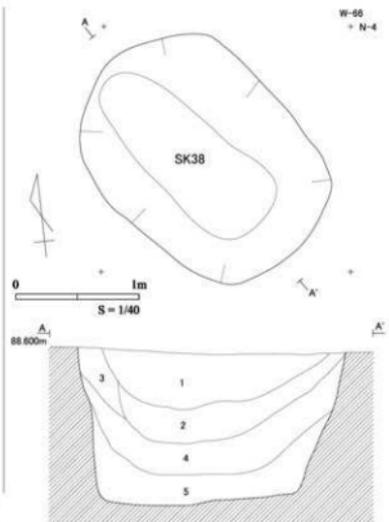
第 48 図 SK33 落ち穴状土坑



SK30 落ち穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/6 暗	シルト	下部に黄褐色土ブロックを含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	
3	10YR3/6 暗褐	粘質シルト	まだら状に黄褐色土ブロックを含む

第 47 図 SK30 落ち穴状土坑



SK38 落ち穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む
2	10YR2/3 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物粒を少量含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む
4	10YR4/4 黒	粘質シルト	
5	10YR4/3 に黄-黄	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、炭化物粒を少量含む

第 49 図 SK38 落ち穴状土坑

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 276cm、短軸 24cm の溝状を呈する。横断面形は V 字状を呈し、深さは 78cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔方向〕南東 - 北西方向

〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。1 層は下部に暗褐色シルトをブロック状に含む褐色シルト、2 層は均質な暗褐色シルト、3 層は暗褐色シルトをブロック状に含む黄褐色粘質シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK33 落とし穴状土坑】(第 48 図、図版 8 - 1)

〔位置・確認面〕S1 西区の西斜面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 190cm、短軸 90cm の楕円形を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 164cm である。

〔底面〕南東側に向かって傾斜する。

〔方向〕南東 - 北西方向

〔堆積土〕堆積土は 8 層に細分される。黄褐色ロームブロックと小礫を含む褐色・暗褐色シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK38 落とし穴状土坑】(第 49 図、図版 8 - 2)

〔位置・確認面〕S1 西区の西斜面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 236cm、短軸 155cm の楕円形を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 128cm である。

〔底面〕北西側に向かって緩やかに傾斜する。

〔方向〕南東 - 北西方向

〔堆積土〕堆積土は 5 層に細分される。炭化物粒と黄褐色ロームブロックを含む暗褐色シルトと黒褐色・褐色・黄褐色の粘質シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

E. 土坑

土坑は 22 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 7・8 表に特徴を示す。

【SK36 土坑】(第 50 図)

〔位置・確認面〕S1 西区の西斜面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北側が調査区外に延びるため全体の形状は不明だが、平面形は東西 325cm、南北 75cm 以上の隅丸方形を呈するとみられる。断面形状は箱形を呈し、深さは 67cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は8層に細分される。黄褐色ローム粒・ブロックと小礫を含む褐色・暗褐色シルトである。1～4層は自然堆積土、5層は壁際の自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK610 土坑】（第51・53図、図版8-3・4）

〔位置・確認面〕S1南区の南斜面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸70cm、短軸30cmの楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは30cmである。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロックと焼土ブロックを含む灰黄褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む灰黄褐色シルトで、いずれも人為的埋土の可能性はある。SK611の堆積土と類似する。

〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器環（第53図）が出土した。外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。

【SK619 土坑】（第54図、図版8-5）

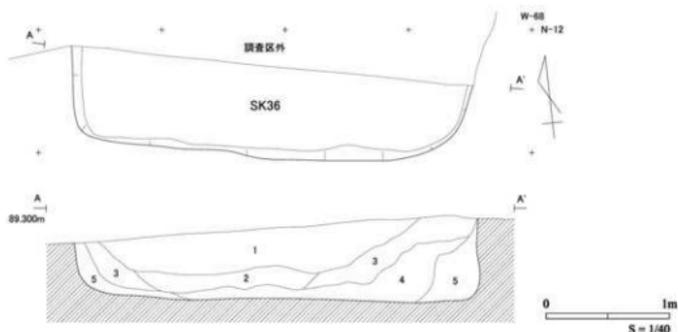
〔位置・確認面〕S1南区の南斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸268cm、短軸160cmの不整楕円形を呈する。断面形は不整な逆台形を呈し、深さは52cmである。

〔底面〕中央部に段を持ち、西側が一段低い。東側は平坦だが、西側は凹凸がみられる。

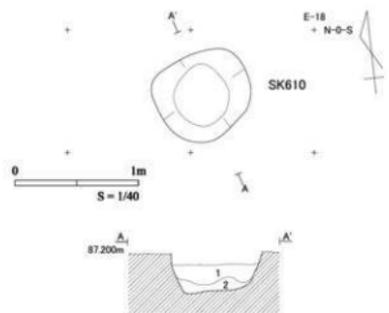
〔堆積土〕堆積土は3層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒色・黒褐色シルトで、人為的埋土の可能性はある。



SK36土坑

No.	土色	土性	備考
1	0YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、小礫を含む
2	0YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色土ブロックを含む
3	0YR3/7 黒褐	シルト	ほぼ均質
4	0YR4/4 黒	シルト	ほぼ均質
5	0YR4/6 黒	粘質シルト	小礫を含む

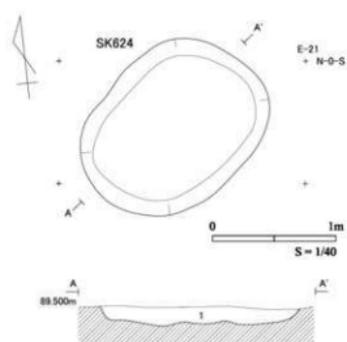
第50図 SK36土坑



SK610土坑

No	土色	土性	備考
1	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土多量に、炭化物粒を少量、焼土ブロック、白色焼土ブロックを含む 人為的埋土
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

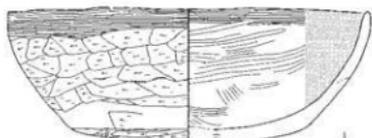
第 51 図 SK610 土坑



SK624土坑

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 灰褐	シルト	焼土粒を少量含む

第 52 図 SK624 土坑



No	層位	地相	器種	分類	断面調整・特徴	法量 (cm)		残存	登録	写真	
						口径	底径				
1	埋	土障部	大型杯	A	外:(口)上げ→(体)狭↓ 内:(口)上げ→(体)窄↓ト→褐色彫理	21.7	—	(8.1)	2/5	06100	31-3

第 53 図 SK610 土坑出土遺物



SK619土坑

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 灰褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土少量含む
3	10YR2/2 灰褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 54 図 SK619 土坑

〔出土遺物〕 堆積土より非ロクロ調整の土師器鉢・甕の破片が出土した。いずれも外面にハケメがみられ、土師器甕は内外面にハケメがみられるもの、外底面に木葉痕がみられるものがある。

【SK624 土坑】（第 52 図、図版 8 - 6）

〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 160cm、短軸 110cm の楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは 25cm である。

〔底面〕 皿状を呈する。

〔堆積土〕 堆積土は 1 層で、少量の焼土粒を含む黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕 堆積土より内面に黒色処理が施された土師器環の小破片と鉄滓が出土した。

【SK625 土坑】（第 55 図、図版 9 - 1）

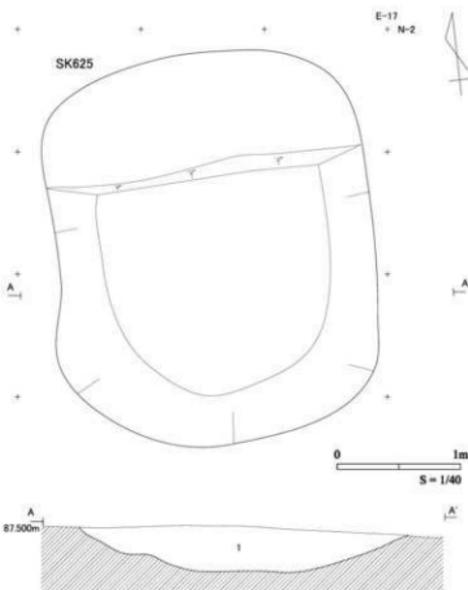
〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は東西 270cm、南北 240cm 以上の楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは 36cm である。

〔底面〕 皿状を呈する。

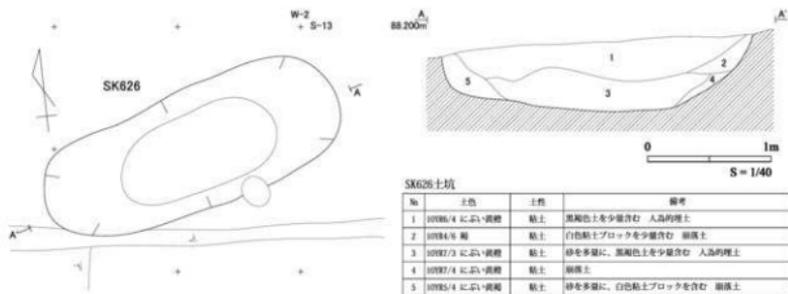
〔堆積土〕 堆積土は 1 層で少量の焼土・炭化物粒を含む黒褐色シルトである。



SK625 土坑

No.	土色	土性	備考
1	10192/2 黒褐	シルト	焼土・炭化物粒を含む

第 55 図 SK625 土坑



SK626 土坑

No.	土色	土性	備考
1	10196/4 紅い黄緑	粘土	黒褐色土を少量含む 人形の埋土
2	10194/6 黒	粘土	白色粘土ブロックを少量含む 薪炭土
3	10197/3 紅い黄緑	粘土	砂を多量に、黒褐色土を少量含む 人形の埋土
4	10197/4 紅い黄緑	粘土	薪炭土
5	10195/4 紅い黄緑	粘土	砂を多量に、白色粘土ブロックを含む 薪炭土

第 56 図 SK626 土坑

〔出土遺物〕 堆積土よりロクロ・非ロクロ調整の土師器環の破片、須恵器環・甕の破片、青磁碗の破片が出土した。非ロクロ調整の土師器環は内面に黒色処理が施されている。須恵器甕は外面に平行タタキ目がみられる。青磁碗は内面に櫛描文がみられる。

【SK626 土坑】（第 56 図、図版 8-8）

〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 250cm、短軸 30cm の楕円形を呈する。横断面形は不整な台形状を呈し、深さは 56cm である。

〔底面〕 皿状を呈する。

〔堆積土〕 堆積土は 5 層に細分され、砂と白色粘土ブロックを含む褐色・にぶい黄褐色粘土で、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【SK628 土坑】（第 57・58 図、図版 9-2）

〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。V 層で確認した。

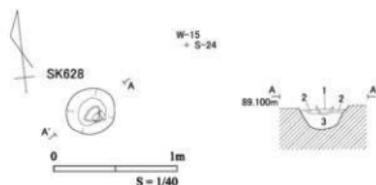
〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は直径 37～40cm の円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは 17cm である。

〔底面〕 皿状を呈する。

〔堆積土〕 堆積土は 3 層に細分され、1 層は黄褐色ロームと焼土粒を含む褐灰色シルト、2 層は黄褐色ローム粒を多く含む灰黄褐色シルト、3 層は若干の黄褐色ロームブロックと少量の炭化物粒を含む暗褐色シルトである。1 層は自然堆積土、2・3 層は人為的埋土の可能性ある。

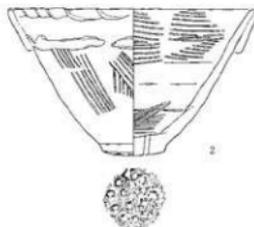
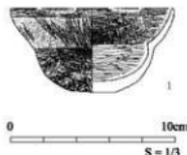
〔出土遺物〕 堆積土 3 層上面で非ロクロ調整の



SK628

No	土色	土性	備考
1	10YR4/7 褐灰	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を含む
2	10YR4/7 黄褐陶	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む 人為的埋土?
3	10YR3/3 暗陶	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物粒を少量含む

第 57 図 SK628 土坑



No	層位	種類	図種	分類	断面調整・特徴	法量 (cm)			検存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	埋 1 層	土師器	環	A.1	外:(□-底) 外→(□-底) 赤影 内:(□-底) 赤影	9.8	2.7	5.1	1/2	06078	31-4
2	埋 1 層	土師器	甕	A.1	外:(□) 煎竹(体) 外(底面) 外→(□-底) 穿孔 内:(□-体) 外、内 多孔式、穿孔 15ヶ所	(14.6)	3.7	8.95	3/5	06079	31-5

第 58 図 SK628 土坑出土遺物

土師器環（第 58 図 1）と甕（第 58 図 2）が重なった状態で出土した。1 は内外面にヘラミガキが、外面と内面口縁部に赤彩が施されている。2 は内外面にハケメがみられ、底部に 15 個の小孔が穿たれている。

このほか、堆積土 1 層より非ロクロ調整の土師器壺の破片が出土した。内面に指押さえ痕がみられ、外面にヘラミガキが、外面と内面口縁部に赤彩が施されている。

F. 溝跡

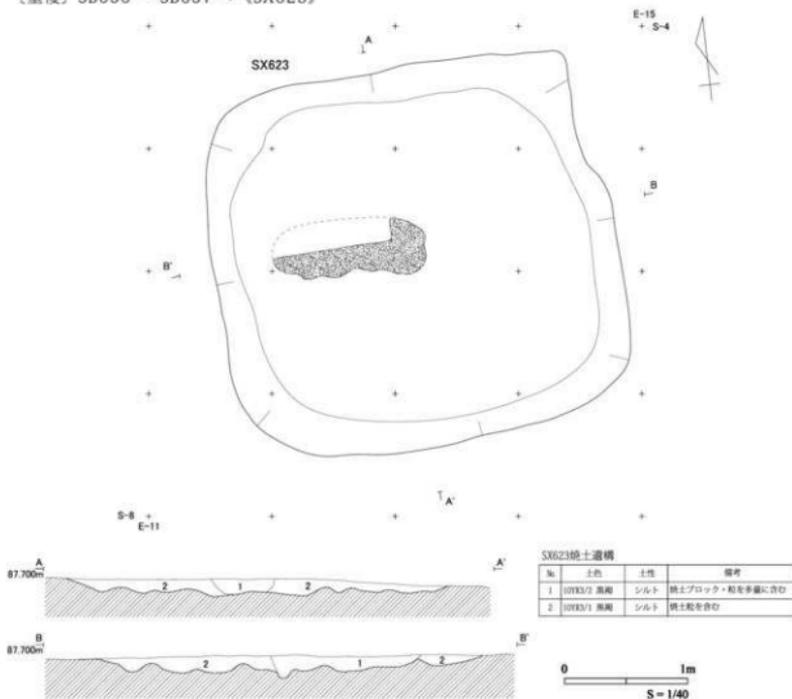
溝跡は 5 条が確認された。S1 中区東側から S1 東区西側にかけて南北方向の溝跡が 4 条確認されている。第 10 表にその特徴を示す。

G. 性格不明遺構

【SX623 性格不明遺構】（第 59 図、図版 9-3）

〔位置・確認面〕 S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕 SB650 — SB657 → 《SX623》



第 59 図 SX623 性格不明遺構

〔規模・形状〕平面形は一边が3.0～3.3mの隅丸方形を呈する。断面形は浅い皿状を呈し、深さは13cmである。

〔底面〕凹凸がみられる。

〔堆積土〕堆積土は2層に細分に細分され、1層は焼土ブロックをきわめて多量に含む黒褐色シルト、2層は焼土粒を含む黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕堆積土より鉄滓が出土した。このほか、いずれも小破片であるが、堆積土1層より須恵器甕、ロクロ調整の土師器甕、非ロクロ調整の土師器環、高杯が出土した。土師器環は内面に黒色処理が施されている。また、堆積土2層より須恵器蓋、ロクロ調整の土師器甕、非ロクロ調整の土師器甕が出土した。ロクロ調整の土師器甕には内面に黒色処理が施されているものがある。

(2) S2区

遺跡の立地する丘陵中腹部の尾根筋にあたる。黒ボク土および漸移層は残存せず、黄褐色ローム層が露出している。北区、南区を設定して調査を行なった。南区は西側斜面に接する落ち際にあたる。後世の削平が著しく、遺構は確認されなかった。北区はS3中区に南東方向から入る沢に向かって緩やかに傾斜する北東向きの緩斜面である(第60図)。やはり後世の削平が著しく、遺構は落し穴状土坑1基のみが確認された。第6表にその特徴を示す。

(3) S3区

遺跡の立地する丘陵を東西に横断する。西区、中区、東区を設定して調査を行なった(第60図)。丘陵中腹部の尾根筋にあたる西区はS2区と同様に黒ボク土および漸移層は残存せず、黄褐色ローム層が露出している。西区と中区の間には南東方向から沢状の地形が入り、中区と東区は東向きの緩斜面である。遺構は竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡5軒、落し穴状土坑3基、土坑14基、溝跡15条、柱穴多数が確認された。以下、主要な遺構について述べる。

A. 竪穴住居跡

竪穴住居跡はS3中区北側の南斜面で1軒、S3西区の東斜面で1軒が確認された。ここではS3西区で確認したSI91について述べる。S3中区で確認したSI62については平面プランのみの確認であるため、第3表にその特徴を示す。

【SI91 竪穴住居跡】(第61・62図、図版10-4・5)

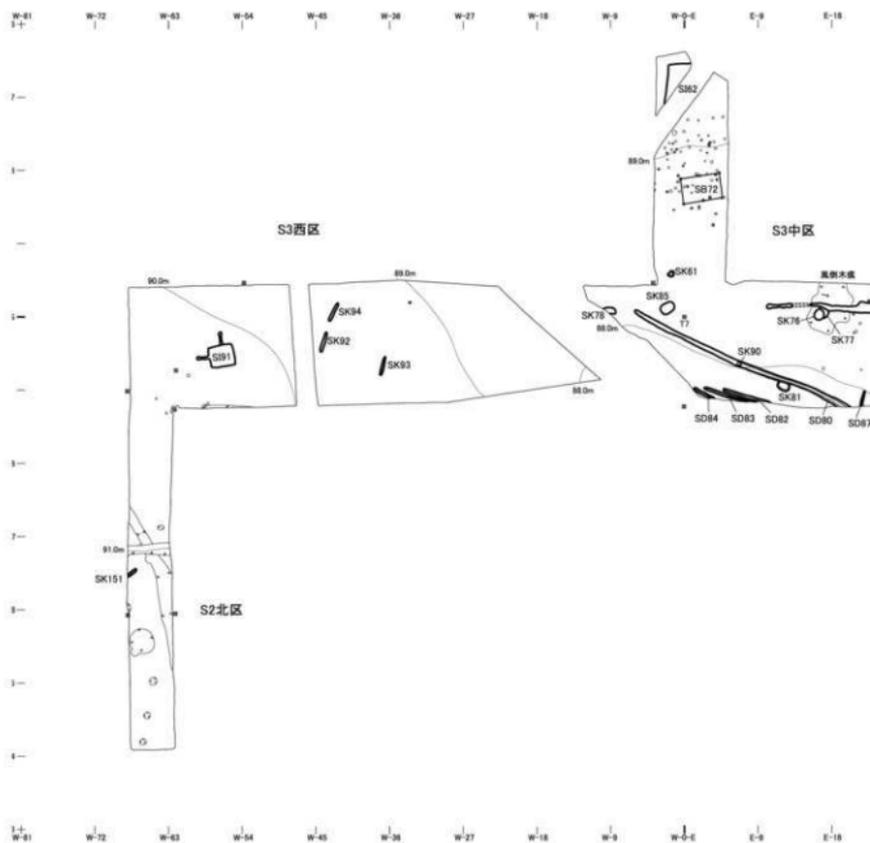
〔位置・確認面〕S3西区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西約2.9m、南北約2.6mの方形を呈する。

〔方向〕旧カマド中軸線：N-1°-E、新カマド中軸線：W-1°-S

〔壁面〕IV層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い南壁で床面から40cmである。

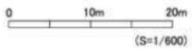
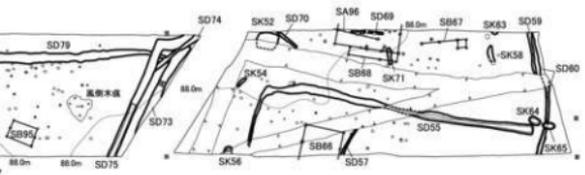


第 60 图 S 2 北 · S 3 西 · 中 · 東区遺構配置图

E-27 E-28 E-43 E-54 E-63 E-72 E-81 E-90 E-98



S3東区



E-27 E-28 E-43 E-54 E-63 E-72 E-81 E-90 E-98

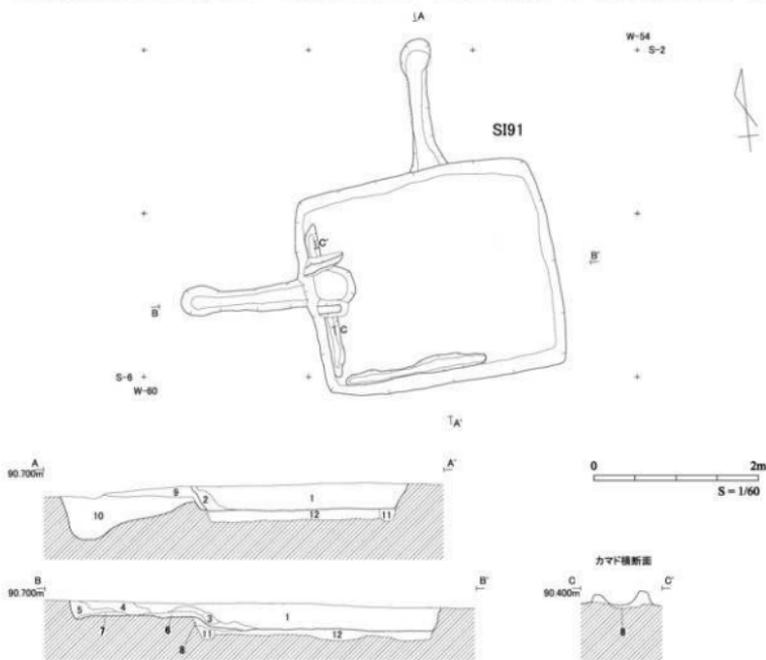
〔床面〕 掘方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴〕 なし

〔周溝・壁材痕跡〕 上端幅 10～18cm、下端幅 7～15cm、床面からの深さ 7～15cm で断面形が U 字形を呈する周溝が西壁と南壁に巡る。新カマド構築時に埋め戻されており、壁材痕跡の有無は確認できない。

〔カマド〕 新旧二時期あり、旧カマドは住居北壁中央やや東寄りに、新カマドは住居西壁やや北寄りに設置されている。旧カマドは燃烧部の一部と煙道部、新カマドは燃烧部と煙道部が残存する。

旧カマドの燃烧部は底面と奥壁が残存する。奥壁は住居北壁より 10～20cm ほど張り出し、奥壁の前面約 60cm の範囲に被熱により赤色化した燃烧部底面の痕跡がみられる。奥壁から北側へ延びる煙道は長さ 164cm で、幅 22～35cm、深さ 20～53cm が残存する。煙道底面は奥壁との接続



SI91 竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色シルトブロックを少量含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状、粘土ブロックを含む
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	褐色粘土ブロックを含む
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム状を含む
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム状を少量含む
6	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	粘土ブロック、炭化物粒を含む

No.	土色	土性	備考
7	10YR3/3 暗褐	シルト	粘土ブロックを含む
8	10YR4/6 褐	粘質シルト	粘土ブロックを含む カマド脚壁構築土
9	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、粘土ブロックを多量に含む
10	10YR2/2 黒褐	シルト	粘土ブロックを少量含む
11	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状を少量含む 周溝埋土
12	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む 住居掘方埋土

第 61 図 SI91 竪穴住居跡

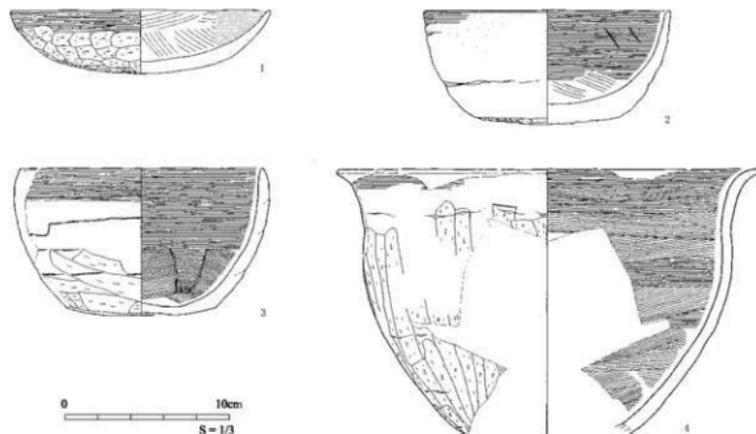
部から先端部に向かって傾斜し、先端部に幅 35cm、奥行 45cm、深さ 53cm の煙出しピット状の窪みを持つ。埋土は旧カマドの機能時堆積と考えられる少量の焼土ブロックを含む黒褐色シルトが厚く堆積し、さらに燃焼部奥壁から煙道上部にかけては旧カマド廃絶時に黄褐色ロームブロックと焼土ブロックを多量に含む黒褐色粘質シルトにより人為的に埋め戻されたと考えられる。

新カマドの燃焼部は長さ 64cm、幅 78cm で、焚口幅は側壁先端間で 65cm である。燃焼部底面は住居周溝を埋め戻した後に焼土ブロックを含む褐色粘質シルトで構築されており、幅 35cm、奥行 50cm で、底面より 3cm ほど皿状に窪み、奥壁に向かって緩やかに立ち上がる。底面には被熱による赤色化がみられる。側壁は左側壁で長さ 38cm、幅 22cm、高さ 18cm、右側壁で長さ 50cm、幅 24cm、高さ 17cm が残存する。焼土ブロックを含む褐色粘質シルトで構築されており、内側は被熱により赤色化している。右側壁先端には長さ 20cm の凝灰岩切石が据えつけられており、焚口部を構成している。奥壁は住居西壁に一致し、奥壁から西側へ延びる煙道は長さ 150cm で、幅 24 ~ 36cm、深さ 14 ~ 23cm が残存する。煙道底面はほぼ平坦で、先端部に幅 36cm、奥行 20cm、深さ 23cm の煙出しピット状の窪みを持つ。

[貯蔵穴] なし

[堆積土] 新カマド構築後の住居内堆積土は 7 層に細分され、いずれも住居廃絶後の自然崩落土ないしは自然堆積土である。旧カマドの堆積土は 3 層に細分され、機能時の堆積土と廃絶時の人為的埋土である。

[出土遺物] 床面より非ロクロ調整の土師器杯 (第 62 図 2) が、住居内堆積土より非ロクロ調整の



No	層位	種類	器種	分類	測定調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	埋土層	土師器	杯	E 1	外: (□) 32P ⁺ → (体) 49P ⁺ 内: 49P ⁺ → 黒色陶器	15.4	—	3.9	9/10	06004	31-6
2	床	土師器	杯	H	外: (□) 32P ⁺ (底面) 45 内: (□) 49P ⁺ → 32P ⁺ (体) 49P ⁺ → 32P ⁺ → 49P ⁺	(14.8)	—	6.9	3/5	06083	31-7
3	埋土層	土師器	杯	H	外: (□) 32P ⁺ (体下部~底) 49P ⁺ 内: (□) 32P ⁺ (体) 49P ⁺	(15.4)	9.0	8.9	2/3	06076	31-8
4	埋土層	土師器	甕	A 2	外: (□) 32P ⁺ (胴) 45 内: (□) 32P ⁺ (胴) 49P ⁺ 、P ⁺	(25.4)	—	(16.1)	1/5	06088	—

第 62 図 SI91 竪穴住居跡出土遺物

土師器環（第62図1・3）・甕（第62図4）が出土した。1は丸底で外面は口縁部横ナデの後に体部にヘラケズリ、内面はヘラミガキの後に黒色処理が施されている。2・3は平底風丸底で、外面は口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ調整が施されている。内面は2が口縁部ヘラナデの後に横ナデ、体部はその後にヘラミガキ、3は体部ヘラナデの後に口縁部横ナデ調整が施されている。内面は黒色処理が施されていない。4は口縁部に横ナデ、体部外面にケズリ調整が施されている。

このほか、住居掘方埋土より非ロクロ調整の土師器甕の破片、須恵器環の破片が、住居内堆積土よりロクロ・非ロクロ調整の土師器環・甕の破片と焼成を受けたスサ入り粘土塊が出土した。土師器環はいずれも内面が黒色処理されている。土師器甕は頸部に段を持ち、口縁部に横ナデ、下半部にケズリ調整が施されているものがある。粘土塊は稲藁状の植物繊維の痕跡がみられた。

B. 掘立柱建物跡

【SB66 掘立柱建物跡】（第63図、図版10-6）

〔位置・確認面〕S3東区の東緩斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし

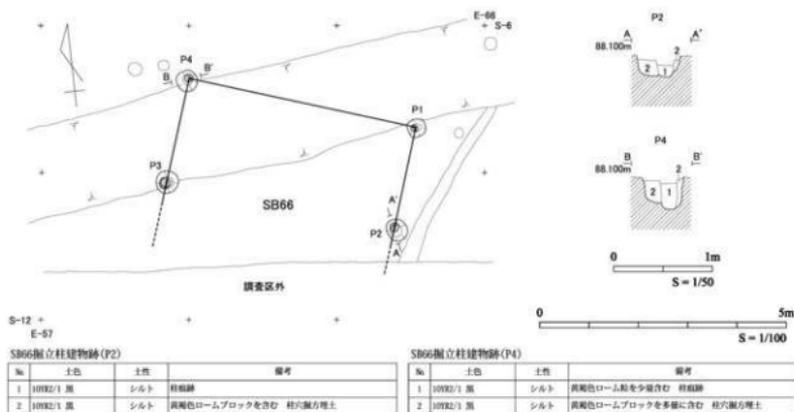
〔規模・形状〕東西1間（総長4.7m）、南北1間（総長2.2m）以上の建物跡で、調査区外の南側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕4基確認した。掘方の平面形は長軸40～44cm、短軸40cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは10～30cmである。いずれも平面形が直径12～20cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列で220cm、北側柱列で470cmである。

〔方向〕西側柱列：N-19°-E

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



第63図 SB66 掘立柱建物跡

【SB67 掘立柱建物跡】(第64図、図版10-7)

〔位置・確認面〕S3東区の東緩斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西2間の柱列の東側に東西1間、南北1間の張り出しが付く。調査区外北側に展開する東廊付き建物跡の可能性はある。

〔柱穴〕身舎とみられる部分で3基、廂と見られる部分で3基確認し、このうち身舎の2基(P4・6)、廂部の2基(P1・3)を調査した。身舎の柱穴掘方は長軸32～40cm、短軸32～34cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは24～32cmである。いずれも平面形が14～15cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。廂部の柱穴掘方は平面形が長軸28～40cm、短軸24～28cmの楕円形を呈し、深さは15cmである。いずれも平面形が12～14cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕身舎東西柱列で西から220-210cm、廂の出は110cm、廂部の東側柱列で100cmである。

〔方向〕身舎東西柱列：E-3° - S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

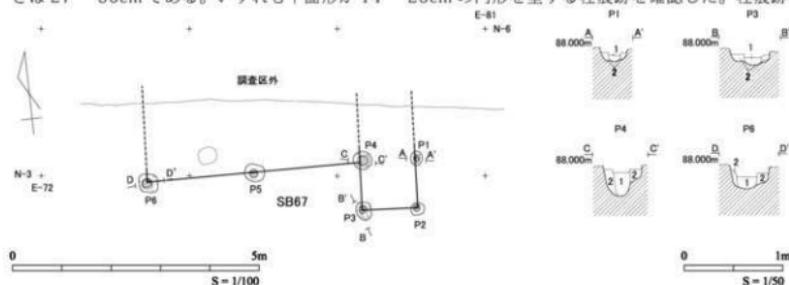
【SB68 掘立柱建物跡】(第65図、図版10-8)

〔位置・確認面〕S3東区の東緩斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕SD69 - SA96 - 《SB68》 - SK71

〔規模・形状〕北側が調査区外へ伸びているため全体の形状は不明だが、東西4間(総長7.8m)、南北1間(総長2.4m)以上の南廊付建物跡である。

〔柱穴〕身舎で6基、廂部で3基確認し、このうち身舎の柱穴4基(P1・2・5・6)を調査した。身舎の柱穴掘方は平面形が長軸32～41cm、短軸27～38cmの楕円形ないしは隅丸方形を呈し、深さは27～36cmである。いずれも平面形が14～20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡



SB67掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴底方埋土

SB67掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴底方埋土

SB67掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴底方埋土

SB67掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴底方埋土

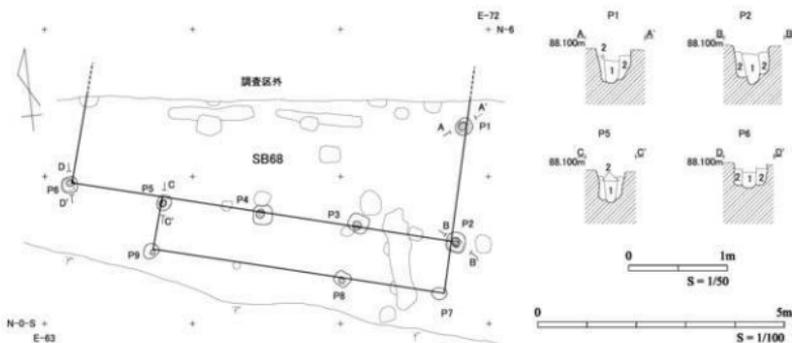
第64図 SB67 掘立柱建物跡

の深さは 27～40cm で、掘方底面に接するものと 3～10cm 程度沈み込んでいるものがある。廊部の柱穴掘方は平面形が長軸 30～32cm、短軸 20～22cm の楕円形ないしは隅丸方形を呈し、身舎の柱穴掘方よりも規模は小さい。2 基で平面形が 10～15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕身舎南側柱列で東から 190・200・200・190cm、東側柱列で 235cm である。廊の出は 100～110cm である。

〔方向〕南側柱列：E - 15° - S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB68 掘立柱建物跡 (P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層土

SB68 掘立柱建物跡 (P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層土

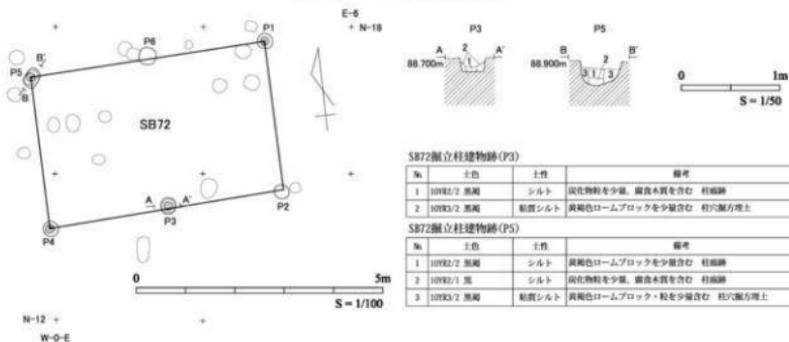
SB68 掘立柱建物跡 (P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方層土

SB68 掘立柱建物跡 (P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴掘方層土

第 65 図 SB68 掘立柱建物跡



SB72 掘立柱建物跡 (P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	炭化物粒を少量、腐食木質を含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴掘方層土

SB72 掘立柱建物跡 (P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	炭化物粒を少量、腐食木質を含む 柱痕跡
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む 柱穴掘方層土

第 66 図 SB72 掘立柱建物跡

【SB72 掘立柱建物跡】(第66図、図版11-1)

〔位置・確認面〕S3 中区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西2間(桁行総長4.8m)、南北1間(梁行総長3.0m)の東西棟建物跡である。

〔柱穴〕6基確認した。掘方の平面形は直径28～38cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは14～24cmである。このうち4基で平面形が直径14～20cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列で240～240cm、西側柱列で300cmである。

〔方向〕北側柱列：E-3°-N

〔出土遺物〕柱痕跡より土師器の小破片が出土した。

【SB95 掘立柱建物跡】(第67図)

〔位置・確認面〕S3 中区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

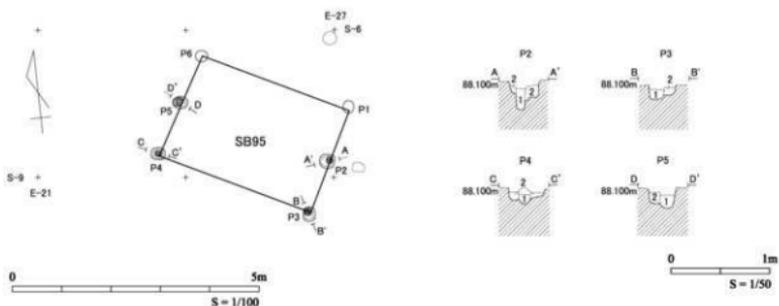
〔規模・形状〕東西1間(梁行総長3.2m)、南北2間(桁行総長2.2m)の東西棟建物跡である。

〔柱穴〕6基確認した。掘方の平面形は直径28～36cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは12～24cmである。このうち4基で平面形が直径10～15cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは15～28cmで、掘方底面より深く沈みこむ。

〔柱間寸法〕北側柱列で320cm、西側柱列で110～110cmである。

〔方向〕E-27°-S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB95掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB95掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB95掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB95掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

第67図 SB95 掘立柱建物跡

C. 柱列跡

【SA96 柱列跡】(第 68 図)

〔位置・確認面〕S3 東区の東緩斜面に立地する。IV層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SD69 → 《SA96》— SB68 — SK71

〔規模・形状〕東西 2 間(総長 5.0m)以上の柱列跡で、調査区外の西側へ延びている可能性がある。

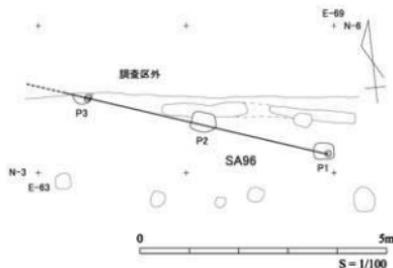
〔柱穴〕3 基確認した。掘方の平面形は長軸 40 ~ 50cm、短軸 34 ~ 40cm の隅丸方形を呈する。

2 基で平面形が直径 12 ~ 15cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕東から 260 - 240cm である。

〔方向〕E - 19° - S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



第 68 図 SA96 柱列跡

D. 落とし穴状土坑

落とし穴状土坑は S3 西区の東斜面で 3 基確認された。第 6 表に特徴を示す。

E. 土坑

土坑は 14 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 7・8 表に特徴を示す。

【SK56 土坑】(第 69 図、図版 11-2)

〔位置・確認面〕S3 東区の東緩斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南側が調査区外に延びるため全体の形状は不明だが、平面形は東西 100cm、南北 100cm 以上の楕円形を呈するとみられる。断面形は U 字状を呈し、深さは 20cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 2 層に細分される。1 層は黄褐色ロームブロックを少量含む黒色シルト、2 層は黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色シルトで、1 層は自然堆積土、2 層は壁際の崩落土である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK61 土坑】(第 70 図、図版 11-3・4)

〔位置・確認面〕S3 中区の南緩斜面に立地する。III層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 84cm、短軸 58cm の不整形である。断面形は浅い皿状を呈し、深さは 20cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 4 層に細分される。1 層は焼土ブロックを若干含む黒褐色シルト、2 層は焼土ブロッ

クを多く含む黒色シルト、3層は焼土粒を少量含む灰層を主体とする黄灰色シルト、4層は均質な焼土層を主体とする明赤褐色シルトである。底面と壁面に被熱による赤色化はみられない。

〔出土遺物〕 堆積土4層より鉄製の短刀が出土した。

【SK64 土坑】（第71図、図版11-5）

〔位置・確認面〕 S3東区の東緩斜面に立地する。IV層で確認した。

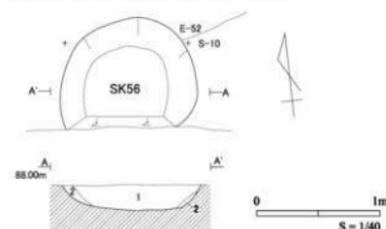
〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸140cm、短軸90cmの楕円形を呈する。断面形は逆台形状を呈し、深さは20cmである。

〔底面〕 底面は平坦である。

〔堆積土〕 堆積土は1層で、黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色シルトである。

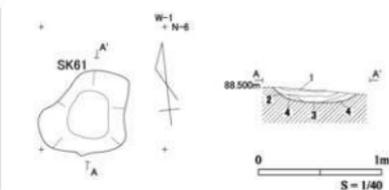
〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



SK56土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR3/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む

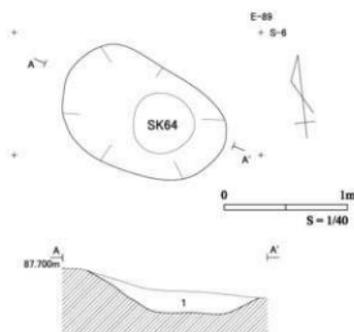
第69図 SK56土坑



SK61

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	焼土ブロックを少量含む
2	10YR2/1 黒	シルト	焼土ブロックを多量に含む
3	2.5Y4/1 黄灰	シルト	ワラ灰の灰層 焼土粒を少量含む
4	10YR/6 明赤	シルト	均質な焼土層

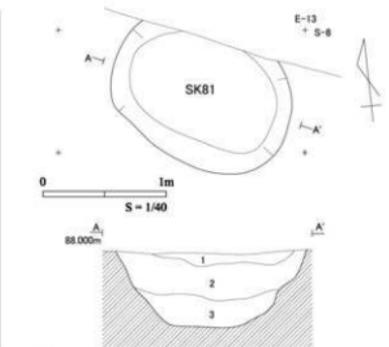
第70図 SK61土坑



SK64土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む

第71図 SK64土坑



SK81土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
2	2.5Y3/1 黄	粘質シルト	グライ化した黄褐色ロームブロックを少量含む
3	2.5Y3/2 黄	粘土	グライ化した黄褐色ロームブロックを含む

第72図 SK81土坑

【SK81 土坑】（第 72 図、図版 11- 6）

〔位置・確認面〕 S3 中区東緩斜面に立地する。IV 層で確認した。

〔重複〕 《SK81》・SK90 → SD80

〔規模・形状〕 北東側の一部が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 155cm、短軸 100cm 以上の楕円形を呈していたとみられる。

〔底面〕 皿状を呈する。

〔堆積土〕 堆積土は 3 層に細分される。1 層は黄褐色ロームブロックを含む暗褐色シルト、2 層はグライ化した黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色粘質シルト、3 層はグライ化した黄褐色ロームブロックを含む黒褐色粘土である。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

F. 溝跡

溝跡は 15 条が確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 10 表に特徴を示す。

【SD55 溝跡】（第 73 図、図版 11- 7）

〔位置・確認面〕 S3 東区の東緩斜面に立地する。IV 層で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 長さ 42.5m の東西・南北方向の溝跡で、西側ではほぼ直角に南に折れる。一部途切れるが、調査区外の東側と南側へ延びている可能性が高い。東西の長さ 35m、南北の長さ 7.5m である。上端幅 20～30cm、下端幅 15cm で断面形は浅い皿状を呈し、深さは 4～10cm である。

〔方向〕 東西・南北方向

〔堆積土〕 堆積土は 1 層で、黄褐色ロームブロックを少量含む黒色シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【SD73 溝跡】（第 74 図、図版 11- 8）

〔位置・確認面〕 S3 中区の東緩斜面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕 SK77 → SD79 → 《SD73》 → SD74 → SD75

〔規模・形状〕 長さ 12m 以上の南北溝跡で、調査区外の南北へ延びている。上端幅 90～120cm、下端幅 30cm で断面形は東側に段の付く逆台形状を呈し、深さは 30cm である。

〔方向〕 北東-南西方向（SD75 と方向を揃える）

〔堆積土〕 堆積土は 1 層で、黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色粘質シルトである。

〔出土遺物〕 堆積土より土師器の小破片が出土した。頸部に屈曲を持つ口縁部破片で、内外面にナデ調整が施されている。

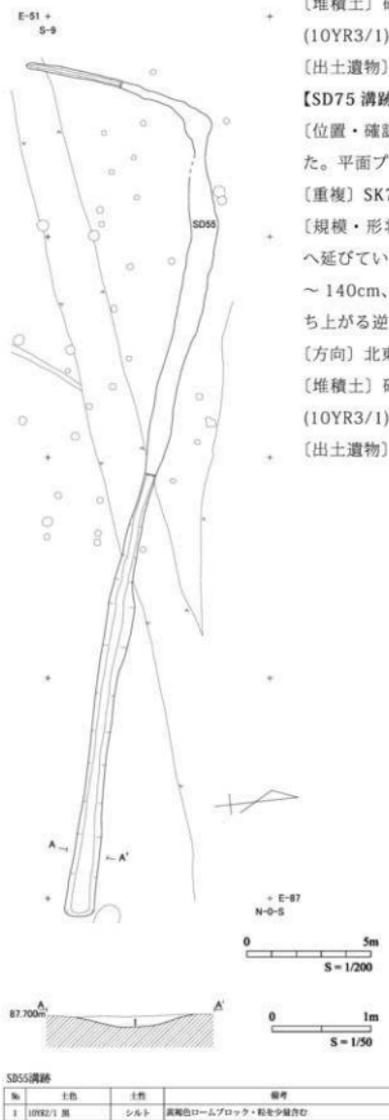
【SD74 溝跡】（第 74 図、図版 11- 8）

〔位置・確認面〕 S3 中区の東緩斜面に立地する。V 層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕 SK77 → SD79 → SD73 → 《SD74》 → SD75

〔規模・形状〕 長さ 6.7m 以上の南北溝跡で、上端幅 30～90cm である。

〔方向〕 北東-南西方向



第73図 SD55 溝跡

〔堆積土〕 確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色(10YR3/1)シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【SD75 溝跡】 (第74図、図版11-8)

〔位置・確認面〕 S3 中区の東緩斜面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

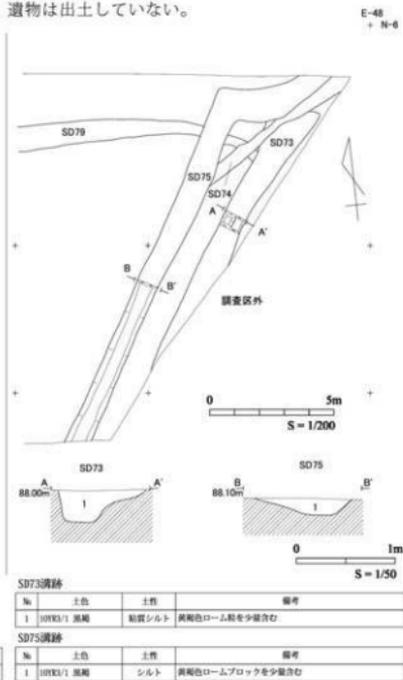
〔重複〕 SK77 → SD79 → SD73 → SD74 → 《SD75》

〔規模・形状〕 長さ19m以上の南北溝跡で、調査区外の南北へ延びている。調査区北端部で東に50°屈曲する。上端幅80~140cm、下端幅30~50cmで断面形は西側が緩やかに立ち上がる逆台形状を呈し、深さは15cmである。

〔方向〕 北東-南西方向 (SD73と方向を揃える)

〔堆積土〕 確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色(10YR3/1)シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



第74図 SD73・SD74・SD75 溝跡

(4) N1区

遺跡の立地する丘陵東斜面の中腹を南北に横断する。北区、南区を設定して調査を行なった(第75図)。南区は後世の切土により黄褐色ロームが露出し、遺構は確認されない。北側は黒ボク土が堆積する南向き斜面で、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、落し穴状土坑1基、土坑1基、溝跡1条が確認された。いずれも平面プランのみの確認である。

A. 竪穴住居跡

【SI301 竪穴住居跡】(第75図、図版12-3)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕一部調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、南北4.2m、東西4.3m以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：N-3°-E

〔カマド〕住居北壁やや東寄りに設置されている。燃焼部と煙道が残存し、煙道は調査区外の北側へ延びている。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。

〔出土遺物〕確認面より非ロクロ調整の土師器杯・甕の破片が出土した。土師器杯は丸底風平底で内面に黒色処理が施されているものと、内外面にミガキ調整と赤彩が施されているものがある。土師器甕は外面にハケメがみられるものがある。

【SI302 竪穴住居跡】(第75図、図版12-3)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西3.5m、南北4.5mの方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E-4°-S

〔カマド〕住居東壁の南寄りに設置されている。燃焼部と煙道が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム・炭化物粒と小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI303 竪穴住居跡】(第75図、図版12-5)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SI304 → 《SI303》 — SB306 → SD307

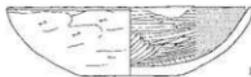
〔規模・形状〕東西4.8m、南北4.3mの方形を呈する。

〔方向〕西辺：N-2°-E

〔カマド〕不明

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム・炭化物粒と小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。

〔出土遺物〕確認面より非ロクロ調整の土師器高杯・壺・甕、ミニチュア土器の破片が出土した。高杯と壺は内外面にミガキ調整と赤彩が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されている。



No.	層位	種類	図種	分類	図面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	遺出ピット	土師器	罌	E 3	外: (体~底) → 外Z 8 内: (9) 18 → 黒色処理	114.8	66.4	4.2	1/5	06023	—

第76図 SI305 竪穴住居跡出土遺物

【SI304 竪穴住居跡】(第75図、図版12-5)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI304》→ SI303 — SB306 — SD307

〔規模・形状〕重複により一部残存しないが、東西5.2m、南北5.2mの方形を呈していたとみられる。

〔方向〕東辺: N - 35° - W

〔カマド〕住居西壁の南寄りに設置されている。燃焼部と煙道が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は小礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。

〔出土遺物〕確認面より非ロクロ調整の土師器製の破片が出土した。球胴を呈し、外面にミガキ調整が施されているものと、ハケメが見られるものがある。

【SI305 竪穴住居跡】(第75・76図、図版12-2)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI305》→ SK309

〔規模・形状〕東側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西2.0m以上、南北4.5m以上の方角を呈するとみられる。

〔方向〕西辺: N - 10° - W

〔カマド〕住居北壁に設置されている。燃焼部と煙道が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒と小礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。

〔出土遺物〕煙道煙出しピット部の確認面より非ロクロ調整の土師器環(第76図)が出土した。外面はヘラケズリ調整が施され、内面は黒色処理が施されている。



第77図 SB306 掘立柱建物跡

B. 掘立柱建物跡

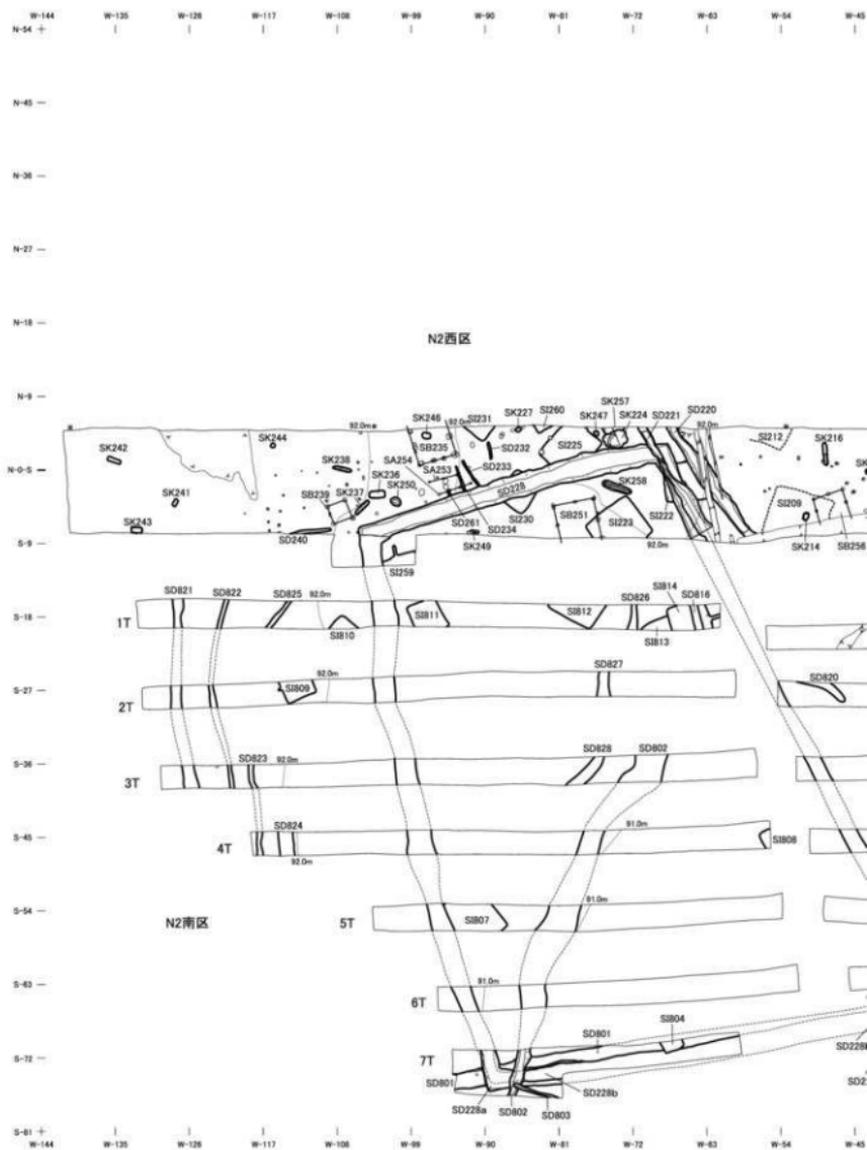
【SB306 掘立柱建物跡】(第77図、図版12-4)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。IV層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SI304 → SI303 — 《SB306》 — SD307

〔規模・形状〕東西2間(総長4.6m)、南北2間(総長4.9m)の建物跡である。

〔柱穴〕8基確認した。掘方の平面形は直径34~60cmの円形ないしは楕円形を呈し、このう



第75图 N1北·南、N2西·中·南区遗构配置图

ち3基で平面形が直径9～12cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列で北から240・220cm、南側柱列で西から250・240cmである。

〔方向〕東側柱列：N-3°-E

〔出土遺物〕P4確認面より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

C. 落とし穴状土坑

【SK308 落とし穴状土坑】(第75図、図版12-3)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸310cm以上、短軸60cmの溝状を呈する。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

D. 土坑

【SK309 土坑】(第75図、図版12-2)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。IV層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SI305 → 《SK309》

〔規模・形状〕平面形は長軸160cm以上、短軸30cmの溝状を呈する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ロームブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

E. 溝跡

【SD307 溝跡】(第75図、図版12-5)

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。IV層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SI304 → SI303 - SB306 → 《SD307》

〔規模・形状〕長さ約12.1mの南北溝跡である。上端幅45～110cmである。

〔方向〕南北方向

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ロームブロック、焼土・炭化物粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

(5) N2区

遺跡の立地する丘陵中腹を東西に横断する。西区、中区、東区、南区を設定して調査を行なった(第75・78図)。西区は丘陵頂部の平坦面にあたり、西部は削平により黄褐色ロームが露出しているが、東部は黒ボク土と漸移層が良好に残存する。中区、東区は東向きの緩傾斜地で、黒ボク土が厚く堆積

する。遺構は西区東部の平坦面を中心として中区、東区にも若干分布し、竪穴住居跡 12 軒、掘立柱建物跡 6 棟、柱列跡 3 条、落し穴状土坑 8 基、土坑 14 基、大溝跡 4 条、溝跡 11 条が確認された。以下、主要な遺構について述べる。

A. 竪穴住居跡

【SI201a 竪穴住居跡】(第 79 図、図版 13-5)

〔位置・確認面〕 N2 東区の平坦面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕 SD205・《SI201a》→ SI201b

〔規模・形状〕 東西 4.7m、南北 3.9m の方形を呈する。

〔方向〕 西辺：N - 2° - W

〔壁面〕 残存しない。

〔床面〕 SI201b との重複によりほとんど残存しないが、北東部の東西 120cm、南北 120cm の範囲に黄褐色ロームブロックを含む硬化層が形成されており、貼床の痕跡の可能性はある。

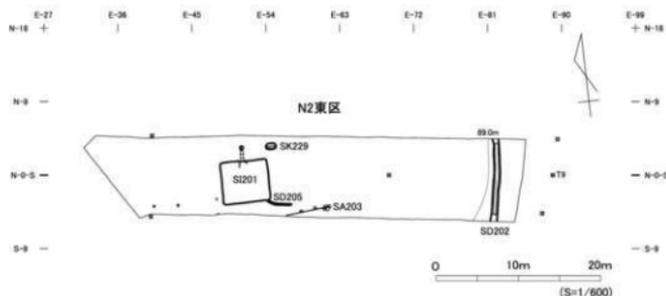
〔主柱穴〕 住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に 120～150cm の位置で柱穴 4 基 (P11～14) を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。掘方の平面形は長軸 26～40cm、短軸 28～38cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 22～30cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、柱痕跡は残存しない。

〔壁柱穴〕 なし

〔周溝・壁材痕跡〕 上端幅 12～32cm、下端幅 10～28cm、確認面からの深さ 12cm で断面形が U 字形を呈する周溝がほぼ全周する。西辺と南辺の底面に平面形が直径 10～18cm の円形を呈する壁材痕跡が点在して確認されることから、SI201b 構築時に壁材の抜き取りが行なわれたと考えられる。

〔カマド・炉・貯蔵穴〕 不明

〔その他〕 SI201b との重複により確認できないが、住居南東コーナー部から東に延びる SD205 は SI201a に伴う外延溝であった可能性がある。



第 78 図 N2 東区遺構配置図

〔堆積土〕 残存しない。

〔出土遺物〕 床面より非ロクロ調整の土師器杯の破片が出土した。外面に横ナデとケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。

【SI201a 竪穴住居跡】 (第 80・81・82・83 図、図版 13-6~8)

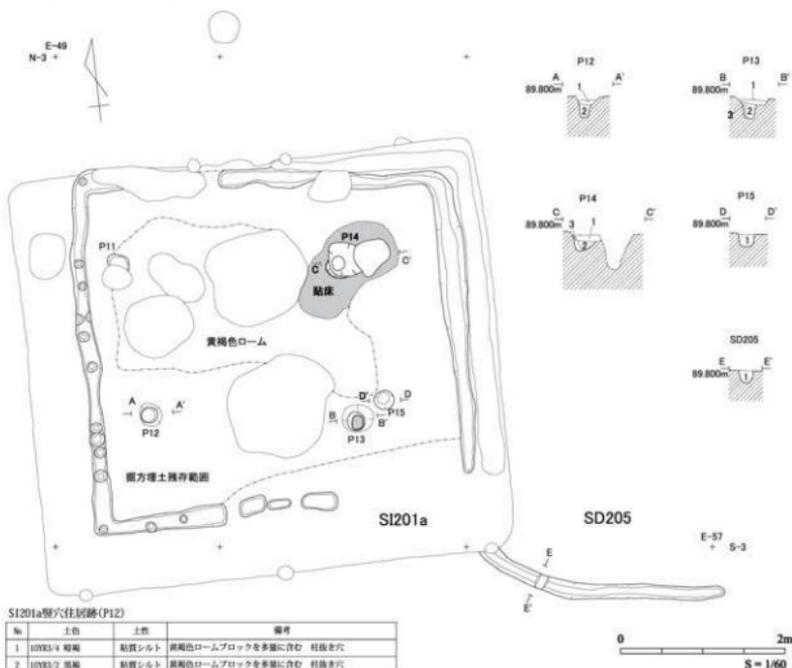
〔位置・確認面〕 N2 東区の平坦面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕 SD205・SI201a → 《SI201b》

〔規模・形状〕 東西 5.6m、南北 5.0m の方形を呈する。

〔方向〕 カマド中軸線：N - 2° - W

〔壁面〕 V 層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い南壁で床面から 14cm である。



SI201a 竪穴住居跡 (P12)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱抜き穴
2	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱抜き穴

SI201a 竪穴住居跡 (P13)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱抜き穴
2	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱抜き穴
3	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴南方埋土

SI201a 竪穴住居跡 (P15)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱抜き穴

SI201a 竪穴住居跡 (P14)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱抜き穴
2	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱抜き穴
3	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴南方埋土

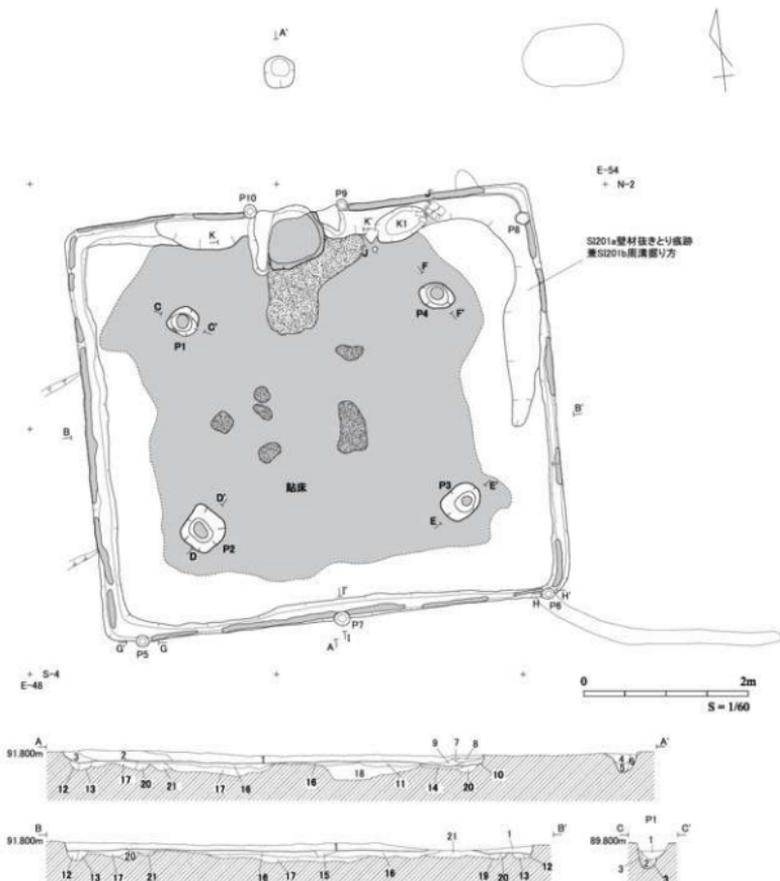
SD205 溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒	シルト	黄褐色ローム製を含む

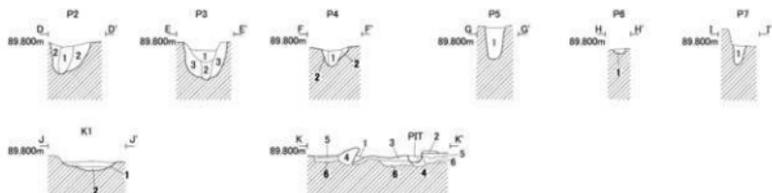
第 79 図 SI201a 竪穴住居跡・SD205 溝跡

〔床面〕 黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床としている。ほぼ平坦である。中央部の東西4m、南北約4mの範囲に黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色砂質シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕 住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に150～160cmの位置で柱穴4基（P1～4）を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。掘方の平面形は長軸35～48cm、短軸30～40cmの楕円形を呈し、床面からの深さは23～45cmである。いずれも平面形が直径15cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。また、このうち2基では柱材の抜き取り痕跡が確認された。



第 80 図 SI201b 竪穴住居跡 (1)



S1201b 竪穴住居跡 (P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴版方埋土

S1201b 竪穴住居跡 (P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱痕跡
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴版方埋土

S1201b 竪穴住居跡 (P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・殻を含む 柱穴版方埋土

S1201b 竪穴住居跡 (P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色粘土ブロックを含む 柱抜き取り痕跡

S1201b 竪穴住居跡 (P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色粘土ブロックを含む 柱抜き取り痕跡

S1201b 竪穴住居跡 (P7)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色粘土ブロックを含む 柱抜き取り痕跡

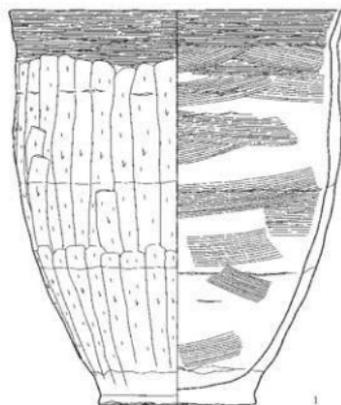
S1201b 竪穴住居跡貯蔵穴 (K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄色粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒を多量に含む
2	7.5YR3/4 暗褐	粘質シルト	粘土ブロックを多量に、黄色粘土ブロックを含む

S1201b 竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR4/6 黄	粘質シルト	焼土粒を少量含む カマド新築土
3	10YR4/6 黄	シルト	焼土ブロック・殻を多量に含む
4	10YR4/4 黄	粘質シルト	黄褐色粘土を主体とする カマド副壁構築土
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・殻、焼土粒を含む 柱穴版方埋土
6	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・殻を含む S1201a埋埋土

第 81 図 S1201b 竪穴住居跡 (2)



0 10cm
S = 1/3

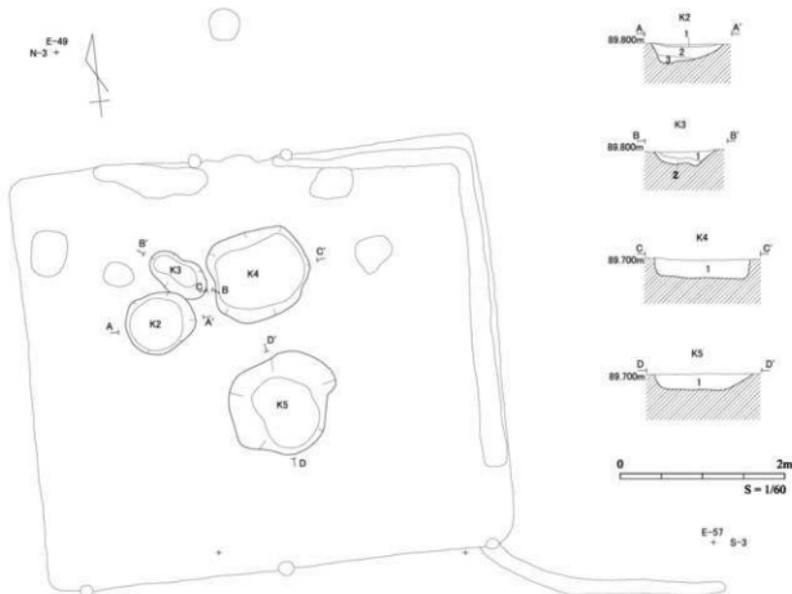
No.	部位	種類	器種	分類	断面調整・特徴	径長 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	床	土版部	敷	D	外: (口) 30YF → (胴) 35Y → (底面) 木炭屑 → 2Y → 内: (口) 30YF (胴) 1Y	20.2	9.4	24.05	3/5	06043	32-1

第 82 図 S1201b 竪穴住居跡出土遺物

〔壁柱穴〕住居北壁のカマド両側壁との接続部で2基、北東コーナー部で1基、南壁で3基の柱穴を確認した(P5～10)。掘方の平面形は直径15～18cmの円形を呈し、住居確認面からの深さは30～50cmである。位置と形状、規模から壁柱穴と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅14～20cm、下端幅8～16cm、確認面からの深さ8～12cmで断面形がU字形を呈する周溝が全周する。北辺と東辺の一部ではSI201aの壁材抜き取り溝が周溝を兼ねている。幅8～10cm、深さ8～12cmの壁材痕跡が断続的に確認される。周溝の堆積土は黄褐色ロームブロックを含む黒色・黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔カマド〕住居北壁中央に設置されている。燃焼部と煙出しピットが残存する。燃焼部は長さ80cm、幅114cmで、焚口幅は側壁先端間で95cmである。燃焼部底面は幅65cm、奥行72cmで、床面より4cmほど皿状に窪んでいる。底面には被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は左側壁で長さ78cm、幅25cm、高さ20cm、右側壁で長さ37cm、幅32cm、高さ13cmが残存する。黄褐色ロー



SI201b竪穴住居跡(K2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物物を多量に含む 20cm程度埋没
2	7.5YR4/4 黒	粘質シルト	焼土ブロック、炭化物物を多量に、黄褐色ロームブロックを含む 人為的埋土
3	10YR2/1 黒	砂質シルト	黄褐色ロームブロック・粘を少量含む 人為的埋土

SI201b竪穴住居跡(K3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	焼土ブロックを多量に、黄褐色ロームブロック、炭化物物を含む 人為的埋土
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む人為的埋土

SI201b竪穴住居跡(K4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

SI201b竪穴住居跡(K5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 83 図 SI201b 竪穴住居跡 (3)

ムで構築されており、内側は被熱により赤色化している。奥壁は住居北壁とほぼ一致する。煙道部は残存しないが、奥壁の北側 145cm の位置に長軸 38cm、短軸 35cm、深さ 24cm のピットが確認された。位置関係から煙出しピットと考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側で土坑 1 基 (K1) が確認された。平面形は長軸 65cm、短軸 38cm の楕円形を呈している。深さ 18cm で底面は皿状を呈する。床面から掘り込まれており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は焼土ブロックを多く含む自然堆積土である。

〔床下土坑〕住居掘方底面で土坑 4 基 (K2～K5) を確認した。K2・K3 は住居北西部で確認した。K1 は平面形が長軸 83cm、短軸 73cm の楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さ 21cm である。K2 は平面形が長軸 75cm、短軸 45cm の楕円形を呈する。断面形は U 字形を呈し、深さ 15cm である。K3 は住居中央部北寄りで確認した。平面形は長軸 125cm、短軸 110cm の楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さ 25cm である。K4 は住居中央部南寄りで確認した。平面形は長軸 140cm、短軸 120cm の不整楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さ 20cm である。埋土はいずれも黄褐色ロームブロックと焼土ブロックを含む人為的埋土で、住居掘方埋土に類似する。

〔堆積土〕住居内堆積土は 10 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕貯蔵穴脇の床面より非ロクロ調整の土師器甕 (第 82 図) が出土した。口縁部に横ナデ、胴部にケズリ調整が施されている。外底面には木葉痕がみられる。

このほか、床面・住居掘方埋土・貯蔵穴堆積土・カマド崩落土・燃焼部底面より土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面にケズリ調整が施され、底面に木葉痕がみられるものと、外面の頸部に沈線がめぐり、ハケメ調整が施されているものがある。須恵器甕は外面に平行タキ目目、内面に同心円状押さえ具痕がみられる。

【SI209 竅穴住居跡】(第 84 図、図版 14-1)

〔位置・確認面〕N2 中区の平坦面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕SK214 —《SI209》— SB256

〔規模・形状〕南側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 7.0m、南北 6.0m 以上の方形を呈していたとみられる。掘方埋土のみが残存する。

〔方向〕西辺：N - 24° - E

〔壁面・床面〕残存しない。

〔主柱穴〕住居平面形の推定対角線上でコーナー部より内側に 150～170cm の位置で柱穴 2 基 (P1・P2) を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。いずれも柱材の抜き取り痕跡が認められ、P1 は掘方が残存しない。P2 の掘方の平面形は長軸 45cm、短軸 30cm の隅丸方形を呈し、確認面からの深さは 73cm である。平面形が直径 15cm の円形を呈し、掘方底面より 15cm ほど沈み込む柱痕跡が確認された。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔炉〕住居北西部の黄褐色ロームが長軸 23cm、短軸 18cm の範囲で皿状に窪み、被熱による赤色硬化がみられる。炉底面と考えられる。

〔貯蔵穴〕なし

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕掘方埋土より土師器破片が、遺構確認面より非ロクロ調整の土師器製の破片が出土した。

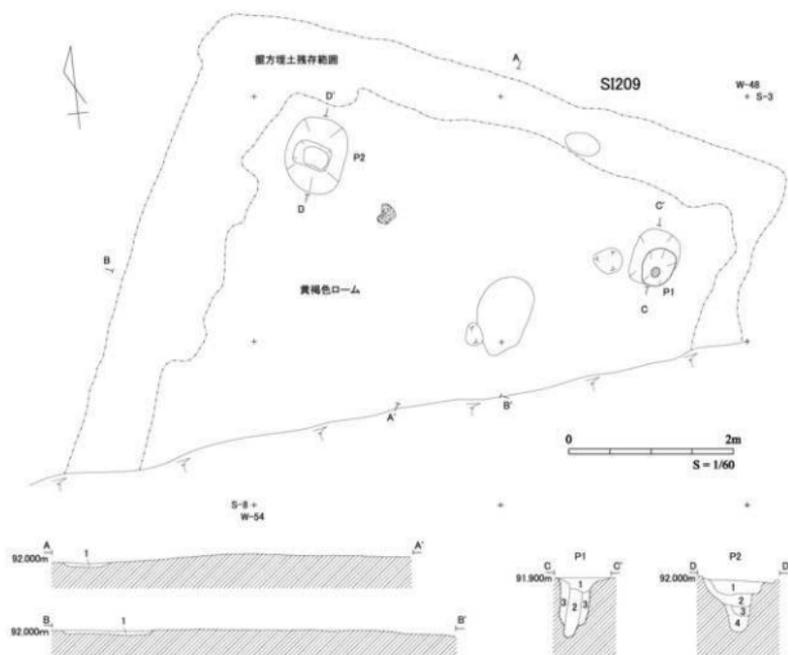
〔SI210 竪穴住居跡〕(第 85・86 図、図版 14-2・3)

〔位置・確認面〕N2 中区の東斜面に立地する。IV 層で確認した。

〔重複〕《SI210》→ SI261 → SK211

〔規模・形状〕南側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 3.2m、南北 2.2m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：N - 14° - W



SI209竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 増黄	シルト	黄褐色ローム粒を均質に含む 柱状掘方埋土

SI209竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒。密実物粒を少量含む 柱状すり取り穴
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱状跡
3	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロック多量に含む 柱穴掘方埋土

SI209竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ローム粒。密実物粒を少量含む 柱抜き穴
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱抜き穴
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱抜き穴
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱抜き穴

第 84 図 SI209 竪穴住居跡

〔壁面〕IV層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い西壁で床面から13cmである。

〔床面〕白色粘土・黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床とする。南東に向かってわずかに傾斜する。

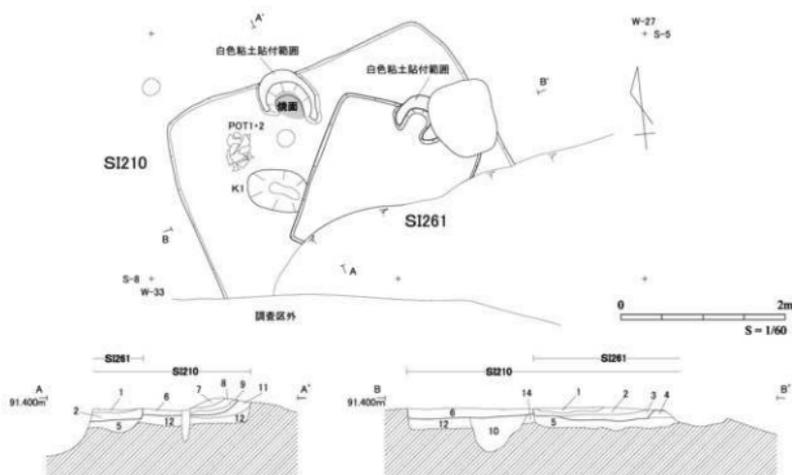
〔主柱・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕北壁中央に設置されており、燃烧部が残存する。燃烧部は長さ56cm、幅110cmで、焚口幅は側壁先端間で75cmである。燃烧部底面は残存しない。側壁は左側壁で長さ52cm、右側壁で長さ30cmが残存する。掘方埋土を掘り込んで黄褐色ロームブロックを含む黒褐色粘質シルトにより構築されている。奥壁は住居北壁より15cmほど張り出す。

〔貯蔵穴〕なし

〔その他〕住居中央やや西寄りの床面で土坑1基(K1)を確認した。平面形は長軸60cm、短軸30cmの楕円形を呈する。断面形はV字形を呈し、深さ42cmである。堆積土は1層で、黄褐色ロームブロックと炭化物粒を含む黒褐色シルトである。人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

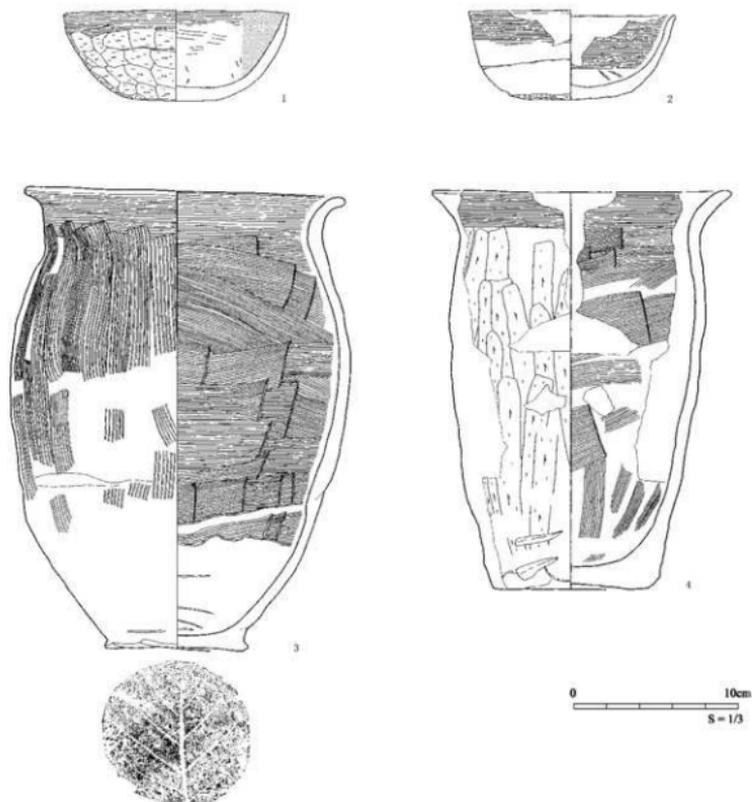


SI210・261壁穴住居跡

No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む SI261焼壁土	7	10YR2/3 黒褐	シルト	白色粘土ブロックを多量、焼土粒、炭化物粒を少量含む SI210焼壁土
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、焼土粒、炭化物粒を少量含む SI261焼壁土	8	2.5YR3/4 暗褐	シルト	焼土ブロック・粒を多量に含む SI210焼壁土
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	焼土粒、炭化物粒を少量、白色粘土を含む SI261焼壁土	9	10YR2/3 黒褐	シルト	粘土ブロックを少量、炭化物粒を含む SI210焼壁土
4	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	白色粘土を多量に、焼土粒、炭化物粒を少量含む SI261カマド周辺焼壁土	10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、炭化物粒を少量含む SI210 K1焼壁土
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む SI261掘方埋土	11	10YR2/2 黒褐	シルト	白色粘土、黄褐色ロームブロックを多量に含む SI210カマド周辺焼壁土
6	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SI210焼壁土	12	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	SI210掘方埋土

第85図 SI210・SI261 壁穴住居跡

〔出土遺物〕 カマド焚口付近の床より土師器甕（第86図3）が、カマド内堆積土より土師器坏（第86図1）が、住居内堆積土より土師器坏（第86図2）・甕（第86図4）・鉄鍬（第186図1）が出土した。いずれも非ロクロ調整である。1は外面の口縁部に横ナデの後に体部にヘラケズリ調整が施され、内面に黒色処理が施されている。2は外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリが施され、内面は口縁部横ナデ、体部にヘラナデ調整が施され、黒色処理が施されていない。3は外面の口縁部



No.	層位	機型	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真	
						口径	底径	高さ				
1	4F3	内埴	土師器	坏	E 3	外：(口) 32F ⁺ → (体) 39E ⁺ 内：32F ⁺ → 39E ⁺ → 黒色処理	13.0	—	5.5	完形	06006	32.2
2	崖 POT3	土師器	甕	坏	H	外：(口) 32F ⁺ (体) 39E ⁺ 内：(口) 32F ⁺ (体) 39E ⁺	12.4	7.4	5.45	4/5	06005	32.3
3	床	土師器	甕	C	外：(口) 32F ⁺ → (胴) 39E ⁺ (底面) 本黒面 内：(口) 32F ⁺ → (胴) 39E ⁺ 外面胴部に炭化物付着	19.2	8.6	28.1	完形	06044	32.5	
4	埋	土師器	甕	D	外：(胴) 39E ⁺ 内：(口) 32F ⁺ 内：(胴) 39E ⁺ → (口) 32F ⁺	18.0	9.4	24.2	2/5	06049	32.4	

第86図 SI210 竪穴住居跡出土遺物

に横ナデの後に胴部にハケメ調整が、外底面に木葉痕がみられる。4は外面の胴部にヘラケズリの後に口縁部に横ナデ調整が施されている。

このほか、床面・住居掘方埋土・カマド内堆積土・住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器環・壺・甕、須恵器環・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、環は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にケズリ調整またはハケメ調整が施されている。須恵器甕は外面に平行タキ目、内面に無文押さえ具痕がみられる。

【SI212 竪穴住居跡】(第87図、図版14-4)

〔位置・確認面〕N2中区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びており、西側は残存しないため全体の形状は不明であるが、東西3.8m以上、南北2.8m以上の方形を呈するとみられる。掘方埋土のみが残存する。床面が残存しないため住居に伴うものかどうか判断できないが、柱穴2基と土坑1基が確認された。

〔方向〕東辺：N-35°-E

〔壁面・床面〕残存しない。

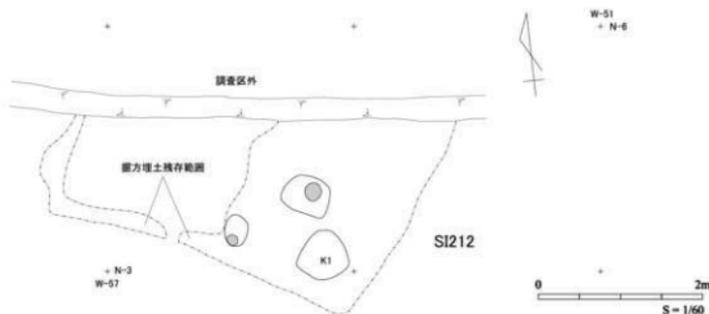
〔主柱穴〕住居推定対角線上の南東コーナー部より内側に120cmの位置で柱穴1基(P1)を確認した。掘方の平面形は長軸56cm、短軸44cmの楕円形を呈し、平面形が直径22cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。位置と形状、規模から主柱穴の可能性が考えられる。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉〕不明

〔貯蔵穴〕住居南東コーナー部で土坑1基(K1)が確認された。平面形は長軸63cm、短軸60cmの楕円形を呈し、確認面の堆積土は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。位置と形状、規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。

〔その他〕住居南側で柱穴1基(P2)を確認した。掘方の平面形は長軸40cm、短軸24cmの楕円形を呈し、平面形が直径15cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。



第87図 SI212 竪穴住居跡

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕貯蔵穴堆積土より非ロクロ調整の土師器壺・甕の破片が出土した。土師器壺は口縁部破片で内外面にミガキ調整と赤彩が施されている。土師器甕は外面にハケメ調整が施されている。

〔SI222 竅穴住居跡〕(第 88・89 図、図版 14-5)

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕(SI222) → SD228 → SD221 — SD220

〔規模・形状〕重複のため全体の形状は不明であるが、東西 4.8m 以上、南北 3.5m の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N-1° -W

〔壁面〕V 層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な南壁で床面から 14cm である。

〔床面〕黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床とする。中央部の東西 3.0m 以上、南北 3.2m の範囲に褐色粘質シルトの硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕床面で柱穴 5 基を確認したが、主柱穴として対応関係にあるものは確認できなかった。

〔壁柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 20cm、下端幅 6cm、確認面からの深さ 16cm で断面形が U 字形を呈する周溝がほぼ全周する。堆積土は住居掘方埋土と同じである。

〔炉〕住居北東部の床面の長軸 64cm、短軸 52cm の範囲が皿状に 6cm ほど窪み、被熱による著しい赤色化がみられる。底面は貼床と同じ褐色粘質シルトで構築されており、炉跡と考えられる。

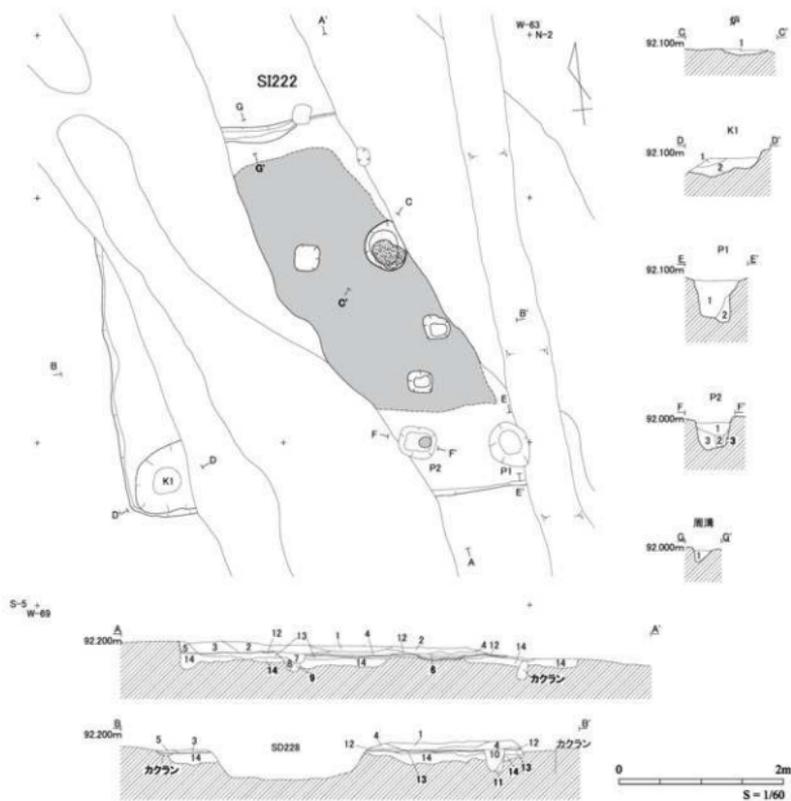
〔貯蔵穴〕住居南西コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。東側が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 84cm 以上、短軸 80cm の楕円形を呈していたとみられる。断面形は西側に段を持つ皿状を呈し、深さ 22cm である。位置と形状、規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。

〔その他〕住居床面の中央やや北東寄り 1 基 (P2)、南東部で 4 基 (P1、P3～P5) の柱穴を確認した。P2 は掘方の平面形が一辺 30cm の方形を呈し、深さ 56cm である。P1 は掘方の平面形が長軸 56cm、短軸 44cm の楕円形を呈し、深さ 52cm である。P3 は掘方の平面形が長軸 32cm、短軸 24cm の楕円形を呈し、深さ 28cm である。P4 は掘方の平面形が長軸 44cm、短軸 37cm の隅丸方形を呈し、深さ 40cm である。P5 は掘方の平面形が長軸 30cm、短軸 26cm の隅丸方形を呈し、深さ 22cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、P4・P5 では平面形が直径 10～15cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

〔堆積土〕住居内堆積土は 5 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕貯蔵穴堆積土より非ロクロ調整の土師器高杯の脚部 (第 89 図) が出土した。内外面にハケメ調整の後に外面に丹念なヘラミガキと赤彩が施されている。

このほか、床面・住居掘方埋土・貯蔵穴堆積土、主柱穴掘方埋土・主柱穴抜き取り穴・住居内堆積土より土師器環・高杯・壺・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、環は口縁部が直立または外反するものと、頸部に屈曲をもち口縁部が短く外反するもの、頸部に屈曲をもち口縁部が長く外反するものがあり、いずれも内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。高杯は脚部



SI222壁穴住居跡

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒層	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を含む
2	10YR3/4 暗層	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
3	10YR3/3 暗層	シルト	黄褐色ローム粒を含む
4	10YR2/2 黒層	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR3/3 に近い暗層	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを少量含む
6	10YR2/2 黒層	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 壁穴
7	10YR3/3 暗層	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む P2柱跡穴
8	10YR4/6 暗層	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む P2柱跡
9	10YR4/6 暗層	シルト	P2柱穴上方埋土
10	10YR2/2 黒層	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む P4柱跡穴
11	10YR3/3 暗層	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む P4柱穴上方埋土
12	10YR4/6 暗層	粘質シルト	黄褐色シルトを含む 住居跡床
13	10YR3/4 暗層	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居跡上方埋土
14	10YR4/6 暗層	シルト	黄褐色ローム粒を含む 住居跡上方埋土

SI222壁穴住居跡P1

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒層	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 壁穴

SI222壁穴住居跡貯蔵穴(K1)

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒層	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を含む
2	10YR3/3 暗層	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

SI222壁穴住居跡(P1)

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒層	シルト	黄褐色ローム粒を含む 柱跡穴
2	10YR3/3 暗層	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む 柱穴上方埋土

SI222壁穴住居跡(P2)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗層	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱跡穴
2	10YR3/3 暗層	シルト	柱跡跡
3	10YR3/4 暗層	シルト	赤色土粒、黄色土粒を少量含む 柱穴上方埋土

SI222壁穴住居跡埋溝

No	土色	土性	備考
1	10YR4/4 暗層	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 88 図 SI222 壁穴住居跡

が円錐台状を呈し、透かし孔をもつものと、脚部が円柱状を呈し末端が開くものがあり、前者は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は単純口縁で内外面に横ナデ調整が施されているものと、二重口縁で外面にハケメ調整が施されているものがある。

【SI223 竪穴住居跡】(第90・91図、図版14-6)

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕《SI223》→SB251a→SB251b

〔規模・形状〕南側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西6.3m、南北5.5m以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕東辺：N-31°-W

〔壁面〕V層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い東壁で床面から38cmである。

〔床面〕黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床とする。中央部の東西4.0m、南北3.8m以上の範囲で床面の硬化がみられる。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に110～140cmの位置で柱穴3基(P1～3)を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。掘方の平面形は長軸52～56cm、短軸44～52cmの楕円形を呈し、床面からの深さは30～42cmである。いずれも平面形が直径20cmの円形を呈し、掘方底面に連する柱痕跡が確認された。また、このうち1基では柱材の抜き取り痕跡が確認された。

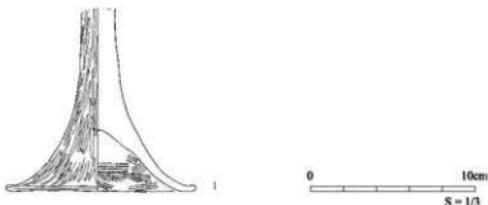
〔壁柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅16～36cm、下端幅8～12cm、確認面からの深さ5～12cmで断面形がU字形を呈する周溝がほぼ全周する。堆積土は黄褐色ローム粒を少量含む砂質シルトである。

〔炉〕住居中央部やや西寄りの床面の長軸60cm、短軸44cmの範囲が皿状に4cmほど窪み、被熱による著しい赤色化がみられる。炉跡と考えられる。

〔貯蔵穴〕なし

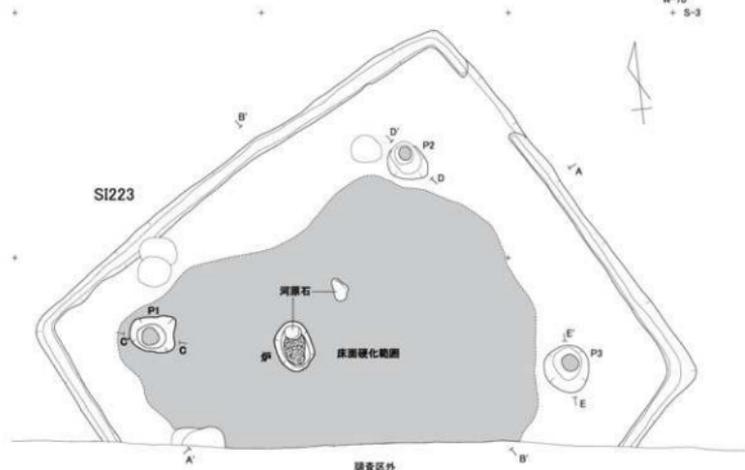
〔その他〕住居北東部の床面で柱穴1基(P4)を確認した。掘方の平面形は長軸36cm、短軸30cmの楕円形を呈し、深さ50cmである。柱痕跡は確認されない。



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)		残存	登録	写真	
						口径	底径				器高
1	貯蔵穴	土製	高杯	B	外: 2径→3径→赤彩 内: 2径→(縮径) 2径 (底径=縮径)	—	(1.15)	(1.12)	一部	06042	33-1

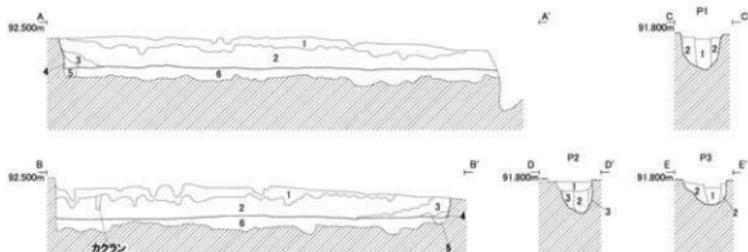
第89図 SI222 竪穴住居跡出土遺物

W-70
+ S-3



S-3 +
W-78

0 2m
S = 1/60



S1223壁穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・殻を多量に含む
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む
4	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 埋蔵埋土
6	10YR3/4 紅み・黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居面埋土

S1223壁穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱基礎
2	10YR3/4 暗褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴面埋土

S1223壁穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱穴埋り層
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・殻を少量含む 柱基礎
3	10YR4/3 紅み・黄褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴面埋土

S1223壁穴住居跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻、炭化物殻を少量含む 柱基礎
2	10YR3/4 暗褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴面埋土

第 90 図 SI223 壁穴住居跡

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居掘方埋土よりミニチュア土器（第91図1）が、住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器環（第91図2）・壺（第91図3）が出土した。1は内外面にナデ調整が施されている。2は丸底で内外面に赤彩が施されている。3は内外面に赤彩が施されている。

このほか、住居掘方埋土・住居内堆積土より土師器環・高杯・壺・甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で、環は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。高杯は外面にミガキ調整の後に赤彩が施されており、透かし孔をもつ。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にミガキ調整が施されているものと、ハケメ調整が施されているものがある。このうち、内面に黒色処理の施された土師器環は上層からの混入と考えられる。

〔SI225 竅穴住居跡〕（第75・92図、図版14-7・8）

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI225》→SD228

〔規模・形状〕南側が残存せず、北側の一部が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西6.1m、南北5.1mの方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N-40°-W

〔炉〕住居中央やや北西寄りに焼面3か所が確認され、炉跡の可能性はある。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色（10YR2/2）シルトである。

〔出土遺物〕遺構確認面よりミニチュア土器（第95図1）、非ロクロ調整の土師器環（第95図2）・甕（第95図3・4）が出土した。1は内外面とも指ナデとみられる調整が施されている。2は丸底で内外面に丹念なヘラミガキと赤彩が施されている。3・4は平底で球胴を呈し、3は胴部外面にヘラケズリの後にヘラミガキが、4は胴部外面にハケメの後にヘラケズリが施されている。

このほか、遺構確認面より土師器環・壺・甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で、環は内外面にミガキ調整の後に赤彩が、壺は外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は二重口縁で外面にミガキ調整が施されているものと、外面にハケメ調整が施されているものがある。

〔SI230 竅穴住居跡〕（第93・94図、図版15-1・2）

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕《SI230》→SD228

〔規模・形状〕重複により北側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西3.7m、南北4.3mの方形を呈していたとみられる。

〔方向〕東辺：N-38°-E

〔壁面〕IV層を壁としている。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い西壁で12cmである。

〔床面〕黄褐色ロームブロックと焼土粒を含む掘方埋土を床としている。南側の160cm四方の範囲で床面の硬化がみられる。

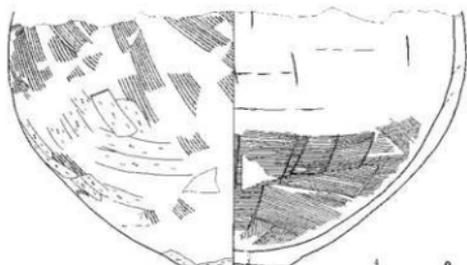
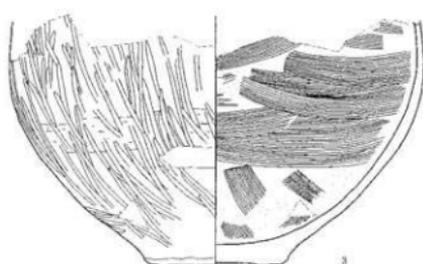
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉〕不明



No	部位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	浅鉢器(埋土)	土師器	—	—	外：PP? 内：PP?	—	—	(3.1)	一部	06051	33-2
2	埴之輪	土師器	环	C	外：(□) 3PP? (体) 4P? + 赤彩 内：(□) 3PP? (体) 4P? + 赤彩	8.85	2.3	3.65	2/3	06050	33-3
3	埴之輪	土師器	环	—	外：4P? + 赤彩 内：4P? + 赤彩	—	—	(2.0)	一部	06102	33-4

第 91 図 S1223 竪穴住居跡



No	部位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	鉢器面	土師器	—	—	外：面PP? (底面) Y? 内：面PP?	(6.3)	3.6	3.6	3/4	06075	33-5
2	鉢器面	土師器	环	A 1	外：(□~体) 4P? + 赤彩 (底面) 4P? + 赤彩 内：(□~體) 3PP? + 4P? + 赤彩	9.8	1.8	5.8	完形	06074	33-6
3	鉢器面	土師器	壺	F 7	外：(胴) 4PP? + 4P? + 赤彩 (底面) 4PP? 内：(胴) 4PP?	—	8.6	(15.3)	一部	06105	33-7
4	鉢器面	土師器	壺	F 7	外：(胴) 4P? + 4PP? (底面) 4PP? 内：(胴) 4PP?	—	6.4	(15.5)	一部	06106	33-8

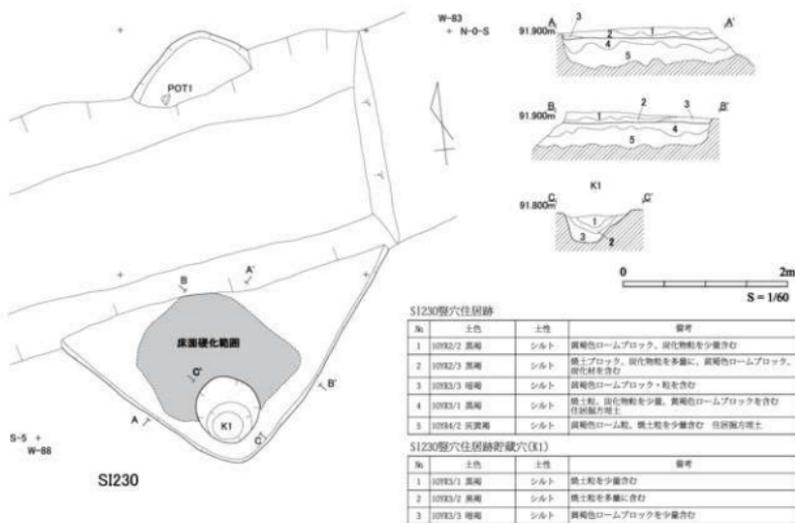
第 92 図 S1225 竪穴住居跡出土遺物

〔貯蔵穴〕南側コーナー部で土坑1基(K1)を確認した。平面形は長軸88cm、短軸72cmの楕円形を呈する。断面形は北側が開く逆台形を呈し、深さ40cmである。堆積土は3層に細分され、焼土・黄褐色ロームブロックを含む黒褐色・暗褐色シルトである。自然堆積と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕北側コーナー部の床面より土師器環(第94図1)が、貯蔵穴堆積土より土師器環(第94図2)が出土した。いずれも非ロクロ調整で丸底を呈し、1は内外面に丹念なヘラミガキと赤彩が、2は体部外面にハケメの後にやや粗いヘラミガキが施されている。

このほか、床面・住居掘方埋土・貯蔵穴堆積土・住居内堆積土より土師器環・高杯・壺・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。



第93図 S1230 竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	断面調整・特徴	法量 (cm)			現存	登録	写真
						口徑	底径	器高			
1	床	土師器	環	A.1	外：(口-腹) 10YR → 10YR 4 → (腹) 沈線 (体) 10YR 9 → 10YR 8 (底面) 10YR 4 赤彩 内：(口-腹) 10YR → 10YR 4 (体) 10YR 1 口縁・腹部赤彩	8.5	2.2	5.9	完形	06007	33-9
2	貯蔵穴 堆3層	土師器	環	A.1	外：(体上) 10YR → 10YR 4 → (口) 10YR (体下) 10YR 9 → 10YR 4 内：10YR 4 → (口) 10YR → 10YR 4	10.4	—	5.85	完形	06045	33-10

第94図 S1230 竪穴住居跡出土遺物

高杯は坏部と脚部の接合部の破片で、外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されているものがある。甕は外面にハケメ調整が施されているものと、ミガキ調整が施されているものがある。

【S1231 竪穴住居跡】(第95・96・97図、図版15-3~6)

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。床面までの精査を行なった。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、長軸3.0m以上、短軸2.5m以上の方角を呈するとみられる。

〔方向〕東辺：N-42°-E

〔壁面〕IV層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は残存状況の良い南壁で12cmである。

〔床面〕黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床としている。中央部の東西1.6m以上、南北0.6m以上の範囲で床面の硬化がみられる。

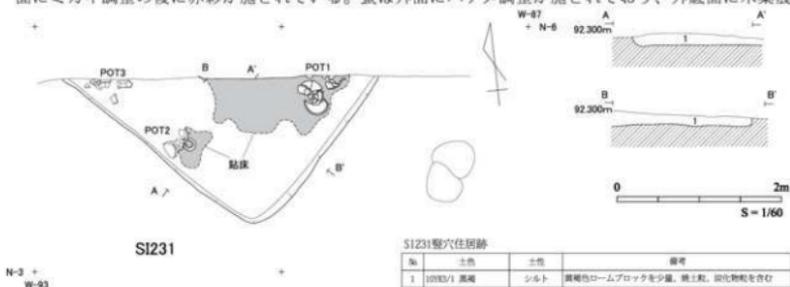
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉・貯蔵穴〕不明

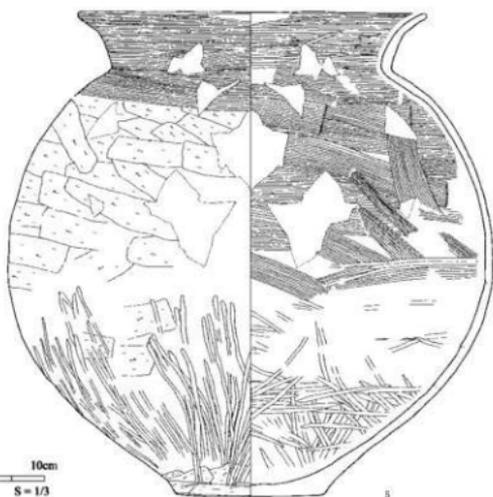
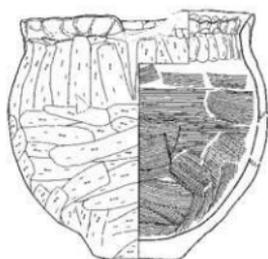
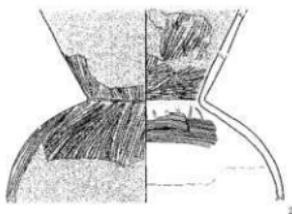
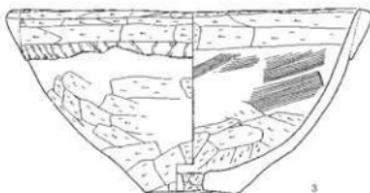
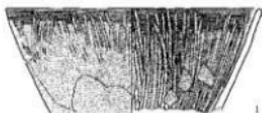
〔堆積土〕住居内堆積土は1層で、住居廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面より非ロクロ調整の壺(第96図1・2)・甕(第96図3)・土師器甕(第96図4・5、第97図)が出土した。第96図3の土師器甕は第96図4の土師器甕のうえに乗った状態で横位に出土した。第96図1・2は口径と胴部最大径がほぼ同じで、内外面に丹念なヘラミガキと赤彩が施されている。第96図3は単孔式の甕で体部外面はケズリ調整が施されている。第96図4は胴部外面にヘラケズリが施され、口縁部に指押さえ痕がみられる。第96図5は平底で球胴を呈し、胴部外面にケズリ、内外面にミガキ調整が施されている。第97図は球胴を呈し、胴部外面はハケメの後にヘラミガキ、内面はヘラナデとヘラケズリの後にヘラミガキが施されている。

このほか、堆積土・確認面より土師器坏・壺・甕、ミニチュア土器、須恵器坏・蓋・高台坏・甕、近世陶器の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されているものと、外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されているものがある。壺は外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されており、外底面に木炭痕



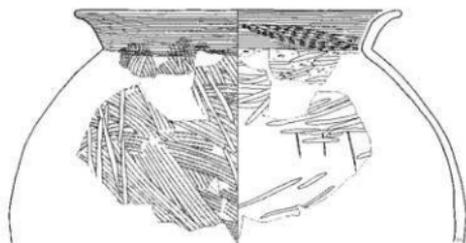
第95図 S1231 竪穴住居跡



0 10cm
S = 1/3

No	層位	種類	西種	分類	西漢調製・導致	法量 (cm)			殘存	登錄	写真
						口徑	底徑	器高			
1	床 POT2	土師器	甑	B	外：(口) 327 ⁺ →432 ⁺ 外→赤影 内：(口) 327 ⁺ →432 ⁺ 外→赤影 06063b 土師一類B	16.3	—	(6.4)	一部	06063a	34-1
2	床 POT2	土師器	甑	B	外：(口) 432 ⁺ 外→赤影 (体) 432 ⁺ 内：(口) 432 ⁺ 外→赤影 (体) 胎厚2→437 ⁺ 06063c 土師一類B	—	—	(11.7)	一部	06063b	34-2
3	床 POT2	土師器	甑	A 2	外：(口) 胎厚2→432 ⁺ (体) 432 ⁺ 内：(口) 432 ⁺ (体) 437 ⁺ →439 ⁺ 外→赤影 2 單孔孔徑 1.05	(20.0)	5.5	11.0	3/4	06061	34-3
4	床 POT2	土師器	甑	A 1	外：(口) 胎厚2→(裏) 432 ⁺ (底) 432 ⁺ 内：(口) 胎厚2 (裏) 437 ⁺ 片口	14.0	5.1	14.8	5/6	06062	34-4
5	床 POT1	土師器	甑	F	外：(口) 437 ⁺ →432 ⁺ (裏) 432 ⁺ →432 ⁺ 内：(口) 327 ⁺ →432 ⁺ (裏) 437 ⁺ →432 ⁺ 外底口→裏上間に炭化物付着	(21.0)	9.0	29.1	2/3	06064	34-5

第 96 図 SI231 竪穴住居跡出土遺物(1)



No	層位	種類	器種	分類	西部調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	床 POT3	土師器	甕	F	外:(口)49F-42F (胴)49F-40F (底)49F-40F 内:(口)49F-42F (胴)49F-40F (底)49F-40F	19.0	-	14.2	一部	06065	-

第 97 図 SI231 竪穴住居跡出土遺物 (2)

がみられる。甕は無底式のものである。ミニチュア土器は口縁部破片で内外面に指オサエ痕がみられる。須恵器環は底面に回転ヘラケズリが施されている。このうち、土師器環の内面に黒色処理が施されているものと、須恵器環・蓋・高台環、近世陶器は上層からの混入と考えられる。

【SI259 竪穴住居跡】(第 75 図、図版 15- 7)

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI259》→ SD228

〔規模・形状〕西側が現存せず、南側と東側は調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 4.2m 以上、南北 1.6m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：N - 6° - W

〔カマド〕住居北壁に設置されている。燃焼部と煙道部が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は焼土・炭化物粒を含む黒褐色 (10YR3/1) シルトである。

〔出土遺物〕確認面・住居内堆積土より土師器環・甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で、環は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は、外面の頸部に段を有しハケメ調整が施されるものがある。

【SI260 竪穴住居跡】(第 75 図、図版 15- 8)

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI260》→ Pit

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、長軸 2.0m 以上、短軸 1.2m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕西辺：N - 25° - W

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ロームブロックと炭化物粒をわずかに含む黒褐色 (10YR2/1) シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI261 竪穴住居跡】(第 85 図)

〔位置・確認面〕N2 中区の東斜面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕SI210 → 《SI261》 → SK211

〔規模・形状〕SI210の精査の過程で確認したこと、南東側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西1.8m、南北1.9m以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：N-35°-E

〔壁面〕SI210の住居内堆積土を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は床面から13cmである。

〔床面〕黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床とする。南東に向かってわずかに傾斜する。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕北壁中央に設置されており、燃焼部が残存する。燃焼部は長さ36cm、幅60cmで、焚口幅は側壁先端間で50cmである。側壁は左側壁で長さ30cmが残存する。白色粘土を多量に含む黒褐色粘質シルトにより構築されている。奥壁は住居北壁に一致する。

〔貯蔵穴〕なし

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕カマド燃焼部底面より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

B. 掘立柱建物跡

〔SB235a 掘立柱建物跡〕(第98図、図版16・1・2)

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕《SB235a》 → SB235b

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西3間(総長4.3m)、南北2間(総長4.4m)以上の建物跡である。

〔柱穴〕7基(P1～P7)確認し、P2のみ調査を行なった。SB235bとの重複により掘方の平面形が分かるものは少ないが、P4は長軸56cm、短軸40cmの隅丸方形を呈し、深さ55cmである。P4を除く6基では柱材の抜き取り痕跡が確認される。

〔柱間寸法・方向〕柱痕跡が残存しないため不明であるが、ほぼ同規模でSB235bに建て替えられたと考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔SB235b 掘立柱建物跡〕(第98図、図版16・1・2)

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕SB235a → 《SB235b》

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西3間(総長4.3m)、南北2間(総長4.4m)以上の建物跡である。

〔柱穴〕7基(P1～P7)確認し、P2のみ調査を行なった。掘方の平面形は長軸32～64cm、短軸28～40cmの楕円形を呈し、深さはP2で60cmである。いずれも平面形が直径12cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕南側柱列で東から160・130・180cm、西側柱列で南から220・220cmである。

〔方向〕西側柱列：N-13°-W

〔出土遺物〕P2・P6の掘方埋土、P2 抜き取り穴、P7 確認面より土師器環・甕の破片が出土した。土師器環は外面にケズリ調整、内面に黒色処理が施されている。

【SB239 掘立柱建物跡】(第99図、図版16-3)

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西1間(総長2.3m)、南北1間(総長2.3m)の建物跡である。周辺に分布する竪穴住居跡と方位、柱穴の規模などが類似しており、竪穴住居の主柱穴であった可能性がある。

〔柱穴〕4基確認した。掘方の平面形は一辺44～52cmの隅丸方形を呈し、深さ24～32cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、このうち1基で平面形が直径20cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が残存する。

〔柱間寸法〕南側柱列で230cm、東側柱列で230cmである。

〔方向〕東側柱列：N-13°-W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB251a 掘立柱建物跡】(第100図、図版16-4)

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

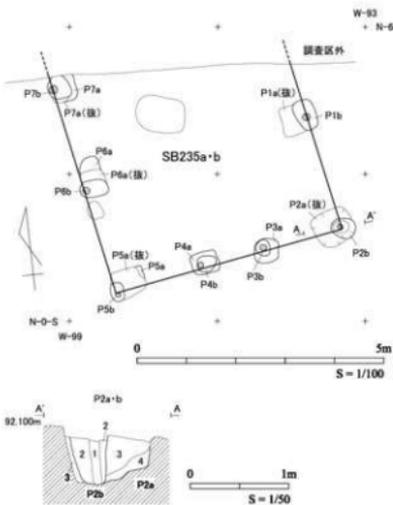
〔重複〕SI223 → 《SB251a》 → SB251b

〔規模・形状〕南側が調査区外へ伸びるため全体の形状は不明であるが、東西2間(総長5.0m)、南北2間(総長4.9m)以上の建物跡である。

〔柱穴〕5基確認した。掘方の平面形は長軸45～50cm、短軸35～45cmの隅丸方形ないしは楕円形を呈し、深さ32～55cmである。SB251bとの重複により柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法・方向〕柱痕跡が残存しないため不明であるが、ほぼ同規模でSB251bに建て替えられたと考えられる。

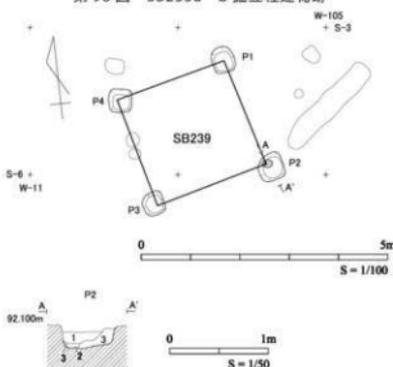
〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB235a・b掘立柱建物跡(P2a・b)

No.	土色	土物	備考
1	10192/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱抜き取面跡
2	10192/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む P2a柱穴埋土
3	10192/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 黒褐色シルトブロックを含有する粘り強い凝結
4	10194/6 黄	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを主体とする P2a柱穴埋土

第98図 SB235a・b 掘立柱建物跡



SB239掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土物	備考
1	10192/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱抜き取面跡
2	10192/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム塊を少量含む 柱痕跡
3	10194/6 黄	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを主体とする 柱穴埋土

第99図 SB239 掘立柱建物跡

【SB251b 掘立柱建物跡】(第100図、図版16-4)

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕SI223 → SB251a → 《SB251b》

〔規模・形状〕南側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西2間(総長5.0m)、南北2間(総長4.9m)以上の建物跡である。

〔柱穴〕6基確認した。掘方の平面形は長軸35～47cm、短軸20～40cmの楕円形を呈し、深さ40～67cmである。このうち5基で平面形が直径10～18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは40～72cmで、掘方底面に接するものと5cm程深く沈みこむものがある。

〔柱間寸法〕北側柱列で西から280・220cm、東側柱列で北から270・220cmである。

〔方向〕東側柱列：N-5°-W

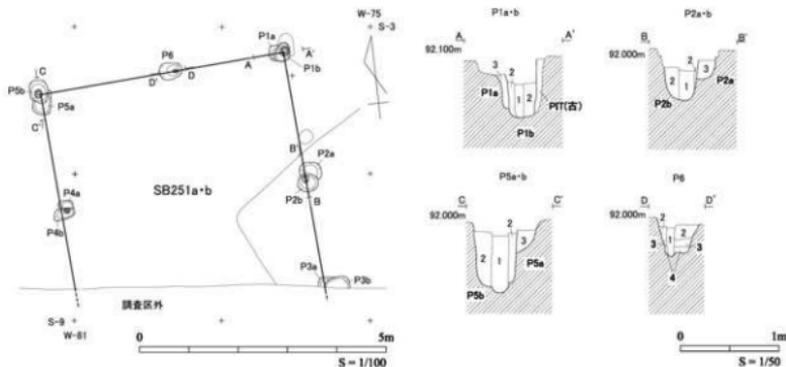
〔出土遺物〕P4 掘方埋土、P3・P5a 堆積土より非ロクロ調整の土師器環・裏の破片が出土した。土師器環は外面にミガキ調整、内面に黒色処理が施されている。土師器裏は有段で外面にハケメ調整が施されている。

【SB256 掘立柱建物跡】(第101図、図版16-5)

〔位置・確認面〕N2 中区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕SK214 — SI209 — 《SB256》

〔規模・形状〕南側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西2間(総長3.8m)、南北1間(総



SB251a・b掘立柱建物跡(P1a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む P1a柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量、灰化物を少量含む P1a柱穴埋方埋土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む P1a柱穴埋方埋土

SB251a・b掘立柱建物跡(P2a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	P2a柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に、硬土粒を少量含む P2a柱穴埋方埋土
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む P2a柱穴埋方埋土

SB251a・b掘立柱建物跡(P5a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む P5a柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む P5a柱穴埋方埋土
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む P5a柱穴埋方埋土

SB251a・b掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴埋方埋土
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴埋方埋土
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴埋方埋土

第100図 SB251a・b掘立柱建物跡

長 1.6m) 以上の建物跡である。

〔柱穴〕 5 基確認した。掘方の平面形は長軸 36 ~ 48cm、短軸 28 ~ 38cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さ 14 ~ 34cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、このうち 1 基で平面形が直径 22cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が残存する。

〔柱間寸法〕 北側柱列で西から 200 - 180cm、東側柱列で 160cm である。

〔方向〕 東側柱列：N - 12° - W

〔出土遺物〕 P1 抜き取り穴より土師器環の破片が、P4 抜き取り穴より土師器甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で土師器環は外面にケズリ調整、内面に黒色処理が施されている。

C. 柱列跡

【SA203 柱列跡】 (第 102 図)

〔位置・確認面〕 N2 東区の平坦面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕 《SA203》 → Pit

〔規模・形状〕 東西 3 間 (総長 5.1m) 以上の柱列跡である。

〔柱穴〕 4 基確認した。掘方の平面形は長軸 36 ~ 40cm、短軸 28 ~ 37cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さ 23 ~ 28cm である。3 基で平面形が直径 15 ~ 18cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕 東から 170 - 170 - 170cm である。

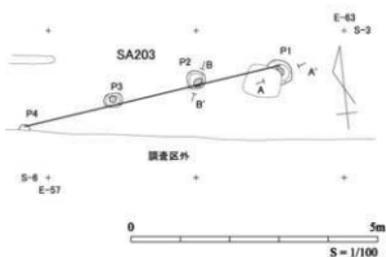
〔方向〕 E - 7° - N

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

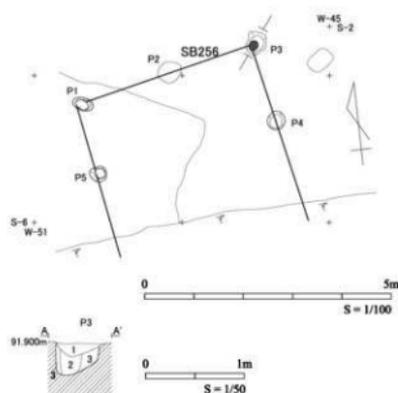
【SA253 柱列跡】 (第 103 図)

〔位置・確認面〕 N2 西区の平坦面に立地する。

IV 層で確認した。



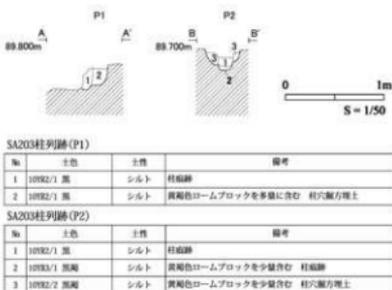
第 102 図 SA203 柱列跡



SB256 掘立柱建物跡 (P1)

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	柱抜き取り面跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を少量含む 柱面跡
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多数に含む 柱穴底面埋土

第 101 図 SB256 掘立柱建物跡



〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西2間(総長3.5m)の柱列跡である。

〔柱穴〕3基確認した。掘方の平面形は長軸28～30cm、短軸23～27cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さ15～25cmである。2基で平面形が直径10cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕東から170-180cmである。

〔方向〕E-9°-N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SA254 柱列跡】(第104図)

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕SD252 → 《SA254》 — SD234

〔規模・形状〕東西3間(総長4.0m)の柱列跡である。

〔柱穴〕4基確認した。掘方の平面形は長軸28～35cm、短軸25～33cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さ47～64cmである。いずれも平面形が直径10cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

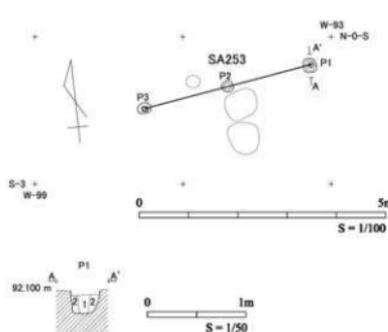
〔柱間寸法〕東から140-130-130cmである。

〔方向〕E-14°-N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

D. 落し穴状土坑

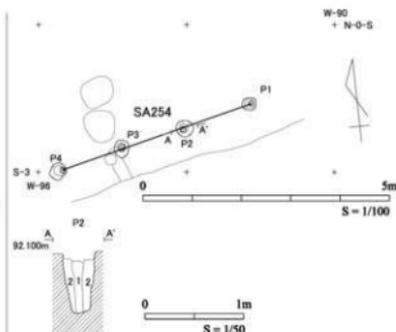
落し穴状土坑は8基確認された。ここではのうち主要なものについて記述し、これ以外については第6表に特徴を示す。



SA253柱列跡(P1)

№	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	柱穴東方端土

第103図 SA253 柱列跡



SA254柱列跡(P2)

№	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を多量に含む 柱穴東方端土

第104図 SA254 柱列跡

【SK216 落し穴状土坑】(第 105 図)

〔位置・確認面〕N2 中区の平坦面に立地する。
V層で確認した。

〔重複〕なし

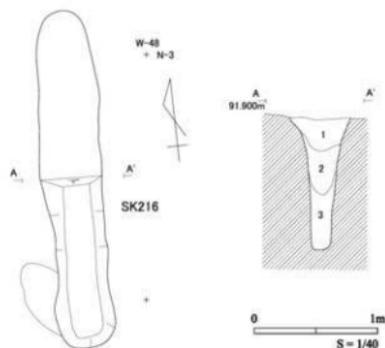
〔規模・形状〕平面形は長軸 260cm、短軸 48cm の溝状を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さ 104cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔方向〕南北方向

〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SK216 落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量を含む

第 105 図 SK216 落し穴状土坑

【SK217 落し穴状土坑】(第 106 図、図版 16-6)

〔位置・確認面〕N2 中区の東斜面に立地する。
V層で確認した。

〔重複〕なし

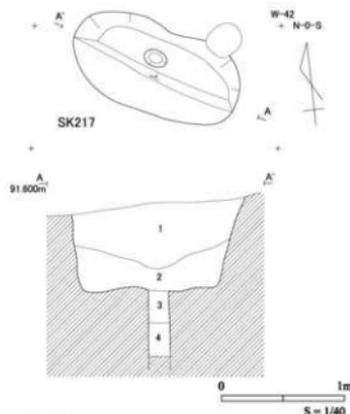
〔規模・形状〕平面形は長軸 140cm、短軸 74cm の楕円形を呈する。横断面形は逆台形を呈し、深さ 70cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。底面中央で平面形が直径 18cm の円形を呈するピット 1 基を確認した。ピットは深さ 10cm 以上で、湧水のため図化できなかった。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SK217 落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量を含む
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
4	10YR3/4 暗褐	細粒シルト	砂を多量を含む

第 106 図 SK217 落し穴状土坑

【SK258 落し穴状土坑】(第 107 図)

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。
IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 370cm、短軸 90cm の溝状を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さ

100cmである。

〔底面〕西に向かってわずかに傾斜する。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は4層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色の砂質シルトおよび褐色の砂質粘土で、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

E. 土坑

土坑は14基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第7・8表に特徴を示す。

〔SK224 土坑〕(第108・109図、図版16-7)

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕SK257 → SK224

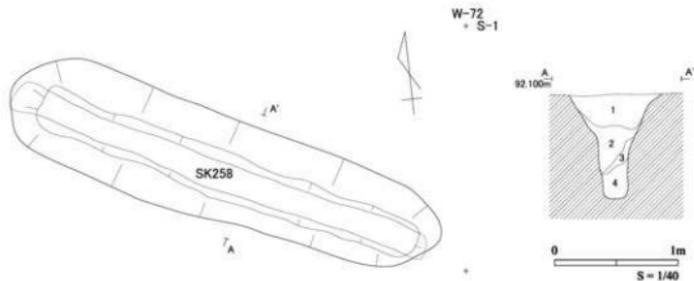
〔規模・形状〕平面形は長軸280cm、短軸220cmの不整楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さ43cmである。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は3層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒、焼土・炭化物粒を含む黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より非クロクロ調整の土師器甔(第109図1)と須恵器高台杯(第109図2)が出土した。1は底部破片で、単孔式の甔である。内外面にヘラミガキ調整が施されている。2は外底面に回転ヘラケズリが施されている。

このほか、堆積土より土師器杯・壺・甕、須恵器杯・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非クロクロ調整で、杯は体部外面に段を有し、口縁部横ナデ、下半部にケズリ調整が、内面に黒色処理が施



SK258 落し穴状土坑

No.	土層	土質	備考
1	109K2/3 黒層	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	109K2/2 黒層	砂質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む
3	109K4/4 層	砂質粘土	黄褐色ロームブロックを多量に含む
4	109K3/4 暗層	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む

第107図 SK258 落し穴状土坑

されている。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は頸部外面に段を有し、ハケメ調整が施されている。須恵器環は外面に回転ヘラケズリが施されている。甕は外面に平行タキ目が見られる。

【SK236 土坑】(第110図、図版16-8)

〔位置・確認面〕N2西区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

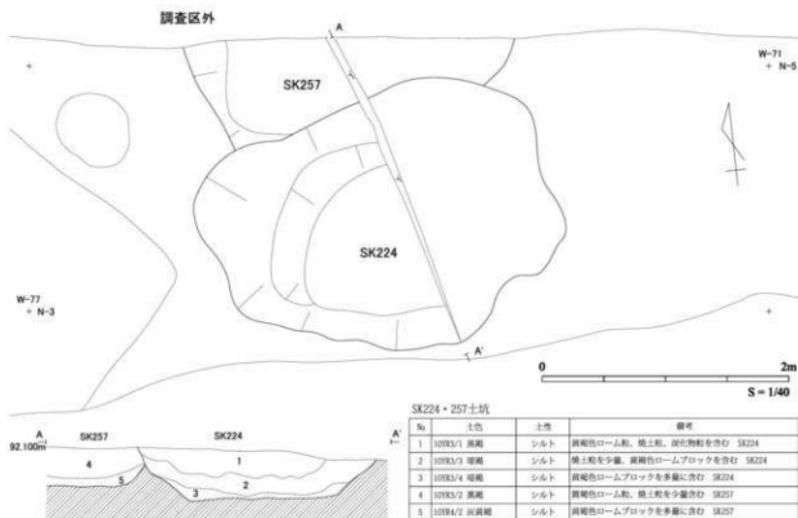
〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸190cm、短軸90cmの長方形を呈する。断面形は箱形を呈し、深さ33cmである。

〔底面〕平坦である。

〔堆積土〕堆積土は2層に細分され、黄褐色ローム粒を少量含む黒色・黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器環・甕の破片が出土した。



第108図 SK224土坑



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			現存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	層2層	土師器	環	A2?	外:4518± 内:4518±	—	—	(3.3)	一部	06189	—
2	層1~2層	須恵器	高台杯	B	外:10791F → 10792F → 高台接合→10797F (底面) 切り離し不明→10794F → 10797F	(14.0)	(8.4)	4.45	3/5	06045	35-3

第109図 SK224土坑出土遺物

【SK243 土坑】(第 111 図、図版 17-1)

〔位置・確認面〕N2 西区の丘陵頂部に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 133cm、短軸 70cm の不整形長方形を呈する。断面形は箱形を呈し、深さ 80cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は 6 層に細分され、黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・暗褐色シルトとにぶい黄褐色粘土で、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土より土師器甕の破片が出土した。

F. 溝跡

溝跡は 15 条確認された。このうち大溝跡が 4 条である。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 10 表に特徴を示す。

【SD202 溝跡】(第 112 図、図版 17-2)

〔位置・確認面〕N2 東区の平坦面に立地する。V 層で確認した。

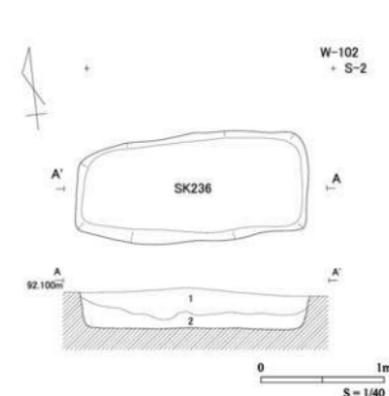
〔重複〕なし

〔規模・形状〕長さ約 10.5m 以上の南北溝跡で、調査区外の南北へ延びている。上端幅 65 ~ 75cm、下端幅 30 ~ 45cm で断面形は逆台形を呈し、深さ 17 ~ 20cm である。

〔方向〕南北方向

〔堆積土〕堆積土は 1 層で、黄褐色ロームブロックを少量含む黒色粘質シルトの自然堆積土である。

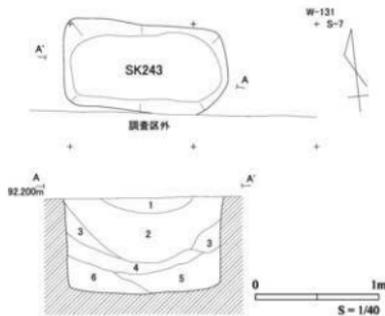
〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SK236土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR2/3 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む

第 110 図 SK236 土坑



SK243土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗緑	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR3/4 暗緑	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む
3	10YR3/4 にぶい暗緑	粘土	黄褐色ローム主体の暗緑土
4	10YR3/3 暗緑	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
5	10YR3/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
6	10YR3/2 にぶい暗緑	粘土	黄褐色ローム主体の暗緑土

第 111 図 SK243 土坑

【SD205 溝跡】(第79図)

〔位置・確認面〕N2東区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕《SD205》—SI201a→SI201b

〔規模・形状〕長さ約3.0m以上の東西溝跡である。上端幅14～22cm、下端幅7～9cmで断面形は皿状を呈し、深さ12～21cmである。SI201bとの重複により確認できないが、SI201aの南東コーナー付近から延びており、SI201aに伴う外延溝であった可能性がある。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は1層で、黄褐色ローム粒を含む黒色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土より不明鉄製品が出土した。

【SD206 大溝跡】(第113・114図、図版17-3・4)

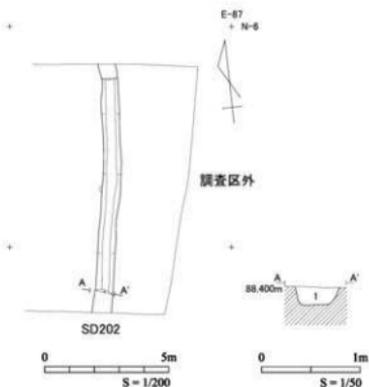
〔位置・確認面〕N2中区の低位部に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕長さ約11.6m以上の南北大溝跡で、調査区外の南北へ延びている。上端幅1.9～2.2m、下端幅1.6～1.9mで断面形は逆台形を呈し、深さ20～33cmである。位置関係と断面形状から、N5区で検出したSD354大溝跡と接続すると考えられ、延長は約87m以上に及ぶ。

〔方向〕南北方向

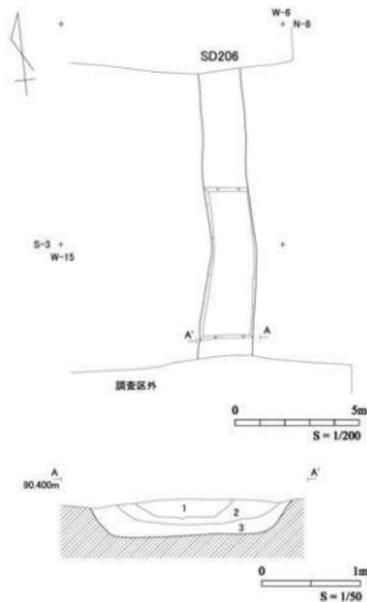
〔堆積土〕堆積土は3層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色のシルト・粘質シルトである。自然堆積土と考えられる。



SD202溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む

第112図 SD202 溝跡



SD206大溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む

第113図 SD206 大溝跡

〔出土遺物〕堆積土1層より非ロクロ調整の土師器甕(第114図2)、確認面より土師器環(第114図1)が出土した。1は体部から口縁部にかけての外面に横ナデの後にヘラケズリ、内面に横ナデ調整が施されている。2は平底で球胴を呈し、口縁部横ナデ、体部外面にヘラケズリ調整が施され、外底面に木葉痕がみられる。

このほか、確認面より土師器壺・甕・甔、須恵器甕の破片が、堆積土1～2層より土師器環・甕、須恵器甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、土師器環は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。土師器甕は外面にハケメ調整が施され、底部に木葉痕がみられるものと、外面にケズリ調整が施されるものがある。須恵器甕は内面に無文・同心円状押さえ具痕が、外面に平行タタキ目がみられる。

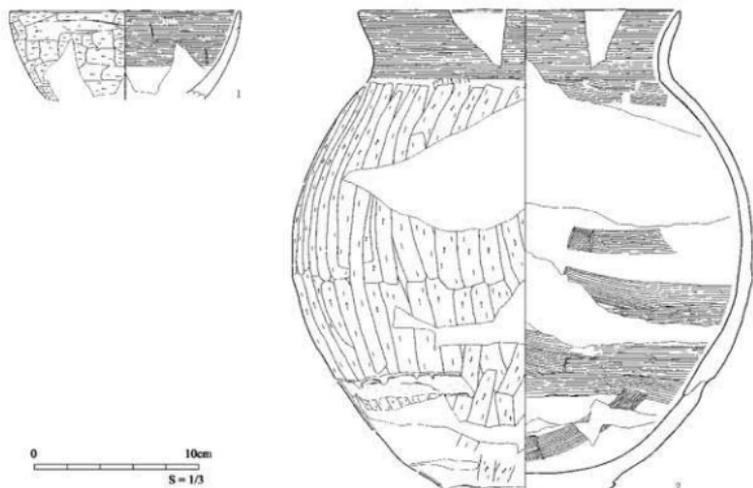
【SD228a・b大溝跡】(第75・115～120図、図版17-5～7、18-1・2)

〔位置・確認面〕N2西～南区の平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕(SI222・SI225・SI230・SI259・SI807・SD234・SD252・SD801)→《SD228a→b》→(SI804・SD221・SD802・SD803・SD805)

〔規模・形状〕大溝による東西約57m、南北約72mの不整形の区画である。大溝の総延長は約233mである。SD228aの埋没後にはほぼ同一のプランでSD228bが掘り直されている。

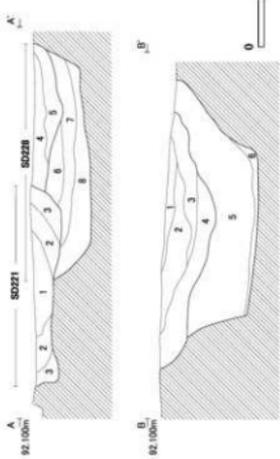
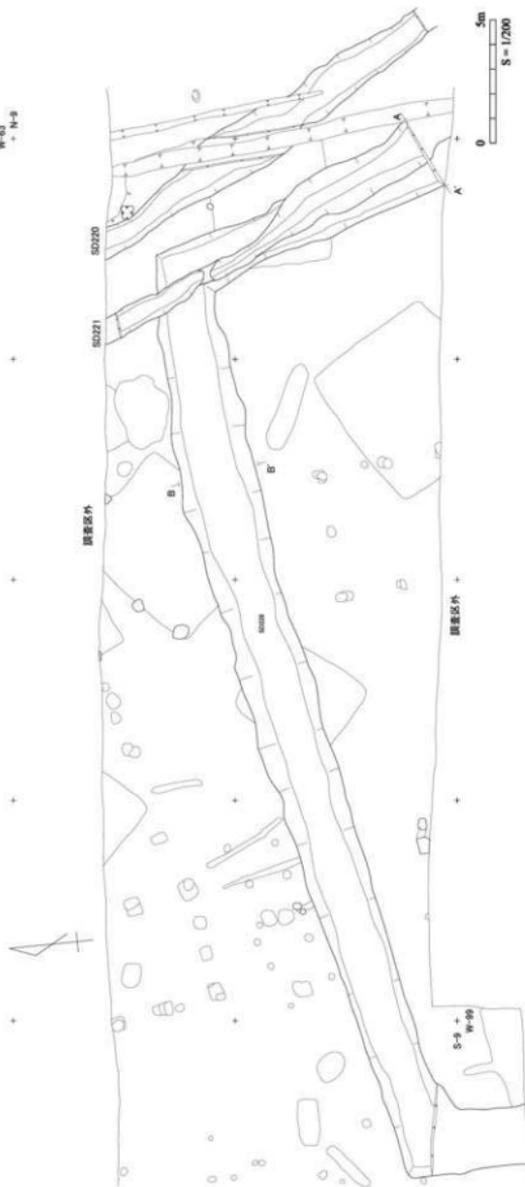
SD228aは上端幅2.0～2.9m、下端幅1.2～1.9mで断面形が逆台形を呈し、深さ0.5～0.8mである。N2西区では延長約53mを確認した。東西方向に40m延び、東西両端でそれぞれ南側に約



No.	層位	種類	器種	分類	表面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	胴高			
1	確認面	土師器	環	J	外:(口～体) 327 ¹ → 492 ¹ 内: 327 ¹	13.8	—	5.35	一部	06072	—
2	埋土層	土師器	甕	G	外:(口) 327 ¹ (胴) 492 ¹ (底面) 木葉痕 内:(口) 327 ¹ (胴) 492 ¹	19.3	9.8	29.35	2/3	06071	35.1

第114図 SD206大溝跡出土遺物

W-63
+ N-9



SD221遺跡・228a・b大遺跡 (A-A')

No	土名	土層	備考
1	100R1.3 遺構	シルト	遺構内から上部、段状埋積土層層状に、SD221
2	100R1.3 遺構	砂質シルト	遺構内から上部、本、段状埋積土層層状に、SD221
3	100R1.3 遺構	シルト	各土層層状に、SD221
4	100R1.4 遺構	砂質シルト	遺構内から上部、段状埋積土層層状に、SD228a
5	100R1.3 遺構	砂質シルト	遺構内から上部、段状埋積土層層状に、SD228a
6	100R1.3 遺構	シルト	遺構内から上部、段状埋積土層層状に、SD228a
7	100R1.3 遺構	砂質シルト	遺構内から上部、段状埋積土層層状に、SD228a
8	100R1.3 遺構	砂質シルト	遺構内から上部、段状埋積土層層状に、SD228a

SD228a・b大遺跡 (B-B')

No	土名	土層	備考
1	100R1.2 遺構	シルト	段状埋積土層層状に、遺構内から上部層状に、SD228b
2	100R1.2 遺構	シルト	遺構内から上部層状に、遺構内から上部層状に、SD228b
3	100R1.1 遺構	シルト	遺構内から上部層状に、遺構内から上部層状に、SD228b
4	100R1.1 遺構	シルト	遺構内から上部層状に、遺構内から上部層状に、SD228b
5	100R1.1 遺	シルト	遺構内から上部層状に、遺構内から上部層状に、SD228a
6	100R1.1 遺	シルト	遺構内から上部層状に、遺構内から上部層状に、SD228a

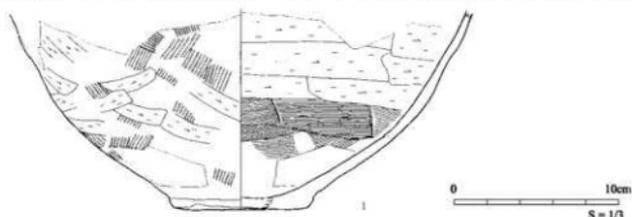
第 115 図 SD228 大遺跡

100°の角度で折れ曲がる。N2南区では南北方向に延びる東辺・西辺の平面プランと、南東・南西コーナー部の平面プランと断面の状況、これを繋ぐ南辺の平面プランを確認した。北東・南東コーナー部間は約75mあり、ほぼ直線的に延びている。北西・南西コーナー部間は約70mあり、やや蛇行しながら延びている。南辺はほぼ直線的に延びており、南西コーナー部は約90度、南東コーナー部は約70°の角度を持つ。両コーナー部間の距離は約57mである。

また、SD228aの埋没後にほぼ同一プランで溝の掘り直しが行なわれている (SD228b)。SD228bは上端幅2.1~2.7m、下端幅0.5~1.5mで断面形が皿状を呈し、深さ0.3~0.5mである。

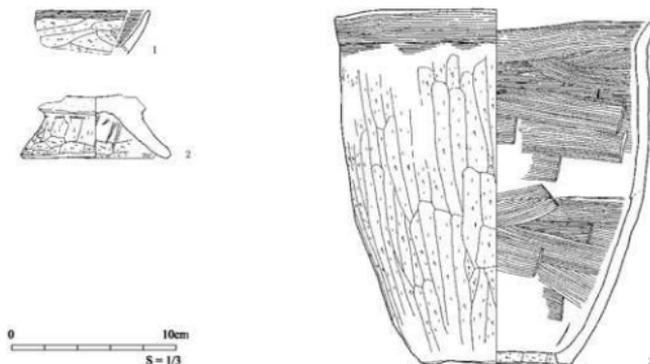
〔方向〕南北方向の不整形

〔堆積土〕SD228aの堆積土は4層に細分される (N2南区T7・D断面7~10層)。7層は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルト、8層は黄褐色ロームブロックを含む黒褐色シルト、9層は黄褐



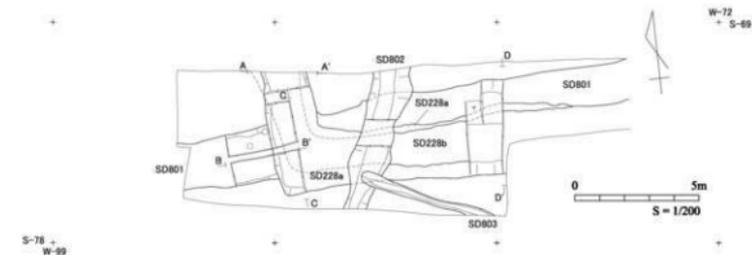
No	層位	種類	器種	分類	断面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	埋	土跡跡	壁	F?	外:(南)→N?→N? (底面)N?Y? 内:(南下部)N? (南上部)N?N?→N?Y?	—	8.1	12.05	一部	06104	35-2

第116図 SD228a 大溝跡出土遺物

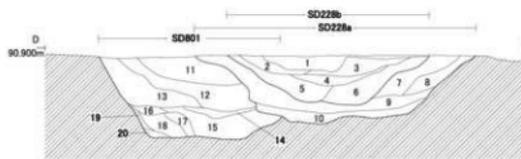
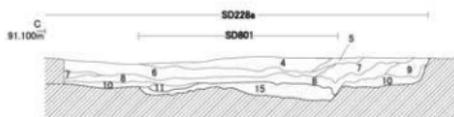
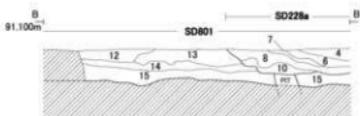
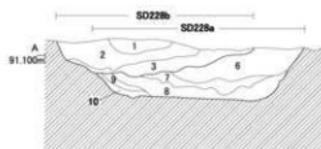


No	層位	種類	器種	分類	断面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	埋	土跡跡	環	I?	外:(口)N?N?→(体)N?Y? 内:(口)N?N?	—	—	1.65	一部	06060	—
2	埋	土跡跡	高杯	C	外:(脚)N?N? 内:N?N?→黒色染層(脚)N?N?工具層→N?N?Y? 高台内面に墨書「人」	—	9.3	3.7	一部	06012	35-4
3	埋	土跡跡	瓶	B	外:(口)N?N?→(体)N?Y? 内:(口)N?N? (体)N?N?・N? 無底	19.1	9.0	21.75	完形	06059	35-5

第117図 SD228b 大溝跡出土遺物



S-78 +
W-99



0 2m
S = 1/50

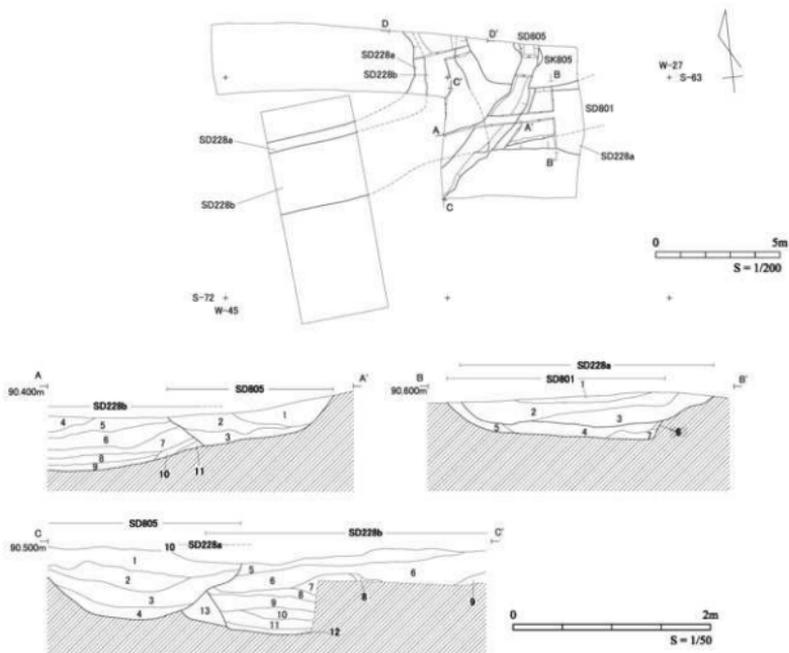
SD228a・b, 801大溝跡(X2緯認調査区T7 A-A'・B-B'・C-C')

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
2	2.5Y3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む SD228b
3	2.5Y3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む 水成堆積 SD228b
4	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を少量含む SD228a
5	10YR2/2 黒褐	シルト	ほぼ均質 SD228a
6	7.5YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む 水成堆積 SD228a
7	10YR2/1 黒	シルト	ほぼ均質 SD228a
8	10YR3/1 黒褐	砂質シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む 水成堆積 SD228a
9	2.5Y2/1 黒	砂質シルト	ほぼ均質 水成堆積 SD228a
10	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を多量に含む SD228a
11	7.5YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を多量に含む SD228a
12	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む S801
13	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む S801
14	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を多量に含む 水成堆積 S801
15	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を多量に含む 人為的埋土 S801

SD228a・b, 801大溝跡(X2緯認調査区T7 D-D')

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	SD228b
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
3	10YR2/1 黒	シルト	SD228b
4	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む SD228b
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
6	10YR1/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む SD228b
7	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を含む SD228a
8	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む SD228a
9	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 水成堆積 SD228a
10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を含む 水成堆積 SD228a
11	10YR1/1 黒	シルト	S801
12	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む S801
13	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む S801
14	10YR2/2 黒褐	シルト	水成堆積 S801
15	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 水成堆積 S801
16	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む S801
17	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む S801
18	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む S801
19	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む S801
20	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色シルト粒を含む S801

第118図 SD228a・b大溝跡、SD801大溝跡(1)



SD228a、805大溝跡 (K2確認調査区KT13 A-A')

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状。炭化物粒を少量含む。 S805
2	10YR3/3 暗褐	シルト	炭化物粒を少量。黄褐色ロームを含む。 S805
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック。炭化物粒を少量含む。 S805
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む。 S8228a
5	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック。炭化物粒を少量。黄褐色ローム状を含む。 S8228a
6	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状。炭化物粒を少量含む。 S8228a
7	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム状を少量。小礫を含む。 S8228a
8	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	炭化物粒を少量。小礫を含む。 S8228a
9	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	砂を少量。白色粘土ブロックを含む。 S8228a
10	10YR4/4 褐	砂質シルト	S8228a
11	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	砂を少量含む。 S8228a

SD228a、801大溝跡 (K2確認調査区KT13 B-B')

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状。炭化物粒を少量含む。 S8228a
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム状。炭化物粒を少量含む。 S8228a
3	10YR2/3 黒褐	シルト	炭化物粒を少量。黄褐色ローム状を均質に含む。 S8228a
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム状。白色粘土ブロックを少量含む。 S801
5	10YR4/4 褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを少量含む。 S801
6	10YR4/4 褐	粘質シルト	S801
7	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ローム状。白色粘土粒を多量に含む。人為的埋土 (S801)

SD228a・b、805大溝跡 (K2確認調査区KT13 C-C')

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状。白色粘土粒を少量含む。 S805
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状を少量含む。 S805
3	10YR3/3 暗褐	シルト	白色粘土粒を少量。黄褐色ローム状。小礫を含む。 S805
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム状を多量に含む。 S805
5	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状。炭化物粒を少量含む。 S8228a
6	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状。白色粘土粒を多量に含む。 S8228a
7	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む。 S8228a
8	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム状を多量に。粘土粒を少量含む。 S8228a
9	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む。 S8228a
10	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム状を少量含む。 S8228a
11	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	S8228a
12	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム状を少量含む。 S8228a
13	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む。 S8228a

第119図 SD228a・b大溝跡、SD801大溝跡 (2)

色ローム粒を少量含む黒褐色シルト、10層は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルトである。9・10層は水成堆積層である。SD228bの堆積土は6層に細分される(N2南区T7・D断面1～6層)。1層は均質な黒褐色シルト、2層は粒を少量含む黒褐色シルト、3層は均質な黒色シルト、4層は粒を含む黒褐色シルト、5層は粒を少量含む黒褐色シルト、6層は黄褐色ロームブロックを含む黒色シルトである。2～6層は黄褐色ローム・黒色土ブロックの混入状況から人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕SD228a:堆積土より非ロクロ調整の土師器甕(第116図)が出土した。平底で球胴を呈し、胴部外面にハケメの後にケズリ調整が施されている。

このほか、堆積土より土師器杯・高杯・壺・甕・甗、須恵器杯・高台杯・蓋・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、杯は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。高杯は脚部が円錐台状を呈し、外面にミガキ調整が施され円形の透かし孔を3か所に持つものと、円柱状を呈し、外面にハケメ調整が見られるものがある。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にミガキ調整またはハケメ調整が施されている。甗は無底式のものである。須恵器杯は底部がヘラキリのもの、回転ヘラケズリが施されるもの、手持ちヘラケズリが施されているものがある。甕は外面に平行タキ目が、内面に無文オサエ工具痕が見られる。

SD228b:堆積土より非ロクロ調整の土師器杯(第117図1)・高杯(第117図2)・甗(第117図3)が出土した。1は外面が口縁部横ナデの後に体部にケズリ、内面に横ナデ調整が施されており、黒色処理が施されていない。2は内面に黒色処理が施されており、高台内面に「人」の墨書がみられる。3は無底で口縁部横ナデの後に体部にケズリ調整が施されている。

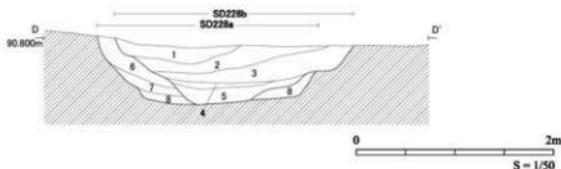
このほか、堆積土より非ロクロ調整の土師器杯・壺・甕・甗、須恵器甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、杯は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。壺は外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されている。甗は二重口縁で外面にハケメ調整が施されている。

【SD801 大溝跡】(第118・119図、図版18-1・2)

〔位置・確認面〕N2南区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕《SD801》→SD228→(SI804・SI221・SD802・SD803・SD805)

〔規模・形状〕長さ約64m以上の東西大溝跡で、調査区外の東西へ延びている。上端幅1.9～2.2m、下端幅1.0～1.8mで断面形は逆台形を呈し、深さ30～80cmである。位置関係と断面形状などから、



SD228a・b大溝跡(N2確認調査4(T13 D-D'))

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	白色粘土ブロックを多量に含む SD228b
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色シルトブロックを多量に、黄褐色ロームブロック・粒を含む SD228b
4	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量に、暗褐色土がミキリ状に含む水成堆積 SD228b
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	砂を少量に含む 水成堆積 SD228b

No.	土色	土性	備考
6	10YR3/3 暗褐色	シルト	灰色物粒を少量に、黄褐色ローム粒を均等に含む SD228a
7	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量、黄褐色ローム粒を均等に含む SD228a
8	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、黄褐色土粒を含む SD228a

第120図 SD228a・b大溝跡

N2 南区 14T の東側で北へ折れ曲がって N2 中区の SD206 および N5 区の SD354 と接続していた可能性がある。N2 南区 12T 東部はこの推定線上にあたるが、削平により遺構は残存しない。

〔方向〕 東西方向

〔堆積土〕 堆積土は 10 層に細分される (N2 南区 T7・D 断面 11 ~ 20 層)。11 層は黒色シルト、12 層は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルト、13 層は黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルト、14 層は黒褐色シルト、15 層は黄褐色ロームブロックをマール状に含む黒褐色シルト、16 ~ 20 層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色シルトである。11 ~ 13 層は自然堆積、14・15 層は水成堆積、16 ~ 20 層は壁際の自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕 N2 南区 7 トレンチの堆積土より非ロクロ調整の土師器杯・甕の破片が出土した。土師器杯は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面にケズリ調整が施されている。

G. N2 南区の遺構確認調査

N2 南区の遺構確認調査区 (1 ~ 14 トレンチ) では、上述した SD228 大溝跡と SD801 大溝跡のほか、竪穴住居跡 10 棟、溝跡 13 条などが確認された (第 75 図)。SD228 大溝跡は方形の区画となることが確認された。竪穴住居跡とそのほかの溝跡については平面プランのみの確認のため詳細は不明であるが、竪穴住居跡のうち S1809 竪穴住居跡と S1814 竪穴住居跡については煙道が伴っている。また、S1811 竪穴住居跡では確認面より土師器高杯の脚部 (第 121 図) が出土した。非ロクロ調整で、外面にハケメ調整の後にヘラミガキ調整が施されている。



No.	層位	種類	器種	分類	断面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	溝底面	土師器	高杯	B	外: (体) 片 (脚) 10.2 → 9.2 欠 → (脚) 2.2 欠 西: (体) 9.2 欠 (脚) 10.2 → (脚) 2.2 欠 (底径 → 脚径)、脚部のみ 4/5	—	(11.2)	(6.1)	一部	06066	36-1

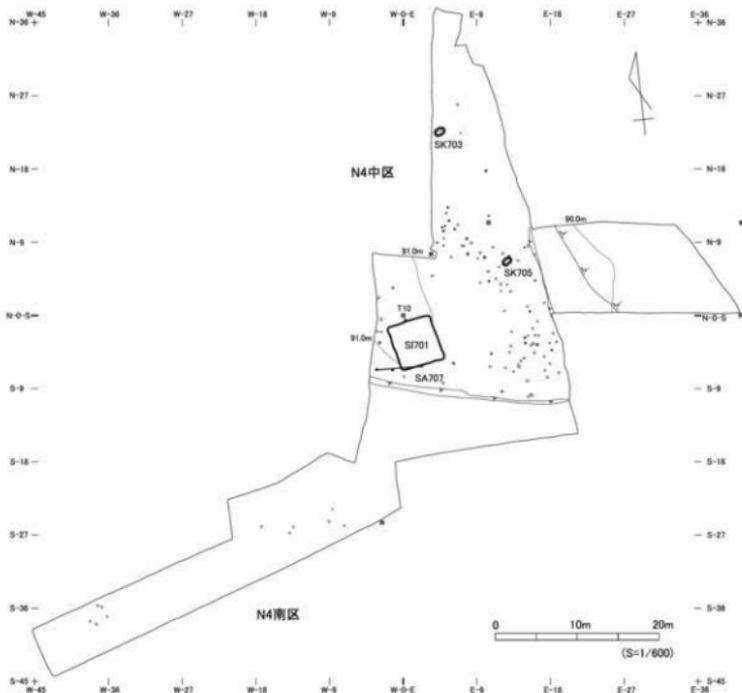
第 121 図 S1811 出土遺物

(6) N3 区

遺跡の立地する丘陵中腹の西縁部にあたる (第 10 図)。試掘調査の結果、後世の削平により黄褐色ロームおよび白色粘土層が露出していることが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。

(7) N4 区

遺跡の立地する丘陵の東縁部で、北区、中区、南区を設定して調査を行なった (第 10・122 図)。北区と中区の間に南東方向から入る小規模な沢と、南区の西西部に東から入る小規模な沢により開析



第122図 N4中・南区遺構配置図

され、その後埋没している。中区は二つの沢に挟まれた小規模な舌状丘陵の先端部に位置し、竪穴住居跡1軒、柱穴1条、落し穴土坑2基が確認された。また、丘陵先端部の東向き斜面で柱穴多数が確認されたが、建物などは確認できない。北区と南区の東半部は剛平を受けており、遺構は確認されなかった。以下、主要な遺構について述べる。

A. 竪穴住居跡

【SI701 竪穴住居跡】(第123～125図、図版19-1～3)

〔位置・確認面〕N4中区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

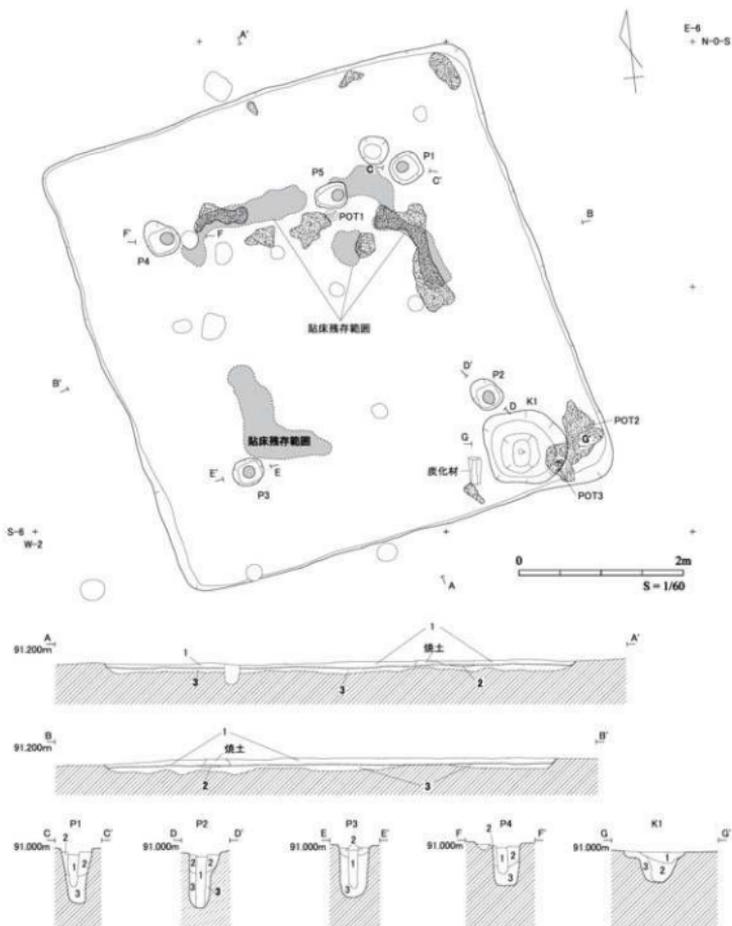
〔重複〕《SI701》→SA707

〔規模・形状〕東西5.3m、南北5.5mの正方形を呈する。

〔方向〕東辺：N-14°-W

〔壁面〕V層を壁とする。残存壁高は最も残存状況の良い西壁で床面から5cmである。

〔床面〕V層起源の黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、主柱穴の内側に暗褐色シルト主体の顕著な硬化層が形成されており、貼床と考えられる。



SI701 竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に、黄褐色ロームを少量、焼土ブロックを含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を少量含む 住居跡床
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴裏方埋土

SI701 竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土ブロック・粒、炭化物粒を多量に含む
3	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む

SI701 竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む 柱穴跡
2	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴裏方埋土
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱穴裏方埋土

SI701 竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む 柱穴跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームを少量含む 柱穴跡
3	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴裏方埋土

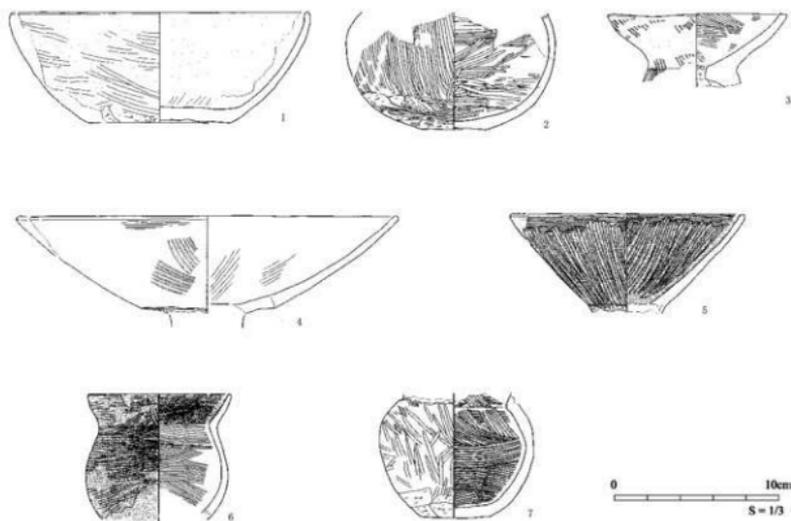
第 123 図 SI701 竪穴住居跡(1)

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に150～160cmの位置で柱穴4基を確認した(P1～4)。掘方の平面形は長軸38～40cm、短軸32～36cmの正方形ないしはそれを基調とする不整形形で、床面からの深さは66～77cmである。いずれも平面形が直径13～14cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の床面からの深さは38～65cmで、掘方底面に連するものと達しないものがある。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔炉〕住居中央やや北東寄りの位置で、被熱による赤色硬化範囲が確認された。平面形は長軸45cm、短軸38cmの不整形形を呈する。床面と同一面上にあり、炉跡と考えられる。

〔貯蔵穴〕住居南東コーナー部で土坑1基(K1)が確認された。平面形は長軸100cm、短軸90cmの不整形形を呈する。断面形は底面に段をもつ逆台形を呈し、深さ40cmである。床面から掘り込ま



No.	層位	種類	器種	分類	器面調性・特徴	径長 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	礎部面	土師器	杯	B	外: 9°E 9→92°E 北 内: 92°E 北 内外面摩滅	(18.2)	8.6	6.75	3/5	06052	36.2
2	埴1層	土師器	杯	A1?	外: (体) 92°E 9→92°E 北 内: (体) 92°E 9→92°E 北	—	3.8	(7.8)	2/3	06055	36.3
3	床	土師器	器台	A	外: (口) 92°E 北 内: (受) 92°E 北 (器) 92°E 北 外面摩滅	—	8.8	(4.65)	一部	06056	36.4
4	床 POT3	土師器	高杯	A1	外: (口) 92°E 北 (体) 92°E 北 内: (体) 92°E 北 杯部のみ 2/5	(23.0)	—	(5.0)	一部	06058	—
5	埴	土師器	高杯	A2	外: (口) 92°E 北 (体) 92°E 北→赤影 内: (口) 92°E 北 (体) 92°E 北→赤影	(14.2)	—	(6.0)	一部	06054	—
6	床	土師器	器	A	外: (口) 92°E 北→赤影 内: (口) 92°E 北→赤影 (体) 92°E 北→赤影	(8.6)	—	(7.6)	1/5	06057	36.5
7	礎部面	土師器	器	A	外: (体) 92°E 北 (体下) 92°E 北→92°E 北 内: (体) 92°E 北	—	4.1	6.6	一部	06053	36.6

第124図 SI701 竪穴住居跡出土遺物

SI701 竪穴住居跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄土質。炭化物粒を多量に含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄土質。炭化物粒を少量含む 柱穴底面
3	10YR4/4 黄	粘質シルト	黄土質。炭化物粒を多量に含む 柱穴底面土

SI701 竪穴住居跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄土質。炭化物粒を多量に含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄土質。炭化物粒を少量含む 柱穴底面土
3	10YR4/4 黄	粘質シルト	黄土質。炭化物粒を多量に含む 柱穴底面土

第125図 SI701 竪穴住居跡(2)

れており、貯蔵穴と考えられる。堆積土は3層に細分され、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔堆積土〕住居内堆積土は1層で、焼土と炭化物粒を多量に含む自然堆積土である。床面直上に焼土ブロックと炭化材が分布しており、焼失住居の可能性はある。

〔出土遺物〕床面より土師器器台(第124図3)・高杯(第124図4)・壺(第124図6)が、住居内堆積土より土師器鉢(第124図1)・高杯(第124図5)が、確認面より土師器環(第124図2)・壺(第124図7)が出土した。3は炉跡付近、4・6は貯蔵穴付近の床面で出土した。1・2は内外面にヘラミガキが施されている。3は受部外面にハケメ、内面にヘラナデ調整が施されている。4は坯部外面にハケメ、内面にヘラミガキ調整が施されている。5は坯部内外面にヘラミガキの後に赤彩が施されている。6は外面と内面の口縁部にヘラミガキの後に赤彩が施されている。7は外面にハケメとヘラケズリの後にヘラミガキが施されている。

B. 柱列跡

〔SA707 柱列跡〕(第126図)

〔位置・確認面〕N4 中区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕SI701 → 《SA707》

〔規模・形状〕東西3間(総長2.8m)以上の柱列跡で、調査区外の西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕4基確認した。掘方の平面形は長軸20～30cm、短軸20～25cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは37～47cmである。いずれも平面形が直径8～11cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕東から80・100・100cmである。

〔方向〕E-3°-S

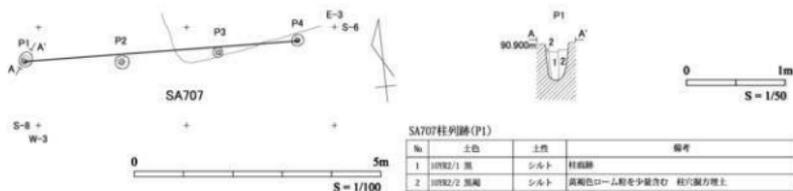
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

C. 落し穴状土坑

落し穴状土坑は2基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第6表に特徴を示す。

〔SK703 落し穴状土坑〕(第127図、図版19-4)

〔位置・確認面〕N4 中央区の丘陵落ち際に立地する。V層で確認した。



第126図 SA707 柱列跡

〔重複〕なし

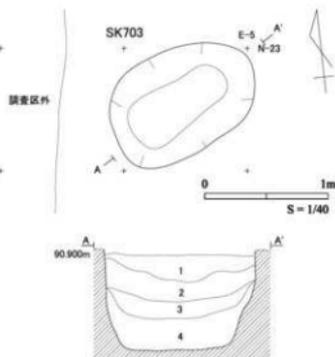
〔規模・形状〕平面形は長軸 130cm、短軸 85cm の楕円形を呈する。横断面形は逆台形を呈し、深さは 85cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔方向〕南西 - 北東方向

〔堆積土〕堆積土は 4 層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒褐色・暗褐色シルトと粘質シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



(8) N5区

遺跡の立地する丘陵東斜面の中腹部にあたり、N4 南区に東から入る小規模な沢が北西方向に屈曲している。このため、N5 区の大半は埋没した沢地上に位置する。北区、南区を設定して調査を行なった(第 129 図)。遺構は落とし穴状土坑 2 基、大溝跡 1 条、溝跡 1 条のほか、柱穴多数が確認されたが、建物などは確認できない。

A. 落とし穴状土坑

落とし穴状土坑は 2 基確認された。第 6 表に特徴を示す。

B. 溝跡

大溝跡 1 条、溝跡 1 条が確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 10 表に特徴を示す。

【SD354 大溝跡】(第 128 図、図版 19-5)

〔位置・確認面〕N5 南区の沢地上に立地する。Ⅲ層で確認した。

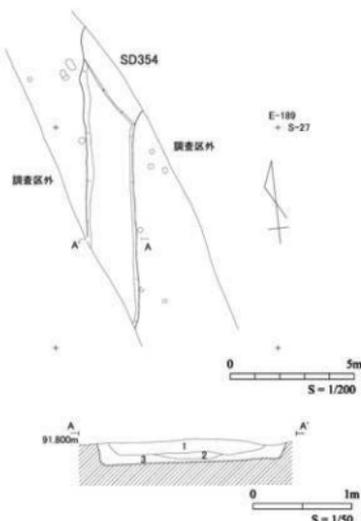
〔重複〕なし

〔規模・形状〕長さ約 8.7m 以上の大溝跡で、調査区外の南北へ延びている。上端幅 1.9 ~ 2.3m、下端幅 1.5 ~ 1.7m で断面形は逆台形を呈し、深さは 11 ~ 23cm である。位置関係と断面形状が

SK703 落とし穴状土坑

No	土色	土性	備考
1	101R3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	101R3/2 黒褐	シルト	
3	101R3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む

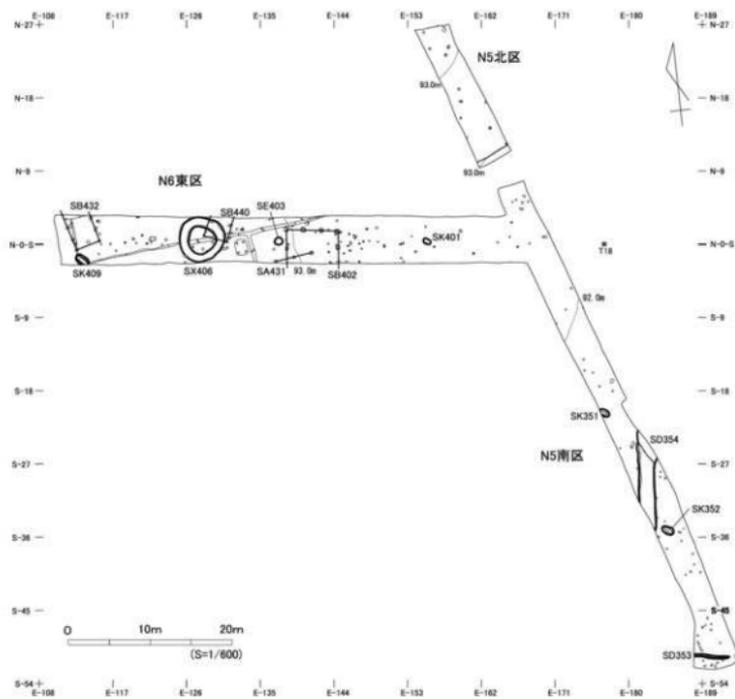
第 127 図 SK703 落とし穴状土坑



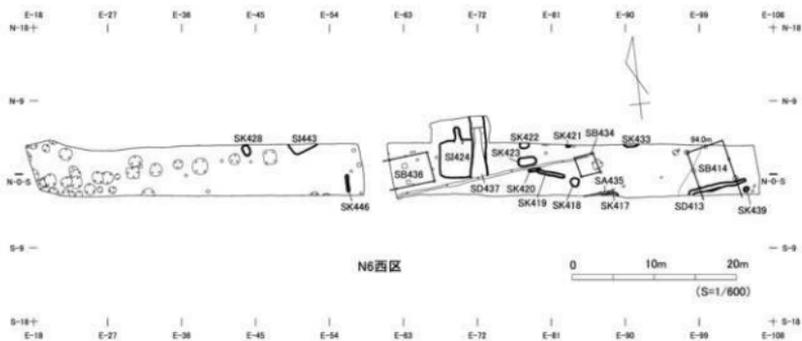
SD354 大溝跡

No	土色	土性	備考
1	101R2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	101R2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
3	101R2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む

第 128 図 SD354 大溝跡



第129图 N5北·南区、N6东区遺構配置図



第130图 N6西区遺構配置図

ら、N2中区で検出したSD206大溝跡と接続すると考えられ、延長は約87m以上に及ぶ。

〔方向〕南北方向

〔堆積土〕堆積土は3層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕堆積土より土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。土師器甕は非クロコ調整で、頸部外面に段を有し、胴部にハケメ調整が施されている。

(9) N6区

遺跡範囲の北部で、遺跡の立地する丘陵を東西に横断する。西区、東区を設定して調査を行なった(第129・130図)。西区はN8西区から続く六角丘陵頂部の平坦面にあたる。東区はN5区に南東から入る小規模な沢に向かって東に緩やかに傾斜している。遺構は西区の東半部から東区の西半部を中心に竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡6棟、柱列跡3条、井戸跡1基、落し穴状土坑2基、溝跡2条、円形周溝跡1基などが確認された。西区の西半部は削平が著しく遺構は確認されなかった。以下、主要な遺構について述べる。

A. 竪穴住居跡

〔SI424 竪穴住居跡〕(第131～135図、図版20-4・5、21-1～3)

〔位置・確認面〕N6西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕《SI424》→SD437→SX459

〔規模・形状〕東西約5.6m、南北約4.5mの隅丸長方形を呈する。

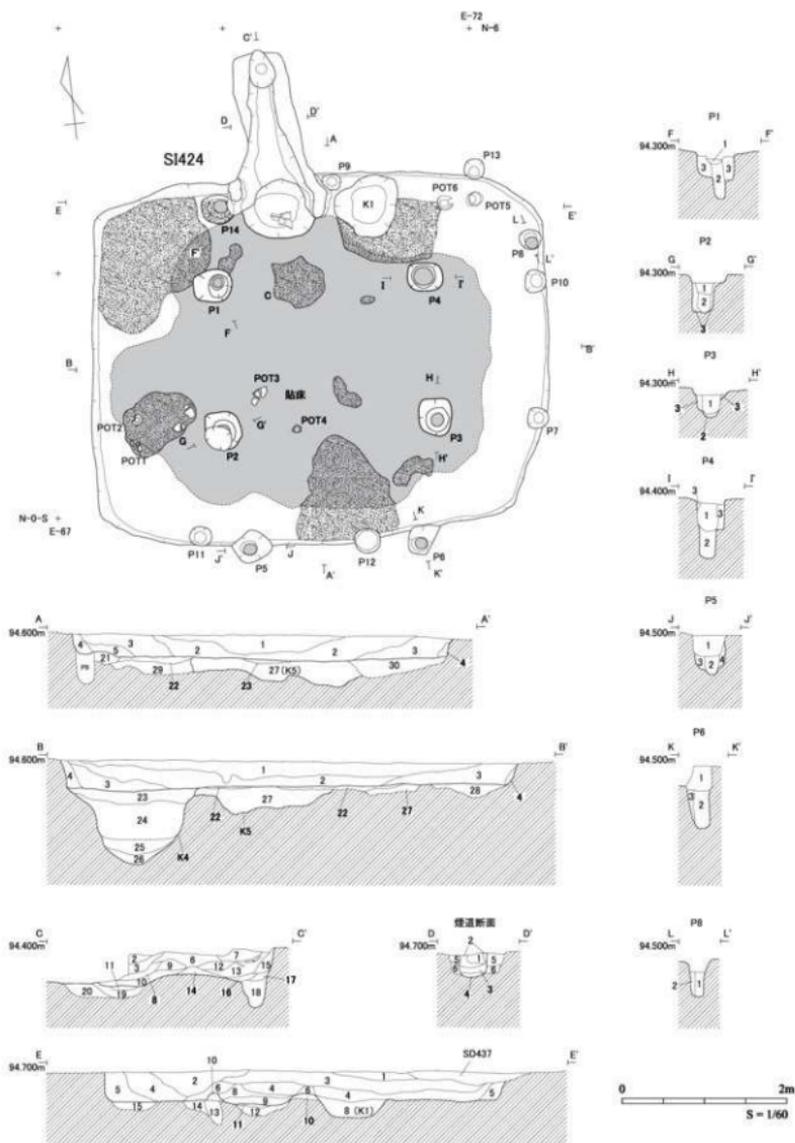
〔方向〕カマド中軸線：N-1°-W

〔壁面〕V層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い北壁で床面から36cmである。

〔床面〕V層起源の黄褐色ロームブロックと一部白色粘土ブロックと焼土、炭化物粒を含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、中央部の東西約4.0m、南北約3.5mの範囲に褐色シルトないしは黄褐色粘土を主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に110～160cmの位置で柱穴4基を確認した(P1～4)。掘方の平面形は長軸45～48cm、短軸35～45cmの隅丸方形ないしはそれを基調とする楕円形で、床面からの深さは40～74cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡が認められ、その底面で直径14～20cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の床面からの深さは40～74cmで、掘方底面に達するものとさらに25～35cmほど深く落ち込むものがある。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。

〔壁柱穴〕住居北壁のカマド両脇で2基、東壁で3基、南壁で2基の柱穴を確認した(P5～P11)。掘方の平面形は長軸25～50cm、短軸18～40cmの円形ないしは楕円形で、住居確認面からの深さは43～76cmである。このうちP5、P6、P8では柱材の抜き取り痕跡が認められ、その底面で直径10～18cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の床面からの深さは46～52cmで、掘方底面に達するものとさらに10cmほど深く落ち込むものがある。位置と形状、規模から壁柱



第131圖 SI424 竪穴住居跡(1)

穴と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕 検出されなかった。

〔カマド〕 住居北壁中央やや西寄りに設置されている。燃焼部と煙道、煙出しシロが残存する。燃焼部は長さ80cm、幅128cmで、焚口幅は側壁先端間で100cmである。燃焼部底面は幅90cm、奥行88cmで、床面より5cmほど皿状に窪んでいる。底面には被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は左側壁で長さ45cm、幅24cm、高さ10cm、右側壁で長さ53cm、幅25cm、高さ17cmが残存する。黄褐色ロームと白色粘土で構築されており、内側は被熱により赤色化している。奥壁は住居北壁にほぼ一致し、奥壁から北側へ延びる煙道は長さ160cmで、幅30～80cm、深さ

S1424竪穴住居跡

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物を少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム土、焼土粒、炭化物を含む
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物を多量に含む
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒、炭化物を多量に含む カマド跡
6	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を多量に含む
7	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物、炭を多量に含む、煙道入り部底面土
8	10YR4/2 に近い赤褐	シルト	黄褐色ローム土、焼土粒、炭化物を多量に含む カマド跡
9	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ローム土、焼土粒、炭化物を含む
10	10Y4/4 に近い赤褐	シルト	焼土粒を多量に含む カマド機能時の堆積
11	10YR4/6 赤褐	シルト	上面に硬面層 焼面
12	10YR3/2 暗褐	シルト	シルト
13	10YR2/2 黒褐	シルト	炭化物を多量に、焼土粒を含む
14	7.5YR4/4 褐	シルト	焼土粒、炭化物を含む カマド機能時の堆積
15	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ローム土、焼土粒、炭化物を多量に含む
16	10YR4/4 褐	シルト	炭化物を少量含む
17	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物を含む
18	10YR3/2 暗褐	シルト	白色粘土ブロック、炭化物を少量含む 底面が削けている
19	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物を含む カマド跡
20	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む カマド跡
21	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒、炭化物を多量に含む カマド跡
22	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴跡
23	10YR5/6 黄褐	粘土	黄褐色ロームブロックを多量に含む 焼褐色シルトを含む 柱穴跡
24	10YR4/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 人為的埋土
25	10YR4/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 人為的埋土
26	10YR3/2 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物を含む 土機能時の堆積
27	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居跡
28	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 住居跡
29	10YR4/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒、炭化物を多量に含む 住居跡
30	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物を多量に含む 住居跡

S1424竪穴住居跡カマド付近東西断面

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	赤褐色面層
2	10YR3/4 暗褐	シルト	シルト
3	10YR2/2 黒褐	シルト	赤褐色面層
4	10YR2/2 黒褐	シルト	赤褐色面層
5	10YR2/2 黒褐	シルト	赤褐色面層
6	10YR3/2 暗褐	シルト	赤褐色面層 黄褐色ローム土
7	10YR2/2 に近い赤褐	シルト	カマド北側面層 黄褐色ローム土
8	10YR4/6 赤褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物、炭を多量に含む、黄褐色(灰)堆積土
9	10YR4/4 に近い赤褐	シルト	カマド北側面層(1層) カマド機能時の堆積
10	10YR4/6 赤褐	シルト	黄褐色ローム土 黄褐色ローム土 カマド跡
11	10YR4/6 赤褐	シルト	カマド北側面層(1層) 焼面
12	10YR3/2 暗褐	シルト	カマド北側面層(2層) カマド跡

No	土色	土性	備考
13	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴跡
14	10YR4/2 に近い赤褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロックを多量に含む 柱穴跡
15	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

S1424竪穴住居跡煙道断面

No	土色	土性	備考
1	2.5YR2/4 に近い赤褐	粘土	黄褐色ロームブロックを多量に含む 下面で削けている
2	10YR3/4 暗褐	シルト	カマド北側面層 煙道入り部底面土
3	10YR3/2 暗褐	シルト	カマド北側面層
4	10YR4/4 褐	シルト	カマド北側面層(1層) カマド機能時の堆積
5	10YR5/6 黄褐	粘土	黄褐色ローム土を多量に含む 黄褐色シルトを含む 煙道跡
6	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む 煙道跡

S1424竪穴住居跡(P1)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物を含む 柱穴跡
2	10YR3/2 暗褐	シルト	柱跡
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、黄色シルトブロックを含む 柱穴跡

S1424竪穴住居跡(P2)

No	土色	土性	備考
1	10YR4/6 赤褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴跡
2	10YR4/6 赤褐	シルト	炭化物を含む 柱跡
3	10YR4/6 赤褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴跡

S1424竪穴住居跡(P3)

No	土色	土性	備考
1	10YR4/6 赤褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴跡
2	10YR3/6 黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱跡
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴跡

S1424竪穴住居跡(P4)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物を含む 柱跡
2	10YR4/4 褐	シルト	柱跡
3	10YR4/6 赤褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴跡

S1424竪穴住居跡(P5)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱跡
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱跡
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物を含む 柱穴跡
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴跡

S1424竪穴住居跡(P6)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱跡
2	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ローム土を少量含む 柱跡
3	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴跡

S1424竪穴住居跡(P8)

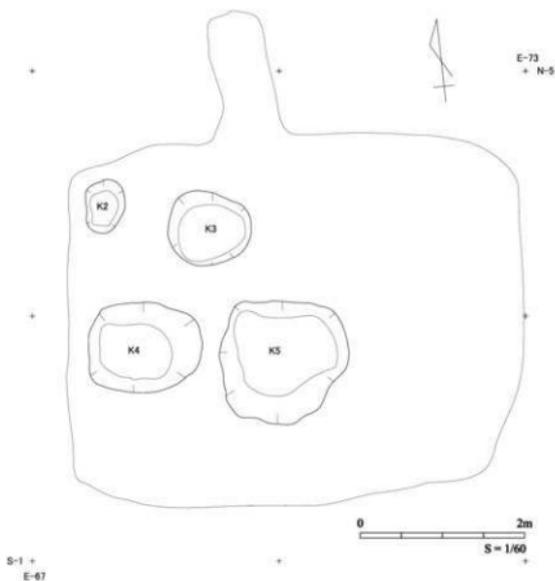
No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 暗褐	シルト	黄褐色ローム土を少量含む 柱跡
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム土を多量に含む 柱穴跡

第132図 S1424 竪穴住居跡(2)

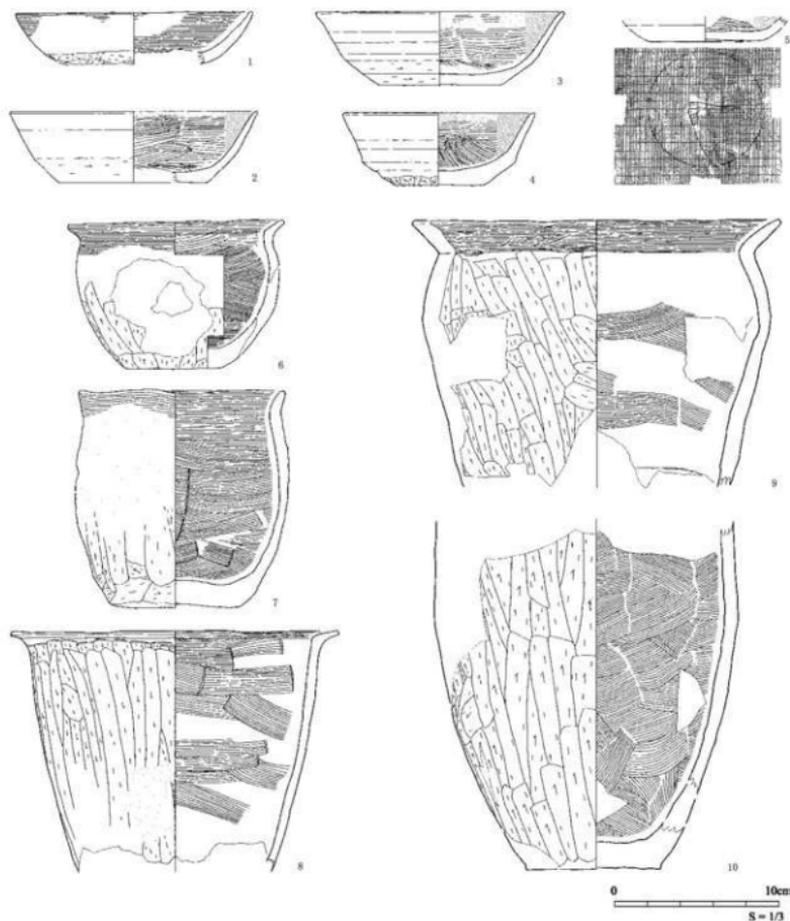
25～40cmが残存する。煙道の先端部には長軸46cm、短軸26cm、煙道底面からの深さ33cmの煙出しピットが確認された。煙道は幅65～90cmの掘方を持ち、カマド側壁と一連の構築土によって煙道側壁が構築されている。また、煙道内堆積土にも下面が被熱により赤色化した同様の構築土のブロックがみられ、煙道天井部が落ち込んだものと考えられる。煙道底面は奥壁との接続部から緩やかに立ち上がり、中ほどから先は煙道ピットに向かって緩やかに傾斜する。カマド奥壁と煙道側壁および煙出しピット南壁の一部は被熱により赤色化している。また、燃焼部底面から煙道底面の中ほどにかけては焼土を多量に含むにぶい赤褐色シルトが5～12cmの厚さで堆積しており、カマド機能時の堆積土と考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側で土坑1基(K1)が確認された。直径75cmの不整形円形を呈し、深さは20cmで底面は皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は1層で、自然堆積土と考えられる。

〔床下土坑〕住居掘方底面で土坑4基(K2、K3、K4、K5)を確認した。K2は平面形が長軸68cm、短軸48cmの楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは15cmである。K3は平面形が直径50cmの不整形円形を呈する。断面形は不整なU字状を呈し、深さ90cmである。K4は平面形が長軸140cm、短軸110cmの楕円形を呈する。断面形は不整なU字状を呈し、深さ90cmである。K5は平面形が長軸160cm、短軸150cmの不整形を呈する。断面形は逆台形状を呈し、深さは40cmである。埋土はいずれも住居掘方埋土と一連の人為的埋土である。なお、K4の底面には焼土と炭化



第133図 SI424 竪穴住居跡(3)



No.	層位	種類	器種	分類	器面図勢・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口徑	底径	器高			
1	埴	土器器	杯	I	外:(口) 32㍉ (体) 27㍉ 内:(口) 32㍉ 外: 2㍉㍉ → 凹輪㍉㍉ (底面) 切り離し不明 → 凹輪㍉㍉ 内: ㍉㍉㍉ + 黒色処理 (底面并柵状) 内面口唇部磨滅	(14.2)	—	(4.15)	1/5	06020	36.7
2	床	㍉土器器	杯	C	外: 2㍉㍉ → 凹輪㍉㍉ (底面) 切り離し不明 → 凹輪㍉㍉ 内: ㍉㍉㍉ + 黒色処理 (底面并柵状) 内面口唇部磨滅	(14.5)	(9.0)	4.35	1/3	06019	36.8
3	埴 3層 POT2	㍉土器器	杯	C	外: 2㍉㍉ → 凹輪㍉㍉ (底面) 切り離し不明 → 凹輪㍉㍉ 内: ㍉㍉㍉ + 黒色処理 (底面并柵状) 内面口唇部磨滅	(14.2)	(7.4)	4.5	3/4	06018	36.9
4	埴 1層	㍉土器器	杯	E	外: 2㍉㍉ → 手持ち㍉㍉ (底面) 切り離し不明 → 手持ち㍉㍉ 内: ㍉㍉㍉ + 黒色処理 (底面并柵状)	(11.6)	(5.4)	4.45	1/5	06017	—
5	埴 2層	㍉土器器	杯	D	外: 2㍉㍉ (底面) 静止和切 → 手持ち㍉㍉ 内: ㍉㍉㍉ + 黒色処理 外底面に磨滅「口」	—	(7.0)	(1.5)	—	06021	36.10
6	床 POT5	土器器	甕	A.2	外:(口-瓶) 32㍉ (胴) ㍉㍉ 内:(口) 32㍉ (胴) ㍉㍉ 胴内面から穿孔	13.1	5.8	5.0	完形	06009	37.1
7	包耳籠5層土	土器器	甕	B.1	外:(口) 32㍉ (胴-底) ㍉㍉ 内:(口) 32㍉ (胴) ㍉㍉	(12.4)	7.9	13.3	3/4	06022	37.2
8	埴 1内埴	土器器	甕	E	外:(口) 32㍉ → (体) 27㍉ 内:(口) 32㍉ (体) ㍉㍉	(10.8)	—	(14.7)	—	06038	—
9	埴 3層	土器器	甕	D	外:(口) 32㍉ (体) 27㍉ 内:(口) 32㍉ (体) ㍉㍉	(22.2)	—	(16.2)	—	06037	—
10	床 POT3	土器器	甕	D	外:(胴-底) 27㍉ 内:(胴) ㍉㍉ 胎土が白色細粒を呈する	—	7.6	(21.2)	—	06024	37.3

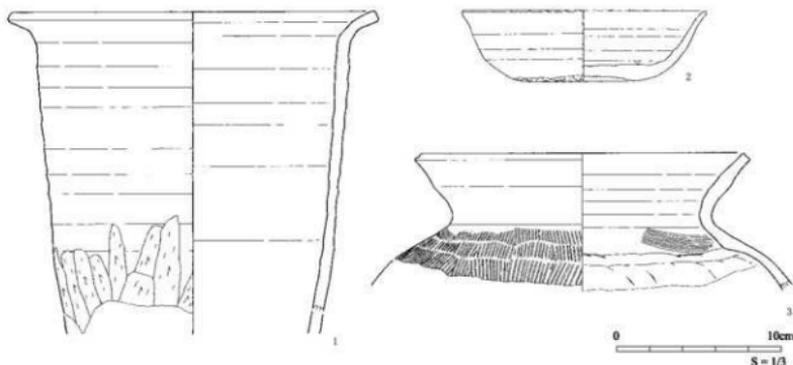
第 134 図 SI424 竪穴住居跡出土遺物 (1)

物粒を含む暗褐色シルトが15cmの厚さで堆積しており、住居床面の構築以前に機能していた可能性がある。

〔堆積土〕住居内堆積土は16層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面よりロクロ調整の土師器環(第134図2)・非ロクロ調整の土師器甕(第134図6・10)・須恵器環(第135図2)が、住居掘方埋土よりロクロ調整の土師器甕(第135図1)・非ロクロ調整の土師器甕(第134図7)・砥石(第187図2)が、カマド内堆積土より非ロクロ調整の土師器甕(第134図8)が、住居内堆積土よりロクロ調整の土師器環(第134図3・4・5)・非ロクロ調整の土師器環(第134図1)・甕(第134図9)・須恵器甕(第135図3)・瓦片(第185図1)・刀子(第186図3)が、確認面より鉄釘(第186図6)が出土した。須恵器環(第135図2)と土師器甕(第134図6)は住居北東コーナー部、ロクロ土師器環(第134図2)と土師器甕(第134図10)は住居中央やや南寄りの床面で出土した。第134図2は外底面に回転ヘラケズリ調整が施され、内面に井桁状のミガキ調整の後に黒色処理が施されている。第134図6は胴部外面にヘラケズリ調整が、内面にナデ調整が施され、胴部内面から穿孔されている。第134図10は外面胴部にケズリ調整が、内面にヘラナデ調整が施されている。

このほか、床面・住居掘方埋土・主柱穴掘方埋土・柱材の抜き取り痕跡・住居内堆積土よりロクロ調整の土師器環・甕、非ロクロ調整の土師器環・甕・壺、須恵器環・蓋・甕の破片が出土した。ロクロ調整の土師器環は外底面に回転糸切り痕が見られ、内面に井桁状のミガキ調整の後に黒色処理が施されているものと、外面底部に手持ちヘラケズリが施されているものがある。非ロクロ調整の土師器環は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面の頸部に段を有し、ハケメ調整が施されているものと、段をもたずにケズリ調整が施されているものがある。壺は外面にミガキ



No.	層位	種類	形種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	住居掘方埋土	土師器甕	甕	C	外：0707F → 0727F 内：0707F	22.3	—	(19.0)	一部	06040	—
2	床 POT6	須恵器環	環	B	外：0707F (底面) 回転糸切り → 手持ちヘラケズリ 内：0707F	14.4	6.6	4.3	4/5	06003	37-4
3	埋3層	須恵器甕	甕	B	外：0707F → 平行3線 内：0707F → 7F → 無文付	20.2	—	(8.3)	一部	06039	37-5

第135図 SI424 竪穴住居跡出土遺物(2)

調整の後に赤彩が施され、内面に指の圧痕が見られる。須恵器坏は底部外面に回転糸切り痕が見られるものがある。襖は外面に平行タタキ目が、内面に無文押さえ具痕がみられる。

【SI443 竪穴住居跡】(第136図、図版21-4)

〔位置・確認面〕N6西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明だが、東西2.5m以上、南北1.5m以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕

〔壁面〕V層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い南壁で床面から24cmである。

〔床面〕V層起源の黄褐色ロームブロックを多量に含む掘方埋土を床としており、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴〕不明

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅18～20cm、下端幅8～15cmで断面形がU字形を呈し、床面からの深さ12cmの周溝が南・西壁をめぐる、幅5～10cm、深さ10cmの壁材痕跡が断続的に認められる。周溝の堆積土は住居掘方埋土に類似し、黄褐色ロームブロックを多く含む人為的埋土である。

〔カマド・貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

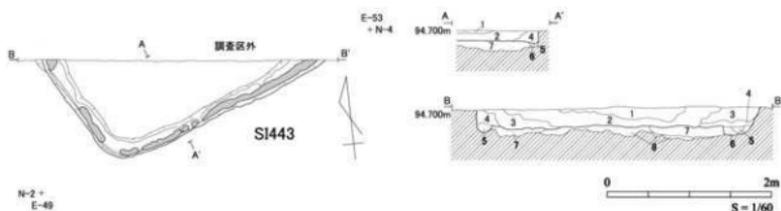
〔出土遺物〕住居内堆積土より土師器襖の破片が出土した。非ロクロ調整で、外面にハケメ調整が施されている。

B. 掘立柱建物跡

【SB402 掘立柱建物跡】(第137図、図版21-5)

〔位置・確認面〕N6東区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕《SB402》— SA431



SI443竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR6/4 黒	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む
2	10YR2/3 黒	シルト	黄褐色ローム粒を含む
3	10YR3/3 暗	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む
4	10YR2/2 黒	シルト	黄褐色ローム粒を多量に、炭化物粒を少量含む

No.	土色	土性	備考
5	10YR3/3 暗	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む 住居壁材面跡
6	10YR3/4 暗	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 住居壁材掘方埋土
7	10YR3/3 暗	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、炭化物粒を少量含む 住居掘方埋土
8	10YR5/8 黄	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む 住居掘方埋土

第136図 SI443 竪穴住居跡

〔規模・形状〕東西3間(総長6.3m)、南北2間(総長4.0m)以上の建物跡で、調査区外の南側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕8基確認した。掘方の平面形は長軸45～59cm、短軸37～50cmの隅丸方形を呈し、深さは20～35cmである。7基で柱材の抜き取り痕跡を確認し、そのうち5基で抜き取り痕跡の底面に平面形が直径15～18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。南西のP6は大部分が調査区外の南側へ延びるため詳細は不明である。

〔柱間寸法〕北側柱列で西から200・220・210cm、東側柱列で北から210・190cmである。

〔方向〕北側柱列：E-8°-S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

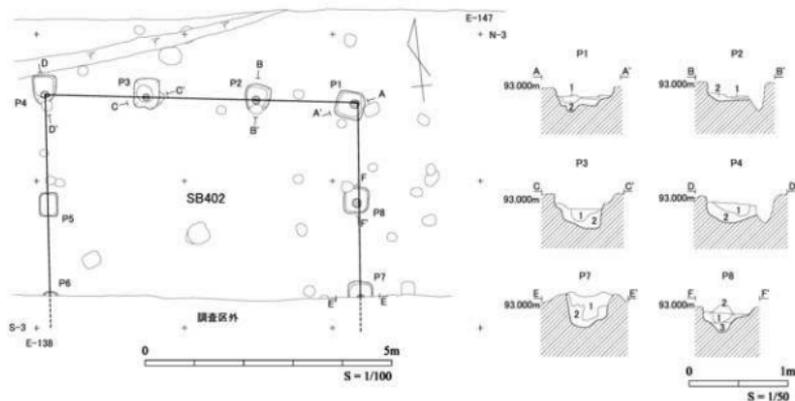
〔SB414 掘立柱建物跡〕(第138図、図版21-6)

〔位置・確認面〕N6西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕《SB414》→SD413

〔規模・形状〕南北3間(桁行総長4.7m)以上、東西2間(梁行総長4.6m)の南北棟建物跡で、調査区外の南側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕6基確認した。掘方の平面形は長軸45～65cm、短軸28～60cmの円形ないしは楕円形を



SB402掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P7)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P8)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土

第137図 SB402掘立柱建物跡

呈し、深さは5～26cmである。1基で平面形が直径16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは20cmで、掘方底面に達する。また、3基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡は掘方底面に達するものとさらに深く入るものがあり、いずれも底面に柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で北から240・230cm程度、北側柱列で西から230・(230)cmである。

〔方向〕西側柱列：N・12° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB432 掘立柱建物跡】(第139図、図版22-1)

〔位置・確認面〕N6東区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

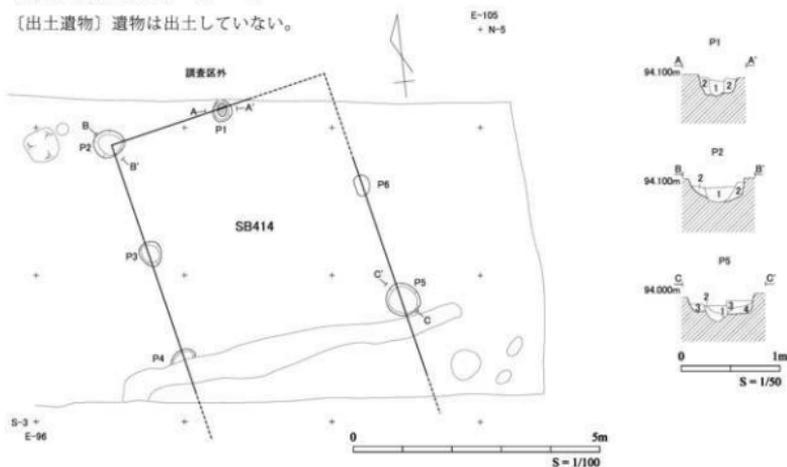
〔規模・形状〕南北2間(桁行総長3.1m)以上、東西1間(梁行総長3.0m)の南北棟建物跡で、調査区外の北西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕6基確認した。掘方の平面形は長軸32～40cm、短軸25～28cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは10～15cmである。5基で平面形が10～12cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列で南から140・170cm、南側柱列で300cmである。

〔方向〕東側柱列：N・16° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB414掘立柱建物跡(P1)

No	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘を多量に含む 柱穴掘方埋土

SB414掘立柱建物跡(P2)

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘を多量に含む 柱穴掘方埋土

SB414掘立柱建物跡(P5)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粘を少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR4/1 黒灰	シルト	黄褐色ロームブロック・粘を多量に含む 柱抜き取り痕跡
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴掘方埋土
4	10YR5/3 に近い黄褐	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを少量含む 柱穴掘方埋土

第138図 SB414 掘立柱建物跡

【SB434 掘立柱建物跡】(第 140 図)

〔位置・確認面〕 N6 西区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕 なし

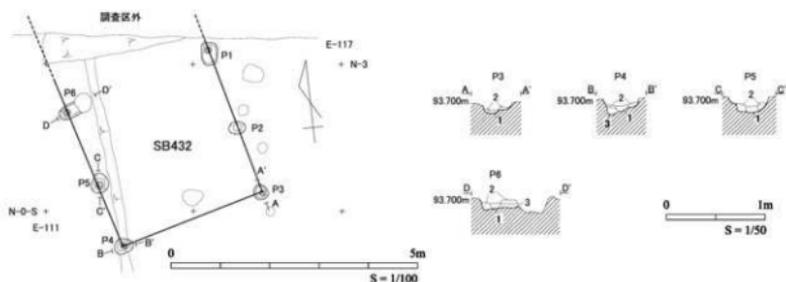
〔規模・形状〕 東西1間(総長2.35m)、南北1間(総長2.45m)以上の建物跡で、調査区外の北側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕 4基確認した。掘方の平面形は長軸25～35cm、短軸23～30cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは12～20cmである。3基で平面形が直径8～10cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは14～16cmで、いずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕 南側柱列で235cm、西側柱列で245cmである。

〔方向〕 西側柱列：N-15°-W

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



SB432掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴層(埋土)

SB432掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴層(埋土)
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴層(埋土)

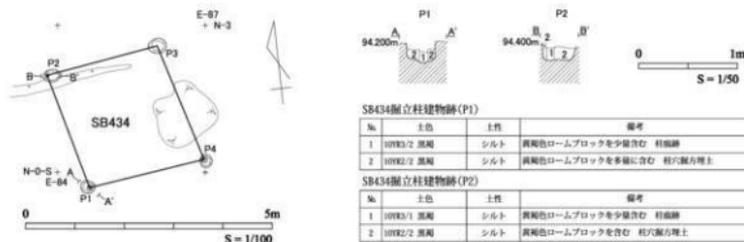
SB432掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を少量含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴層(埋土)

SB432掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を少量含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を多量に含む 柱穴層(埋土)
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴層(埋土)

第 139 図 SB432 掘立柱建物跡



第 140 図 SB434 掘立柱建物跡

SB434掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱穴層(埋土)

SB434掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 柱穴層(埋土)

【SB436 掘立柱建物跡】(第142図、図版21-7)

〔位置・確認面〕N6 西区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西2間(桁行総長4.7m)以上、南北1間(梁行総長3.7m)の東西棟建物跡で、調査区外の西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕6基確認した。掘方の平面形は長軸20~26cm、短軸18~22cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは24~38cmである。いずれも平面形が直径8~15cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列で東から260-210cm、東側柱列で370cmである。

〔方向〕南側柱列：E-6°-N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB440 掘立柱建物跡】(第141図)

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。IV層で確認した。

〔重複〕《SB440》→SX406

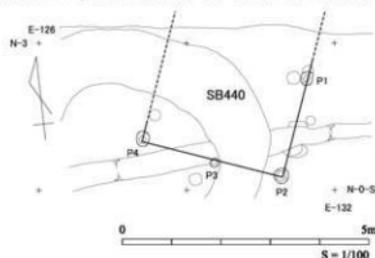
〔規模・形状〕東西2間(総長3.0m)、南北1間(総長2.1m)以上の建物跡で、調査区外の北東側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕4基確認した。掘方の平面形は長軸20~32cm、短軸15~30cmの楕円形を呈し、深さは10~33cmである。いずれも柱痕跡は確認できない。

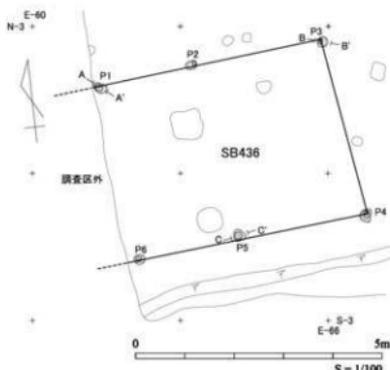
〔柱間寸法〕南側柱列で西から160-140cm、東側柱列で210cmである。

〔方向〕東側柱列：N-20°-E

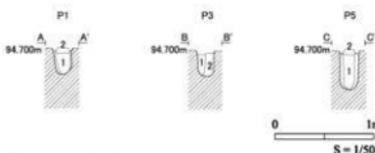
〔出土遺物〕遺物は出土していない。



第141図 SB440 掘立柱建物跡



第142図 SB436 掘立柱建物跡



SB436掘立柱建物跡(P1)

№	土色	土性	備考
1	10192/3 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む 柱痕跡
2	10194/3 灰白-黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む 柱穴層方上

SB436掘立柱建物跡(P3)

№	土色	土性	備考
1	10192/3 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む 柱痕跡
2	10194/3 灰白-黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む 柱穴層方上

SB436掘立柱建物跡(P5)

№	土色	土性	備考
1	10192/3 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む 柱痕跡
2	10194/3 灰白-黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む 柱穴層方上

C. 柱列跡

【SA431 柱列跡】(第 143 図、図版 22- 2)

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕(SA431) — SB402

〔規模・形状〕東西 2 間 (4.5m) 以上の柱列跡で、調査区外の南西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方は平面形が長軸 35 ~ 40cm、短軸 30 ~ 40cm の隅丸方形を呈し、深さは 33 ~ 40cm である。いずれも平面形が直径 13 ~ 16cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の深さは 22 ~ 32cm で、掘方底面に達するものと達しないものがある。

〔柱間寸法〕東から 220 - 230cm である。

〔方向〕E - 8° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SA435 柱列跡】(第 144 図)

〔位置・確認面〕N6 西区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 3.4m) 以上の柱列跡で、調査区外の南西へ延びる可能性がある。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方は平面形が長軸 35cm、短軸 30cm ほどの円形ないしは楕円形を呈し、深さは 33 ~ 46cm である。2 基で直径 12cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の深さは 33 ~ 46cm で、いずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕東から 160 - (180)cm

〔方向〕E - 6° - N

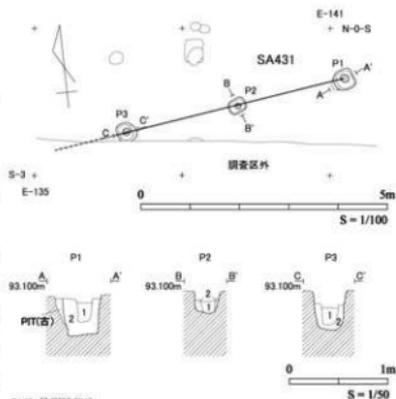
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

D. 井戸跡

【SE403 井戸跡】(第 145 図、図版 22- 3)

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし



SA431 柱列跡 (P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 柱穴底面埋土

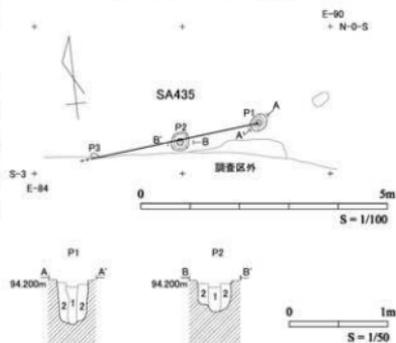
SA431 柱列跡 (P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む 柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 柱穴底面埋土

SA431 柱列跡 (P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱穴底面埋土

第 143 図 SA431 柱列跡



SA435 柱列跡 (P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 柱穴底面埋土

SA435 柱列跡 (P2)

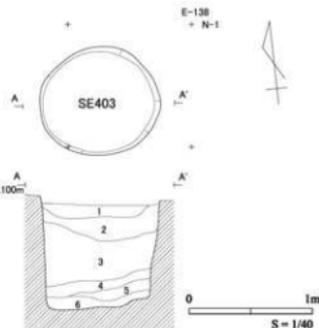
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量含む 柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む 柱穴底面埋土

第 144 図 SA435 柱列跡

〔規模・形状〕 平面形は長軸 93cm、短軸 87cm の円形を基調とし、深さ 93cm の円筒形を呈する。底面は西側に傾斜している。

〔堆積土〕 6層に細分される。1～4層は黄褐色ロームブロックを多く含む黒色・黒褐色シルトと黄褐色粘質シルト、5層はにぶい黄褐色粘質シルト、6層は黄褐色ローム粒を若干含む黒褐色シルトである。1～4層は人為的埋土、5層は壁際の自然崩落土、6層は機能時の堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土より土師器環、須恵器裏の破片が出土した。土師器環はロクロ調整で内面に黒色処理が施されている。須恵器裏は外面に平行タタキ目が見られる。



SE403井戸跡

No.	土層	土性	備考
1	10R2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 人為的埋土
2	10R2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む 人為的埋土
3	10R2/4 にぶい黄褐色	粘質シルト	黄褐色ローム土を主体とする 黄褐色シルトブロックを少量含む 人為的埋土
4	10R3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
5	10R6/4 にぶい黄褐色	粘質シルト	
6	10R2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 機能時の堆積

E. 落し穴状土坑

落し穴状土坑は 3 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 6 表に特徴を示す。

第 145 図 SE403 井戸跡

〔SK409 落し穴状土坑〕 (第 146 図、図版 22- 4)

〔位置・確認面〕 N6 東区の丘陵平坦面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 南西端部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 172cm 以上、短軸 106cm の楕円形を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 137cm である。

〔底面〕 中央部がやや高く、両端部に向かって緩やかに傾斜する。

〔方向〕 南西 - 北東方向

〔堆積土〕 堆積土は 7 層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒色・黒褐色シルトと、黒褐色シルトをブロック状に含むにぶい黄褐色の粘質シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔SK419 落し穴状土坑〕 (第 146 図、図版 22- 5)

〔位置・確認面〕 N6 西区の丘陵平坦面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 330cm、短軸 43cm の溝状を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 85cm である。

〔底面〕 ほぼ平坦である。

〔方向〕 東西方向

〔堆積土〕 堆積土は 5 層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む褐色・黒褐色シルト・粘質シルトと、にぶい黄褐色の粘質シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

F. 土坑

土坑は8基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第7・8表に特徴を示す。

【SK418 土坑】(第147図、図版22-6)

〔位置・確認面〕N6西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は直径約60cmの不整形円形を呈する。断面形は箱形を呈し、深さは20cmである。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は1層で、黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色シルトである。人為的埋土の可能性はある。

〔出土遺物〕堆積土より土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。土師器甕は非ロクロ調整で外面にヘラケズリ調整が施されている。須恵器甕は外面に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

【SK423 土坑】(第148図、図版22-7)

〔位置・確認面〕N6西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸223cm、短軸105cmの楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは15cmである。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は1層で、黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色シルトである。人為的埋土の可能性はある。

〔出土遺物〕堆積土よりロクロ調整の土師器甕、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。須恵器甕は外面に平行タタキ目が、内面に無文押さえ具痕がみられる。

G. 溝跡

溝跡は2条確認された。第10表に特徴を示す。

H. 円形周溝跡

【SX406 円形周溝跡】(第149図、図版23-1・2)

〔位置・確認面〕N6東区の丘陵平坦面に立地する。IV層で確認した。

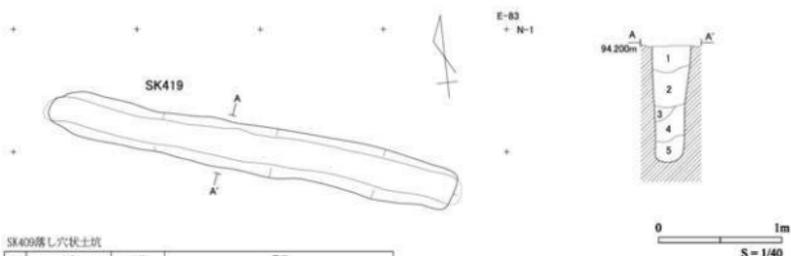
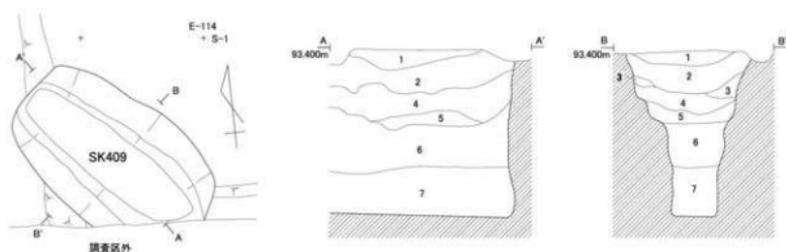
〔重複〕SB440 → 《SX406》

〔規模・形状〕平面形が外周で直径約5.5m、内周で直径約3.4mの円形を呈する周溝跡である。溝の上端幅は85～120cm、下端幅は75～100cmで、断面形は深さ30～45cmの箱形を呈する。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は2層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒色・黒褐色シルトである。また、底面の一部に黄褐色ロームブロックを多量に含む暗褐色シルトからなる厚さ10cm前後の硬化層が形成されており、掘削直後に底面を平坦に整えた掘方埋土と考えられる。

〔その他〕周溝で区画された内部ではこれに伴う建物跡等は確認されない。また、内部に盛土があっ



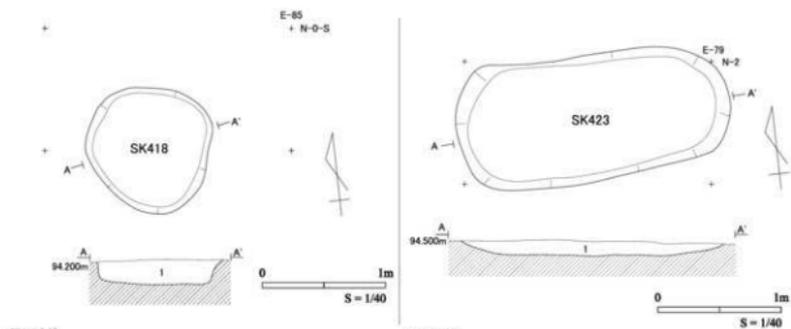
SK409落し穴状土坑

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
3	10YR6/4 に近い黄橙	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを含む
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
5	10YR6/4 に近い黄橙	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを含む
6	10YR3/2 黒褐	シルト	ほぼ均質
7	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

SK419落し穴状土坑

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR3/4 に近い黄褐	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを少量含む
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
4	10YR6/4 に近い黄橙	粘質シルト	黄褐色ローム土主体の塊状土
5	10YR4/1 黄灰	シルト	黄褐色ロームブロックを含む

第 146 図 SK409・SK419 落し穴状土坑



SK418土坑

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

SK423土坑

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 147 図 SK418 土坑

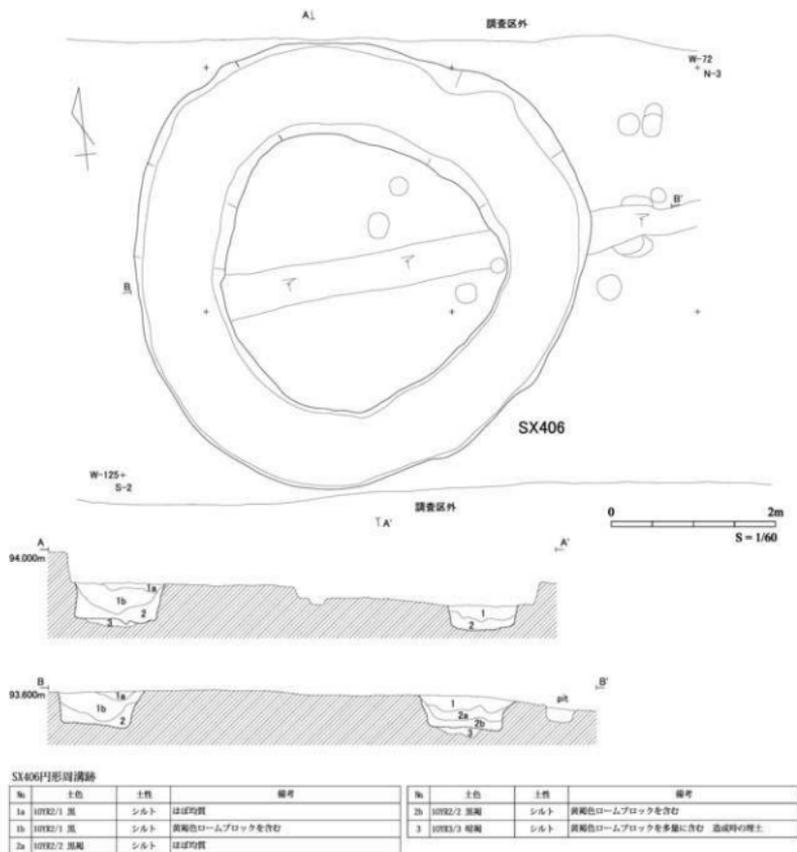
第 148 図 SK423 土坑

たことを示すような堆積状況は確認されない。

〔出土遺物〕 堆積土より土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。土師器甕は非ロクロ調整で外面の頸部に段を有し、胴部にハケメ調整が施されているものと、内外面に横ナデ調整が施されているものがある。

(10) N7区

遺跡の立地する丘陵の北東部で、南東向きに緩傾斜地に位置する(第10図)。試掘調査の結果、後世の削平により黄褐色ローム層が露出していることが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。



第149図 SX406円形周溝跡

(11) N8区

遺跡範囲の北縁部で、遺跡の立地する丘陵を東西に横断する。西区、東区を設定して調査を行なった(第150図)。西区はN6西区に続く六角丘陵頂部の平坦面にあたる。東区はN5区に南東から入る沢の沢頭付近にあたり、東に緩やかに傾斜している。遺構は西区の東半部を中心に竪穴住居跡3軒、落し穴状土坑4基、土坑1基、大溝跡1条などが確認された。西区の西半部は削平が著しく、遺構は確認されなかった。以下、主要な遺構について述べる。

A. 竪穴住居跡

【SI751 竪穴住居跡】(第151図、図版24-1)

〔位置・確認面〕N8西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

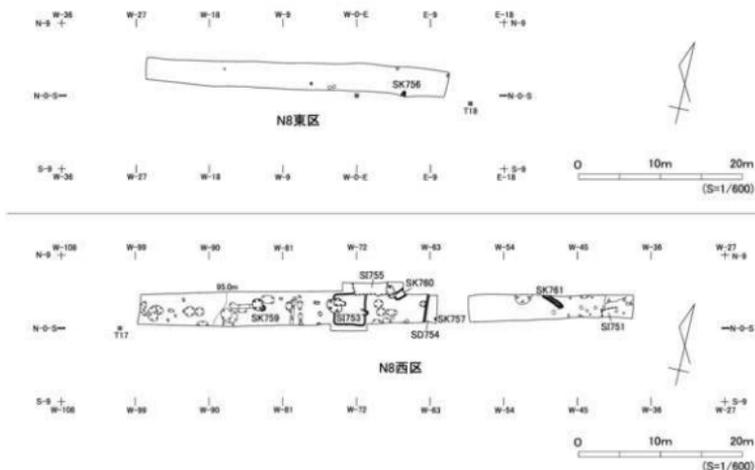
〔重複〕なし

〔規模・形状〕残存状況が良好でないこと、住居南半と東半は調査区外にのびていることから全体の形状は不明であるが、東西約3.8m以上、南北約1.3m以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N-20°-W

〔壁面・床面〕残存しない。

〔主柱穴〕住居北西コーナー付近で柱穴1基を検出した(P755)。平面形は長軸45cm、短軸35cmの楕円形を呈し、床面からの深さは35cmである。柱材の抜き取り痕跡が確認され、その底面に平面形が直径14cmの円形で深さ10cmの柱痕跡が確認された。位置と形状、規模から主柱穴の一つと考えられる。



第150図 N8東・西区遺構配置図

〔周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居西壁に設置されており、調査区南壁断面にカマド燃焼部の堆積土と崩落土が認められる。遺構検出時には確認できなかったため平面形は不明であるが、調査区外へ延びている。

〔貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI753 竪穴住居跡】(第152・153図、図版24・2・3)

〔位置・確認面〕N8西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕SI755 → 《SI753》

〔規模・形状〕東西約3.7m、南北4.0mの方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E-14°-S

〔壁面〕V層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で床面から30cmである。

〔床面〕V層起源の黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、中央部の南北約2.5m、東西約2.0mの範囲に暗褐色シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔支柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅20cm、下端幅15cm、床面からの深さ10cmで断面形がU字状ないし逆台形を呈する周溝がカマド、貯蔵穴のある東壁の一部をのぞいて全周し、部分的に幅10cm、深さ10cm程度の壁材痕跡が認められる。周溝の堆積土は住居掘方埋土に類似し、黄褐色ロームブロックを多く含む人為的埋土である。

〔カマド〕住居東壁中央やや南寄りに設置されており、燃焼部のみが残存する。燃焼部は長さ



SI751竪穴住居跡

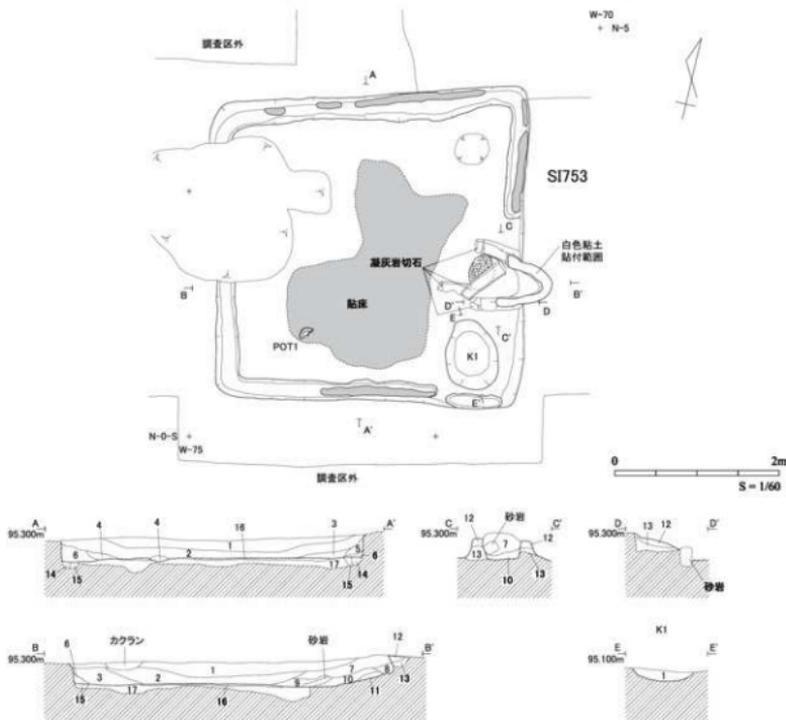
No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロックを多量に、炭化物粒を含む。古ワダ崩壊土
2	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を多量に含む
3	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、炭化物を含む住居掘方埋土

SI751竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 深褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱置き切り面跡
2	10YR4/7 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 柱痕跡
3	10YR3/2 深褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 柱穴掘方埋土

第151図 SI751 竪穴住居跡

102cm、幅86cmで、焚口幅は58cmである。燃焼炉底面は幅58cm、奥行88cmで、床面より5cmほど皿状に窪んでいる。底面は黒色を呈し、硬化している。側壁は左側壁で長さ56cm、幅24cm、高さ26cm、右側壁で長さ60cm、幅16cm、高さ15cmが残存している。白色粘土で構築されており、内側は被熱により赤色化している。側壁先端部には10～15cm角の柱状の凝灰岩切石が据えられている。また、カマド崩落土中にも長さ90cmで15cm角の柱状の凝灰岩切石がみられ、



SI753竪穴住居跡

No	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む多量に含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、黄褐色ロームブロックを含む
6	10YR3/4 暗褐	軽質シルト	黄褐色ロームブロックを含む
7	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白磁土ブロック、焼土ブロック、炭化物を含む
8	10YR3/3 暗褐	シルト	白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物を含む
9	10YR2/3 黒褐	シルト	白色粘土ブロック、砂岩切石を含む 下面は炭化して黒色に硬化、カマド崩落土
10	7.5YR4/4 黒	シルト	焼土を多量に、白色粘土ブロックを含む カマド崩落土
11	7.5YR2/3 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物を多量に含む カマド機能時の堆積

No	土色	土性	備考
12	10YR7/4 に近い黄褐色	粘土	白色粘土を主成分とする 黄褐色シルトを少量含む カマド崩落堆積土
13	10YR4/6 黒	シルト質粘土	黄褐色ローム土を主成分とする 10層との間に粘土面域カマド崩落堆積土
14	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 住居壁材堆積
15	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 黄褐色方理土
16	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居炉床
17	10YR3/6 黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居壁方理土

SI753竪穴住居跡的竪穴(K1)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	軽質シルト	黄褐色ロームブロックを多量、焼土粒、炭化物を少量、白色粘土ブロックを含む

第152図 SI753竪穴住居跡

これらは焚口部を構成していたものと考えられる。奥壁は住居の東壁を35cmほど張り出させた内側に15cmほどの厚さで白色粘土を貼り付けて構築されている。なお、燃焼部底面の一部に焼土と炭化物粒を主体とする堆積層がみられ、カマド機能時の堆積土と考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東コーナー部で土坑1基(K1)が確認された。長軸87cm、短軸64cmの楕円形を呈している。深さ16cmで底面は皿状を呈する。床面から掘り込まれており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土、炭化物粒を含む人為的埋土である。

〔堆積土〕住居内堆積土は10層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面より土師器環(第153図1)が、貯蔵穴堆積土より土師器環(第153図2)が、カマド崩落土より土師器台付鉢(第153図4)が、住居内堆積土より土師器環(第153図3)が出土した。いずれも非ロクロ調整で、1は口縁部横ナデ、体部内面はヘラナデ調整が施されている。2・3は外面が口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ調整が施され、内面は黒色処理が施されている。

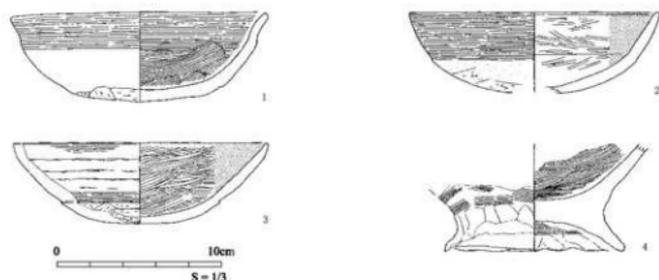
このほか、住居内堆積土・カマド内堆積土・貯蔵穴堆積土・床面・掘方埋土より土師器環・鉢・壺?・甕、須恵器環の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、環は体部に屈曲を有し、外面の口縁部に横ナデ調整が、下半部にケズリ調整が施され、内面に黒色処理が施されている。壺?は頸部~体部の破片で、外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にミガキ調整が施されているもの、ケズリ調整が施されているもの、ハケメ調整が施されているもの、外底面に木葉痕のみられるものがある。ハケメ調整が施されているものは頸部に段を有さないものである。

【SI755 竪穴住居跡】(第154・155図、図版24-4)

〔位置・確認面〕N8西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕《SI755》→ SI753

〔規模・形状〕残存状況が良好でないこと、住居北半は調査区外にのびていることから全体の形状は



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	床	土師器	環	G	外:(口)32? (底面)49?×9 内:(口)32? (体)49?	15.5	8.0	5.5	2/3	06027	37-6
2	貯蔵穴堆	土師器	環	D 2	外:(口)32? (体)49?×9 内:49?×9→黒色処理	(15.0)	—	(4.9)	1/3	06028	—
3	堆2層	土師器	環	D 1	外:(口)32? (体)49?×9 内:49?×9→黒色処理 内面口縁部に使用痕跡	(15.4)	—	4.9	一部	06031	—
4	貯2層	土師器	台付鉢	A	外:胎体→? 内:49? (高台)胎体→? (底径→高台径)	—	10.8	(6.5)	一部	06029	37-7

第153図 SI755 竪穴住居跡出土遺物

不明であるが、東西約 4.3m 以上、南北約 1.5m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N - 19° - W

〔壁面〕残存しない。

〔床面〕一部を残して削平されているが、V層起源の黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床面としていたとみられる。中央南寄りの南北 60cm、東西 85cm の範囲に灰黄褐色粘質シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕なし

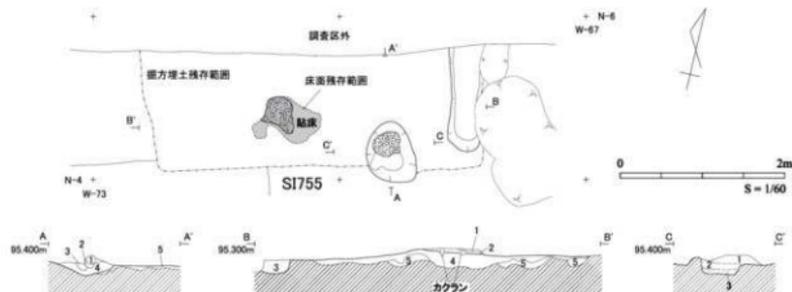
〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 45cm、下端幅 30cm、床面からの深さ 15cm で断面形が U 字状を呈する周溝が東辺に巡る。壁材痕跡は認められないが、周溝の堆積土は人為的埋土の可能性はある。

〔カマド〕住居南壁の東寄りに設置されている。幅 60cm、奥行き 75cm の燃焼部底面のみが残存し、底面は床面より 10cm ほど皿状に窪んでいる。

〔貯蔵穴〕なし

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕カマド付近の床面より鉄釘（第 186 図 4・5）が、周溝内堆積土よりロクロ調整の土師器杯の破片（第 155 図）が、掘方埋土より砥石（第 188 図 3）が、確認より砥石（第 188 図 2）



SI755 竪穴住居跡南北断面・カマド断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/1 黄灰	シルト	白色粘土ブロックを多量に含む カマド副埋土
2	10YR4/2 灰黄	シルト	黄褐色ローム粒、粘土粒を含む カマド副埋土
3	10YR4/2 灰黄	泥	一部水化している カマド副埋土の硬塊
4	2.5YR3/6 暗赤黄	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む カマド副埋土の硬塊
5	10YR4/1 黄灰	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 住居層埋土

SI755 竪穴住居跡東西断面

No.	土色	土性	備考
1	2.5YR4/4 に近い赤褐	粘質シルト	粘土を主体とする
2	10YR4/2 灰黄	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量に含む 住居層床
3	10YR4/1 黄灰	シルト	黄褐色ローム粒を少量に含む
4	10YR4/1 黄灰	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 住居層埋土
5	10YR4/2 灰黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 住居層埋土

第 154 図 SI755 竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)		残存	登録	写真	
						口径	底径				
1	周溝内埋	土師器	杯	—	外: 20777 内: 2874→黒色処理 外面に黒書「□」	—	—	(3.15)	一部	06103	37-8

第 155 図 SI755 竪穴住居跡出土遺物

が出土した。第155図1は内面に黒色処理が施され、外面に墨書(判読不能)がみられる。

このほか、住居内堆積土・カマド内堆積土・カマド崩落土・周溝埋土よりロクロ調整の土師器環・甕、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器環・甕の破片が、住居掘方埋土より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。ロクロ調整の土師器環は内面に黒色処理が施されている。非ロクロ調整の土師器甕は外面にハケメ調整が施されている。

B. 落とし穴状土坑

落とし穴状土坑は4基確認された。第6表に特徴を示す。

C. 土坑

【SK759 土坑】(第156・158図)

[位置・確認面] N8 西区の平坦面に立地する。V層で確認した。

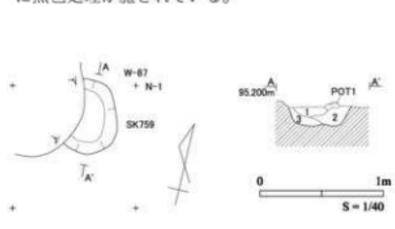
[重複] なし

[規模・形状] 西半部が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸65cm、短軸50cmの楕円形を呈していたとみられる。断面形は逆台形を呈し、深さは25cmである。

[底面] 皿状を呈する。

[堆積土] 堆積土は3層に細分される。黄褐色ロームブロックと焼土粒を含む暗褐色・灰黄褐色シルトである。

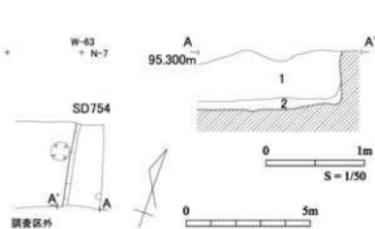
[出土遺物] 堆積土よりロクロ調整の土師器環(第158図)と甕の破片が出土した。土師器環は内面に黒色処理が施されている。



SK759土坑

No	土色	土性	備考
1	07K3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を多量に含む
2	07K3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
3	07K4/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第156図 SK759土坑



SD754溝跡

No	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を均等に含む
2	10YR4/1 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第157図 SD754大溝跡



No	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	質量 (cm)					
						上径	底径	高さ	残存	登録	写真
1	地	07土師器	環	E	外: 07D77 → 07D78 (底面) 切り離し不明 → 手持ち07D78 内: 07D78 → 黒色処理	13.6	6.6	4.5	1/3	06026	37-9

第158図 SK759土坑出土遺物

D. 大溝跡

【SD754 大溝跡】(第 157 図、図版 23- 5)

〔位置・確認面〕 N8 西区の平坦面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕 SK757 → 《SD754》

〔規模・形状〕 幅 1.7m 以上、長さ 3.5m 以上の南北大溝跡で、調査区外の南北へ延びている。断面形は箱状を呈し、深さは 54cm である。

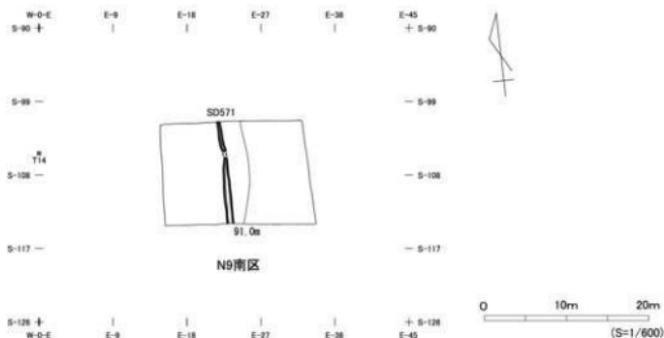
〔方向〕 南北方向

〔堆積土〕 堆積土は 2 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を多く含む暗褐色・褐灰色シルトで、人為的埋土の可能性はある。

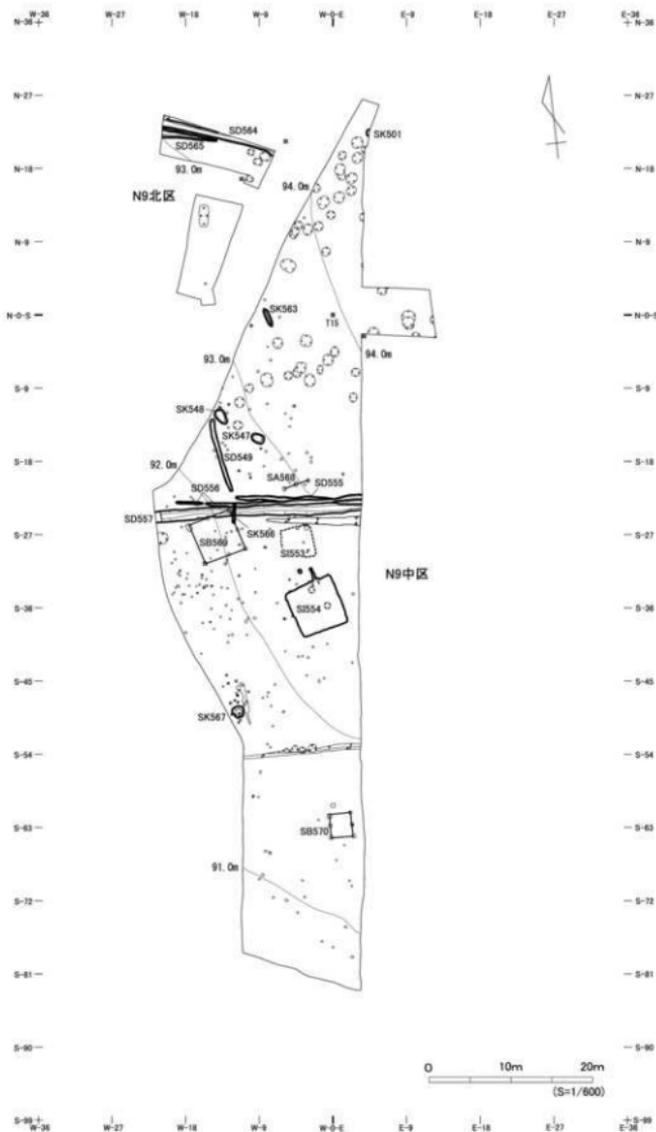
〔出土遺物〕 堆積土より土師器坏・甕、須恵器鉢・甕の破片、鉄鏃(第 186 図 2) が出土した。土師器はいずれも非口クロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されているもの、外底面に木葉痕のみられるものがある。また、器種は不明だが内外面にヘラミガキの後に赤彩が施された口縁部～体部の破片がある。

(12) N9 区

遺跡の立地する丘陵の西縁部で、南西向き斜面となっている。丘陵東側に比して傾斜が急で、黒ボク土および漸移層は残存せず、黄褐色ローム層が露出している。北区、中区、南区を設定して調査を行なった(第 159・160 図)。北区は後世の削平が著しく、溝跡 2 条のみが確認された。中区は北東部の削平が著しいが、丘陵縁辺部の南西部では黒ボク土および漸移層が残存する。遺構は竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 2 棟、柱列跡 1 条、落し穴状土坑 2 基、土坑 4 基、溝跡 6 条が確認された。南区は後世の削平が著しく、溝跡 1 条のみが確認された。以下、主要な遺構について述べる。



第 159 図 N9 南区遺構配置図



第160图 N9北・中区遺構配置図

A. 竪穴住居跡

【SI553 竪穴住居跡】(第 161 図、図版 25-4)

〔位置・確認面〕 N9 中区の南西斜面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕《SI553》→ Pit

〔規模・形状〕 後世の削平が著しく全体の形状は不明であるが、東西 3.9m 以上、南北 3.9m 以上の方形を呈していたとみられる。掘方埋土のみが残存する。

〔方向〕 東辺：N-8°-W

〔壁面・床面〕 残存しない。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕 なし

〔カマド〕 住居北壁東寄りに設置されている。燃烧部底面と右側壁の基部のみが痕跡的に残存する。燃烧部底面は幅 40cm、奥行 34cm の範囲で残存し、被熱による赤色化がみられる。側壁は右側の基部のみ残存する。掘方埋土を掘り込んで構築されており、長さ 57cm、幅 23cm、深さ 5cm が残存する。構築土には白色粘土と黄褐色ロームを含む。

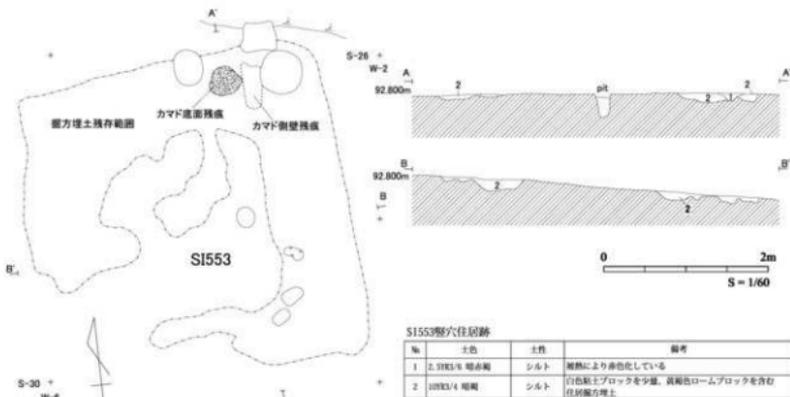
〔貯蔵穴〕 不明

〔堆積土〕 残存しない。

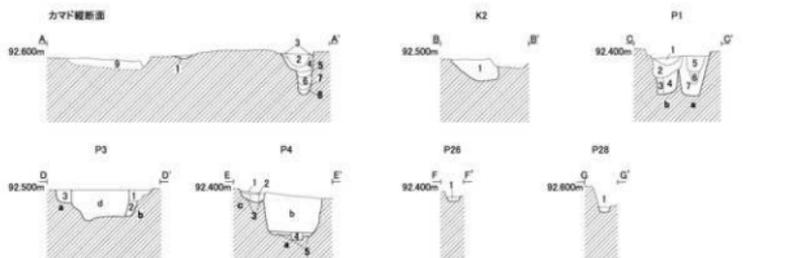
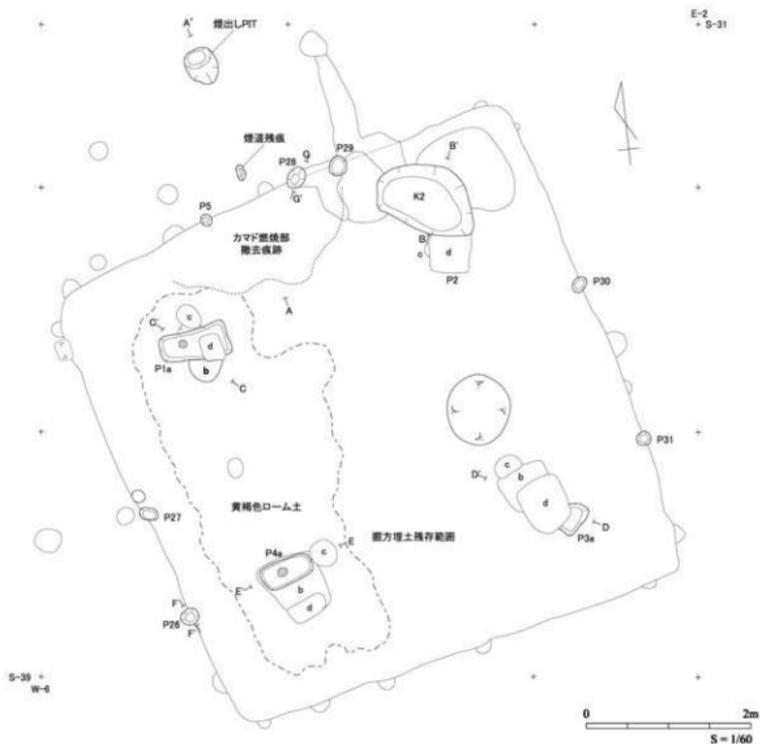
〔出土遺物〕 P3 掘方埋土で須恵器環の破片が出土した。外底面に回転ヘラケズリ調整が施されている。

【SI554a・b・c 竪穴住居跡】(第 162～169 図、図版 25-5・6、26-1・2)

SI554 は同一のプランを踏襲しながら 3 時期 (a・b・c) に変遷する。SI554a は北壁中央にカマド、北東コーナー部に貯蔵穴を持ち、北・東・西壁に壁柱が巡る。主柱穴は 3 基確認され、掘方の平面形は隅丸長方形ないしは楕円形である。床面は残存しないが、掘方埋土下で床下土坑 2 基が確認されている。SI554b は SI554a のカマド撤去後に床面の再構築が行なわれている。東壁中央にカマドを持ち、各壁とコーナー部に壁柱が巡る。主柱穴は 3 基確認され、掘方の平面形は隅丸方形である。床面はほぼ全面に貼床が施されている。SI554c は SI554b の床面を踏襲する。北壁東寄りにカマド、



第 161 図 SI553 竪穴住居跡



S1554a 竪穴住居跡カマド縦断面

No	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロックを多量に含む
2	10YR4/4 褐	シルト	焼土ブロックを多量に含む
3	10YR2/4 暗褐	シルト	炭化物粒を多量に含む
4	10YR2/4 暗褐	シルト	焼土ブロック、炭化物粒を少量含む
5	10YR2/3 に近い黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

No	土色	土性	備考
6	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を多量に含む
7	10YR4/3 に近い黄褐	シルト	焼土ブロックを少量含む
8	10YR2/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む
9	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、白色粘土粒を少量含む カマド燃焼跡除去痕跡

第 162 図 S1554a 竪穴住居跡 (1)

北東コーナー部に貯蔵穴を持ち、周溝と壁材痕跡がほぼ全周する。主柱穴は掘方の平面形が楕円形を呈する小規模なものが4基、隅丸方形を呈する比較的規模の大きなものが4基確認され、前者から後者へ建て替えが行なわれている。以下に詳細を述べる。

【SI554a 竪穴住居跡】(第162～164・169図、図版26-2)

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕《SI554a》→SI554b→SI554c

〔規模・形状〕東西5.7m、南北6.2mの方形を呈する。

〔方向〕東辺：N-7°-W

〔壁面〕V層を壁とする。ほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い東壁で15cmである。

〔床面〕残存しない。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に120～200cmの位置で掘方埋土上面より柱穴3基を確認した(P1a、P3a、P4a)。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。SI554b・cの主柱穴との重複により北東側の1基は残存しない。3基についても掘方の残存状況は良好でないが、平面形は長軸45～85cm、短軸30～50cmの隅丸方形ないしは楕円形を呈していたとみられ、確認面からの深さは35～66cmである。このうち2基で平面形が直径13cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の確認面からの深さは50cmで、掘方底面よりやや深く沈みこむ。また、1基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔壁柱穴〕住居北壁で3基、東・西壁でそれぞれ2基の柱穴を確認した。平面形は直径13～28cmの円形ないしは楕円形を呈し、確認面からの深さは10～30cmである。位置と形状、規模から壁柱穴と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居北壁中央に設置されていたとみられる。煙道の一部と煙出しピットが残存する。燃焼部はSI554b構築時に撤去されており、残存しない。煙道は住居北壁から北に28～50cmの位置にわずかに底面の痕跡を残す。煙出しピットは住居北壁から175cmの位置で確認した。平面形は長軸

SI554a竪穴住居跡(K2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多数含む

SI554a竪穴住居跡(P1a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む P1a柱抜き取り痕跡
2	10YR/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む P1b柱抜き取り痕跡
3	10YR/3 暗黄	シルト	黄褐色ロームブロックを含む P1a柱痕跡
4	10YR/4 暗黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む P1a柱穴覆方埋土
5	10YR/3 暗黄	シルト	黄褐色ローム塊を少量含む P1a柱抜き取り痕跡
6	10YR/3 暗黄	シルト	黄褐色ローム塊を少量含む P1a柱抜き取り痕跡
7	10YR/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロック、粘土を多数に、炭化物塊を少量含む P1a柱穴覆方埋土

SI554a竪穴住居跡(P3a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR/4 黄	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多数含む P3a柱抜き取り痕跡
2	10YR/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多数含む P3a柱穴覆方埋土
3	10YR/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、礫を多数含む P3a柱穴覆方埋土

SI554a竪穴住居跡(P4a・c)

No.	土色	土性	備考
1	10YR/3 暗黄	シルト	黄褐色ローム塊を含む P4a柱抜き取り痕跡
2	10YR/4 暗黄	シルト	黄褐色ロームブロックを含む P4c柱抜き取り痕跡
3	10YR/4 暗黄	シルト	黄褐色ロームブロックを含む P4c柱穴覆方埋土
4	10YR/4 暗黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む P4a柱痕跡
5			

SI554a竪穴住居跡(P26)

No.	土色	土性	備考
1	10YR/3 暗黄	シルト	黄褐色ローム塊を多数含む P26柱抜き取り痕跡

SI554a竪穴住居跡(P28)

No.	土色	土性	備考
1	10YR/4 黄	シルト	白色粘土塊を多数に、黄褐色ローム塊、粘土塊を少量含む P28柱抜き取り痕跡

第163図 SI554a 竪穴住居跡(2)

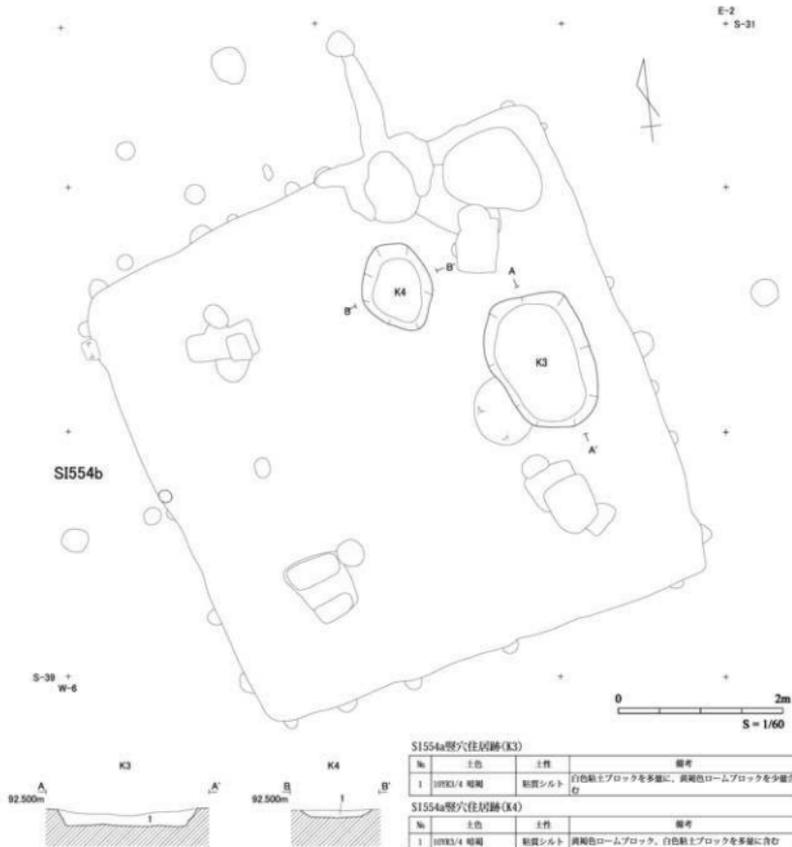
45cm、短軸 35cm の楕円形を呈し、煙道底面からの深さは 54cm である。

〔貯蔵穴〕住居北東コーナー部で土坑 1 基 (K2) が確認された。長軸 130cm、短軸 83cm の楕円形を呈し、深さは 22cm で底面は皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 1 層で、SI554b 構築時に埋め戻された人為的埋土と考えられる。

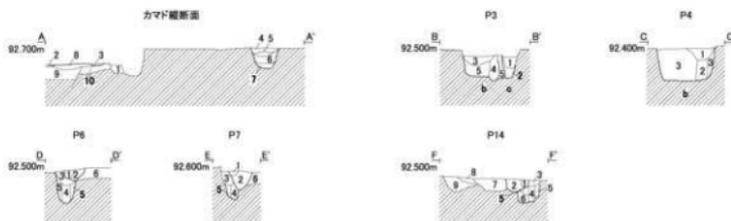
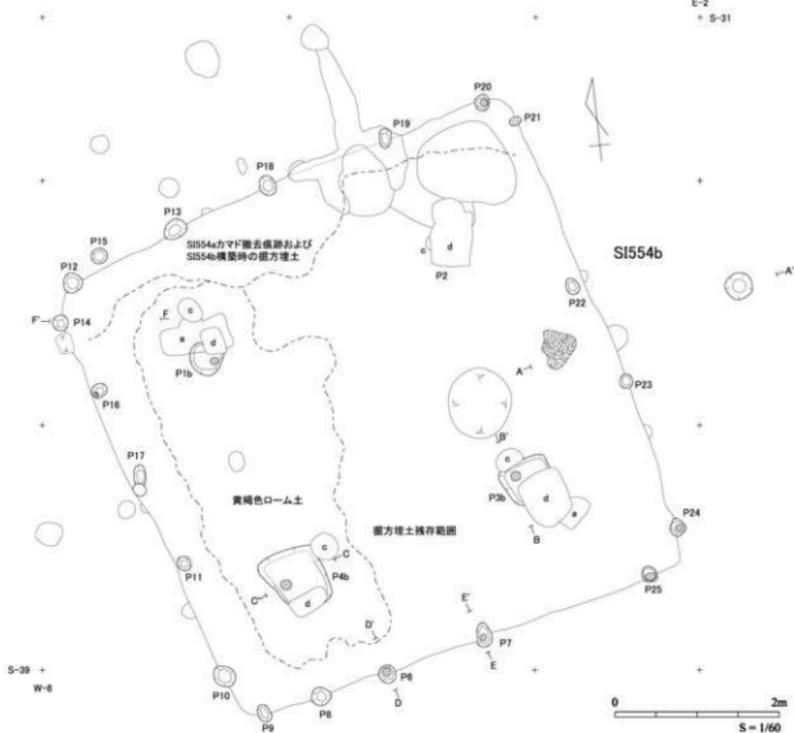
〔床下土坑〕住居北東部の掘方埋土下で土坑 2 基 (K3、K4) を確認した。K3 は平面形が長軸 175cm、短軸 122cm の楕円形を呈し、深さは 20cm である。K4 は平面形が長軸 112cm、短軸 85cm の楕円形を呈し、深さは 17cm である。埋土はいずれも白色粘土ブロックを多量に含む暗褐色 (10YR3/4) 粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕煙道の一部と煙出しピットの堆積土のみ残存する。7 層に細分され、焼土ブロック・粒、

E-2
S-31



第 164 図 SI554a 壁穴住居跡 (3)



SI554b居住区跡カマド縦断面

№	土色	土性	備考	№	土色	土性	備考
1	10YR3/8 暗褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む SI554a段遺跡方埋土	6	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土ブロックを多量に含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土粒を多量に含む 住居跡直線跡埋土	7	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	焼土ブロックを多量に含む
3	10YR4/6 暗褐色	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む カマド機能埋土	8	2.5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土により赤色化している カマド直線埋土
4	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物粒を少量含む	9	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 3期埋土
5	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土ブロックを多量に含む	10	10YR5/6 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む SI554a住居跡方埋土

第 165 図 SI554b 居住区跡カマド縦断面 (1)

炭化物粒、地山ブロックを多量に含む自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居掘方埋土よりミニチュア土器(第169図1)が出土した。外底面に木炭痕がみられる。

このほか、P1a抜き取り痕跡・住居掘方埋土より非クロコ調整の土師器環・甕、須恵器環・蓋の破片が出土した。土師器環は外面にケズリ調整またはケズリ調整の後にミガキ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面にケズリ調整が施され、外底面に木炭痕のみられるものがある。

【S1554b 竪穴住居跡】(第165・166図、図版26-1)

〔位置・確認面〕N9中区の南西斜面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕S1554a → 《S1554b》 → S1554c

〔規模・形状〕東西5.7m、南北6.2mの方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E-7°-N

〔壁面〕V層を壁とする。ほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い東壁で15cmである。

〔床面〕西側は削平により残存しないが、東側のほぼ全面に焼土・炭化物・白色粘土粒を含む黒褐色シルトからなる硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に120～170cmの位置で床面より柱穴3基を確認した(P1b、P3b、P4b)。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。S1554b・cの主柱穴との重複により北東側の1基は残存しない。3基についても掘方の残存状況は良好でないが、平面形は長軸61～83cm、短軸44～70cmの隅丸方形を呈していたとみられ、確認面からの深さは32～44cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡が認められ、その底面で平面形が直径10～14cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱穴確認面からの柱痕跡の深さは40～60cmである。

〔壁柱穴〕住居壁面に沿って20基(西・北壁でそれぞれ3基、東・南壁でそれぞれ2基、北西・南西コーナー部でそれぞれ3基、北東・南東コーナー部でそれぞれ2基)の柱穴を確認した。平面形は直径15～30cmの円形ないしは楕円形を呈し、確認面からの深さは10～30cmである。位置と形状、規模から壁柱穴と考えられる。

S1554b竪穴住居跡(P3b・c)

No	土色	土性	備考
1	10YR6/2 に近い黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、礫を多量に含むP1a抜き取り痕跡
2	10YR8/4 黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含むP1a抜き取り痕跡
3	10YR4/4 黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、礫を多量に含むP1a抜き取り痕跡
4	10YR2/1 に近い黄褐色	シルト	白色粘土と礫を多量に含むP1a柱痕跡
5	10YR4/4 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含むP1a柱穴埋方埋土

S1554b竪穴住居跡(P4b)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含むP1a柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、礫を含むP1a柱痕跡
3	10YR4/4 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含むP1a柱穴埋方埋土

S1554b竪穴住居跡(P6)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含むS1554b住居埋方埋土
2	10YR2/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を含むS1554b埋方埋土
3	10YR3/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含むP1a柱抜き取り痕跡
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を含むP1a柱抜き取り痕跡
5	10YR2/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を含むP1a柱穴埋方埋土
6	10YR4/4 黄褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを少量含むS1554b住居埋方埋土

S1554b竪穴住居跡(P7)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含むS1554b住居埋方埋土
2	10YR3/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を含むS1554b埋方埋土
3	10YR3/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含むP1a柱抜き取り痕跡
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を含むP1a柱痕跡
5	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を含むP1a柱穴埋方埋土
6	10YR4/4 黄褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを少量含むS1554b住居埋方埋土

S1554b竪穴住居跡(P14)

No	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒を少量含むS1554b住居埋方埋土
2	10YR3/2 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含むS1554b埋方埋土
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含むP1a柱抜き取り痕跡
4	10YR2/2 暗褐色	シルト	P1a柱痕跡
5	10YR3/4 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含むP1a柱穴埋方埋土
6	10YR2/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含むP1a柱穴埋方埋土
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒、黄土粒を少量含むS1554b住居埋方埋土
8	10YR2/2 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粒、礫土粒を少量含むS1554b住居埋方埋土
9	10YR3/4 暗褐色	粘質シルト	S1554b住居埋方埋土

第166図 S1554b 竪穴住居跡(2)

〔周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居東壁中央に設置されていたとみられる。燃焼部底面と煙出しピットが残存する。燃焼部はSI554c構築時に撤去されており、底面のみが幅50cm、奥行45cmの範囲で残存し、被熱による赤色化がみられる。煙出しピットは住居東壁から150cmの位置で確認した。平面形は直径32cmの円形を呈し、確認面からの深さは25cmである。

〔貯蔵穴〕なし

〔堆積土〕煙出しピットの堆積土のみ残存する。4層に細分され、焼土ブロックと炭化物粒を多量に含む自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕煙出しピット堆積土より須恵器短頸甕の破片が、P4b抜き取り痕跡・P4b掘方埋土・住居掘方埋土より非クワ口調整の土師器杯・大形杯・甕、須恵器杯の破片が出土した。土師器杯・大形杯は外面にヘラケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。

【SI554c 竪穴住居跡】(第167～169図、図版25・5・6、26・1)

〔位置・確認面〕N9中区の南西斜面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕SI554a → SI554b → 《SI554c》

〔規模・形状〕東西5.7m、南北6.2mの方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N-7° - W

〔壁面〕V層を壁とする。ほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良い東壁で15cmである。

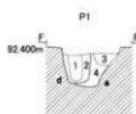
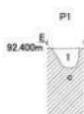
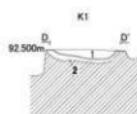
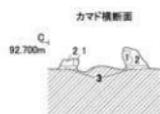
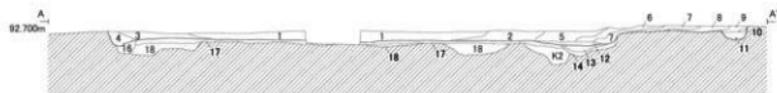
〔床面〕SI554b床面と同一面を床面とする。西側は削平により残存しないが、東側のほぼ全面に焼土・炭化物・白色粘土粒を含む黒褐色シルトからなる硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕主柱穴と見られる柱穴が床面で8基確認され、掘方の形状などから2時期の変遷が考えられる。1時期目の柱穴は住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に140～230cmの位置で4基(P1c～P4c)確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。掘方の平面形は直径30～34cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは23～28cmである。3基で柱材の抜き取り痕跡が確認され、このうち1基で平面形が直径約12cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。2時期目の柱穴は住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に135～175cmの位置で4基(P1d～P4d)確認した。掘方の平面形は長軸34～65cm、短軸24～55cmの隅丸方形を呈し、深さは30～42cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、その底面で平面形が直径12～16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の床面からの深さは28～40cmで、掘方底面に達するものと達しないものがある。

〔壁柱穴〕なし

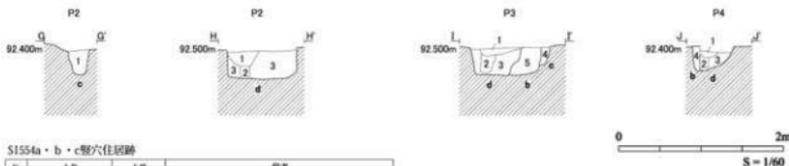
〔周溝・壁材痕跡〕上端幅8～26cm、下端幅8～20cm、床面からの深さ7～15cmで断面形がU字状を呈する周溝がカマド部分を除いてほぼ全周する。幅8～12cm、深さ7～10cm程度の壁材痕跡が断続的に認められる。周溝の堆積土は住居掘方埋土に類似し、黄褐色ロームブロックを含む人為的埋土である。

〔カマド〕住居北壁の東寄りに設置されている。燃焼部と煙道、煙出しピットが残存する。燃焼部は長さ93cm、幅113cmで、焚口幅は側壁先端間で66cmである。燃焼部底面は幅56cm、奥行



第 167 図 SI554c 竪穴住居跡 (1)

90cmで、床面より6cmほど皿状に窪んでいる。底面は被熱により赤色化している。側壁は左側壁で長さ56cm、幅24cm、高さ13cm、右側壁で長さ62cm、幅34cm、高さ27cmが残存し、内側は被熱により赤色化している。焼土ブロックを多量に含む白色粘土で構築されており、SI554bの旧カマド構築土が再利用されたと考えられる。奥壁は住居の北壁とほぼ一致し、奥壁から北側へ延びる煙道は長さ154cmで、幅18～30cm、深さ5～8cmが残存する。底面は奥壁との接続部からスロープ状に立ち上がり、中ほどから先はほぼ平坦である。煙道の先端部には長軸36cm、短軸26cm、深



SI554a・b・c 竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、粘。炭化物を少量含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘。白色粘土ブロック。炭化物を少量含む
3	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、粘。炭化物を少量含む
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘。焼土粒を少量含む
5	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	焼土粒。白色粘土ブロックを多量に含む
6	2.5Y5/6 黄褐色	シルト	白色粘土ブロックを多量に含む。被熱により赤色化しているカマド天井面土
7	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	焼土粒。炭化物を多量に含む
8	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	焼土粒。炭化物を少量含む。埋戻天井面土
9	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	焼土粒。炭化物を少量含む
10	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
11	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黄褐色ローム粘。炭化物を多量に含む
12	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土粒を多量に含む。カマド構体の構築土
13	10YR4/6 赤褐色	シルト	被熱により赤色化しているカマド底部の構築土
14	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘を多量に含む。カマド構体の埋方土
15	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む。住居壁面土
16	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘を少量含む。埋方土
17	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土粒。白色粘土。炭化物を少量含む。住居壁面土
18	10YR4/4 暗褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを少量含む。住居壁面土
19	10YR3/4 暗褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを多量に含む。SI554b 埋方土
20	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粘を少量含む。SI554c 住居壁面土
21	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む。SI554a 埋方土

SI554c 竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR6/6 暗褐色	粘土	焼土ブロックを多量に含む。カマド側壁構築土
2	10YR6/6 暗褐色	粘土	灰白色粘土ブロック、灰黄色粘土ブロックを多量に含む。カマド側壁構築土
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘。灰白色粘土を多量に含む。カマド側壁構築土

SI554c 竪穴住居跡貯蔵穴(Ⅰ)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を少量。黄褐色ロームブロックを含む
2	10YR4/4 に灰~黄褐色	粘質シルト	白色粘土による壁面・底面構築土

SI554c 竪穴住居跡(P1c)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘。炭化物を少量含む。P1c柱置き取り面跡

SI554c 竪穴住居跡(P1a・d)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘を含む。P1d柱跡
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘を少量含む。P1d柱跡上方土
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘を少量含む。P1a柱置き取り面跡
4	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、粘を多量に。炭化物を少量含む。P1d柱跡上方土

SI554c 竪穴住居跡(P2c)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、粘を多量に含む。P2c柱置き取り面跡

SI554c 竪穴住居跡(P2b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘を含む。P2b柱置き取り面跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む。P2b柱跡
3	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、粘を多量に含む。P2b柱跡上方土

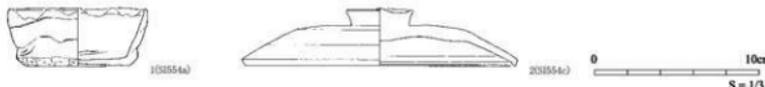
SI554c 竪穴住居跡(P3b・c・d)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘を少量含む。P3b柱置き取り面跡
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む。P3b柱跡
3	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、粘を含む。P3b柱跡上方土
4	10YR4/3 に灰~黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、粘を多量に含む。P3c柱置き取り面跡
5	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む。P3d柱跡上方土

SI554c 竪穴住居跡(P4b・d)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム粘を含む。P4b柱置き取り面跡
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘を含む。P4b柱跡
3	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む。P4b柱跡上方土
4	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む。P4b柱跡上方土

第168図 SI554c 竪穴住居跡(2)



No.	層位	構築	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			現存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	住居跡上方土	土	一	一	外:(体)ナリ→ナリ(口底)木製 内:(体)ナリ	(8.1)	6.1	4.5	1/3	OB034	37.10
2	灰	遺灰	蓋	A	外:ナリ 内:ナリ 厚2.0	(10.0)	—	3.5	1/8	OB033	—

第169図 SI554a・c 竪穴住居跡出土遺物

さ 16cm の煙出しピットが確認された。

〔炉〕住居床面中央やや南西寄りの長軸 70cm、短軸 42cm の範囲が皿状に 3cm ほど窪み、被熱による著しい赤色化がみられる。炉跡と考えられる。

〔貯蔵穴〕住居北東コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。長軸 98cm、短軸 77cm の楕円形を呈し、深さは 12cm で底面は皿状を呈する。底面は 5～8cm の厚さで白色粘土を貼り付けて構築されている。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 1 層で、自然堆積土と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は 12 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面より須恵器蓋 (第 169 図 2) が出土した。

このほか、遺構確認面・住居内堆積土・カマド内堆積土・カマド底面・カマド崩落土・煙出しピット堆積土・貯蔵穴底面・壁材痕跡・P4c 抜き取り痕跡・P2d 掘方埋土・P9 掘方埋土・床面より非ロクロ調整の土師器環・甕・壺、須恵器環・蓋・甕の破片が出土した。土師器環は外面にケズリ調整が施されるもの、ケズリ調整の後にミガキ調整が施されるものがあり、いずれも内面に黒色処理が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されているもの、横ナデとケズリ調整が施されているものがあり、後者は頸部に段を有する。壺は体部外面にヘラミガキの後に赤彩が施されている。

B. 掘立柱建物跡

〔SB569 掘立柱建物跡〕 (第 170 図、図版 26-3)

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。V 層で確認した。

〔重複〕SK566 — 《SB569》 → SD557

〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 5.2m)、南北 2 間 (総長 5.0m) の建物跡である。

〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は長軸 40～54cm、短軸 38～44cm の隅丸方形を呈し、深さ 22～45cm である。このうち 3 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。また 3 基で平面形が直径 12～14cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列で西から 290 - 230cm、東側柱列で北から 240 - 260cm である。

〔方向〕東側柱列：N - 17° - W

〔出土遺物〕P5 堆積土より非ロクロ調整で外面にハケメ調整の施された土師器甕の破片が出土した。

〔SB570 掘立柱建物跡〕 (第 171 図、図版 26-4・5)

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。V 層で確認した。

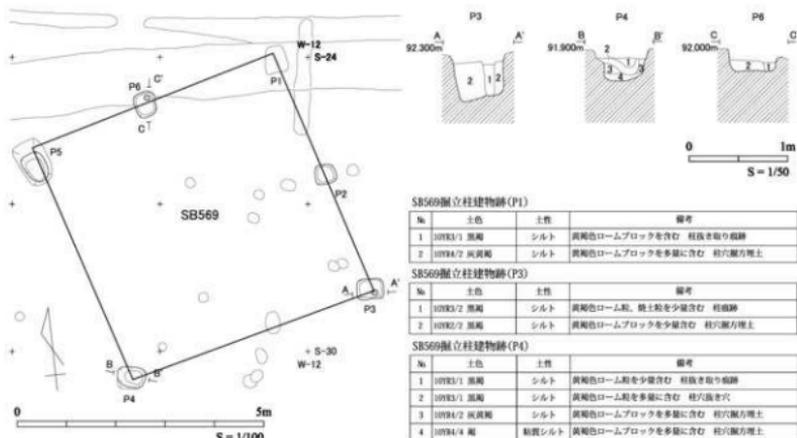
〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北 2 間 (桁行総長 3.0m)、東西 1 間 (梁行総長 2.7m) の南北棟建物跡である。

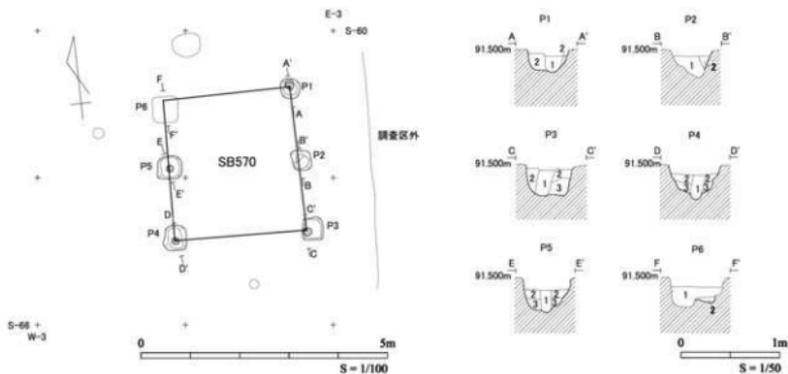
〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は長軸 40～50cm、短軸 38～48cm の隅丸方形を呈し、深さ 18～32cm である。このうち 4 基で平面形が直径 14～15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 22～34cm で、掘方底面に接するものと 3～8cm 程度沈み込むものがある。また、2 基で柱材の抜き取り痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕北側柱列で 270cm、東側柱列で北から 160 - 140cm である。

〔方向〕東側柱列：N - 1° - E



第 170 図 SB569 掘立柱建物跡



第 171 図 SB570 掘立柱建物跡

〔出土遺物〕P4 堆積土より非ロクロ調整の土師器
甕の破片が出土した。

C. 柱列跡

〔SA568 柱列跡〕(第 174 図、図版 26-6)

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。
V 層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間(総長 3.1m)の柱列跡で、
南側へ展開する掘立柱建物跡であった可能性がある。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方の平面形は長軸 44
～ 46cm、短軸 34～46cm の隅丸方形を呈し、
深さ 26～57cm である。いずれも柱材の抜き取
り痕跡が認められ、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕東から 150～160cm である。

〔方向〕E - 13° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

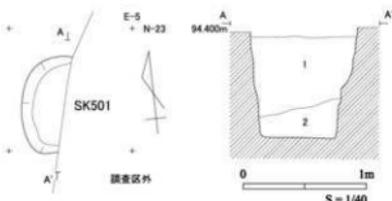
D. 落し穴状土坑

落し穴状土坑は 2 基確認された。第 6 表に特
徴を示す。

E. 土坑

〔SK501 土坑〕(第 172 図)

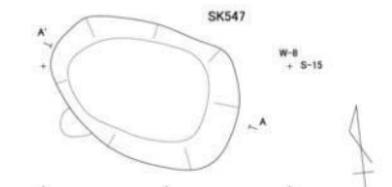
〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。



SK501 土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR6/4 黄	シルト	炭化物粒を少量、礫を含む
2	10YR3/3 暗黄	シルト	礫を多量に含む

第 172 図 SK501 土坑



SK547

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒黄	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量、暗褐色シルトを含む
2	10YR2/2 黒黄	シルト	炭化物粒を多量に含む
3	10YR1.7/1 黒	シルト	炭化物粒を多量に、黄褐色ロームブロックを少量、粘土粒を含む、礫の埋め

第 173 図 SK547 土坑

SA568 掘立柱建物跡 (P1)

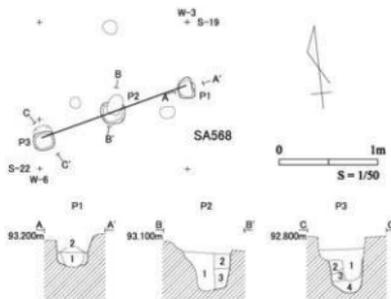
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む、柱抜き取り痕跡
2	10YR1/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む、柱穴版方土

SA568 掘立柱建物跡 (P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む、柱抜き取り痕跡
2	10YR1/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む、柱穴版方土
3	10YR3/2 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む、柱穴版方土

SA568 掘立柱建物跡 (P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロックを含む、柱抜き取り痕跡
2	10YR4/2 灰黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む、柱穴版方土
3	10YR3/3 暗黄	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む、柱穴版方土
4	10YR4/2 灰黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む、柱穴版方土



第 174 図 SA568 柱列跡

V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、直径86cm以上の円形を呈するとみられる。断面形は逆台形を呈し、深さ88cmである。

〔底面〕平坦である。

〔堆積土〕堆積土は2層に細分される。小礫と炭化物粒を含む褐色・暗褐色シルトで、人為的埋土の可能性はある。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK547 土坑】(第173図、図版26-7)

〔位置・確認面〕N9中区の南西斜面に立地する。

V層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸156cm、短軸58cmの不整楕円形を呈する。断面形は東側に段の付く逆台形を呈し、深さ44cmである。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は3層に細分される。1層は炭化物・黄褐色ローム粒を少量含む暗褐色シルト、2層は炭化物粒を多量に含む黒褐色シルト、3層は炭化物粒と焼土を極めて多量に含む黒色シルトである。1・2層は自然堆積、3層は土坑機能時の堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より非クロ調整の土師器環・鬘、須恵器環または蓋の破片が出土した。

【SK548 土坑】(第175図、図版26-8)

〔位置・確認面〕N9中区の南西斜面に立地する。

IV層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸230cm、短軸117cmの不整楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さ17~30cmである。

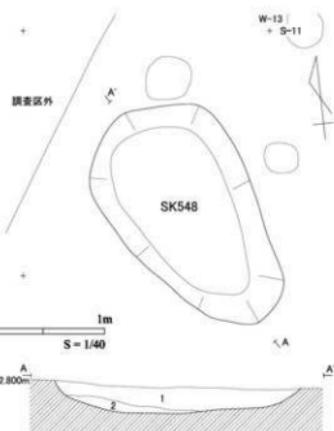
〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は2層に細分される。ブロックを含む黒褐色のシルトと粘質シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK567 土坑】(第176図)

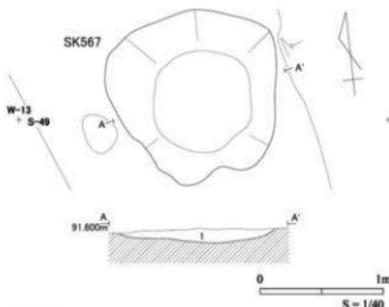
〔位置・確認面〕N9中区の南西斜面に立地する。



SK548土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第175図 SK548土坑



SK567土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

第176図 SK567土坑

V層で確認した。

〔重複〕 Pit →《SK567》

〔規模・形状〕 平面形は長軸 150cm、短軸 110cm の不整形円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さ 10cm である。

〔底面〕 皿状を呈する。

〔堆積土〕 堆積土は 1 層で、粒をわずかに含む黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

F. 溝跡

溝跡は 6 条確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 10 表に特徴を示す。

〔SD555 溝跡〕 (第 177 図)

〔位置・確認面〕 N9 中区の南西斜面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕 SK566・SB569・《SD555》→SD556→SD557

〔規模・形状〕 長さ 11.7m 以上の東西溝跡で、調査区外の東側へ延びている。上端幅 50cm、下端幅 30cm で断面形は皿状を呈し、深さ 10～13cm である。

〔方向〕 東西方向

〔堆積土〕 堆積土は 1 層で、黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色シルトである。

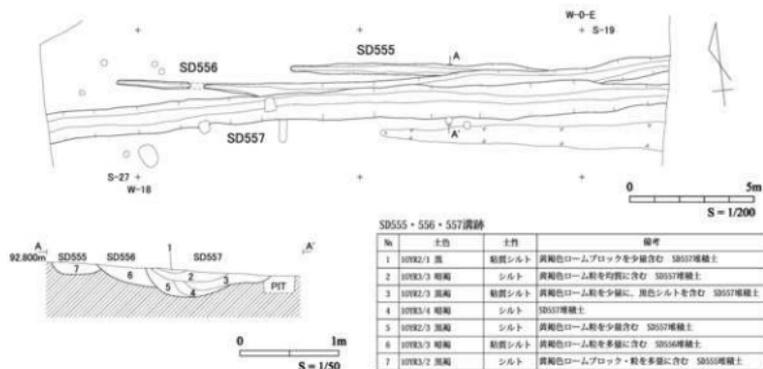
〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔SD556 溝跡〕 (第 177 図)

〔位置・確認面〕 N9 中区の南西斜面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕 SK566・SB569・SD555→《SD556》→SD557

〔規模・形状〕 長さ 22.3m 以上の東西溝跡で、調査区外の東側へ延びている。上端幅 40～50cm、下端幅 15～30cm で断面形は皿状を呈し、深さ 8～20cm である。



第 177 図 SD555・556・557 溝跡

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は1層で、黄褐色ローム粒を含む暗褐色シルトである。

〔出土遺物〕堆積土より土師器破片と須恵器甕の破片が出土した。

【SD557 溝跡】(第177図)

〔位置・確認面〕N9中区の南西斜面に立地する。V層で確認した。

〔重複〕SK566・SB569・SD555 → SD556 → 《SD557》

〔規模・形状〕長さ24.5m以上の東西溝跡で、調査区外の東西へ延びている。上端幅90～140cm、下端幅30～60cmで断面形は皿状を呈し、深さ10～30cmである。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は5層に細分され、黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色粘質シルト、黒褐色・暗褐色シルトである。

〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器坏、須恵器甕、近世陶器(銅緑釉、大甕相馬焼)の碗の破片が出土した。

(13) N10区

遺跡の立地する丘陵中腹部の南向き緩斜面に位置する。南端部はN1南区からN2中区を通過して南東方向からのびる沢の先端部にあたる。遺構は竪穴住居跡2軒、柱列跡1条、土坑1基が確認された(第178図)。以下、主要な遺構について述べる。

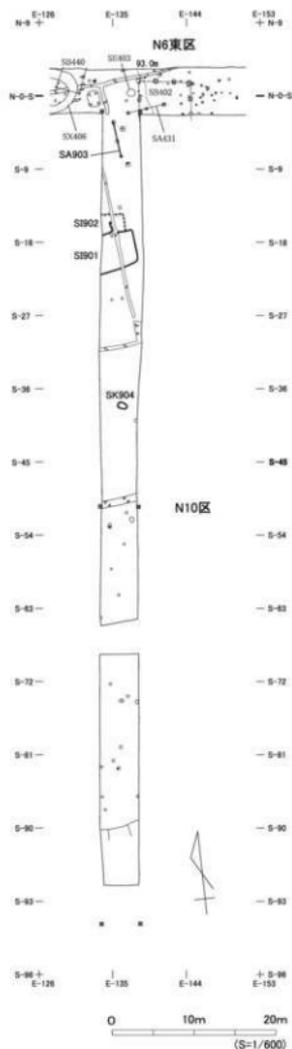
A. 竪穴住居跡

【SI901 竪穴住居跡】(第178図、図版27-3・4)

〔位置・確認面〕N10区北側の平坦面に立地する。V層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SI902 → 《SI901》

〔規模・形状〕西側が調査区外へ延びるため全体



第178図 N10区遺構配置図

の形状は不明であるが、東西 5.0m 以上、南北 4.5m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕

〔カマド〕住居北壁に設置されている。燃焼部と煙道部が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を含む黒色 (10YR2/1) シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI902 竪穴住居跡】(第 178 図、図版 27-3)

〔位置・確認面〕N10 区北側の平坦面に立地する。V 層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI902》→ SI901

〔規模・形状〕南側が SI901 と重複し、西側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 2.8m 以上、南北 2.4m 以上の方形を呈するとみられる。掘方埋土のみが残存する。

〔方向〕カマド中軸線：N-7°-W

〔カマド〕不明である。

〔堆積土〕確認面の住居掘方埋土は白色粘土ブロックと黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色 (7.5YR2/2) シルトである。なお表土掘削の際に削平してしまったが、調査区西側の断面観察の結果、住居床面および住居内堆積土がわずかに残存することが確認された。住居内堆積土は黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

B. 柱列跡

【SA903 柱列跡】(第 178 図、図版 27-5)

〔位置・確認面〕N10 区北側の平坦面に立地する。V 層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北 2 間 (総長 4.3m) の柱列跡である。N6 東区で確認された SA431 とほぼ直行する関係にあり、同時に存在していた可能性がある。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方の平面形は長軸 30～50cm、短軸 25～40cm の円形ないしは楕円形を呈する。2 基で平面形が直径 15～20cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕南から 190-240cm である。

〔方向〕

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

C. 土坑

土坑は 1 基確認した。第 8 表に特徴を示す。

(14) その他の出土遺物

これまで述べた各遺構から出土した土器類以外の遺物 (金属製品、石製品、石器、縄文・弥生土器、中世・近世陶磁器など) および遺構外からの出土遺物について述べる。

A. 土師器・ロクロ土師器・須恵器（第179～184図）

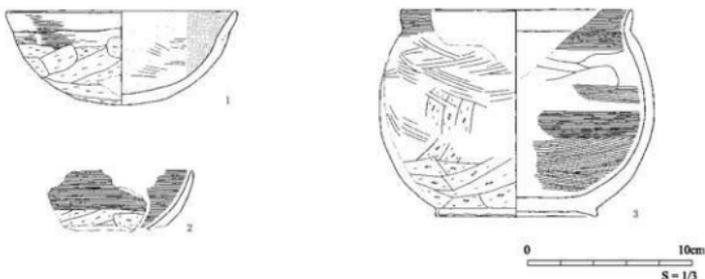
表土および基本層、遺構確認面などから多量に出土したが、小破片が多く図示できるものは少ない。

S1区ではロクロ調整の土師器環（第179図1）と非ロクロ調整の土師器環（第179図2）が出土した。1は外底面に回転糸切り痕がみられ、内面は黒色処理が施されている。2は内外面に横ナデ調整が施され、外面にはケズリの後に沈線が加えられている。内面に黒色処理が施されていない。



No	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	遺構	土師器	環	A	外：刃切→手持り切X形（底面）回転糸切 内：刃切→黒色処理	14.0	5.6	4.9	1/3	06107	38-1
2	遺構	土師器	環	1? ?	外：（口）刃切→X形→沈線 内：（口）刃切	—	—	(3.7)	一部	06101	—

第179図 S1区遺構外出土遺物



No	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	遺構	土師器	環	D 2	外：（口）刃切→（体～底）刃切 内：刃切→黒色処理	14.0	—	(6.75)	1/3	06089	—
2	遺構	土師器	環	1? ?	外：（口）刃切→（体）刃切 内：（口）刃切	—	—	(3.6)	一部	06191	—
3	表土	土師器	器	C	外：（口）刃切（体）刃切→刃切（底面）刃切、片 内：（口）刃切（体）刃切（底面～高台縁）	14.0	9.8	12.6	1/4	06087	38-2

第180図 S3区遺構外出土遺物



No	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	遺構	土師器	環	A 1	外：（口～体）刃切→赤影 内：（口）刃切（体）片→（口、体下）刃切（口～体上）赤影	8.9	2.9	5.9	3/4	06048	38-3
2	遺構	土師器	環?	—	外：刃切→赤影 内：刃切→外面に赤影	—	—	—	一部	06047	38-4
3	刃切	須恵器	環	—	外：刃切 内：刃切→外底面に赤影	—	(1.0)	—	一部	06041	38-5

第181図 N2区遺構外出土遺物

N 2南区ではミニチュア土器（第 182 図 1）と非ロクロ調整の土師器杯（第 182 図 2）、鉢（第 182 図 3）が出土した。1 は脚部の破片で、内外面にナデ調整が施されている。2 は内外面に丹念なヘラミガキと赤彩が施されている。3 は体部外面にハケメの後にナデ調整が施され、外底面に木葉痕がみられる。

N 5区では須恵器甕（第 183 図）が出土した。口縁部から頸部にかけての破片で、外面に波状文が施されている。N 9区では非ロクロ調整の土師器杯（第 184 図）が出土した。外面の体部にヘラケズリ調整が、内面にヨコナデ調整が施され、黒色処理が施されていない。

B. 瓦（第 185 図 1・2）

N 6西区の SI424 竪穴住居跡堆積土などから 2 点出土した。いずれも平瓦の小破片である。1 は凸面に斜格子タタキが、凹面と側面にヘラケズリが施されている。古代の瓦である。同様に破片資料であるが本遺跡の南に位置する蔵王町都遺跡（蔵王町教委 2005）に類例が認められる。2 は凸面と側面に面取りが施され、凹面にナデ調整が施されている。近世の瓦とみられる。

C. 陶磁器（第 185 図 3～9）

表土および基本層、遺構確認面、土坑、溝跡、柱穴などから約 90 点が出土した。ほとんどが小破片である。3 は青磁碗である。12 世紀後半から 13 世紀初頭の中国龍泉窯産の可能性がある。4・5 は中世陶器の播鉢で在地産とみられる。6・7 は中世陶器の甕で、簾状押印がみられる。6 は常滑産、7 は渥美産とみられる。8・9 は瀬戸美濃産志野織部の丸皿で、高台は削り出しである。8 は内面に鉄絵がみられる。17 世紀初頭のものである。本遺跡の東に位置する蔵王町鍛冶屋敷遺跡（蔵王町教委 2006）に類例が認められる。

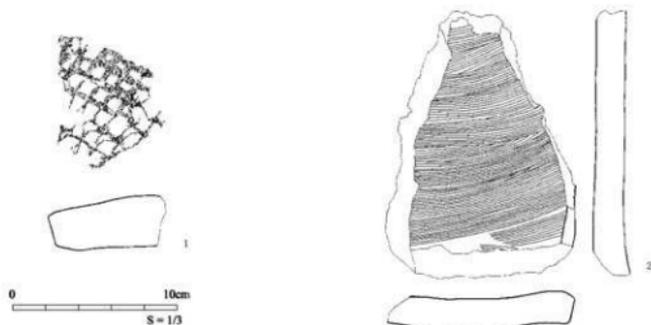
このほか、小破片ながら遺構に伴うものとしては S 3 中区 SK78 土坑の堆積土から中世陶器の甕が、S 1 南区 SK625 土坑の堆積土から青磁碗が出土した。近世陶磁器は S 1 南区 SB615P7 掘方埋土、N 6 西区 SK439 土坑、N 9 北区 SK562 土坑、SD557 溝跡、SD564 溝跡の堆積土から出土している。

D. 金属製品（第 186 図）

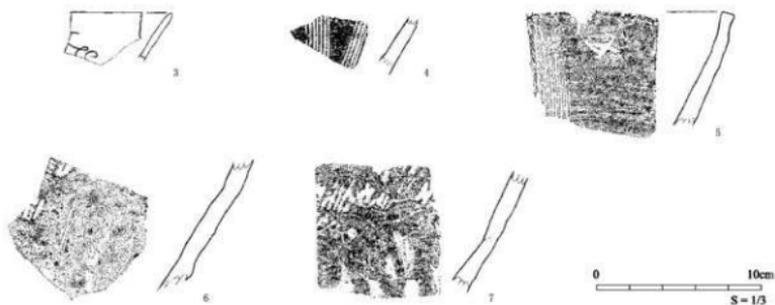
遺構確認面、竪穴住居跡、土坑、溝跡、柱穴などから 23 点が出土した。鉄鏃、鉄製刀子、鉄釘、銅銭がある。1・2 は鉄鏃で、細長い柳葉形の刃部と短い茎部からなる。刃部上半部の横断面形は扁平なレンズ状を呈し、刃部下半部から茎部にかけては方形を呈する。3 は鉄製の刀子で、刃部の破片である。4～10 は鍛造による鉄釘で、脚部の横断面形は方形を呈する。4・6・8・9 は折り曲げによる不定形の頭部が残存する。11 は銅銭で、寛永通宝である。

E. 転用砥、砥石（第 187・188 図）

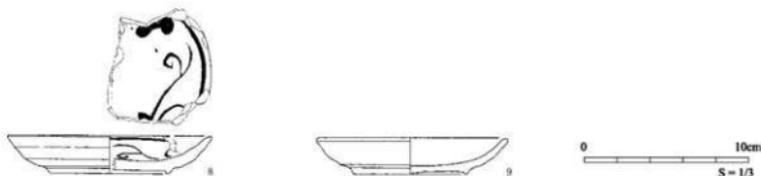
遺構確認面、竪穴住居跡、土坑などから転用砥 1 点、砥石 11 点が出土した。第 187 図 1 は転用砥で、須恵器甕の胴部破片の一边に砥面がみられる。第 187 図 2～4、第 188 図 1～3 は凝灰岩製の砥石である。長方形の板状で長辺の 4 面に砥面を持つ。第 188 図 2・3 は N 8 西区 SI755 竪穴住居跡から出土したもので同一個体であるが、中央部で折損した後にそれぞれ別個体として使用されている。



No	区	遺構	層位	種類	図種	断面調整・特徴	度量 (cm)			残存	登録	写真
							高	幅	厚			
1	N6 西	SI424	堀 3 層	瓦	平瓦	凸面：斜格子状 凹面：A印X 9 側面：A印X 9 古代瓦	(8.0)	(7.1)	3.0	一部	06109	39-1
2	S1 西	砂92		瓦	平瓦	凸面：面取り 凹面：F' 側面：面取り 近世瓦	(16.0)	(11.4)	1.9	一部	06108	39-2

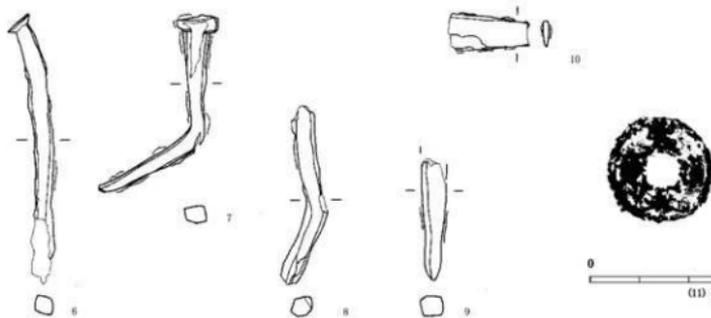
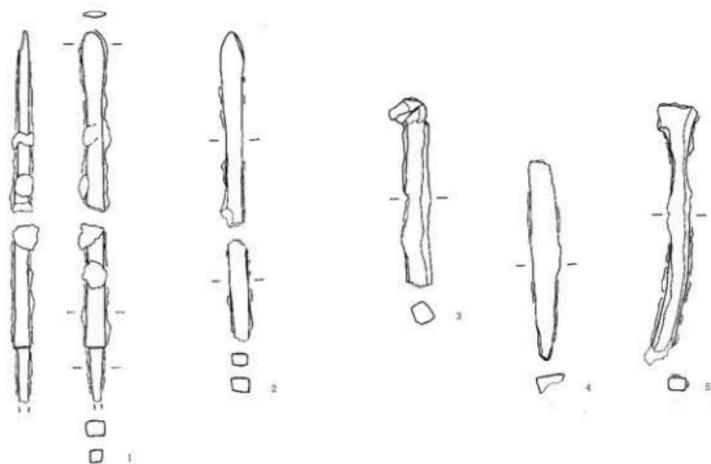


No	区	遺構	層位	種類	図種	産地	断面調整・特徴	度量 (cm)			残存	登録	写真
								口幅	底径	高さ			
3	S2 南 T7	遺構		青磁	底	中国か	青磁輪 内面：刺繍	-	-	(2.75)	一部	06121	39-3
4	S1 南	砂92		中世陶器	団鉢	在地か	F' 内面：糸輪帯	-	-	-	一部	06116	39-4
5	S1 西	砂92		中世陶器	団鉢	在地か	F' 内面：糸輪帯 刺印「X」	-	-	(8.0)	一部	06117	39-5
6	S3 西	遺構		中世陶器	壺	常陸	F' 内面：雲状押印	-	-	-	一部	06120	39-6
7	N4 南	遺構		中世陶器	壺	常陸か	F' 刺繍 内面：雲状押印	-	-	-	一部	06112	39-7



No	区	遺構	層位	種類	図種	産地	断面調整・特徴	度量 (cm)			残存	登録	写真
								口幅	底径	高さ			
8	S 1 南	砂92		近世陶器	皿	瀬戸美濃	志野焼物 鉄絵、長石粉	(12.4)	7.2	2.3	1/3	06154	39-8
9	S1 西	遺構		近世陶器	皿	瀬戸美濃	志野焼物 長石粉	11.6	6.8	3.2	完整	06153	39-9

第 185 図 瓦、陶磁器

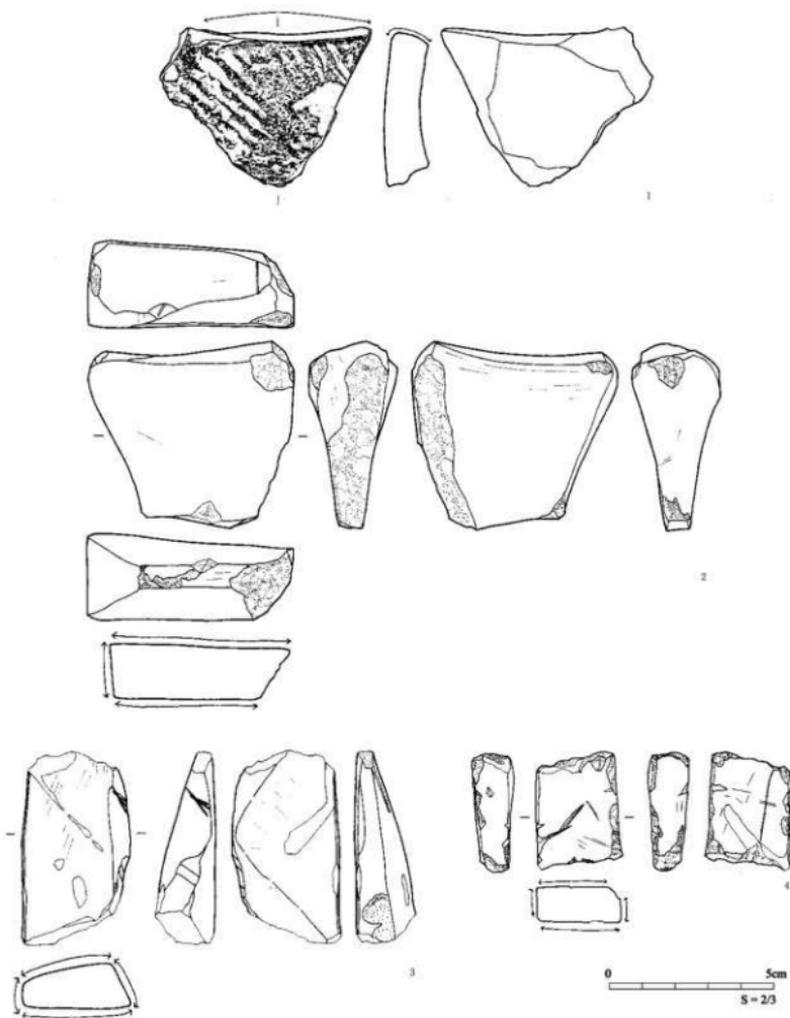


0 3cm
(1) S=1

0 5cm
(1~10) S=2/3

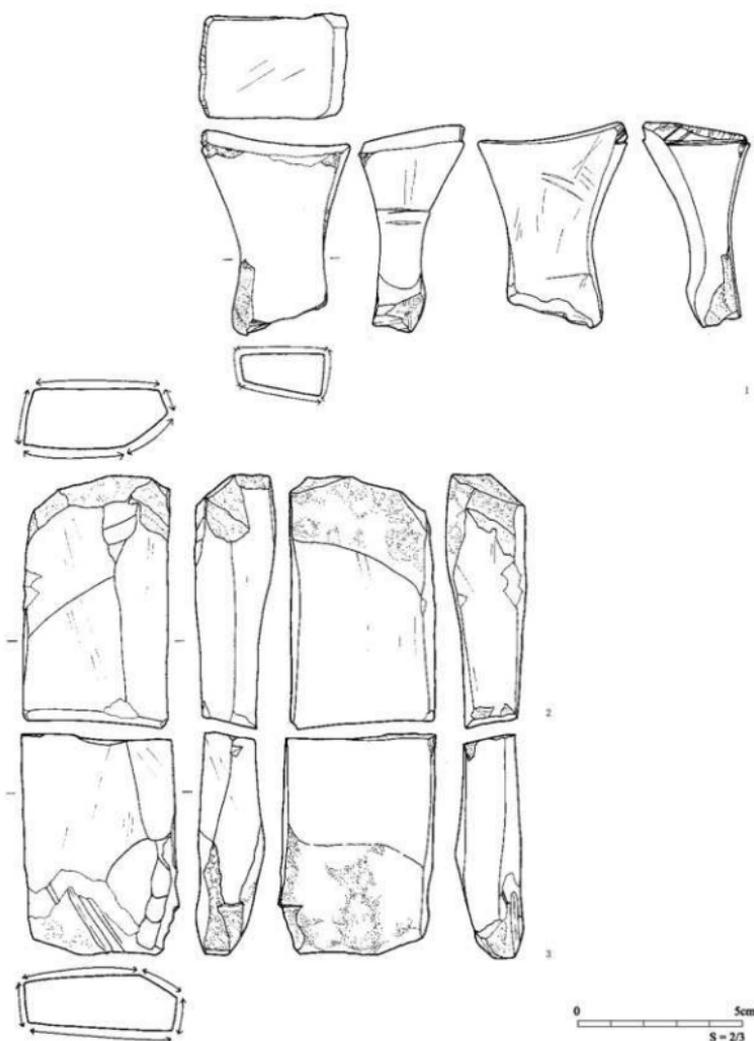
No	区	遺構	層	種類	寸法 [cm・g]				備考	登録No	写真
					長	幅	厚	重			
1	N2中	S210	埋	鉄釘	5.0	0.8	0.5	9.1			06126 40-1
					5.5	0.7	0.5				
2	N8西	S0754	2層	鉄釘	4.0	0.8	0.4	4.9			06136 40-2
					3.1	0.6	0.5				
3	N8西	S755	カマ下付近	鉄釘	3.8	0.8	0.7	6.5	頭部幅：11.0mm	断面断面：方形	06134 40-3
4	N8西	S756	カマ下付近	鉄釘	6.1	0.9	0.5	5.2	断面断面：方形		06135 40-4
5	N6西	S424	礎断面	鉄釘	8.1	0.6	0.4	7.9	頭部幅：12.5mm	断面断面：方形	06133 40-5
6	N9中	遺構		鉄釘	7.8	0.6	0.6	6.7	頭部幅：8.0mm	断面断面：方形	06138 40-6
7	N9中	遺構		鉄釘	5.4	0.6	0.5	5.7	頭部幅：13.0mm	断面断面：方形	06139 40-7
8	N9中	遺構		鉄釘	5.5	0.6	0.6	4.5	断面断面：方形		06137 40-8
9	S1東	遺構		鉄釘	3.7	0.7	0.6	2.2	断面断面：方形		06140 40-9
10	N6西	S424	埋	刀子	2.5	1.2	0.2	2.3			06132 40-10
11	N2南T2	遺構		舌鏡	2.2	2.2	0.1	1.9	既未調査		06155 40-11

第186図 金属製品



No.	区	遺構	層	種類	材質	法量 (cm・g)				形状	砥面数	残存	備考	登録 No	写真
						径	幅	厚	重						
1	N4南	遺構	—	板状砥	須磨器・變	4.8	6.4	1.3	40.2	板状	1	完形	外面に平行タテナ目	O6110	41-1
2	N6西	S1424	墓方埋土	砥石	細粒層状岩	5.7	6.3	2.6	93.0	板状	6	ほぼ完形		O6147	41-2
3	S1南	遺構	—	砥石	細粒層状岩	6.0	3.3	1.4	39.8	板状	4	下端折損		O6149	41-3
4	K2南T1	遺構	—	砥石	細粒層状岩	3.4	2.7	1.1	18.0	板状	4	下端折損		O6152	41-4

第187図 転用砥、砥石(1)



No.	区	遺構	層	種類	材質	法量 (cm・g)				形状	底面数	残存	備考	登録 No	写真
						長	幅	厚	重						
1	S1 南	SI601	埋上層	砥石	粗粒凝灰岩	6.3	4.6	3.1	56.0	直方体	5	下層折損		06151	41-5
2	N8 西	SI755	礎部面	砥石	粗粒凝灰岩	7.7	4.5	2.4	119.0	板状	6	下層折損	3と同一個体	06150	41-6
3	N8 西	SI755	礎方埋上	砥石	粗粒凝灰岩	6.8	4.7	2.0	90.0	板状	5	上層折損	2と同一個体	06148	41-7

第 188 图 砥石 (2)

F. 縄文・弥生土器 (第189図)

表土、遺構確認面などから多数の破片が出土した。小破片が多く図示できるものは少ないが、主なものについて以下に記述する。また、竪穴住居跡、土坑、柱穴などから出土したものもあるが、いずれも混入の可能性が高く、遺構に伴うと考えられるものはない。

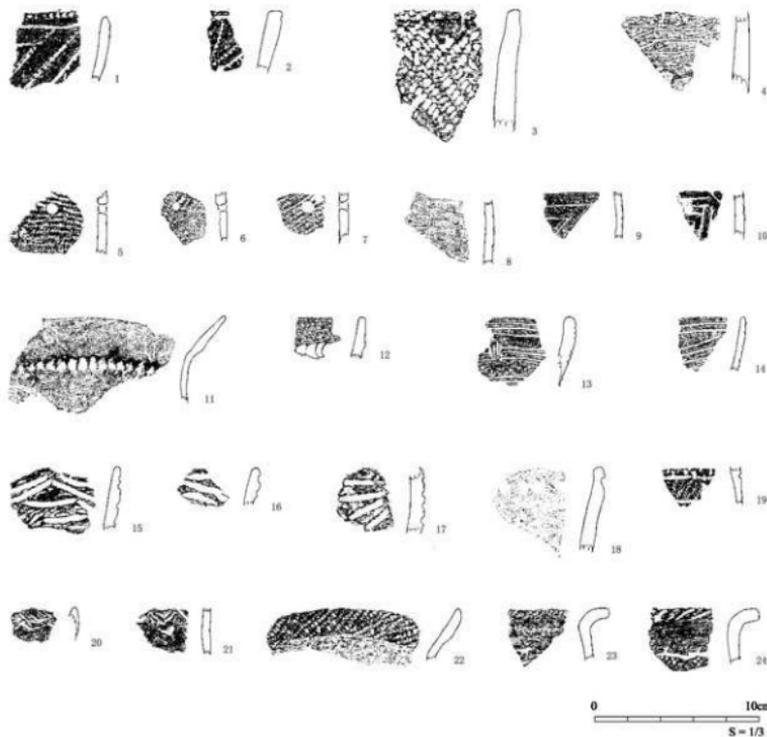
第189図1～7は縄文土器である。1・2は貝殻腹縁文土器で、沈線文と貝殻腹縁文による幾何学文様が施文されている。3は織維土器で、0段多条の羽状縄文が施文されている。4は燃糸文が施文されている。5～7は縄文が施文されており、焼成後に補修孔とみられる穿孔が行なわれている。

第189図8～24は弥生土器である。8～10は円田式土器で、先端の鋭い工具による細い沈線で円弧状や菱形の施文が行なわれている。11～19は天王山式土器の範疇に含まれると考えられる。11・12は頸部に連続する刺突文が施されている。13・14は先端の鋭い工具による細い沈線の施文がみられる。15～17は棒状工具によるやや太めの沈線の施文がみられる。18は棒状工具の先端による列点状の刺突文が施されている。19は交互刺突文が施されている。20・21は波状ないしは鋸歯状の沈線文が施されている。22は口縁部に縄文が施文されている。23・24は口縁部が短く反し、口唇部と体部に燃糸痕文が施文されている。

G. 石器 (第190・191図)

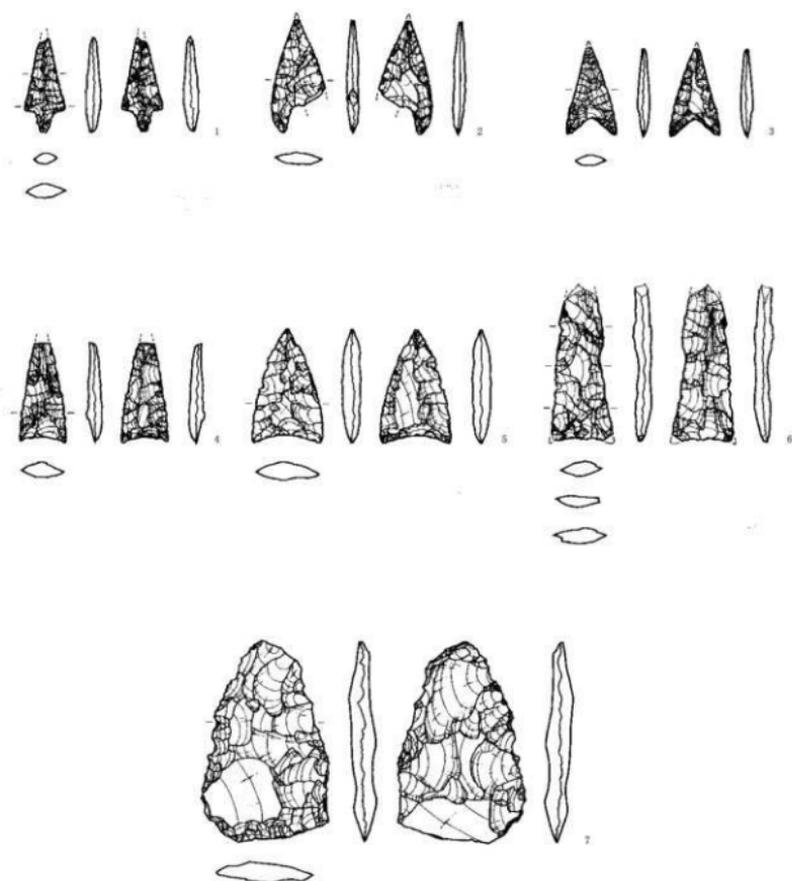
表土、遺構確認面などから60点が出土した。竪穴住居跡、土坑、柱穴などから出土したものもあるが、いずれも混入の可能性が高く、遺構に伴うと考えられるものはない。器種別に見ると石鏃13点、筐形石器1点、二次加工ある剥片4点、石核3点、剥片・碎片39点である。石鏃は凹基無茎の三角形鏃が主体である。二次加工ある剥片はいずれも剥片の切断面に剥離または使用の痕跡が認められるものである。石核はいずれも打面転移を頻繁に行って小形の剥片を剥離するものである。剥片類に母岩を共有するものはなく、遺跡内での石器製作の痕跡は認められない。石材は珪質頁岩43点、玉髓5点、鉄石英3点、珪化凝灰岩・流紋岩・石英岩が各2点、碧玉・珪化木・黒曜石が各1点である。日本海側の珪質頁岩を主体に、玉髓など在地産の石材が利用されている。

第190図1～6は石鏃で、1は玉髓製、2は碧玉製、3・4・6は珪質頁岩製、5は流紋岩製である。1は細身の二等辺三角形の鏃身にV字状の茎部を持つ。2は側縁下部に丸みを持ち、基部にU字状の袢りを持つ。3～6は二等辺三角形の鏃身に逆V字状ないし浅い皿状の袢りを持つ。1・4は先端部に衝突剥離痕がみられる。第190図7は珪質頁岩製の筐形石器で、片面からの連続する剥離で刃部が形成されている。刃部裏面には素材剥片の腹面を残す。第191図1・2は二次加工ある剥片である。1は珪化凝灰岩製で、両側縁に二次加工を加える過程で折損した後、折断面から腹面側に剥離が加えられている。折断面と腹面のなす縁辺には使用による磨減が観察される。2は珪質頁岩製で、剥片の折断面から背面側に剥離が加えられている。第191図3は流紋岩製の分割礫を素材とする石核で、打面転移を頻繁に行なって末端がヒンジ・フラクチャーとなるような詰まりの小形剥片を剥離している。打面はいずれも単一の剥離面からなり、調整剥離は認められない。



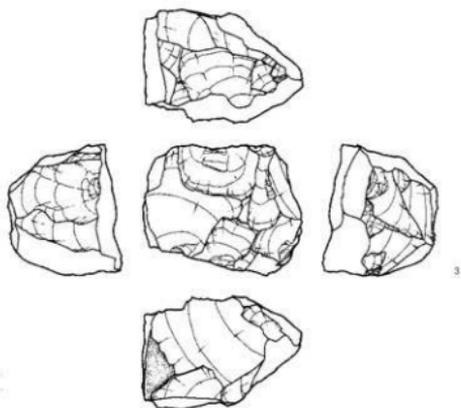
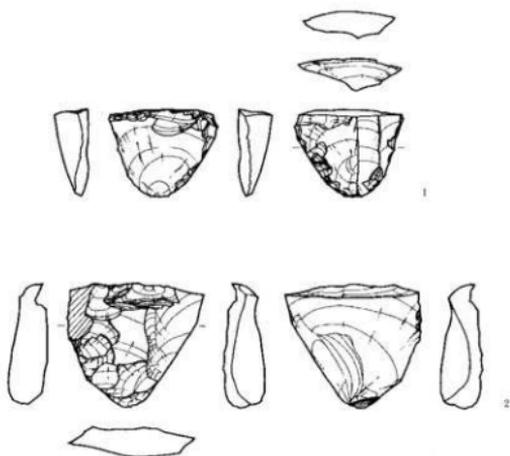
№	区	遺構	層位	種類	部位	特徴	高厚 (mm)	径	写真
1	N8 中	赤土		縄文土器	口縁部	沈線文→乱刻線文・口縁部に柄み	6.0	06174	42.1
2	N8 中	SS554	西方塚土	縄文土器	口縁部	乱刻線文・沈線文	9.0	06178	42.2
3	N8 西	赤土		縄文土器	口縁部	乱刻線文・沈線文・口縁部に横糸状遺文・胎土に輪刺痕	11.0	06171	42.3
4	N4 中	S1701	埴	縄文土器	体部	横糸文	9.0	06181	42.4
5	N2 西	S2223	2層	縄文土器	体部	縄文・横成後外面より穿孔・内面割落	5.0	06184	42.5
6	N2 西	S2223	2層	縄文土器	体部	縄文・横成後外面より穿孔・内面割落	6.0	06185	42.6
7	N2 西	S2223	2層	縄文土器	体部	縄文・横成後外面より穿孔・内面割落	5.0	06186	42.7
8	S1 西	S2	埴	弥生土器	体部	円弧状の沈線文・内凹式	4.0	06165	42.8
9	N4 中	P705	埴	弥生土器	体部	菱形状の沈線文・内凹式	4.0	06188	42.9
10	S1 南	遺構		弥生土器	体部	菱形状の沈線文・内凹式	5.0	06188	42.10
11	N8 西	S1753	1層	弥生土器	口縁部	横部に連続刻突文・胎土に砂粒多量・天王山式	3.0	06176	42.11
12	S1 西	赤土		弥生土器	口縁部	横部に連続刻突文・天王山式	6.0	06167	42.12
13	N4 中	S1701	1層	弥生土器	口縁部	沈線文・天王山式	8.0	06187	42.13
14	N4 中	遺構		弥生土器	口縁部	沈線文・天王山式	4.0	06166	42.14
15	S1 南	遺構		弥生土器	口縁部	縄文→沈線文・天王山式	6.0	06169	42.15
16	N8 西	遺構		弥生土器	体部	沈線文・天王山式	6.0	06179	42.16
17	N2 東	遺構		弥生土器	体部	沈線文・胎土に砂粒多量・天王山式	8.0	06180	42.17
18	N2 東	S201b	1層	弥生土器	口縁部	縄文→刻突文・天王山式	8.0	06170	42.18
19	N2 東	遺構		弥生土器	体部	縄文→沈線文→交互刻突文・天王山式	5.0	06172	42.19
20	N4 中	S1701	埴	弥生土器	口縁部	弧状の沈線文	4.0	06182	42.20
21	N2 南T2	遺構		弥生土器	体部	縦線状の沈線文	4.0	06183	42.21
22	N2 西	S230	1層	弥生土器	口縁部	口縁部に縄文	6.0	06177	42.22
23	N4 中	S1701	1層	弥生土器	口縁部	口縁部外反・口縁部・体部に横糸状遺文	6.0	06173	42.23
24	S1 南	S8615	P1	弥生土器	口縁部	口縁部外反・口縁部・体部に横糸状遺文	6.0	06175	42.24

第 189 図 縄文・弥生土器



No.	区	遺構	層	機能	石材	経緯 (mm・g)				備考	登録No.	写真
						径	幅	厚	重			
1	N9中	S6S38	溝	石鏃	玉髓	28.9	12.3	4.5	1.1	先端部に著明な剥離面	06163	42-23
2	S1南	遺構		石鏃	碧玉	34.7	15.7	3.6	1.6	先端部・基部一部欠損	06161	42-26
3	N2中	S209	掘方埋土	石鏃	綠頁岩	26.9	14.9	3.5	0.9	先端部欠損	06158	42-27
4	N2南T1	遺構		石鏃	綠頁岩	30.0	14.2	4.7	1.7	先端部に著明な剥離面	06193	42-28
5	S1南	遺構		石鏃	瑪瑙岩	34.8	21.4	5.5	3.4		06162	42-29
6	S1西	遺構		石鏃	綠頁岩	48.1	18.5	5.4	4.1	先端部・基部欠損	06159	42-30
7	N2南T2	遺構		整形石鏃	綠頁岩	62.0	38.1	7.6	18.2	刃部裏面に素材層面を残留	06156	42-31

第190図 石器(1)



0 5cm
S = 2/3

No.	区	遺構	層	種類	石材	法量 (mm・g)				備考	登録No.	写真
						長	幅	厚	重			
1	S1 南	S1609	2層	二次加工ある剥片	珪化凝灰岩	27.2	32.6	10.2	6.7	折断面と素材表面のなす縁辺に使用による磨滅	06157	42-32
2	S9 中	遺構		二次加工ある剥片	珪質頁岩	37.6	41.0	11.3	17.0		06160	—
3	S1 西	遺土		石核	流紋岩	39.9	48.9	30.9	75.0	分断面1、打面数5、作業面数4、打面調整なし	06164	42-33

第191図 石器(2)

第5章 考 察

第4章で記載した本遺跡の発掘調査結果を踏まえて、あらためて遺物と遺構について検討を加え、遺構の時期と変遷、遺跡の性格などについて考察する。なお、今回の発掘調査で確認した遺構と遺物は縄文時代から近世までのものがあるが、主体となるのは古墳時代～奈良・平安時代のものである。

1. 遺物

遺物は土器器類が最も多く、須恵器が少量出土した。土器類以外では、瓦、土製品（ミニチュア土器）、石製品（砥石）、金属製品（鉄鏃・刀子）が出土した。これらの大半が古墳時代と奈良・平安時代のものである。また、このほかに縄文・弥生時代の土器・石器、中世・近世の陶磁器などが少量出土した。

以下、主体となる古墳時代～奈良・平安時代の土器類について検討する。はじめに土器類の分類を行い、これをもとに土器群を設定し各土器群の編年的位置づけなどについて検討する。

A. 分類

土器器(非ロクロ調整)、ロクロ土器器(ロクロ調整)、須恵器がある。これらは器形と細部調整によって以下のように細分することができる(第192・193・194図)。土器器には坏・大型坏・器台・高杯・鉢・壺・短頸壺・甌・甕・台付甕がある。ロクロ土器器と須恵器には坏・甕がある。

(a) 土器器

【坏】口縁部や体部の形態、器面調整と黒色処理の有無などから分類できる。内外面に丁寧なヘラミガキ調整が施され、器面に赤彩が施されるか胎土が赤色を呈するもの(A～C類)、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施すもの(D～F類)、内面にヨコナデ調整が施され黒色処理を施さないもの(G～I類)に大別できる。

A：平底で体部と口縁部の境界に強い屈曲をもつ。体部が内湾し口縁部が内湾気味に外傾するもの。内外面に丁寧なヘラミガキ調整の後に赤彩を施すものが多い。

1：器高と口縁部径の割合が1：2を超えないもの。

2：器高と口縁部径の割合が1：2を超えるもの。

B：平底で体部が内湾気味に外傾し、口縁部部がやや内湾するもの。内外面に丁寧なヘラミガキ調整を施し、胎土が赤色を呈する。

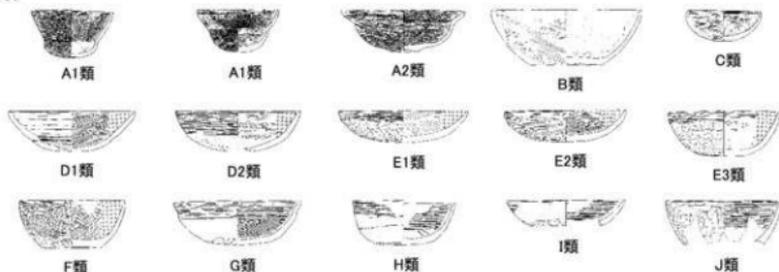
C：丸底で体部が内湾し口縁部がつまみ出されて直立するもの。内外面に丁寧なヘラミガキ調整の後に赤彩を施す。

D：丸底で体部外面に段をもち、口縁部が外傾あるいは外反するもの。外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施し、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。

1：体部外面の下部に明瞭な段をもち、内面には屈曲をもたないもの。口縁部はやや内湾気味に外傾する。

《土師器》

(坏)



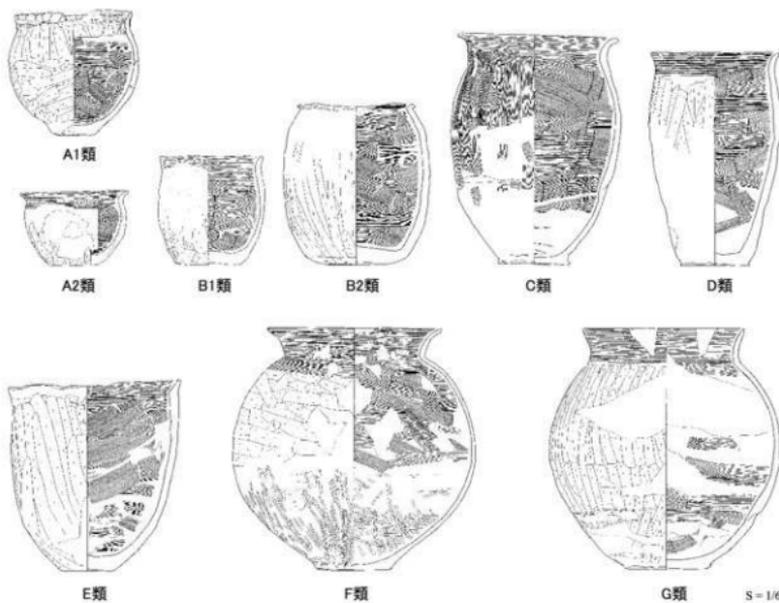
(大型坏)



(鉢)



(甕)



S-1/6

第 192 圖 土師器分類圖

- 2：体部外面の中部に弱い段をもち、内面にも屈曲をもつもの。口縁部は外傾あるいは短く外反する。
- E：丸底あるいは平底気味の丸底で、体部がゆるやかに内湾しながら口縁部にいたるもの。外面の口縁部にヨコナデ調整、体部から底部にかけてケズリ調整を施し、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。
- 1：丸底で半球形を呈するもの。
- 2：丸底で半球形を呈し、外面に粗いミガキ調整を施すもの。
- 3：底部が平底あるいは平底気味の丸底を呈するもの。
- F：平底で体部が直線的に外傾し、口縁端部が内湾するもの。外面にケズリ調整の後にミガキ調整を施し、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。
- G：丸底で体部外面の上位に屈曲をもち、口縁部が短く外反するもの。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部から底部にかけては外面にケズリ調整、内面にヘラナデ調整を施す。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含む。
- H：丸底気味の平底で、体部がわずかに内湾しながら立ち上がるもの。外面に輪積み痕を明瞭に残し、口縁部にヨコナデ調整、底面にケズリ調整を施す。内面にはヨコナデ調整を施す。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含む。
- I：丸底で体部がわずかに内湾しながら口縁部にいたるもの。口縁部から体部にかけては内外面ともヨコナデ調整を施し、底部外面にはケズリ調整を施す。胎土がきめ細かく、明るい赤褐色を呈する。
- J：体部がわずかに内湾しながら立ち上がるもの。底部の形態は不明である。外面は底部から口縁部までケズリ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施す。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含む。

【大型環】環のうち口径が20cmを超えるもの。

- A：平底気味の丸底で、体部が緩やかに内湾しながら口縁部にいたるもの。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部から底部にかけては外面にケズリ調整、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。

【器台】いわゆる粗製器台がある。

- A：わずかに内湾しながら外傾し、外上方にひらく受部をもつもの。受部と脚部の間には貫通孔をもつ。器壁が厚手で、内面にヘラナデ調整、外面にハケメ調整を施す。

【高杯】環部と脚部の形態により分類できる。

- A：わずかに内湾しながら外傾し、外上方にひらく環部をもつもの。環部のみのため全体の器形は不明である。
- 1：環部と脚部の接合部付近に稜をもつもの。外面にハケメ調整、内面にヘラミガキ調整を施し、胎土が赤色を呈する。
- 2：環部と脚部の接合部に稜をもたないもの。内外面に丁寧な縦位のヘラミガキ調整の後に赤彩を施す。
- B：上半部が中実で、下半部が外反しながらひらく脚部をもつもの。外面に丁寧な縦位のヘラ

ミガキ調整を施し、赤彩を施すものがある。脚部のみのため全体の器形は不明である。

C：短く八の字状にひろく脚部をもつもので、内面にミガキ調整の後に黒色処理を、外面にケズリ調整を施す。脚部のみのため全体の器形は不明である。

【鉢】器面調整はヘラナデ調整が主体である。

A：口径と器高がほぼ同じで、体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや強く内湾するもの。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部は外面にハケメ調整の後にヘラナデ調整、内面にヘラナデ調整を施す。平底で底面に木葉痕をもつ。

B：平底で体部が直線的に外傾し、口縁部にヨコナデ調整を施すもの。底面に木葉痕をもつ。

【壺】短い単純口縁をもつ小型壺と、口縁部が外上方に長くひろく直口壺、広口でごく短い口縁をもつものとに分類できる。

A：平底で体部が球形を呈し、外傾する短い単純口縁をもつもの。外面にヘラミガキ調整を施し、赤彩を施すものがある。

B：体部が球形を呈し、外上方に長くひろく口縁部をもつ直口壺である。内外面に丁寧なヘラミガキ調整の後に赤彩を施す。

C：体部が球形を呈し、広口でごく短い口縁をもつもの。体部の外面に粗いヘラミガキ調整を施し、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施す。

【瓶】鉢形で多孔式のものと同単孔式のもの、長胴形で無底式のものに分類できる。

A：鉢形で折り返し口縁をもつもの。口縁部外面にはユビオサエ痕がみられる。

1：多孔式のもの。器面調整はハケメ調整が主体である。

2：単孔式のもの。器面調整はヘラケズリ調整が主体である。

B：長胴形で無底式のもの。器面調整は縦位のヘラケズリ調整が主体である。

【甕】口径と器高の比率、器形によって鉢形・長胴形・球胴形に大別できる。器高が20cmを超えない小型のものと、20cmを超える大型のものがある。

A：小型で口径に対して器高が低い鉢形のもの。頸部がくびれて口縁部が外傾あるいは外反する。器面調整は外面にケズリ調整、内面にヘラナデ調整を施す。

1：胴部最大径に対して底径が小さく、体部がやや球胴を呈するもの。頸部から口縁部にかけてユビナデあるいはユビオサエ痕がみられる。

2：胴部下半が外傾し、上半が直立気味に立ち上がるもの。頸部がくびれて口縁部が外傾あるいは外反する。

B：小型で口径と胴部径がほぼ同じ円筒形を呈するもの。器壁が厚く器面調整は粗雑である。

1：頸部がわずかにくびれて口縁部が外傾するもの。

2：頸部が明瞭にくびれて口縁部が短く外反するもの。

C：長胴形で胴部最大径を中位にもつもの。頸部がくびれて口縁部が外反する。外面にハケメ調整を施し底面に木葉痕がみられる。

D：長胴形で胴部最大径を上位にもつもの。頸部がくびれて口縁部が外傾あるいは外反する。外面に縦位のケズリ調整を施し底面に木葉痕がみられるものがある。

E：長胴形で胴部最大径が頸部との境界となるもの。頸部が屈曲して口縁部が外傾する。外面

に縦位のケズリ調整を施し底面に木葉痕がみられるものがある。

- F：球胴形を呈するもので、頸部がくの字状に屈曲して口縁部が外反する。器面調整はヘラケズリ調整・ヘラナデ調整・ハケメ調整の各種があり、粗いミガキ調整を施すものが多い。
- G：球胴気味の長胴形を呈するもので、口縁部が直立し、中ほどから外反する。口縁部は内外面ヨコナデ調整で、体部外面に縦位のヘラケズリ調整を施した後に粗いミガキ調整を施す。胎土が赤褐色を呈する。

【台付裏】小型の裏に短脚が付くもの。

- A：八の字状に短くひろく脚部をもつもので、ユビオサエ痕がみられる。脚部のみのため全体の器形は不明である。

(b) ロクロ土師器

【 坏 】平底で、体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がそのまま外傾あるいはわずかに外反する。内面はヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。底部の切り離し方法とその後の再調整の有無によって分類できる。

- A：回転系切りの後に再調整を施さないもの。
- B：回転系切りの後に手持ちヘラケズリ調整を施すもの。
- C：切り離し方法が不明で回転ヘラケズリ調整を施すもの。
- D：静止系切りの後に手持ちヘラケズリ調整を施すもの。
- E：切り離し方法が不明で手持ちヘラケズリ調整を施すもの。

【 裏 】

- A：口径に対して器高が低い鉢形のもの。底面には網代痕がみられる。
- B：長胴形で胴部最大径を中位にもつもの。底部の切り離し方法は不明で手持ちヘラケズリ調整を施す。
- C：長胴形で胴部最大径が頸部との境界となるもの。底部の切り離し方法は不明で胴下部に縦位のヘラケズリ調整を施す。
- D：上半部が不明で底部の切り離しが回転系切りによるもの。胴下部から底部外周に手持ちヘラケズリ調整を施す。

(c) 須恵器

【 坏 】平底で、体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がそのまま外傾あるいはわずかに外反する。底部の切り離し方法とその後の再調整の有無によって分類できる。

- A：ヘラ切りの後に再調整を施さないもの。
- B：回転系切りの後に手持ちヘラケズリを施すもの。
- C：切り離し方法が不明で回転ヘラケズリ調整を施すもの。

【高台坏】付高台をもつもので、坏部と高台部の形態により分類できる。

- A：坏体部に稜をもち、内面にも屈曲をもつもので、口縁部が外反する。底部の切り離し方法が不明で、高台部は直線的に外傾する。
- B：坏体部が直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるもの。底部の切り離し方法が不明で、高台部は八の字状に外反する。

《土師器》

(甌)



A1類



A2類



B類

(台付甌)



A類

(高杯)



A1類



A2類



B類



C類

(器台)



A類

(壺)



A類



B類



C類

《ロクロ土師器》

(杯)



A類



B類



C類



D類



E類

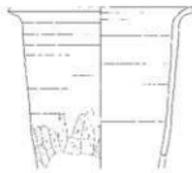
(甕)



A類



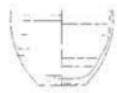
B類



C類



D類



S = 1/6

第 193 図 土師器・ロクロ土師器分類図

【 蓋 】

A：中央がやや突出するリング状のつまみをもち、天井部と体部がゆるやかに屈曲し、口縁端部を短く折り返すもの。

【 甕 】 部分的な資料が多く全体の分かるものはない。口縁部の形態などから分類できる。

A：頸部に櫛描波状文をもつもので、口縁部の形態により分類できる。

1：口縁部が直線的に外傾するもの。口縁部の外面に隆帯をもつ。

2：口縁部がゆるやかな屈曲をもって外反するもの。口唇部につまみ出しをもつ。

B：体部に平行タタキ目をもつもので、口縁部がゆるやかに外反するもの。

C：上半部が不明で体部に平行タタキ目をもつもの。

《須恵器》

(杯)



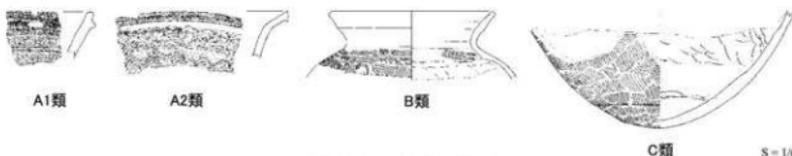
(高台杯)



(蓋)



(甕)



第 194 図 須恵器分類図

S=1/6

B. 土器群の設定と編年の位置づけ

前項で分類した土器類を遺構ごとにまとめると第2表ようになる。全体的な器種構成などを検討することが困難な遺構が多いが、これらの中で、ある程度まとまりをもった遺構出土土器として挙げられるのは、SI1・SI91・SI210・SI231・SI424・SI601・SI621・SI701・SI753 竪穴住居跡出土土器である。以下、これらの遺構出土土器を中心にしながら器種構成と主に坏類の特徴から土器群を設定し、各土器群の編年の位置づけを検討する。なお、各竪穴住居跡出土土器のうち、堆積土などの出土遺物で他の床面・貯蔵穴などの出土遺物との様相が異なり、層位的に遺構外からの混入と考えられるものについては検討の対象から除外する。

第1群土器 (第195図・SI222・SI225・SI230・SI231・SI701・SK628 出土土器)

器種構成には、土師器杯A1・A2・B類、甕A1・F類、甕A1・A2類、高杯A1・A2・B類、器台A類、壺A・B類が含まれる。第1群土器については、器種構成とその形態の特徴から古墳時代前期の塩釜式(氏家1957)の範疇に含まれるものと考えられる。宮城県内における当該期の土器編年については、

辻秀人により細分が図られている(辻 1994・1995)。塩釜式は辻編年Ⅱ～Ⅲ期に該当し、Ⅱ期では多様な「小型鉢」が存在し、小型器台との緩やかなセット関係をもつものに対して、Ⅲ期では小型器台の上に乗せることを前提に体部を小型で球形に近い形とする「小型丸底鉢」と小型器台とのセット関係が成立するとされている。第1群土器に主体的に組成する坏A1類は辻編年における器種分類で「鉢G(小型丸底鉢)」とされたものに該当する。また、高杯B類は辻編年の「高杯F」に該当し、脚上半部が中実、下半部が外反しながらひろくもので、辻編年Ⅲ期に広く認められている。器台A類は辻編年の「器台F」に該当する粗製器台で、辻編年Ⅲ-3期に類例が知られている。以上のことから、第1群土器は古墳時代前期の塩釜式期のもので、辻編年Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

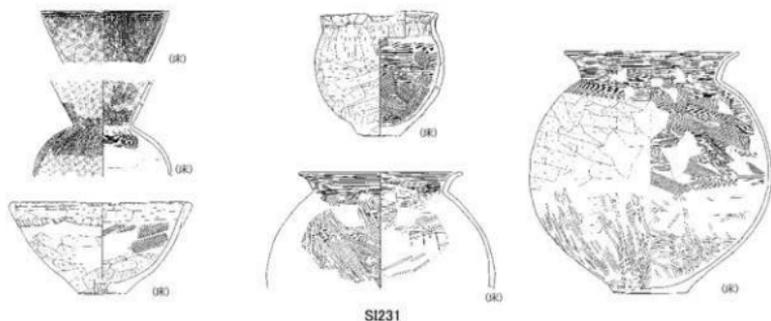
第2群土器(第195図・SI753出土土器)

器種構成には、土師器環D1・D2・G類、台付甕A類が含まれる。第2群土器については、土師器環の形態的特徴から古墳時代後期の栗田式(氏家 1957)の範疇に含まれるものと考えられる。宮城県内における古墳時代後期から奈良時代の土器編年については、村田晃一により細分が図られている(村田 2007)。坏D1・D2類は村田編年における器種分類で「有段丸底坏(坏B・C)」とされたものに該当し、村田編年2～4段階で坏の主要器種として挙げられている。台付甕A類は村田編年の「甕D」に該当し、2～4段階に認められている。有段丸底坏の体部外面の稜に着目すると1～3段階が顕著で、4段階以降は前者ほど目立たなくなるという。また、体部内面の屈曲は3段階まではほとんどのものに認められるが、4段階になると屈曲をもつものともたないものが共存し、5段階以降は屈曲が認められなくなると指摘されている。こうした特徴から、坏D1・D2類は村田編年4段階に該当する。ところで、坏G類は仙台市郡山遺跡1期官衙に伴うSX2093出土土器(仙台市教委 2004)の中に類例が認められ、いわゆる関東系土師器と考えられる。郡山遺跡SX2093出土土器は7世紀後半頃に位置づけられている。以上のことから、第2群土器は村田編年4段階に位置づけられ、年代的には7世紀中頃～後半と考えられる。

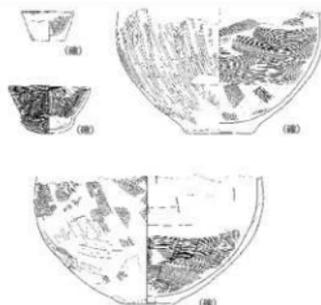
調査区	遺構	第1群土器												第2群土器											
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J				
SI	SI-001																								
	SI-002																								
	SI-003																								
	SI-004																								
	SI-005																								
	SI-006																								
	SI-007																								
	SI-008																								
	SI-009																								
	SI-010																								
SI1	SI1-011																								
	SI1-012																								
	SI1-013																								
	SI1-014																								
	SI1-015																								
	SI1-016																								
	SI1-017																								
	SI1-018																								
	SI1-019																								
	SI1-020																								
SI2	SI2-021																								
	SI2-022																								
	SI2-023																								
	SI2-024																								
	SI2-025																								
	SI2-026																								
	SI2-027																								
	SI2-028																								
	SI2-029																								
	SI2-030																								
SI3	SI3-031																								
	SI3-032																								
	SI3-033																								
	SI3-034																								
	SI3-035																								
	SI3-036																								
	SI3-037																								
	SI3-038																								
	SI3-039																								
	SI3-040																								

第2表 各遺構出土土器一覧(表中のアミカケは床面あるいは貯蔵穴などの出土土器)

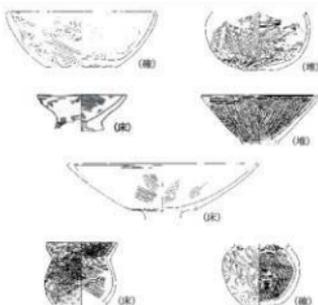
第1群土器



SI231



SI225



SI701



SI230



SK628



SI811



SI222

S = 1/6

第2群土器



SI753

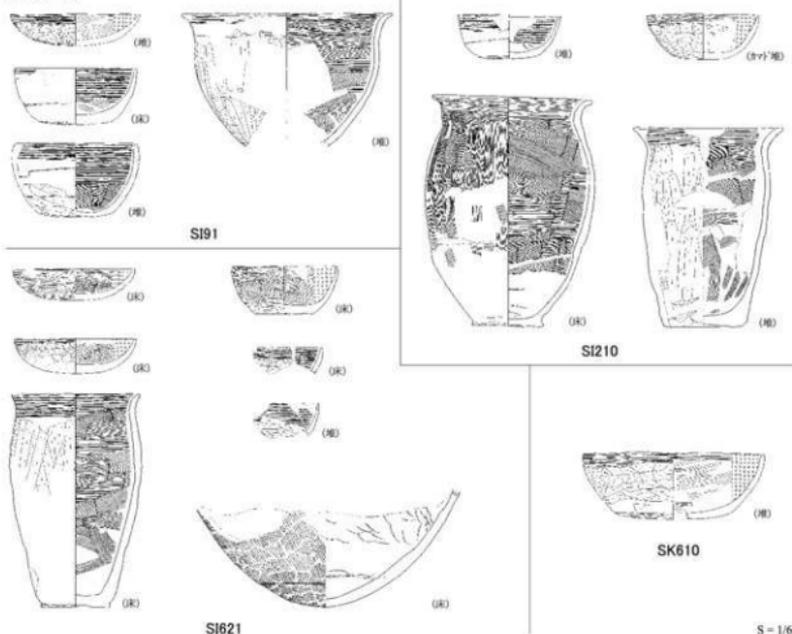


SI603

S = 1/6

第195図 第1群土器・第2群土器

第3群土器



第 196 図 第 3 群土器

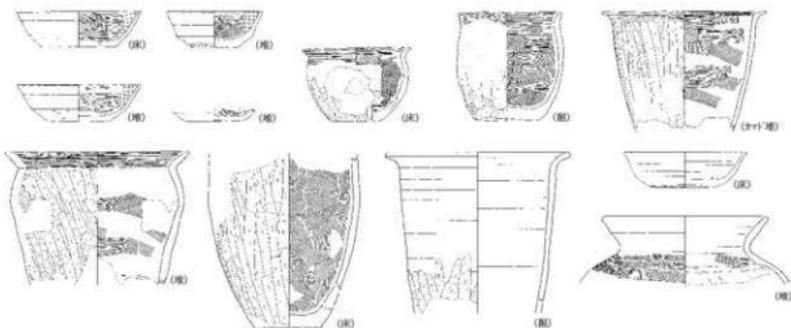
第 3 群土器 (第 196 図・SI91・SI210・SI621・SI634 出土土器)

器種構成には、土師器坏 E1・E2・E3・F 類、鉢 B 類、甕 A2・C・D 類が含まれる。第 3 群土器については、器種構成とその形態的特徴から国分寺下層式（氏家 1967・桑原 1976）の範疇に含まれるものと考えられる。坏 E1・E2・E3 類は村田編年の「坏 G」に該当し、村田編年 7 段階の主要器種として挙げられている。また、坏 F 類は村田編年の「碗 B」に該当し、4～7 段階に認められている。ところで、坏 H 類は蔵王町堀の内遺跡 11 号住居跡出土土器（蔵王町教委 1997）の中に類例が認められ、いわゆる関東系土師器と考えられる。堀の内 11 号住居跡出土土器は村田編年 6 段階に該当すると考えられる。村田編年 6 段階は 8 世紀前半、7 段階は 8 世紀中頃～後半と位置づけられており、第 3 群土器については 8 世紀前半～中頃の年代を考えておきたい。

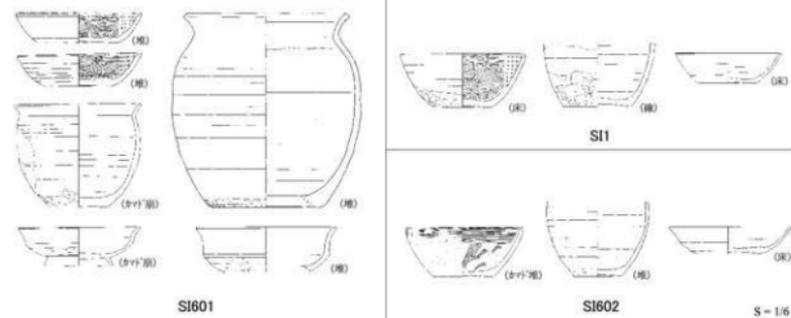
第 4 群土器 (第 197 図・SI1・SI424・SI601・SI602・SI755・SK759)

器種構成には、ロクロ土師器坏 C・D・E 類、甕 A・B・C・D 類、土師器甕 A2・B1・D・E 類、鉢 C 類、須恵器坏 A・B 類、高台坏 A 類・甕 B 類が含まれる。第 4 群土器については、ロクロ調整の土師器坏・甕を中心に構成されることから、表杉ノ入式（氏家 1957・1967）の範疇に含まれる。表杉ノ入式の年代的位置づけは 8 世紀末から 12 世紀頃と幅広いが、第 4 群土器についてはロクロ土師器坏の底部切り離し後に再調整が施されることや、ロクロ・非ロクロ調整の甕を伴うことなどが特徴

第4群土器



SI424



第197図 第4群土器

として挙げられる。これと共通する特徴をもつ資料としては8世紀末～9世紀初頭に位置づけられている利府町郷楽遺跡105A号住居跡（宮城県教委ほか1990）、栗原市大境山遺跡25号住居跡（瀬峰町教委1983）出土土器、9世紀前半～中葉に位置づけられている利府町郷楽遺跡10号住居跡（宮城県教委ほか1990）、大河原町台ノ山遺跡8号住居跡（宮城県教委1980）出土土器などがある。このことから、第4群土器については8世紀末～9世紀中葉頃の年代を考慮しておきたい。

2. 遺構

今回の調査で確認した遺構は、竪穴住居跡52軒、掘立柱建物跡29棟、柱列跡10条、井戸跡1基、落し穴状土坑39基、土坑71基、大溝跡6条、溝跡44条、円形周溝跡1基、性格不明遺構1基、柱穴多数である。以下、これらの各調査区における遺構確認状況について概括した後遺物の検討結果などをもとに遺構期を設定し、本遺跡の遺構群の変遷について考察する。

A. 遺構の確認状況

本遺跡の立地する丘陵は盆地北側から中央部に向かって南東方向に延びており、丘陵の西斜面は比較的な急な傾斜をもち、東斜面および丘陵先端部の南斜面ではきわめてなだらかな傾斜をもって盆地底面と接している。発掘調査は、道路・水路・田面の整備によって遺構面が削平される範囲を主な対象として実施した。このため、遺跡範囲の全域に東西・南北方向の調査区が配置されたことになる。以下、各調査区における遺構確認状況について述べる。

S1区

丘陵の先端部で、遺跡範囲の南端部に位置する。東・南側はきわめてなだらかに傾斜して黒ボク土が厚く堆積するのに対し、西側はローム層が露出し比較的な急な傾斜となる。遺構は竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡9棟、柱列跡1条、落し穴状土坑14基、土坑23基、溝跡5条、性格不明遺構1基のほか、柱穴多数が確認された。竪穴住居跡と掘立柱建物跡は東斜面の中腹から辺縁部にかけて分布する。斜面の上部から丘陵の尾根筋にかけてもこれらが分布していた可能性があるが、後世の削平を受けており確認できなかった。落し穴状土坑は調査区北西部の丘陵の尾根筋から西斜面と、調査区南東部の丘陵南端部の緩斜面にややまとまって確認された。

S2区

丘陵中腹部の尾根筋から北東斜面に位置する。全体に削平を受けており、黒ボク土は残存せず、ローム層が露出している。遺構は落し穴状土坑1基のみが確認された。

S3区

丘陵中腹部を東西に横断する調査区である。丘陵の尾根筋から東斜面上部にかけてはS1・S2区と同様に黒ボク土は残存せず、ローム層が露出している。東斜面の中腹には南東方向から小規模な沢状の地形が延びている。遺構は竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡5棟、落し穴状土坑3基、土坑14基、溝跡15条のほか、柱穴多数が確認された。竪穴住居跡は調査区西部の丘陵東斜面上部と中腹部に各1軒、東部の丘陵東縁部に1軒が分布する。調査区中央部の東斜面には溝跡と掘立柱建物跡が分布している。落し穴状土坑は調査区西部の丘陵尾根筋から東斜面上部にまとまって分布している。

N1区

丘陵東斜面の中腹部を南北に縦断する調査区である。調査区南部は切土によりローム層が露出し、遺構は確認できなかった。調査区北側は黒ボク土が堆積する南向き斜面で、遺構は竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、落し穴状土坑1基、土坑1基、溝跡1条、少数の柱穴が確認された。

N2区

丘陵を東西に横断する調査区である。調査区西部は丘陵頂部の平坦面にあたり、上部は削平によりローム層が露出しているが、東へ行くにつれて漸移層と黒ボク土が堆積している。調査区東部は東向き斜面で、黒ボク土が厚く堆積する。N1区と交差する付近の丘陵中腹部には南東方向から小規模な沢状の地形が延びている。遺構は竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡6棟、柱列跡3条、落し穴状土坑8基、土坑14基、大溝跡3条、溝跡11条のほか、柱穴多数が確認された。また、このほかにN2南区の遺構確認調査では竪穴住居跡10軒、溝跡13条などが確認されている。

遺構の多くは調査区西部の丘陵頂部から東斜面の上部にまとまって分布し、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡6軒などが密集する。落し穴状土坑も同様の範囲に分布がみられる。沢状の地形を挟ん

だ調査区東部の丘陵東縁部には竪穴住居跡 2 軒が分布する。この沢地に近い場所に SD206 大溝跡が南北方向に延びている。後述の N5 区に位置する SD354 大溝跡と接続していると考えられ、延長 90m 以上となる。また、調査区西部から南側にかけての平坦面には北辺約 40m、東辺約 75m、西辺約 70m、南辺約 57m の不整形のプランとなる SD228a・b 大溝跡による区画が位置する。この大溝跡はほぼ同一のプランを踏襲する形で二時期の変遷が認められ、さらにこれに先行して SD228a・b の南辺部分を通して東西方向に 70m 以上延びる SD801 大溝跡が位置している。N2 南区で実施した SD228a・b による区画内部の遺構確認調査では、時期不明の竪穴住居跡などが確認された。

N 3 区

丘陵中腹の西斜面に位置する。全体に削平を受けており、遺構は確認されなかった。

N 4 区

丘陵の東縁部に位置する。南東方向と東方向から入る二つの小規模な沢によって開析され、小規模な舌状丘陵を形成している。丘陵の上部は若干の削平を受けて漸移層が露出しているが、斜面下部には黒ボク土およびその二次堆積層がみられる。遺構は丘陵先端部の東斜面に竪穴住居跡 1 軒、柱穴列 1 条、落し穴状土坑 2 基のほか、柱穴多数が確認された。

N 5 区

丘陵東斜面を南北に縦断する調査区である。N4 区に東から入る小規模な沢が本調査区南部で屈曲して北西方向に延びる。このため本調査区の大半は埋没した沢地上に位置し、黒ボク土およびその二次堆積層がみられる。遺構は大溝跡 1 条、溝跡 1 条、落し穴状土坑 2 基、少数の柱穴が確認された。

N 6 区

丘陵の頂部を東西に横断する調査区である。西部は丘陵頂部の平坦面にあたり、漸移層およびローム層が露出している。東部は N5 区に入る小規模な沢に向かって緩やかに傾斜し、黒ボク土の堆積がみられる。遺構は東斜面の上部から中腹部で竪穴住居跡 1 軒、掘立柱建物跡 6 棟、柱列跡 3 条、井戸跡 1 基、落し穴状土坑 2 基、溝跡 2 条、円形周溝跡 1 基のほか、柱穴多数が確認された。

N 7 区

丘陵の東斜面に位置する。全体に削平を受けており、遺構は確認されなかった。

N 8 区

丘陵の付け根部分を東西に横断する調査区である。ほぼ平坦であるが、削平を受けており漸移層およびローム層が露出している。調査区東部は東向きの緩斜面となる。遺構は調査区西部の平坦面を中心に竪穴住居跡 3 軒、落し穴状土坑 4 基、土坑 1 基、大溝跡 1 条、少数の柱穴が確認された。

N 9 区

丘陵の付け根部分から西縁部に位置する。南西向きの傾斜のある斜面となっており、斜面上部ではローム層が露出している。遺構は斜面中腹部を中心に竪穴住居跡 4 軒、掘立柱建物跡 2 棟、柱列跡 1 条、落し穴状土坑 2 基、土坑 4 基、溝跡 6 条のほか、柱穴多数が確認された。

N 10 区

丘陵の東斜面上部を南北に縦断する調査区である。調査区北部は N6 区から延びる平坦面で、ローム層が露出している。調査区南部は N2 区から続く小規模な沢の先端付近にあたり、黒ボク土がみられる。遺構は北部の平坦面を中心に竪穴住居跡 2 軒、柱列跡 1 条、土坑 1 基、少数の柱穴が確認された。

B. 遺構期の設定

前述のように、今回の調査で出土した遺物のうち主体を占める古墳時代と奈良・平安時代の土器類については、古墳時代前期の埴笠式で辻編年Ⅲ期の第1群土器、栗罎式で村田編年4期の第2群土器(7世紀中頃～後半)、国分寺下層式で村田編年7段階の第3群土器(8世紀中頃)、表杉ノ入式の第4群土器(8世紀末～9世紀中葉)に分けられた。これをもとにして、以下のように本遺跡における遺構期を設定する。なお、縄文時代～弥生時代の土器・石器類が表土や基本層などから出土しているが、これらを伴う遺構は確認されなかった。

A期(縄文時代)

S1区 の SK29・SK30・SK33・SK38・SK612・SK613・SK617・SK620・SK622・SK627・SK637・SK640・SK644、S2区 の SK151、S3区 の SK92・SK93・SK94、N1区 の SK308、N2区 の SK218・SK219・SK216・SK217・SK229・SK238・SK250・SK258、N5区 の SK351・SK352、N6区 の SK419・SK401・SK409、N8区 の SK756・SK757・SK760・SK761、N9区 の SK563・SK566 落し穴状土坑によって構成される。いずれの遺構にも遺物は伴っていないため、その時期は明確にしえないが、黒ボク土の上面から掘り込まれているものがあること、遺構の性格から考えて集落と同時期に構築されることはないと思われることなどから、後期旧石器時代以降でB期の集落が形成される以前、縄文時代～弥生時代のある時期に機能したものと考えられる。さらに、後述するように、落し穴状土坑の形態的特徴と配置状況などからみて、これらの落し穴状土坑群は縄文時代中期～後期に位置付けられる可能性が考えられる。

B期(古墳時代前期埴笠式期・第1群土器)

N2区 の SI212・SI222・SI225・SI230・SI231、N4区 の SI701 竪穴住居跡などによって構成される。このうちN2区の竪穴住居跡は丘陵平坦面にまとまって分布し、住居の方位をそろえている。この付近で確認されたSI209・SI223についても、その位置や方位からこれらと同一の住居群を形成していたとみられることや、堆積土中より出土した土器器破片が第1群土器に該当することから当該期に属すると考えられる。

C期(7世紀中頃～後半・第2群土器)

S1区 の SI603、N2区 の SI259、N8区 の SI753 竪穴住居跡などによって構成される。

D期(8世紀前半～中頃・第3群土器)

S1区 の SI621・SI634、S3区 の SI91、N2区 の SI201a・bとSI210、N9区 の SI554a・b・c 竪穴住居跡などによって構成される。また、N2区 の SB235a・b 掘立柱建物跡とSB251a・b 掘立柱建物跡、SD228a・b 大溝跡はそれぞれ2時期の変遷をもち、方角もそろえていることから相互に意識した立地で同時期に機能していた可能性がある。SD228a・b 掘立柱建物跡出土土器は破片資料であるが、第3群土器に相当する。また、柱穴掘方埋土からも破片資料ではあるが第3群土器に相当するものが出土している。このことから、これらの遺構はD期に位置づけられる可能性が考えられる。さらに、N2区 の SD206 大溝跡およびこれに接続するとみられるN5区 の SD354 大溝跡についても、規模・形状と堆積土中の遺物の特徴などからD期に位置付けられる可能性がある。また、遺物の特徴が不明なものSD228a・b 大溝跡に先行するSD801 大溝跡についても、SD228a・bの南辺と一致していることやその規模・形状などから、ごく近接した時期のものとしてD期に位置付けて大過ない

ものとみられる。なお、SD801 大溝跡がSD206・SD354 大溝跡とコーナー部を形成して接続していた可能性も考えられるが、接続部と推定される付近は削平を受けており不明である。

E期（8世紀末～9世紀中葉・第4群土器）

S1区のSI1・SI601・SI602・SI609・SI645、N6区のSI424、N8区のSI755 竪穴住居跡などによって構成される。SI1 竪穴住居跡と重複関係にあり、これに先行するSI9 竪穴住居跡は、カマドが東壁に付設され、焚口部を凝灰岩切石で構築することからSI1 竪穴住居跡に近接した時期のものと考えられる。また、SI9 竪穴住居跡で出土したB2類の土器器臺は白石市植田前遺跡2号溝跡（宮城県教委1981）でロクロ土器器環と共存していることから、E期に位置づけられると考えられる。このほか、SI2 竪穴住居跡についてもSI1・9 竪穴住居跡の付近に位置し、同様に東壁にカマドが付設されていることや堆積土中より内面に黒色処理を施すロクロ土器器環の破片が出土していることからE期に位置づけられると考えられる。

その他の遺構について

以上のほか、土器類の破片資料あるいは竪穴住居の構造などからみて、N2区のSI201a 竪穴住居跡はB期またはC期、S1区のSI633、N2区のSI261、N9区のSI553 竪穴住居跡はB期またはそれ以降、S1区のSI633 竪穴住居跡はD期またはそれ以降と考えられるが、明確な帰属時期については不明である。

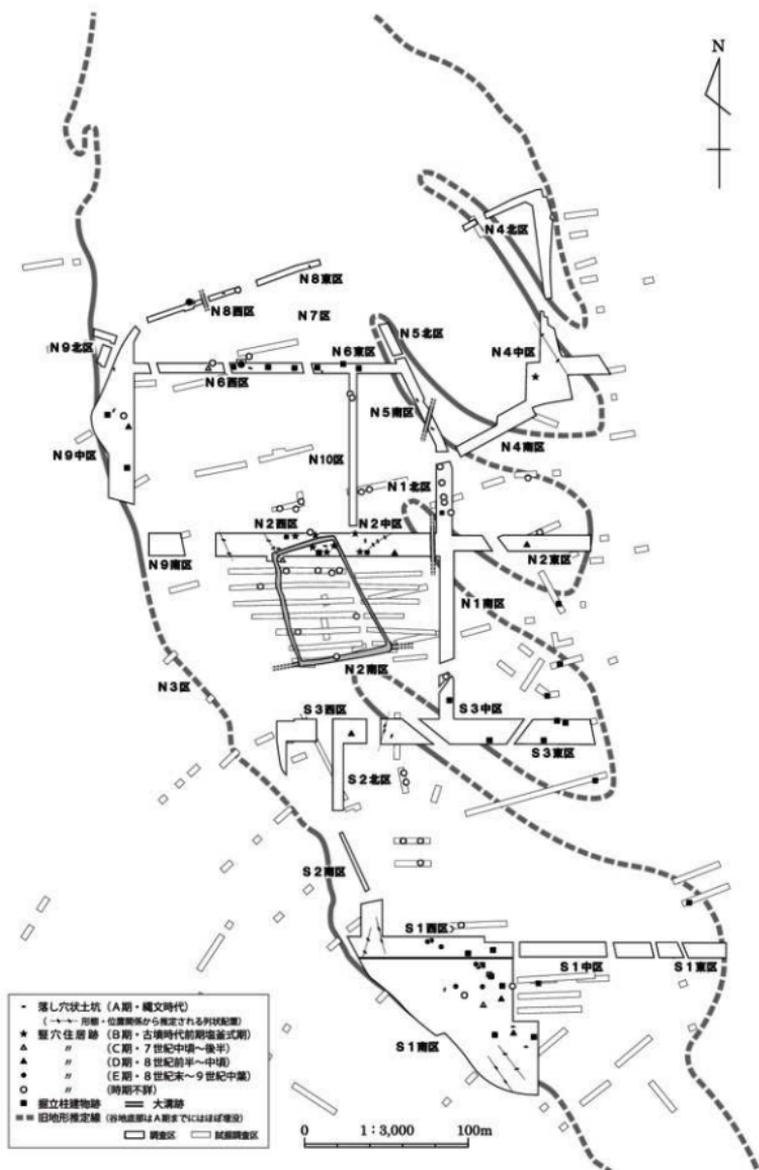
また、上述した以外の掘立柱建物跡については出土遺物に乏しく、明らかに古代に遡ると考えられるものは確認できなかった。S1区のSB615 掘立柱建物跡は柱穴埋土より近世陶磁器の破片が出土しており、近世以降のものと考えられる。また、これと隣接するSB650・SB657・SB655 掘立柱建物跡については、SB615 掘立柱建物跡と方角をそろえていることから相互に意識した立地で同時期に機能していた可能性が考えられる。同様に、S3区SB66・SB68 掘立柱建物跡とSD55 溝跡についても相互に意識した立地で同時期に機能していた可能性が考えられる。このほかの掘立柱建物跡についても、建物の構造および柱穴の形状と規模などからみて、多くは中～近世に帰属するものと考えられる。本遺跡の東側に位置する蔵王町車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡（蔵王町教委2006）では掘立柱建物跡と区画溝などからなる近世の屋敷跡が確認されており、本遺跡も同時期の屋敷地として利用されていた可能性が考えられる。

C. 遺構の分布と特徴

ここでは、遺物の検討結果などから設定したA期～E期までの各遺構期の遺構の立地と分布の状況（第198図）、および遺構の特徴について述べる。

A期（縄文時代）

遺構は落し穴状土坑に限られる。丘陵の尾根筋から東側・南側の緩斜面と湿地際にかけて広範囲に分布する。調査区の制約から詳細な状況は明らかでないが、S1・S3・N2・N4区などでは数基がまとまって列状に配置されている状況が確認できた。落し穴状土坑には平面形が楕円形を呈し断面形がU字状を呈するものと、平面形が細長い溝状を呈し横断面形がV字状を呈するものの二形態があり、前者は短軸方向に、後者は長軸あるいは斜方向に一定間隔で列状に配置される傾向が認められる。また、前者については底面にピットをもつものもある。



第198図 主な遺構の分布と変遷

落し穴状土坑については今村啓爾らによる研究があり、落し穴に関わる遺構とされている（今村1973・佐藤1989）。本遺跡で確認された二形態のうち平面形が楕円形を呈するものは今村分類B型、溝状を呈するものは今村分類E型に該当し、B型はイノシシ、E型はシカが主な狩猟対象であったとされている。また、列状配置の落し穴は民族例などから穴と穴の間に簡易な柵を設置し、柵を回避しようとする動物が落ち込むように工夫されたもので、大規模なものは追い込み猟とも結びついていた可能性があると考えられている。このような列状配置の落し穴状土坑は東北地方では縄文時代中～後期に多く確認されており、本遺跡の落し穴状土坑についても同時期に属する可能性が考えられる。

B期（古墳時代前期埴山式期・第1群土器）

遺構はN2区に竪穴住居跡6軒、N4区に竪穴住居跡1軒が分布する。N2区の竪穴住居跡は似通った住居方位のものが近接して配置されている。また、平面プランのみの確認のため帰属時期が不明なN1区の竪穴住居跡の中にもN2・N4区の竪穴住居跡と似通った住居方位でカマドをもたない竪穴住居跡がみられる。こうしたことから、B期にはN2区からN4区にかけて、丘陵の尾根筋にあたる平坦面を中心に一部東側緩斜面にまでおよぶ比較的まとまった集落が形成されていたと考えられる。

C期（7世紀中頃～後半・第2群土器）

遺構はS1・N2・N8区にそれぞれ竪穴住居跡1軒が分布する。調査範囲の制約も考えられるが、C期の集落は丘陵の広範囲に竪穴住居が散漫に点在する状況であったと考えられる。

竪穴住居跡のカマドの位置をみると、S1・N2区の2軒は北壁に、N8区の1軒は東壁に付設されている。N8区SI753竪穴住居跡はカマド側壁を凝灰岩切石によって構築し、焚口上部にも凝灰岩切石を据え付けていたと考えられる。

D期（8世紀前半～中頃・第3群土器）

遺構はS1区に竪穴住居跡2軒、S3区に竪穴住居跡1軒、N2区に竪穴住居跡2軒、N9区に3回の建て替えがみられる竪穴住居跡1棟が分布する。D期の集落は、丘陵の中腹から先端部にかけて竪穴住居が散在する状況であったと考えられる。また、丘陵中腹の平坦面を中心に立地するN2区の掘立柱建物跡2棟と大溝跡による区画もD期に属するものとみられるが、その性格については現段階では不明であると言わざるを得ない。また、N2南区の遺構確認調査では大溝跡による区画の内外で複数の竪穴住居跡が確認されたが、これらの時期や区画に伴うものかどうかについても不明である。

竪穴住居跡のカマドの位置をみると、S1区の2軒とN2区の2軒は北壁、S3区の1軒は北→西壁へ付け替え、N9区の1軒は北→西→北壁へ付け替えが行なわれている。S1区SI621竪穴住居跡はカマド側壁の構築材として河原石を用い、焚口上部に凝灰岩切石を据え付けていたと考えられる。S3区SI91竪穴住居跡はカマド煙道が先端部に行くにつれて深くなる構造で、一般的な構造と異なっている。N9区SI554a・b竪穴住居跡は住居壁際に壁柱がめぐる構造である。SI554aは2基の床下土坑をもち、人為的に埋め戻されている。また、SI554cの北東コーナ部で確認された貯蔵穴は、底面および側面に5～8cmの厚さで白色粘土を貼り付けて構築している。

E期（8世紀末～9世紀中葉・第4群土器）

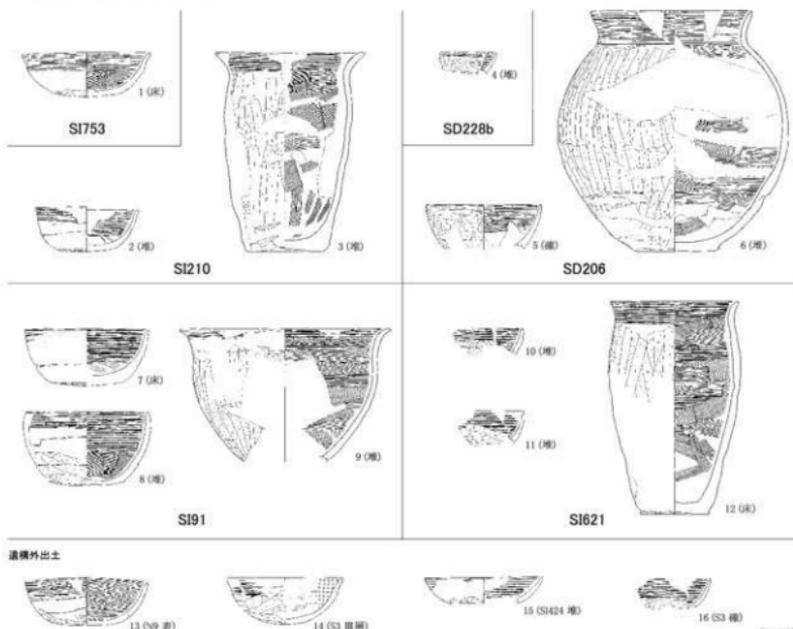
遺構はS1区に竪穴住居跡7軒、N6・N8区に竪穴住居跡各1軒が分布する。S1区にまとまって分布する。E期の集落は丘陵南端部に竪穴住居跡がまとまって分布し、丘陵の付け根部分に少数が散在する状況であったと考えられる。

竪穴住居跡のカマドの位置をみると、S1区の4軒が東壁で、北壁と南壁が各1軒である。N6区のものには北壁、N8区のものには南壁である。S1区SI1・SI9竪穴住居跡はカマド側壁を凝灰岩切石で構築している。SI601竪穴住居跡は2基の床下土坑をもち、住居掘方埋土に似た埋土で人為的に埋め戻されている。N6区SI424竪穴住居跡はカマド煙道部を掘削した後にかまど側壁と一連の構築土を貼り付けることによって煙道側壁から天井部を構築している。また、4基の床下土坑をもち、住居掘方埋土と一連の埋土で人為的に埋め戻されている。

D. 関東系土師器・関東型カマドをもつ竪穴住居跡

C期・D期段階の土器には、他の土師器類とは胎土や焼成、器面調整などが異なるいわゆる関東系土師器とみられるものが含まれている（第199図）。内面調整がヨコナデ主体で黒色処理を施さない環と、長胴あるいは球胴状で口縁部にヨコナデ、胴部にケズリ調整を施す環がある。

1は丸底で体部の上位に屈曲をもち、口縁部が短く外反する環である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部から底部にかけては外面にケズリ調整、内面にヘラナデ調整を施す。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含んでいる。これと共通する特徴を持つものとしては、仙台市郡山遺跡I期官衙に伴うSX2093出土土器（仙台市教委2004）の中に類例がみられる。SX2093は7世紀後半に位置づけられている。



遺構外出土

第199図 関東系土師器

S-1/6

2・7・8・13は丸底気味の平底で、体部がわずかに内湾しながら立ち上がる土師器環である。内外面ともにヨコナデ調整を施し、外底面にはケズリ調整を施す。5は外面の口縁部付近までケズリ調整が施されるもので、内面にヨコナデ調整を施す。いずれも外面には輪積み痕が明瞭である。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多量に含んでいる。これらと共通する特徴を持つものとしては、蔵王町堀の内遺跡11号住居跡（蔵王町教委1997）出土土器の中に類例がみられる。堀の内11号住居跡は8世紀前半頃と位置づけられている。また、14は丸底で体部の上位に屈曲をもち、口縁部が短く外傾する土師器環で、内面にミガキ調整の後に黒色処理を施すものであるが、胎土と外面の調整がこれらと共通しているものである。

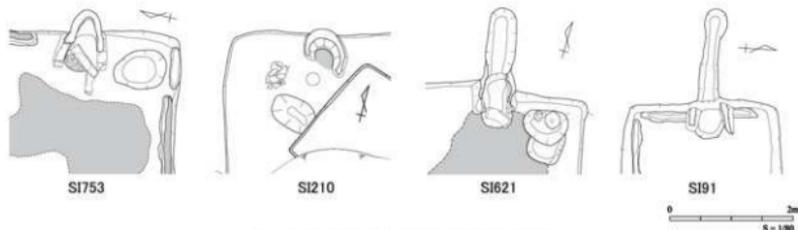
4・10・11・15・16は体部がわずかに内湾する土師器環である。外面の上部に稜をもつものもたないものがある。内面はヨコナデ調整で、外面は口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整が施されている。胎土がきめ細かく、明るい赤褐色を呈する。これらと共通する特徴を持つものとしては、仙台市郡山遺跡（仙台市教委2005）、東松島市赤井遺跡（矢本町教委2001）などに類例がみられ、7世紀後半～8世紀前半頃に位置づけられている。

3・6・9・12はこれまで述べた土師器環に共伴するもので、口縁部が外反し、頸部に段をもたない土師器環である。口縁部の内外面にヨコナデ調整、体部外面に縦位のケズリ調整が施されている。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含む点が上述の土師器環と共通している。3・12は長胴形で、胴部がほぼ直立する。6は球胴に近い長胴形で、口縁部が直立し、中ほどから外反する。胴部外面にはケズリ調整の後に幅広の粗いミガキ状の調整が施されている。9は底部に向かってすばまる鉢形を呈し、頸部が直立して口縁部が外反する。これらと共通する特徴を持つものとしては、栗原市御駒堂遺跡1・6・29号住居跡（宮城県教委1982）出土土器、東松島市赤井遺跡（矢本町教委2001）出土土器の中に類例がみられ、8世紀前半頃もしくは前半頃に位置づけられている。

以上のことから、本遺跡ではSI91・SI210・SI621・SI753 竪穴住居跡、SD206・SD228b 大溝跡で関東系土師器が出土しており、年代的には7世紀後半に位置づけられるものと、8世紀前半あるいは前半頃に位置づけられるものがあると考えられる。

次に、これらが出土した竪穴住居跡の主にカマドの構築方法の特徴について述べる。

SI753 竪穴住居跡では、住居の壁を掘り込んでカマド燃焼部を構築し、その最奥部に煙道としての機能をもたせたと考えられる。側壁および奥壁は白色粘土で構築され、焚口部を凝灰岩切石で構築している。SI210 竪穴住居跡では煙道部の状況が不明だが、住居の壁を掘り込んでカマド燃焼部を構築している。側壁および奥壁は白色粘土で構築されている。SI621 竪穴住居跡では、住居の壁を掘り込



第200図 関東系土師器を伴う竪穴住居跡

んでカマド燃焼部を構築し、その先に煙道が設けられている。側壁は白色粘土で構築され、焚口部を河原石と凝灰岩切石で構築している。また、SI554c 竪穴住居跡でも住居の壁を掘り込んでカマド燃焼部を構築し、その先に煙道が設けられており、側壁は白色粘土で構築されている。これらの竪穴住居跡でみられるカマドの構築方法は、いわゆる関東型カマド（村田 2000）と考えられる。SI753・SI210 は村田氏によるカマド分類の 2a 類、SI621・SI554c は 3 類に該当する。これまで宮城県北部地域を中心に分布が確認されており、前者は 7 世紀中葉～8 世紀前半、後者は 8 世紀以降に位置づけられている。なお、SI91 は煙道部が先端に向かって深く落ち込む点の特異ではあるが、基本的には一般的な在地型カマドの構築方法である。側壁は黄褐色ロームで構築されている。

3. 旧地形と集落形成の様相

本遺跡は、高木丘陵から派生して円田盆地北東部に延びる低平な丘陵上に立地する。今回の調査では遺跡範囲の全域に対して縦横に調査区が配置され、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、落とし穴状土坑などを中心とする多数の遺構が確認された。これによって、遺跡の立地する丘陵の旧地形と集落形成の様相、およびその変遷などについての概要を把握することができた。ここでは、これまで述べてきた遺物と遺構の検討結果を踏まえ、本遺跡の性格についての概括を述べる。

蔵王山東麓の高木丘陵から派生して、円田盆地の盆底部へ南東方向に延びる本遺跡の丘陵は、その東側を流れる雁柄川に注ぐ小規模な沢地形が発達し、羊歯状に開析された。そして、その後の沖積作用による盆底部の形成にあわせて沢地形が埋没し、現在の景観に近いきわめて低平な舌状の丘陵地に变化したと考えられる。

本遺跡において最も初期に認められる人間活動の痕跡は、縄文時代中期～後期のものとみられる多数の落とし穴状土坑である。丘陵の尾根筋から辺縁部の湿地際まで広範囲に分布し、一定間隔で列状に配置される傾向がみられた。落とし穴状土坑には二形態がみられ、それぞれ狩猟対象獣の違いが考えられる。落とし穴状土坑は本遺跡北東部に隣接する原遺跡のほか、盆地西縁部の堀の内遺跡や東縁部の上葉の木沢遺跡などでも確認されている。本遺跡と近接した位置に当該期の集落跡は確認されていないが、西方に位置する高木丘陵上には鞘堂山遺跡、湯坂山 B 遺跡などの縄文時代中期～後期を中心とした集落跡が複数立地している。こうしたことから、本遺跡を含めて高木丘陵の東端部に位置する盆地周縁部が縄文時代中期～後期には狩猟場として利用されていたと考えられる。

このほか、縄文・弥生時代の土器と石器類が出土したが、遺構に伴うものではないため具体的にどのような活動が営まれていたのかについては明らかにできなかった。土器は小破片が多く、石器には多数の石鏃のほか筒形石器などが含まれており、製品の搬入が主体的である。少なくとも、本遺跡内では土器や石器の製作といった活動は低調であったとみられる。

古墳時代前期壙釜式期になると、丘陵中腹部の平坦面あるいは、埋没が進んで窪地状になった小規模な埋没谷に挟まれた舌状丘陵上に集落が形成される。丘陵中腹部の平坦面では方位をそろえた複数の竪穴住居跡が相互に重複せずに近接して立地することから同時並存していた可能性が高く、比較的規模の大きいまとまった集落が形成されていたものと考えられる。

7 世紀中葉～後半には、丘陵上の広範囲に単独の竪穴住居が点的に分布する状況で、まとまった集落を形成することはなかったものとみられる。なお、7 世紀後半の竪穴住居跡には関東系土師器と関

東型カマドをもつものが確認できた。

8世紀前半～中頃になると丘陵の中腹から南端部にかけて数軒ずつの竪穴住居が散在する状況となり、相互に関連しながら集落を形成していたとみられる。また、8世紀前半頃には丘陵中腹部の平坦面を中心に大溝による不整形の区画が形成されたとみられる。この区画には一部掘立柱建物を伴う可能性が推定できたが、具体的な性格については今回の調査では明らかにできなかった。なお、8世紀前半の竪穴住居跡には、関東系土師器と関東型カマドをもつものが複数確認できた。

8世紀末～9世紀中葉には、丘陵の付け根部分と南端部にそれぞれ竪穴住居がまとまって分布し、二つの集落が形成されたとみられる。

なお、8世紀前半～9世紀中葉頃の竪穴住居跡には、住居掘方の底面に土坑状の落ち込みを持つものが複数確認された。これらはいずれも住居掘方埋土などで人為的に埋め戻されており、住居構築時に床面やカマドで使用する粘土を採掘する目的で掘られた可能性が考えられる。

このほか、時期を特定できなかった掘立柱建物跡や溝跡の多くは中世～近世に形成されたものとみられる。丘陵中腹部の東斜面や丘陵南端部の東斜面には区画溝と掘立柱建物数棟が方向をそろえて配置されている。盆地東縁部の車地藏遺跡・鍛冶屋敷遺跡には同様の区画溝と掘立柱建物跡などで構成される近世の屋敷が立地しており、近世には本遺跡を含めて盆地周縁部の微高地上に複数の屋敷地が点在していたとみられる。

以上のことから、本遺跡の考古学的変遷を簡単にまとめると、縄文時代中～後期には落とし穴環を行なう猟場として利用され、古墳時代前期埴笠式期・7世紀中頃～後半・8世紀中葉・8世紀末～9世紀中葉の各時期には竪穴住居を中心とする集落が、近世には区画溝と掘立柱建物などで構成される屋敷が形成されていたことが分かった。

また、7世紀後半～8世紀前半頃には、関東系土師器と関東型カマドをもつ竪穴住居跡が存在し、8世紀前半頃には大溝による区画施設などが形成されるとみられるが、相互の関連性および区画施設の性格等については今回の調査では明らかにできなかった。本遺跡の南東約1kmの円田盆地中央部に位置する都遺跡では、7世紀末～8世紀前半の材木扉による区画施設や、大型の掘立柱建物跡のほか、多賀城政庁1期のもとの共通する特徴をもった軒平瓦などが採集されている。また、未報告ではあるが、本遺跡の西約0.5kmの盆地西縁部に位置する十郎田遺跡では平成19年度の発掘調査で丘陵の辺縁部を長方形に区画する材木跡が確認されている。

陸奥国府と考えられる仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙の設置は694～700年頃とされており、7世紀末には仙台平野南部が律令国家の安定した統治下に置かれていたことがうかがえる。さらに、神亀元年(724年)には多賀城が創建され、国府の機能が仙台平野北部に移された。続日本紀によれば、養老5年(721年)には陸奥国柴田郡から菟田郡が分置されている。また、これに先立って霊龜2年(716年)には陸奥国最上・置賜郡が出羽国に移管されている。

こうしたことから、8世紀前半頃には律令国家による現在の宮城県南部から山形県南部にかけての地域に対する統治および経営体制の再編が行われたとみられる。阿武隈川水系の敷川流域に形成された円田盆地は当時の菟田郡内でもまとまった耕地を有していたとみられ、地域経営に関わる拠点的な施設が置かれていた可能性も考えられる。本遺跡および周辺の遺跡を含め、当該期の円田盆地における今後の検討課題のひとつとしておきたい。

第6章 まとめ

1. 六角遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字小村崎字六角地蔵地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の円田盆地北東部に位置し、蔵王山東麓の高木丘陵から派生して盆地中央部に向かって南東方向に延びる低平な舌状丘陵上に立地している。
2. 今回の発掘調査は経営体育成基盤事業の円田Ⅱ期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）を原因として実施した。調査区は遺跡範囲の全域に縦横に配置され、調査面積は約 25,800 m²である。
3. 確認した遺構は、竪穴住居跡 52 軒、掘立柱建物跡 29 棟、柱列跡 10 条、井戸跡 1 基、落し穴状土坑 39 基、土坑 71 基、大溝跡 6 条、溝跡 44 条、円形周溝跡 1 基、性格不明遺構 1 基、柱穴多数である。このうち、竪穴住居跡は古墳時代前期塩釜式期・7 世紀中葉～後半・8 世紀前半～中頃・8 世紀末～9 世紀中葉の各時期のものである。掘立柱建物跡と大溝跡の一部には 8 世紀前半頃とみられるものがある。このほかの掘立柱建物跡・溝跡の多くは中世～近世のものともみられる。落し穴状土坑は縄文時代中期～後期のものとみられる。
4. 出土した遺物は、土師器、ロクロ土師器、須恵器、瓦、土製品（ミニチュア土器）、石製品（砥石）、金属製品（鉄鏃・鉄製刀子）、縄文土器、弥生土器、石器、中世・近世の陶磁器、古銭である。このうち、主体を占めるのは上述した古墳時代～奈良・平安時代の各時期の竪穴住居跡に伴う多数の土師器・ロクロ土師器と若干数の須恵器である。
5. 発掘調査の結果、本遺跡の立地する丘陵にはその東側を流れる雁柄川に注ぐ小規模な沢地形が発達し、羊歯状に開析された後、沖積作用による盆底部の形成に合わせて沢地形が埋没し、現在の景観に近い極めて低平な舌状の丘陵地に変化したことが分かった。本遺跡における人間活動の痕跡は、沢地の埋没がほぼ完了して丘陵地が黒ボク土に覆われた段階から認められる。
6. 本遺跡の立地する丘陵は、縄文時代中～後期には落し穴甍を行なう狩猟場として利用され、古墳時代前期塩釜式期・7 世紀中葉～後半・8 世紀中葉・8 世紀末～9 世紀中葉の各時期には竪穴住居を中心とする集落が、近世には区画溝と掘立柱建物などで構成される屋敷が形成されていたことが分かった。各時期の遺構の分布状況と占地の様相にはそれぞれ違いが認められ、上述した地形の形成過程および当時の人びとの生業形態の変化、あるいは政治的な要因などによって集落が変遷している可能性が想定される。
7. 今回の発掘調査成果は、円田盆地北東部における土地利用のあり方の歴史的な変化と、そこに居住した当時の人びとの具体的な暮らしぶりを知る上で貴重な手がかりとなるものである。

引用・参考文献（著者名五十音順）

- 今泉隆雄・辻 秀人・熊谷公明 2000『第二章 陸奥国と仙台平野』『仙台市史 通史編2 古代中世』
今村賢隆ほか編 1973『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団
- 氏家和典 1957『東北土師器の形式分類とその編年』『歴史』第 14 輯
- 氏家和典 1967『陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって－奈良・平安土師器の諸問題－』『山形県の考古と歴史』
大場正壽 2004『宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について』『宮城考古学』第 6 号
- 加藤道明 1989『宮城県における土師器研究の現状』『考古学論叢』Ⅱ
- 熊谷公明 2004『古代の蝦夷と城柵』『歴史文化ライブラリー 178』吉川弘文館
- 桑原滋郎 1976『東北地方北部および北海道の所謂第 1 型式の土師器について』『考古学雑誌』第 61 巻第 4 号
- 佐藤宏之 1989『陥し穴跡と縄文時代の狩猟社会』『考古学と民族誌』
- 蔵王町教育委員会 1990『堀の内遺跡』『蔵王町文化財調査報告書』
- 蔵王町教育委員会 1997『堀の内遺跡』『蔵王町文化財調査報告書第 1 集』
- 蔵王町教育委員会 2002『諏訪館前遺跡』『蔵王町文化財調査報告書第 2 集』
- 蔵王町教育委員会 2005『都遺跡ほか』『蔵王町文化財調査報告書第 3 集』
- 蔵王町教育委員会 2006『車地蔵遺跡・鏡石原遺跡ほか』『蔵王町文化財調査報告書第 4 集』
- 蔵王町教育委員会 2007『中沢 A 遺跡』『蔵王町文化財調査報告書第 5 集』
- 蔵王町史編纂委員会 1987『蔵王町史 資料編 1』
- 蔵王町史編纂委員会 1994『蔵王町史 通史編』
- 佐藤洋一 2003『蔵王町円田盆地における遺跡分布状況』『宮城考古学』第 5 号
- 佐川正敏・鈴木 雅・安倍奈々子 2005『賀茂沢遺跡 2005 年度発掘調査の成果』
『第 19 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』
- 白鳥良一・吉川一明『8. 東北』『2. 土師器の編年』『古墳時代の研究 第 6 巻 土師器と須恵器』
白石市史編纂委員会 1976『白石市史 別巻 考古資料篇』
- 瀬峰町教育委員会 1983『大境山遺跡』『瀬峰町文化財調査報告書第 4 集』
- 仙台市教育委員会 2005『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編(1)・(2)－』『仙台市文化財調査報告書第 283 集』
- 仙台市教育委員会 2004『郡山遺跡 24』『仙台市文化財調査報告書第 269 集』
- 辻 秀人 1994『東北部における古墳出現期の土器編年 その 1』『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第 26 号
- 辻 秀人 1995『東南部における古墳出現期の土器編年 その 2』『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第 27 号
- 辻秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
『平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書』
- 東北福祉大学 116 番教室 1994『宮城県蔵王町 兵衛館 第 1 次発掘調査報告書』
- 東北福祉大学 116 番教室 1995『宮城県蔵王町 兵衛館 第 2 次発掘調査報告書』
- 東北福祉大学 116 番教室 1996『宮城県蔵王町 兵衛館 第 3 次発掘調査報告書』
- 東北福祉大学 16 番教室 1997『宮城県蔵王町 兵衛館 第 4 次発掘調査報告書』
- 東北福祉大学 16 番教室 1998『宮城県蔵王町 兵衛館 第 5 次発掘調査報告書』
- 東北福祉大学 16 番教室 1999『宮城県蔵王町 兵衛館 第 6 次発掘調査報告書』
- 東北福祉大学吉井研究室 2000『宮城県蔵王町 兵衛館 第 7 次発掘調査報告書』
- 東北福祉大学吉井研究室 2001『宮城県蔵王町 兵衛館 第 8 次発掘調査報告書』
- 宮城県教育委員会 1980『台ノ山遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』『宮城県文化財調査報告書第 62 集』
- 宮城県教育委員会 1981『植田前遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』『宮城県文化財調査報告書第 81 集』
- 宮城県教育委員会 1982『御駒堂遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』『宮城県文化財調査報告書第 83 集』
- 宮城県教育委員会 1989『三十三間堂遺跡ほか』『宮城県文化財調査報告書第 131 集』
- 宮城県教育委員会 1990『祝光寺ほか』『宮城県文化財調査報告書第 135 集』
- 宮城県教育委員会 1991『合戦原遺跡ほか』『宮城県文化財調査報告書第 140 集』
- 宮城県教育委員会 1992『下草古城跡ほか』『宮城県文化財調査報告書第 160 集』
- 宮城県教育委員会 2002『名生館遺跡ほか』『宮城県文化財調査報告書第 188 集』
- 宮城県教育委員会 2003『塚の越遺跡ほか』『宮城県文化財調査報告書第 195 集』
- 宮城県教育委員会 2005『角山遺跡』『宮城県文化財調査報告書第 200 集』
- 宮城県教育委員会・利府町教育委員会 1990『利府町御染遺跡Ⅱ』
『宮城県文化財調査報告書第 134 集・利府町文化財調査報告書第 5 集』
- 宮城県高等学校理科研究会地学部会 1975『宮城県の地質案内』宝文堂
- 村田晃一 2000『飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－』『宮城考古学』第 2 号
- 村田晃一 2007『Ⅱ. 宮城県中部から南部』『第二章 東北・北海道における 6～8 世紀の土器変遷と地域の相互関係』
『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
- 矢本町教育委員会 2001『赤井遺跡 1』『矢本町文化財調査報告書第 14 集』

第3表 堅穴住居跡観察表

区	遺跡名	位置	方向	規模(m) 縦 横	埋存状況 (cm)	構造						階段	床下 土質	出土遺物	重要関係	BMC		
						瓦葺	土葺六	掘削六	西葺	北葺	東葺					好層六	平葺	削葺
S10	S11	東斜面	E-4°-N	(1.20)	3.50	15	瓦葺	なし	なし	なし	東葺1'	-	なし	土壌層 法衣層	S19より新	12	12	
	S12	東斜面	E-13°-S	3.10	3.20	26	掘方 掘土	なし	なし	なし	東葺1'	南東1	なし	土壌層 法衣層	なし	15	15	
	S19	東斜面	E-5°-S	(1.90)	(1.30)	10	瓦葺	なし	なし	なし	東葺1'	南東1	なし	土壌層 法衣層	S11より古	12	12	
S10	S1001	東斜面	N-25°-W	4.30	3.00	27	掘方 掘土	なし	なし	なし	北葺1'	北東1	2層	土壌層 法衣層	S847より新	18	19	
	S1002	東斜面	E-2°-N	2.40	(2.20)	8	掘方 掘土	なし	なし	なし	東葺1'	-	なし	土壌層 法衣層	なし	21	21	
	S1003	東斜面	N-9°-E	3.30	(3.40)	4	掘方 掘土	なし	なし	なし	北葺1'	北東1	なし	土壌層	なし	23	23	
	S1009	東斜面	S-1°-E	3.00	3.10	33	石・ V葺	なし	なし	なし	南葺1'	なし	なし	土壌層	S1645より新 S8043・S8015より古	25	25	
	S1021	東斜面	N-13°-W	3.10	3.60	27	掘方 掘土	なし	なし	なし	北葺1'	北東1	なし	土壌層 法衣層	S801より古	27	27	
	S1023	東斜面	N-5°-E	4.60	(3.80)	9	掘方 掘土	3層	なし	なし	-	-	なし	土壌層 法衣層	なし	29	29	
	S1034	東斜面	N-11°-W	4.50	4.70	12	掘方 掘土	なし	4層	なし	北葺1'	なし	なし	土壌層 法衣層	S844より新	31	31	
	S1035	東斜面	N-23°-W	(4.40)	(3.00)	-	-	4層	なし	なし	-	-	なし	土壌層	なし	34	34	
	S1045	東斜面	N-2°-E	(4.40)	(4.20)	8	掘方 掘土	なし	なし	なし	なし	なし	なし	土壌層	S1000・S1043・S1015より古	35	35	
	S10	S102	東斜面	N-12°-E	(4.80)	(2.80)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	60	-
S191		東斜面	N-1°-E	2.90	2.60	40	掘方 掘土	なし	なし	一部	北葺1'	なし	なし	土壌層 法衣層	なし	61	61	
北北	S1301	平地面	N-3°-E	4.20	(4.80)	-	-	-	-	北葺1'	-	-	-	-	-	75	-	
	S1302	平地面	E-4°-S	3.50	4.50	-	-	-	-	東葺1'	-	-	-	-	-	75	-	
	S1303	平地面	N-2°-E	4.30	4.80	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	75	-	
	S1304	平地面	N-33°-W	3.20	3.20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	75	-	
北北	S1305	平地面	N-33°-W	(4.50)	(2.30)	-	-	-	-	北葺1'	-	-	-	-	-	75	-	
	S1309	平地面	N-34°-E	(6.00)	7.00	-	-	3層	なし	なし	北葺1'	なし	なし	土壌層	S256・S214土葺層	84	84	
	S1310	東斜面	N-14°-W	(2.20)	3.20	13	掘方 掘土	なし	なし	なし	北葺1'	(東葺1')	なし	なし	土壌層 法衣層	S1261・S1211より古	85	85
北中	S1312	平地面	N-33°-E	(2.80)	(3.80)	-	-	1層	なし	なし	-	南東1	-	土壌層	なし	87	-	
	S1361	東斜面	N-35°-E	1.90	1.80	13	掘方 掘土	なし	なし	なし	北葺1'	なし	なし	土壌層	S1210より新 S1211より古	85	85	
北西	S1222	平地面	N-1°-W	4.70	(4.80)	14	掘方 掘土	なし	なし	全層	北東葺1'	南西1	なし	土壌層	S2028・S1804・S2021・ S8002・S8003・S8005より古	88	88	
	S1223	平地面	N-31°-W	3.50	3.30	38	掘方 掘土	3層	なし	全層	中央葺1'	-	-	土壌層 法衣層	S823より古	90	90	
	S1225	平地面	N-40°-W	5.10	6.10	-	-	-	-	-	北葺1'	-	-	-	-	75	-	
	S1230	平地面	N-38°-E	4.30	3.70	12	掘方 掘土	なし	なし	なし	-	南西1	なし	土壌層	S2028・S1804・S2021・ S8002・S8003・S8005より古	93	93	
	S1231	平地面	N-42°-E	(3.00)	(2.50)	12	掘方 掘土	なし	なし	なし	-	-	-	-	-	95	95	
	S1259	平地面	N-6°-E	(1.60)	(4.20)	-	-	-	-	-	北葺1'	-	-	-	-	75	-	
北東	S1280	平地面	N-25°-W	(2.00)	(1.20)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	75	-	
	S1301a	平地面	N-2°-W	3.90	4.70	-	掘方 掘土	4層	なし	全層	-	-	なし	土壌層	S1011より古	79	79	
北東	S1201b	平地面	N-2°-W	5.6	5.00	14	掘方 掘土	4層	6層	全層	北葺1'	北東1	4層	土壌層 法衣層	S1201a・S2005より新	80	80	
	S1701	平地面	N-14°-W	5.50	5.30	5	掘方 掘土	4層	なし	なし	中央葺1'	南東1	なし	土壌層	S4707より古	123	123	
北西	S1424	平地面	N-1°-W	4.50	5.60	30	掘方 掘土	4層	7層	なし	北葺1'	北東1	4層	土壌層 法衣層	S4337・S4509より古	131	132	
	S1443	平地面	N-30°-W	(1.50)	(2.50)	24	掘方 掘土	-	-	一部	-	-	-	土壌層	なし	136	136	
北西	S1751	平地面	N-18°-W	(3.80)	(1.30)	-	-	1層	なし	-	北葺1'	-	-	なし	なし	151	151	
	S1753	平地面	E-7°-S	3.70	4.00	30	掘方 掘土	なし	なし	全層	東葺1'	(東葺1')	南東1	なし	土壌層 法衣層	S1755より新	152	152
	S1755	平地面	N-19°-W	(1.90)	(4.30)	-	掘方 掘土	なし	なし	一部	南葺1'	なし	-	-	-	154	154	
北中	S1553	東西斜面	N-3°-E	(3.90)	(3.80)	-	-	なし	なし	北葺1'	-	なし	法衣層	P11より古	161	161		
	S1554a	東西斜面	N-15°-W	6.20	5.70	15	-	3層	7層	なし	北葺1'	北東1	2層	土壌層 法衣層	S1554b・S1554cより古	162	163	
	S1554b	東西斜面	E-15°-W	6.20	5.70	15	掘方 掘土	3層	20層	なし	東葺1'	なし	なし	土壌層 法衣層	S1554aより新 S1554cより古	163	166	
	S1554c	東西斜面	N-15°-W	6.20	5.70	15	掘方 掘土	3層	なし	全層	北葺1'	北東1	なし	土壌層 法衣層	S1554a・S1554bより新	167	168	
北中	S1901	平地面	N-10°-W	(4.50)	(3.00)	-	-	-	-	-	北葺1'	-	-	-	-	178	-	
	S1902	平地面	N-3°-E	(2.40)	(2.80)	-	-	-	-	-	北葺1'	-	-	-	-	178	-	

第4表 掘立柱建物跡観察表

区	遺構名	位置	方向	構造	階数	掘長(m)	掘幅寸法(北・東・南)	柱穴(cm)				出土遺物	重要関係	附記			
								平面形	高輪	壁輪	深さ						
S10	S811	東斜面	E-13°-N	南北棟	2x1	3.9x2.9	1.9-2.0	2.9	平面形 掘丸方形	20-38	15-35	18-48	10-15	-	-	36	36
	S812	東斜面	E-30°-E	東西棟	2x1	2.7x2.3	1.3-1.4	2.3	円形 掘円形	23-35	20-30	33-25	12-18	-	-	37	37
S10	S815	東斜面	E-4°-E	南北棟	4x1	7.2x4.5	2.0-2.0 -1.6-1.6	4.5	掘丸方形 掘円形	60-100	50-65	15-43	-	土師器 須恵系 近江 陶磁器	S1045・S1009・ S1043より新	38	38
	S816	東斜面	E-10°-E	南北棟	3x2	5.2x3.9	1.8-1.7 -1.7	2.1-1.8	掘丸方形 掘円形	18-38	17-22	5-20	12	-	-	39	39
	S836	東斜面	E-3°-E	-	1x1	2.7x2.6	2.7	2.6	掘丸方形	33-47	26-40	28-38	14-20	-	S629より古 S1043・S1009 より新	40	40
	S843	東斜面	E-8°-E	-	1x1	2.1x3.0	2.1	3.0	不整円形	30-38	27-32	40-70	12-14	土師器	S1015より古	41	41
	S850	東斜面	E-2°-E	-	2x2	4.2x4.7	2.3-2.4	2.1-2.1	掘円形 不整円形	58-66	46-62	14-50	14-20	土師器 須恵系 近江	S1057より新	42	42
	S855	東斜面	E-5°-N	東西棟	3x1	6.5x4.5	2.0-2.5 -2.0	4.5	不整円形	36-50	28-40	9-28	10-14	-	S1056より新	43	43
	S857	東斜面	E-2°-E	-	1x1	4.6x2.7	4.6	2.7	掘円形	26-55	24-48	33-47	14-16	-	S1023より古 S1057より新	44	44
S34	S872	東斜面	E-3°-E	東西棟	2x1	4.8x3.0	2.4-2.4	3.0	円形 掘円形	28-38	28-38	14-24	14-20	土師器	-	66	66
	S891	東斜面	E-27°-E	東西棟	1x2	3.2x2.2	1.1-1.1	3.2	円形 掘円形	28-36	28-36	52-24	10-15	-	-	67	67
S34	S891	東斜面	E-19°-E	-	1x1	4.7x(2.2)	4.7	2.2	円形 掘円形	40-44	40	10-30	12-20	-	-	63	63
	S887	東斜面	E-3°-E	東向付 溝部 1x1	4.3	-	2.2-2.1	-	身倉 円形 掘円形 掘円形 掘円形	32-40 32-34 28-40	32-34 溝部 24-28	24-32 溝部 15	14-15 溝部 12-14	-	-	64	64
	S888	東斜面	E-13°-E	南向付 溝部	4x1	7.8x(2.4)	1.9-2.0 -1.0-1.9	2.4	身倉 掘円形 掘丸方形 掘丸方形 掘丸方形	32-41 27-36 30-32	32-36 溝部 20-22	27-36 溝部 10-15	14-20 溝部 10-15	-	S406・S871・ S888と重要	65	65
K1北	S8306	平地面	E-3°-E	-	2x2	4.6x4.9	2.4-2.2	2.5-2.4	円形 掘円形	34-60	34-60	-	9-12	土師器	S1304・S1007 と重要	77	-
K20	S8256	平地面	E-12°-E	-	2x1	3.8x(1.6)	2.0-1.8	1.6	円形 掘円形	36-48	28-38	14-34	22	土師器	S1209と重要	101	101
	S8254	平地面	-	-	3x2	4.3x(4.4)	-	-	掘丸方形	56	40	55	-	-	S8256より古	98	98
K20	S8259	平地面	E-13°-E	-	3x2	4.7x(4.4)	1.6-1.3 -1.8	2.0-2.2	掘円形	32-64	28-40	40	12	土師器	S8259より新	98	98
	S8258	平地面	E-13°-E	-	1x1	2.3x2.3	2.3	2.3	掘丸方形	44-52	44-52	24-32	20	-	-	99	99
	S8251a	平地面	-	-	2x2	5.0x(4.9)	-	-	掘丸方形 掘円形	43-50	35	32-55	-	-	S1223より新 S8251bより古	100	100
	S8251b	平地面	E-5°-E	-	2x2	5.0x(4.9)	2.8-2.2	2.7-2.2	掘円形	35-47	20-40	40-47	10-18	土師器	S1223・S8251b より古	100	100
S414	平地面	E-12°-E	南北棟	3x2	4.7x(4.6)	2.4-2.3	2.9-2.3	円形 掘円形	45-65	28-60	5-26	16	-	S1413より古	138	138	
K6西	S8434	平地面	E-15°-E	-	1x1	2.35x2.45	2.35	2.3	円形 掘円形	25-35	23-30	12-24	8-10	-	-	140	140
	S8436	平地面	E-6°-E	東西棟	2x1	(4.7)x3.7	2.6-2.1	3.7	円形 掘円形	20-26	18-22	24-38	8-15	-	-	142	142
	S8402	平地面	E-8°-S	-	3x2	6.3x(4.0)	2.0-2.2 -2.1	2.1-1.9	掘丸方形	45-59	37-50	20-35	15-18	-	S431と重要	137	137
K6東	S8432	平地面	E-16°-E	南北棟	2x1	(3.1)x3.0	1.4-1.7	3.0	円形 掘円形	32-40	25-28	10-15	10-12	-	-	139	139
	S8440	平地面	E-20°-E	-	2x1	3.0x(2.1)	1.6-1.4	2.1	掘円形	20-32	15-30	10-33	-	-	S406より古	141	-
K6中	S8589	東斜面	E-17°-E	-	2x2	5.2x3.0	2.9-2.3	2.4-2.6	掘丸方形	40-54	38-44	22-45	12-14	土師器	S1023より古 S1057と重要	170	170
	S8370	南西斜面	E-1°-E	南北棟	2x1	3.0x2.7	1.6-1.4	2.7	掘丸方形	40-50	38-48	18-32	14-15	土師器	-	171	171

第5表 柱列跡観察表

区	遺構名	位置	方向	構造	階数	掘長(m)	掘幅寸法(北・東・南)	柱穴(cm)				出土遺物	重要関係	附記			
								平面形	高輪	壁輪	深さ						
S10西	S410	東斜面	E-4°-E	東西柱列	(2)棟	(8.20)	2.3-2.0 -2.1	-	不整円形	28-33	23-30	26-33	10-14	土師器	-	45	45
S34東	S490	東斜面	E-15°-E	東西柱列	(2)棟	(5.00)	2.6-2.4	-	掘丸方形	40-50	34-40	-	12-15	-	S890より新 S1048・S871と重要	68	-
K20西	S423	平地面	E-9°-N	東西柱列	(2)棟	3.50	1.7-1.8	-	円形 掘円形	28-30	23-27	15-25	10	-	-	103	103
	S4254	平地面	E-14°-E	東西柱列	(2)棟	4.00	1.4-1.3 -1.3	-	円形 掘円形	28-35	25-33	47-64	10	-	S1025より新 S1024と重要	104	104
K2東	S4203	平地面	E-7°-E	東西柱列	(2)棟	(3.10)	1.7-1.7 -1.7	-	円形 掘円形	30-40	28-37	23-28	15-18	-	-	102	102
S4中	S4707	平地面	E-5°-E	東西柱列	(2)棟	(2.80)	0.8-1.0 -1.0	-	円形 掘円形	20-30	20-25	37-47	8-11	-	S170より新	126	126
K6西	S4335	平地面	E-6°-E	東西柱列	(2)棟	(3.40)	1.6-(1.8)	-	円形 掘円形	35	30	33-46	12	-	-	144	144
K6東	S4311	平地面	E-8°-E	東西柱列	(2)棟	(4.50)	2.2-2.3	-	掘丸方形	35-40	30-40	33-40	13-16	-	-	174	174
	S4308	東斜面	E-13°-E	東西柱列	(2)棟	3.10	1.5-1.6	-	掘丸方形	44-46	34-46	26-25	-	-	S402と重要	174	174
K10	S4603	平地面	E-7°-N	南北柱列	(2)棟	4.30	1.9-2.4	-	円形 掘円形	30-50	25-40	-	15-20	-	-	178	-

第6表 落し穴状土坑観察表

区	遺構名	位置	方向	形状		幅員(α)			出土遺物	重要関係	照応
				平面	断面	長	幅	深			
S10	S875	西側部	S-E	溝状	溝状	3.20	0.29	1.00	なし		46, 48
	S830	北側部	S-E	溝状	溝状	2.76	0.24	0.78	なし		47, 47
	S833	西側部	S-E	溝状	溝状	1.90	0.90	1.64	なし		48, 48
	S838	南側部	E-W	溝状	溝状	2.30	1.53	1.28	なし		49, 49
	S842	東側部	E-W	溝状	溝状	1.34	0.34	0.48	なし		49
	S843	東側部	S-W	溝状	溝状	2.40	0.27	0.69	なし		14 -
	S847	東側部	S-W	溝状	溝状	2.84	0.62	0.95	なし		14 -
	S848	東側部	E-W	溝状	溝状	1.74	0.70	0.39	なし		14 -
	S852	東側部	S-E	溝状	溝状	2.33	0.30	0.75	なし		14 -
	S867	東側部	S-E	溝状	溝状	1.45	0.80	0.63	なし		14 -
S18	S867	東側部	S-E	溝状	溝状	1.58	0.73	0.70	なし		14 -
	S867	東側部	E-W	溝状	溝状	2.28	0.23	0.20	なし		14 -
	S864	東側部	S-W	溝状	溝状	1.19	0.58	0.60	なし		14 -
	S844	東側部	E-W	溝状	溝状	1.10	0.58	0.60	なし		S1034より古
	S844	東側部	S-W	溝状	溝状	1.40	0.55	0.39	なし		60 -
	S892	東側部	S-E	溝状	溝状	2.30	0.40	-	-		60 -
	S893	東側部	S-E	溝状	溝状	2.30	0.30	0.53	なし		60 -
	S894	東側部	S-E	溝状	溝状	2.30	0.35	-	-		60 -
	S838	東側部	E-W	溝状	溝状	1.8, 10.0	0.50	-	-		75 -
	S8216	東側部	S-E	溝状	溝状	2.60	0.48	1.04	なし		105, 105
S20	S8217	東側部	E-W	溝状	溝状	1.40	0.74	0.70	なし		106, 106
	S8218	東側部	E-W	溝状	溝状	1.30	0.75	-	-		75 -
	S8219	東側部	E-W	溝状	溝状	1.35	0.70	-	-		75 -
S25	S8238	東側部	E-W	溝状	溝状	2.30	0.45	0.55	なし		75 -
	S8250	東側部	S-E	溝状	溝状	1.35	1.00	1.05	なし		75 -
	S8258	東側部	E-W	溝状	溝状	3.70	0.90	1.00	なし		107, 107
S28	S8229	東側部	E-W	溝状	溝状	1.22	0.72	0.46	なし		78 -
	S8303	北側部	S-W	溝状	溝状	1.30	0.85	0.85	なし		127, 127
	S8325	東側部	S-E	溝状	溝状	1.15	0.72	0.87	なし		127 -
S30	S8351	北側部	S-W	溝状	溝状	1.18, 1.0	0.77	0.91	なし		129 -
	S8352	北側部	S-W	溝状	溝状	1.30	0.87	0.91	なし		129 -
	S8419	東側部	S-E	溝状	溝状	3.00	0.43	0.88	なし		146, 146
S35	S8401	東側部	S-W	溝状	溝状	0.30	0.54	0.75	なし		146, 146
	S869	東側部	S-E	溝状	溝状	1.72	1.06	1.37	なし		146, 146
	S8757	東側部	E-W	溝状	溝状	0.40	0.50	0.90	なし		150 -
S36	S8360	東側部	S-E	溝状	溝状	1.40	0.80	1.40	なし		S8754より古
	S8361	東側部	S-E	溝状	溝状	0.60	0.50	0.95	なし		150 -
	S8756	東側部	S-E	溝状	溝状	0.60	0.35	0.83	なし		150 -
S38	S8563	東側部	S-E	溝状	溝状	0.70	1.10	0.83	なし		150 -
	S8366	南側部	S-E	溝状	溝状	2.16	0.34	0.57	なし		S8506・S8557より古 S8589と重複

第7表 土坑観察表(1)

区	遺構名	位置	方向	形状		幅員(α)			出土遺物	重要関係	照応
				平面	断面	長	幅	深			
S10	S814	東側部	不明	溝状	溝状	2.30	2.80	-	-		14 -
	S813	東側部	不明	溝状	溝状	1.30	1.20	0.21	なし		14 -
	S814	東側部	不明	溝状	溝状	0.60	0.35	0.48	土師器		なし
	S815	東側部	不明	溝状	溝状	0.60	0.40	0.35	なし		なし
	S816	東側部	不明	溝状	溝状	0.49	0.38	0.73	土師器		S815より古
	S817	東側部	不明	溝状	溝状	1.40	0.55	0.41	なし		なし
	S816	東側部	不明	溝状	溝状	1.20	0.55	0.41	なし		なし
	S816	東側部	不明	溝状	溝状	3.25	0.75	0.87	なし		なし
	S860	東側部	不明	溝状	溝状	0.50	0.46	0.38	なし		なし
	S811	東側部	不明	溝状	溝状	0.60	0.40	0.43	なし		なし
S10	S810	東側部	不明	溝状	溝状	0.70	0.30	0.30	土師器		なし
	S811	東側部	不明	溝状	溝状	0.70	0.55	0.16	なし		なし
	S819	東側部	不明	溝状	溝状	2.68	1.40	0.52	土師器		なし
	S824	東側部	不明	溝状	溝状	1.60	1.10	0.25	土師器		なし
	S825	東側部	不明	溝状	溝状	2.70	0.36	0.36	土師器		なし
	S826	東側部	不明	溝状	溝状	2.50	0.30	0.56	なし		55, 55
	S828	東側部	不明	溝状	溝状	0.40	0.37	0.17	土師器		なし
	S829	東側部	不明	溝状	溝状	1.58	0.30	0.60	土師器		S830より古
	S830	東側部	不明	溝状	溝状	1.30	0.85	0.18	土師器		S831・S832より古
	S831	東側部	不明	溝状	溝状	0.70	0.80	0.11	なし		S832より古 S830より古
S18	S852	東側部	不明	溝状	溝状	1.28	1.13	0.40	土師器		なし
	S842	東側部	不明	溝状	溝状	0.48	0.30	0.44	土師器		S830・S831より古
	S8647	東側部	不明	溝状	溝状	0.50	0.40	0.22	なし		S190より古
	S8648	東側部	不明	溝状	溝状	0.55	0.35	0.13	なし		なし
	S8651	東側部	不明	溝状	溝状	0.74	0.45	0.21	なし		なし
	S8656	東側部	不明	溝状	溝状	1.95	0.48	0.07	なし		S8655より古
	S876	東側部	不明	溝状	溝状	1.20	1.20	-	-		S877より古
	S877	東側部	不明	溝状	溝状	1.40	1.00	-	-		S878・S879・S874・S875より古
	S878	東側部	不明	溝状	溝状	1.80	0.60	-	-		なし
	S885	東側部	不明	溝状	溝状	1.80	1.20	-	-		なし
S30	S890	東側部	不明	溝状	溝状	0.50	0.50	-	-		S890より古
	S852	東側部	不明	溝状	溝状	0.50	2.00	-	-		なし
	S854	東側部	不明	溝状	溝状	0.50	0.30	-	-		なし
	S859	東側部	不明	溝状	溝状	1.00	1.40	0.20	なし		なし
	S858	東側部	不明	溝状	溝状	0.60	0.40	-	-		P1より古
	S861	東側部	不明	溝状	溝状	0.84	0.58	0.20	金銅製品		70, 70
	S863	東側部	不明	溝状	溝状	0.70	0.28	0.28	なし		なし
	S864	東側部	不明	溝状	溝状	1.60	0.90	0.20	なし		なし
	S865	東側部	不明	溝状	溝状	1.80	0.80	0.20	なし		S865と重複
	S871	東側部	不明	溝状	溝状	2.10	0.30	-	-		P1より古 S868と重複
S38	S881	東側部	不明	溝状	溝状	0.55	1.00	0.60	なし		S880より古
	S883	東側部	不明	溝状	溝状	0.60	0.30	-	-		なし
	S8211	東側部	不明	溝状	溝状	0.90	0.78	0.15	土師器		S110より古
S20	S8214	東側部	不明	溝状	溝状	0.96	0.60	0.08	土師器		S109と重複

第8表 土坑観察表(2)

区	遺構名	位置	形状		規模(□)			出土遺物	遺構関係	SS%		
			平面	断面	長	幅	深			平面	断面	
西区	SK224	平地面	不整楕円形	段台形	段状	2.80	2.20	0.43	土師器 須恵器	SK257より新	108	108
	SK227	平地面	楕円形	-	-	0.64	0.90	-	土師器	-	75	-
	SK236	平地面	長方形	楕円形	段台形	1.90	0.90	0.33	土師器	なし	115	110
	SK237	平地面	不整長方形	段台形	段台形	2.35	0.47	0.20	なし	なし	75	-
	SK241	長瀬溝内	不整長方形	段台形	段台形	0.90	0.47	0.08	なし	なし	75	-
	SK242	長瀬溝内	不整長方形	-	-	1.65	0.55	-	なし	なし	75	-
	SK243	長瀬溝内	不整長方形	楕円形	段台形	1.33	0.70	0.80	土師器	なし	111	111
	SK244	平地面	不整円形	-	-	0.55	0.55	-	土師器	-	75	-
	SK248	平地面	楕円形	-	-	1.00	0.70	-	-	SK257と重層	75	-
	SK247	平地面	不整円形	-	-	0.64	0.55	-	土師器	-	75	-
	SK249	平地面	溝状	1字溝	段状	0.96	0.30	0.30	なし	行より新	75	-
	SK257	平地面	不整楕円形	段台形	段状	0.70	1.10	0.43	なし	SK224より古	108	108
	SK417	平地面	不整円形	段台形	段台形	1.90	0.30	0.20	なし	なし	130	-
南区	SK418	平地面	不整円形	楕円形	段台形	0.60	0.90	0.20	土師器 須恵器	なし	147	147
	SK420	平地面	長楕円形	段状	段状	1.45	0.55	0.10	なし	なし	130	-
	SK411	平地面	楕円形	段台形	段状	0.88	0.30	0.05	なし	なし	130	-
	SK422	平地面	楕円形	段台形	段台形	1.10	0.70	0.17	土師器	なし	130	-
	SK423	平地面	楕円形	段状	段台形	2.23	1.05	0.15	土師器 須恵器	なし	148	148
	SK428	平地面	楕円形	楕円形	段台形	1.40	0.90	0.20	なし	なし	130	-
	SK433	平地面	楕円形	段台形	段状	1.80	0.40	0.55	なし	なし	130	-
	SK430	平地面	楕円形	段台形	段状	0.65	0.50	0.21	なし	なし	130	-
	SK449	平地面	溝状	V字溝	段状	2.10	0.30	0.28	土師器	なし	130	-
	SK759	平地面	楕円形	段台形	段状	0.65	0.90	0.25	土師器	なし	156	156
西区	SK501	東西斜面	円形	段台形	段台形	0.88	0.88	0.44	土師器 須恵器	なし	172	172
	SK547	東西斜面	不整楕円形	段台形	段状	1.56	0.58	0.44	なし	なし	173	173
	SK548	東西斜面	不整楕円形	段状	段状	2.30	1.17	0.17~0.30	なし	なし	173	175
	SK567	東西斜面	不整楕円形	段状	段状	1.50	1.10	0.10	なし	行より新	176	176
南区	SK604	平地面	不整楕円形	-	-	1.10	0.70	-	なし	なし	178	-

第9表 大溝跡観察表

区	遺構名	位置	方向	規模(□)				断面形	出土遺物	遺構関係	SS%	
				幅(延長)	上幅	下幅	深				平面	断面
西区	SD206	段台形	S-E	11.60	1.90~2.20	1.60~1.90	0.30~0.33	段台形	土師器 須恵器	なし	113	113
西区 一南	SD286a	平地面	S-E 不整長方形	北辺 37	2.00~2.90	1.20~1.90	0.50~0.80	段台形	土師器 須恵器	S1222・S1225・S1230・S1259・S1807・ S0234・S0252・S0801より新	115	115
	東辺 74								S0286・S1804・S0321・S0802・S0803・S0805より古	118	110	
	南辺 54									119	120	
	SD286b			南辺 68	2.10~2.70	0.50~1.50	0.30~0.50	段状	土師器 須恵器	S1222・S1225・S1230・S1259・S1807・S0234・S0252・ S0286・S0252・S0801・S0286aより新 S1804/S0321・S0802・S0803・S0805より古	115	115
南区	SD801	平地面	E-W	64.00	1.90~2.20	1.00~1.80	0.30~0.80	段台形	土師器	S0228・S1804・S0802・S0805より古	118	118
南区	SD354	段台形	S-E	8.70	1.90~2.30	1.50~1.70	0.11~0.23	段台形	土師器 須恵器	なし	128	128
南区	SD754	平地面	S-E	3.50	(1.70)	1.50	0.54	楕円形	土師器 須恵器 鉄鏝	SK757より新	157	157

第10表 溝跡観察表

区	遺構名	位置	方向	規模(m)				断面形	出土遺物	重要関係	測高		
				幅	深		深				平高	前高	
					上端部	下端部							
S1中	S28	内堀遺構	S-E	23.60	1.70~0.80	-	0.40	0.27	残土状況	なし	なし	14	-
	S29	内堀遺構	SW-S	3.00	0.85~1.00	0.50~0.80	0.15	残土状況	なし	なし	14	-	
	S30	内堀	SW-S	6.00	1.00~1.80	0.30	0.38	U字状	なし	なし	14	-	
	S31	内堀	E-W	3.60	0.35~0.40	0.15~0.20	0.09~0.14	残土状況	なし	なし	14	-	
	S32	内堀遺構	SW-S	6.00	0.30	0.50	0.03~0.10	残土状況	なし	なし	11	-	
S3中	S273	家屋跡	NE-S	12.00	0.90~1.20	0.30	0.30	遊歩形	土割跡	S277・S279より新 S274・S275より古	74	74	
	S274	家屋跡	NE-S	6.70	0.30~0.90	-	-	-	-	S277・S279・S273より新 S275より古	74	-	
	S275	家屋跡	NE-S	18.00	0.80~1.40	0.30~0.50	0.15	遊歩形	なし	S277・S279・S273・S274より新	74	74	
	S279	家屋跡	E-W	33.00	0.30~1.40	-	-	-	-	S273・S274・S275より古	74	-	
	S280	家屋跡	NE-S	28.00	0.60	0.30	0.10	残土状況	なし	S280・S281より新	60	-	
	S282	家屋跡	SW-S	5.50	0.40	0.20	0.03	残土状況	なし	なし	60	-	
	S283	家屋跡	SW-S	6.00	0.30	0.20	0.03~0.18	残土状況	なし	なし	60	-	
	S284	家屋跡	SW-S	2.50	0.32	0.20	0.30	U字状	土割跡	なし	なし	60	-
S287	家屋跡	S-W	1.40	0.15~0.24	0.08	0.03~0.05	U字状	なし	なし	2→ 溝 カマ ド	-	-	
S3東	S265	家屋跡	E-W・S-E	東西30 南北7.5	0.20~0.30	0.15	0.04~0.10	残土状況	なし	なし	なし	73	73
	S267	家屋跡	SW-S	3.20	0.20~0.30	0.12~0.18	0.03	残土状況	なし	なし	60	-	
	S269	家屋跡	S-E	4.90	0.20~0.45	0.20	0.26	遊歩形	なし	S269より新 S265・S266	60	-	
	S260	家屋跡	S-E	11.20	0.40~0.60	0.20~0.30	0.20	遊歩形	なし	S269より新 S265・S266	60	-	
	S269	家屋跡	E-W	4.00	0.30	-	-	-	-	S269より古 S265・S266	60	-	
	S270	家屋跡	SW-S	3.00	0.25~0.40	-	-	-	-	-	60	-	
	S2707	平塚田	S-E	16.10	0.45~1.10	-	-	-	-	S1304・S1303・S1306より新	75	-	
	S2707	平塚田	E-W	15.80	0.20~0.65	0.43	0.14	U字状	なし	なし	75	-	
S2中	S2208	倉庫跡	E-W	17.00	0.80~2.00	0.45	0.38	階段	土割跡	なし	なし	75	-
	S2209	平塚田	SE-SW	16.00	1.10~2.50	0.70~1.65	0.10~0.25	階段	土割跡	S1222より新	115	-	
S2西	S2271	平塚田	SE-SW	16.50	0.90~1.65	0.50~1.40	0.05~0.25	遊歩形	土割跡	S1222・S1225・S1230・S1250・S1807・ S2234・S2252・S2801・S2226より新	115	-	
	S2232	平塚田	S-E	2.10	0.28	-	-	-	-	なし	75	-	
	S2233	平塚田	S-E	3.60	0.16~0.25	0.10~0.13	0.06~0.10	残土状況	なし	なし	75	-	
	S2234	平塚田	S-E	3.30	0.11~0.30	0.04~0.20	0.05~0.19	残土状況	なし	S2228・S1804・S2021・S2023・S2803・S2805より古 S2532と重複	75	-	
	S2240	平塚田	E-W	5.00	0.33~0.45	0.25~0.30	0.10	残土状況	土割跡	なし	75	-	
S2252	平塚田	S-E	0.80	0.25	0.15	0.20	階段	なし	S2532・S2228・S1804・S2021・S2802・ S2803・S2805より古	75	-		
S2東	S2202	平塚田	S-E	10.50	0.65~0.75	0.30~0.45	0.17~0.20	遊歩形	なし	なし	112	112	
	S2225	平塚田	E-W	3.00	0.14~0.22	0.07~0.08	0.12~0.21	階段	残土状況	S1203より古	79	79	
	S2253	平塚田	E-W	4.10	0.30~0.34	0.17~0.14	0.13	残土状況	なし	なし	126	-	
S2西	S2413	平塚田	E-W・S-E	東西7 南北21	0.34~0.50	0.52~0.35	0.09~0.35	遊歩形	なし	S2413より新	130	-	
	S2437	平塚田	S-E	7.00	1.50~1.60	0.66~0.80	0.18	残土状況	土割跡 遊歩形	S1424より新 S2439より古	130	-	
S2北	S2664	遊歩形	E-W	14.00	1.00	0.70	0.05~0.17	遊歩形	近付 陶器類	なし	なし	160	-
	S2649	遊歩形	E-W	6.70	0.30~1.28	0.10~0.60	0.05~0.16	残土状況	なし	なし	160	-	
	S2649	遊歩形	S-E	8.10	0.44~0.60	0.28~0.44	0.20	U字状	なし	なし	160	-	
	S2655	遊歩形	E-W	11.70	0.30	0.30	0.10~0.13	階段	なし	S2656・S2657より古	177	177	
	S2656	遊歩形	E-W	22.30	0.40~0.50	0.15~0.3	0.08~0.2	階段	土割跡 遊歩形	S2656・S2657より新 S2657より古	177	177	
S2南	S2657	遊歩形	E-W	24.50	0.90~1.40	0.30~0.60	0.10~0.30	階段	土割跡 近付 陶器類	S2649・S2656・S2655・S2658より新	177	177	
	S2671	遊歩形	S-E	12.50	0.30~0.70	0.10~0.35	0.20	遊歩形	なし	なし	159	-	

第11表 井戸跡、円形周溝跡、性格不明遺構観察表

区	遺構名	位置	構造	形状				断面形	出土遺物	重要関係	測高			
				平面	縦断面	断面	長				深		平高	前高
											上端部	下端部		
S1南	S2623	家屋跡	性格不明	隅丸方形	残土状況	円形あり	3.30	-	3.00	0.13	土割跡 遊歩形 陶器類	S2600・S2607より新	59	59
	S2403	平塚田	井戸跡	円形	円形	円形	0.93	-	0.87	0.93	土割跡 遊歩形	なし	145	145
S2東	S2406	平塚田	円形周溝跡	階段	階段	平田	外周2.50 内周2.40	0.85~1.20	0.75~1.00	0.30~0.45	土割跡 遊歩形	S2440より新	149	149

写 真 图 版



六角遺跡の位置と周辺の遺跡



1. 青麻山展望台より北東に円田盆地を望む



2. 六角遺跡遠景（東から）



1. S1西区全景 (東から)



2. S1東区全景 (西から)



3. S1中区全景 (西から)



4. S1南区全景 (南から)



5. S1南区全景 (北から)



6. S1南区全景 (北西から)



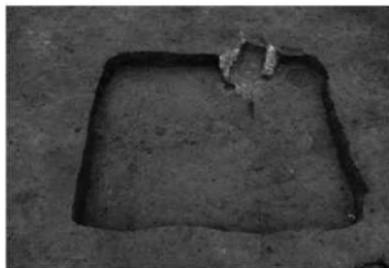
7. S1・S19 竪穴住居跡 (西から)



1. SI1カマド部分 (西から)



2. SI1床面遺物出土状況



3. SI2竪穴住居跡 (西から)



4. SI2カマド部分 (西から)



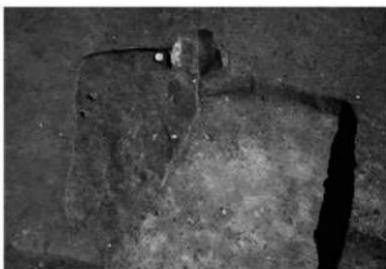
5. SI601竪穴住居跡 (南から)



6. SI601カマド部分 (南から)



7. SI601床下土坑 (南から)



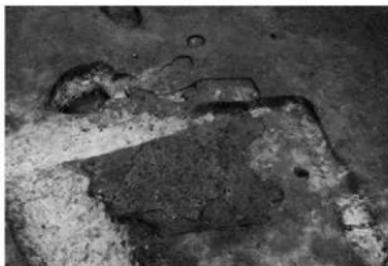
8. SI602竪穴住居跡(西から)



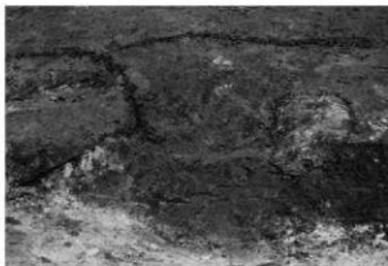
1. SI602カマド部分 (西から)



2. SI602カマド付近床面遺物出土状況 (西から)



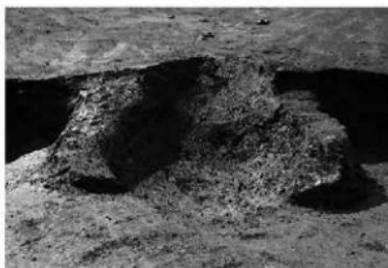
3. SI603竪穴住居跡 (南から)



4. SI603カマド部分 (南から)



5. SI609竪穴住居跡、SB615掘立柱建物跡 (南から)



6. SI609カマド部分 (北から)



7. SK621竪穴住居跡 (南から)



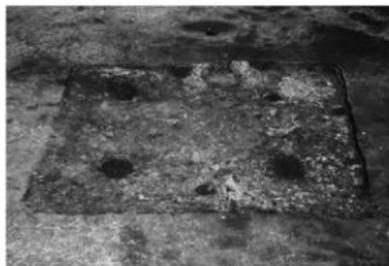
8. SI621カマド脇床面遺物出土状況 (南から)



1. SI621カマド部分 (南から)



2. SI633竪穴住居跡 (東から)



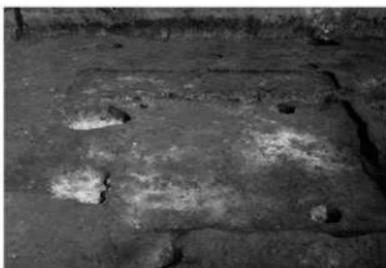
3. SI634竪穴住居跡 (南から)



4. SI634カマド部分 (南から)



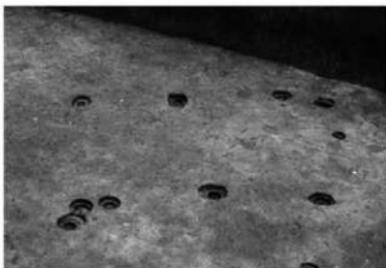
5. SI635竪穴住居跡 (西から)



6. SI645竪穴住居跡、SB643掘立柱建物跡 (南から)



7. SB11掘立柱建物跡 (東から)



8. SB12掘立柱建物跡 (北から)



1. SB616掘立柱建物跡 (南から)



2. SB636掘立柱建物跡 (南から)



3. SB650、SB657掘立柱建物跡 (南から)



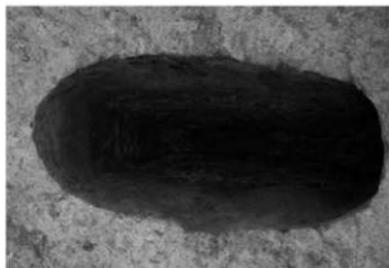
5. SK29落とし穴状土坑 (南から)



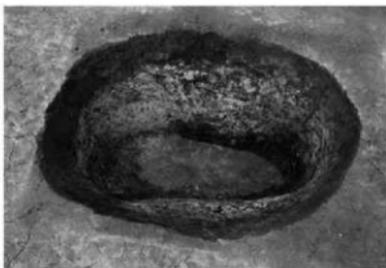
4. SB655掘立柱建物跡 (南から)



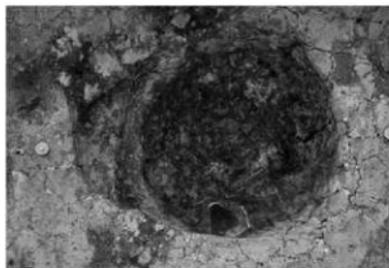
6. SK30落とし穴状土坑 (南から)



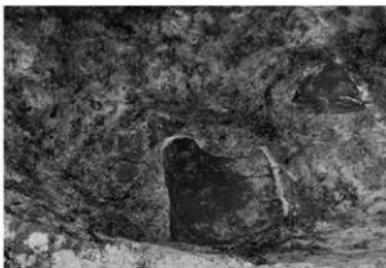
1. SK33落し穴状土坑（南から）



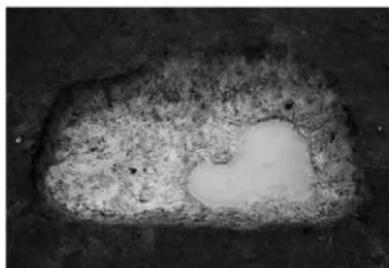
2. SK38落し穴状土坑（東から）



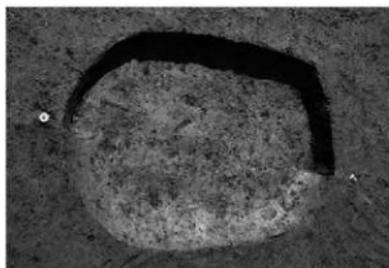
3. SK610土坑（東から）



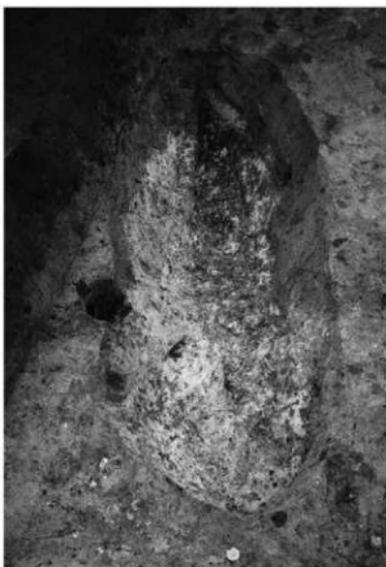
4. SK610遺物出土状況



5. SK619土坑（北から）



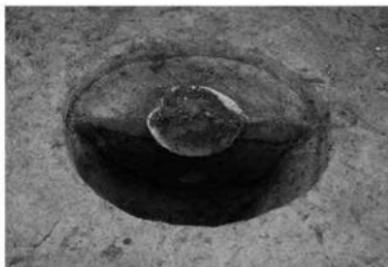
6. SK624土坑（北から）



8. SK626土坑（西から）



1. SK625土坑断面 (南から)



2. SK628土坑断面 (北から)



3. SX623性格不明遺構 (北から)



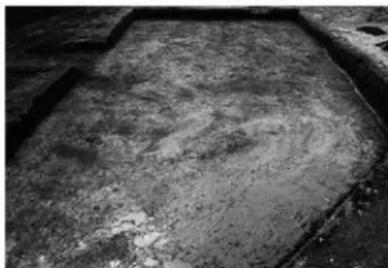
5. S2北区全景 (南から)



4. S2南区全景 (南から)



6. S2北区、S3西区西側全景 (北から)



7. S3西区東側全景 (東から)



1. S3西区全景 (西から)



2. S3中区全景 (西から)



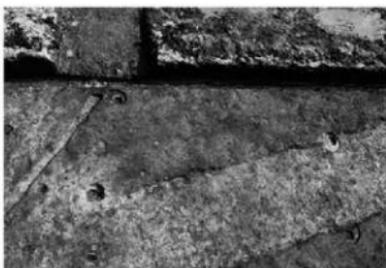
3. S3中区北側全景 (南から)



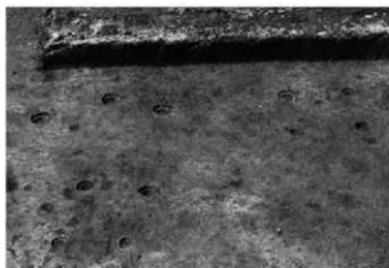
4. SI91竈穴住居跡 (東から)



5. SI91床面遺物出土状況



6. SB66掘立柱建物跡 (北から)



7. SB67掘立柱建物跡 (南から)



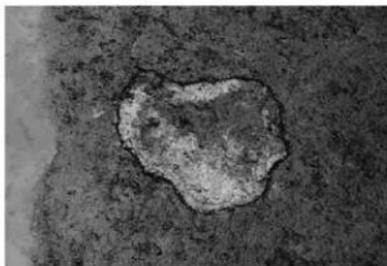
8. SB68掘立柱建物跡 (南から)



1. SB72掘立柱建物跡 (南から)



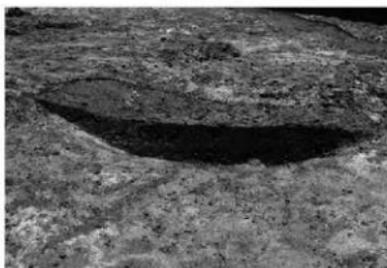
2. SK56土坑断面 (北から)



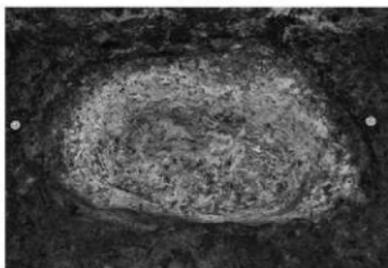
3. SK61土坑確認状況 (西から)



4. SK61遺物出土状況



5. SK64土坑断面 (南から)



6. SK81土坑 (南から)



7. SD55溝跡 (東から)



8. SD73、SD74、SD75溝跡 (東から)



1. N1南区全景 (南から)



2. N1北区全景 (南から)



3. N1北区全景 (北から)



4. SB306掘立柱建物跡 (西から)



5. SI303・304竪穴住居跡、SD307溝跡 (西から)



6. N2東区全景 (西から)



1. N2中区東側全景 (西から)



2. N2中区西側全景 (西から)



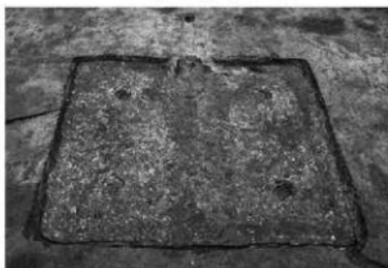
3. N2西区遺構確認状況 (西から)



4. N2西区全景 (西から)



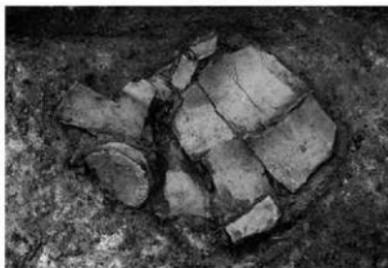
5. Si201a竪穴住居跡 (南から)



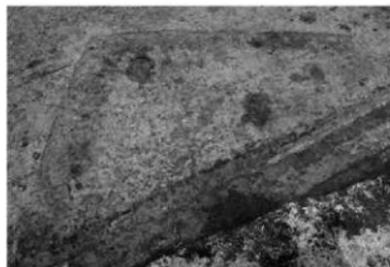
6. Si201b竪穴住居跡 (南から)



7. Si201bカマド部分 (南から)



8. Si201b床面遺物出土状況 (南から)



1. SI209竪穴住居跡（南から）



2. SI210竪穴住居跡（南東から）



3. SI210床面遺物出土状況



4. SI212竪穴住居跡（北から）



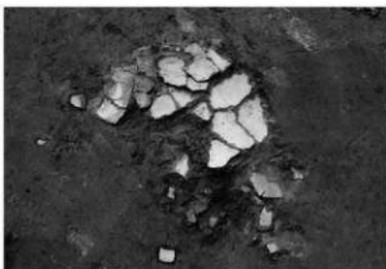
5. SI222竪穴住居跡（南から）



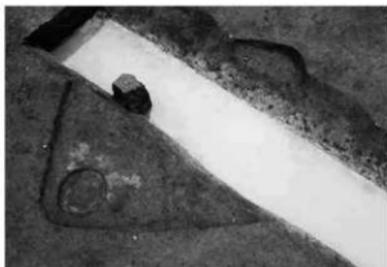
6. SI223竪穴住居跡（北から）



7. SI225竪穴住居跡（北から）



8. SI225遺物出土状況（東から）



1. SI230竪穴住居跡(東から)



SI230床面遺物出土状況



3. SI231竪穴住居跡(北から)



4. SI231 床面遺物出土状況 (1)



5. SI231 床面遺物出土状況 (2)



6. SI231 床面遺物出土状況 (3)



7. SI259竪穴住居跡,SD228a・b大溝跡(南から)



8. SI260竪穴住居跡(北から)



1. SB235掘立柱建物跡 (南から)



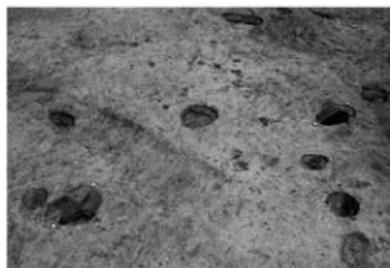
2. SB235a・b P2柱穴断面 (北から)



3. SB239掘立柱建物跡 (南から)



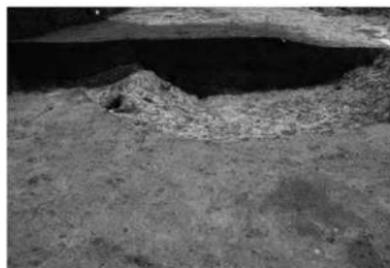
4. SB251掘立柱建物跡 (北から)



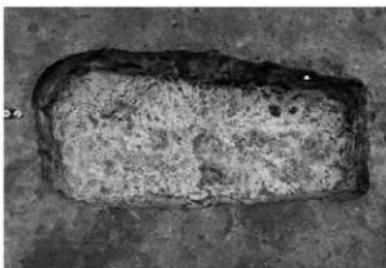
5. SB256掘立柱建物跡 (南から)



6. SK217落し穴状土坑 (北から)



7. SK224土坑断面 (西から)



8. SK236土坑 (北から)



1. SK243土坑 (北から)



2. SD202溝跡 (東から)



3. SD206大溝跡 (南から)



4. SD206遺物出土状況



5. SD228大溝跡、SD220・221溝跡 (東から)



6. SD228a・b大溝跡断面 (西から)



7. SD221、SD228断面 (北から)



1. N2南区13T SD228a・b,SD801大溝跡(東から)



2. N2南区7T SD228a・b,SD801大溝跡(西から)



4. N4南区全景(西から)



3. N4中区全景(南東から)



5. N4北区全景(北から)



6. N4北区西側全景(東から)



1. SI701竪穴住居跡（東から）



2. SI701床面焼土検出状況（東から）



3. SI701床面遺物出土状況



4. SK703落とし穴状土坑（北から）



5. N5区全景（南から）



6. N6西区東側全景（西から）



1. N6西区東側全景 (東から)



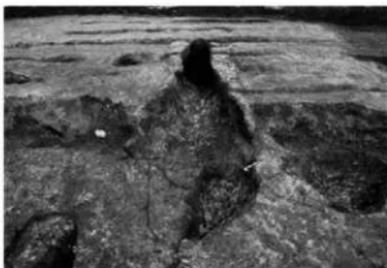
2. N6西区西側全景 (西から)



3. N6東区全景 (西から)



4. SI424竪穴住居跡 (南から)



5. SI424竪穴カマド部分 (南から)



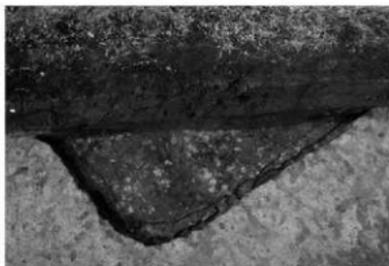
1. SI424煙道部分 (東から)



2. SI424床面遺物出土状況 (南から)



3. SI424床下土坑 (西から)



4. SI443竪穴住居跡 (南から)



5. SB402掘立柱建物跡 (南から)



6. SB414掘立柱建物跡 (南から)



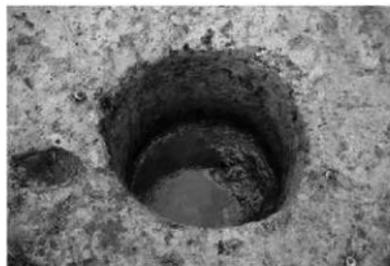
7. SB436掘立柱建物跡 (西から)



1. SB432掘立柱建物跡 (西から)



2. SA431柱列跡 (南から)



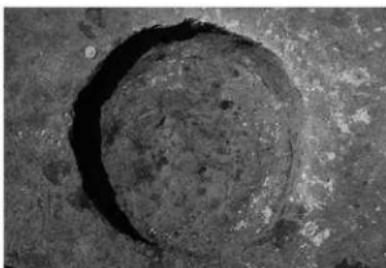
3. SE403井戸跡 (南から)



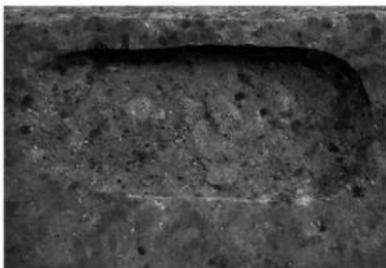
4. SK409落とし穴状土坑 (南から)



5. SK419落とし穴状土坑 (東から)



6. SK418土坑 (南から)



7. SK423土坑 (北から)



1. SX406円形周溝跡 (南から)



2. SX406断面 (西から)



3. N8東区全景 (東から)



4. N8西区東側全景 (東から)



5. N8西区西側全景 (東から)



1. SI751竪穴住居跡（北から）



2. SI753竪穴住居跡（西から）



3. SI753カマド部分（西から）



4. SI755竪穴住居跡（北から）



5. N9南区全景（西から）



6. N9区中区全景（南から）



7. N9中区南側全景（南から）



8. N9中区中央部全景（南から）



1. N9中区北側全景 (南から)



2. N9北区南側 (北から)



3. N9北区北側全景 (東から)



4. SI553竪穴住居跡 (南から)



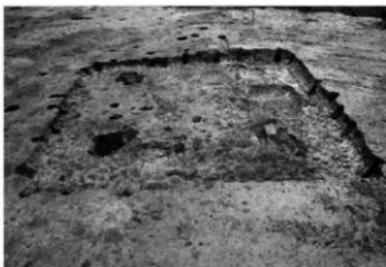
5. SI554c竪穴住居跡 (南から)



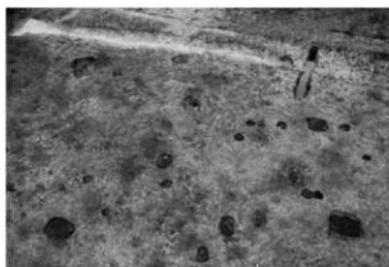
6. SI554cカマド部分 (南から)



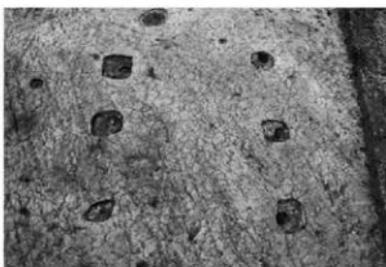
1. SI554c周溝とSI554b壁柱穴P6断面(東から)



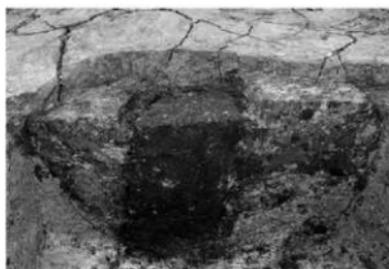
2. SI554完掘状況(南から)



3. SB569掘立柱建物跡(南から)



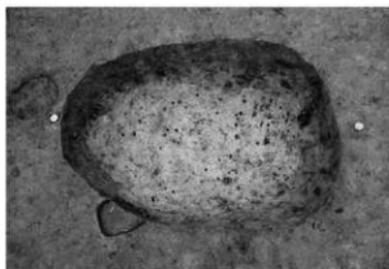
4. SB570掘立柱建物跡(南から)



5. SB570 P3断面(東から)



6. SA568柱列跡(南から)



7. SK547土坑(南から)



8. SK548土坑(南から)



1. N10区全景 (南から)



2. N10区全景 (北から)



3. S1901 - S1902 竪穴住居跡 (南から)



4. S1901 確認状況 (東から)



5. SA903 柱列跡 (北から)

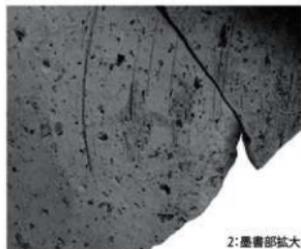


1~3:S11 4:S12 5~7:S19

(54/1/3)



1b: 墨書部拡大



2: 墨書部拡大



1~5: S1601

(5/1/3)



1~3: S1602 4: S1609 5~8: S1621

(5/4/1/3)

S1602・609・621 整穴住居跡出土土器



1:SI621 2:SI633 3:SK610 4・5:SK628 6~8:SI91

(5a/1/3, 5b:任意)

SI91・SI621・SI633竪穴住居跡、SK610・SK628土坑出土土器



1: S1201b 2~5: S1210

(5/4/3)

S1201b・S1210竪穴住居跡出土土器



1: S1222 2~4: S1223 5~8: S1225 9・10: S1230

(5/1/3)

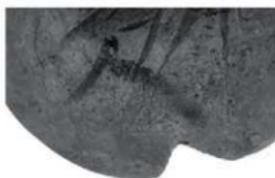
S1222・S1223・S1225・S1230 竪穴住居跡出土土器



1~5:SI231

(54/1/3)

SI231 竪穴住居跡出土土器



4b: 高台内面の墨書部拡大

1: S0206 2: S0228 3: SK224 4・5: S0228b (5年1/3)

SD206・SD228a・SD228b大溝跡、SK224土坑出土土器



1:SI811 2~6:SI701 7~10:SI424

(5/1/3)



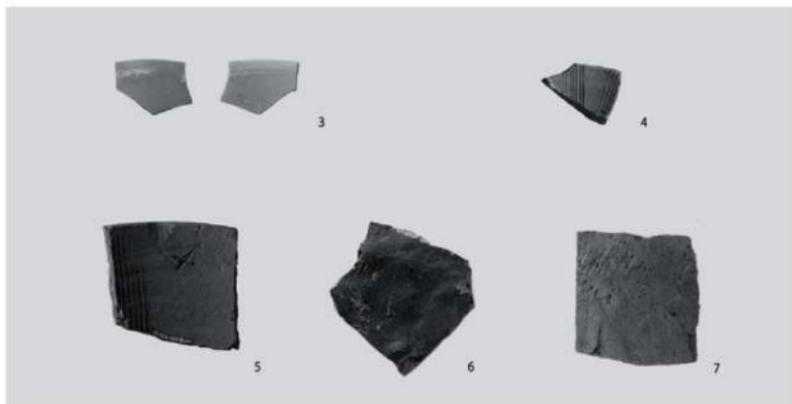
1~5: S1424 6・7: S1753 8: S1755 9: SK759 10: S1554 (5年1/3)

S1424・S1753・S1755・S1554 竪穴住居跡、SK759 土坑出土土器



1:S1北 T1遺種 2:S3西 表土 3:N2西 遺種 4:N2中央 遺種 5:N2中央 砂土 6~8:N2南 遺種 9:N5区 表土 10:N9 表土

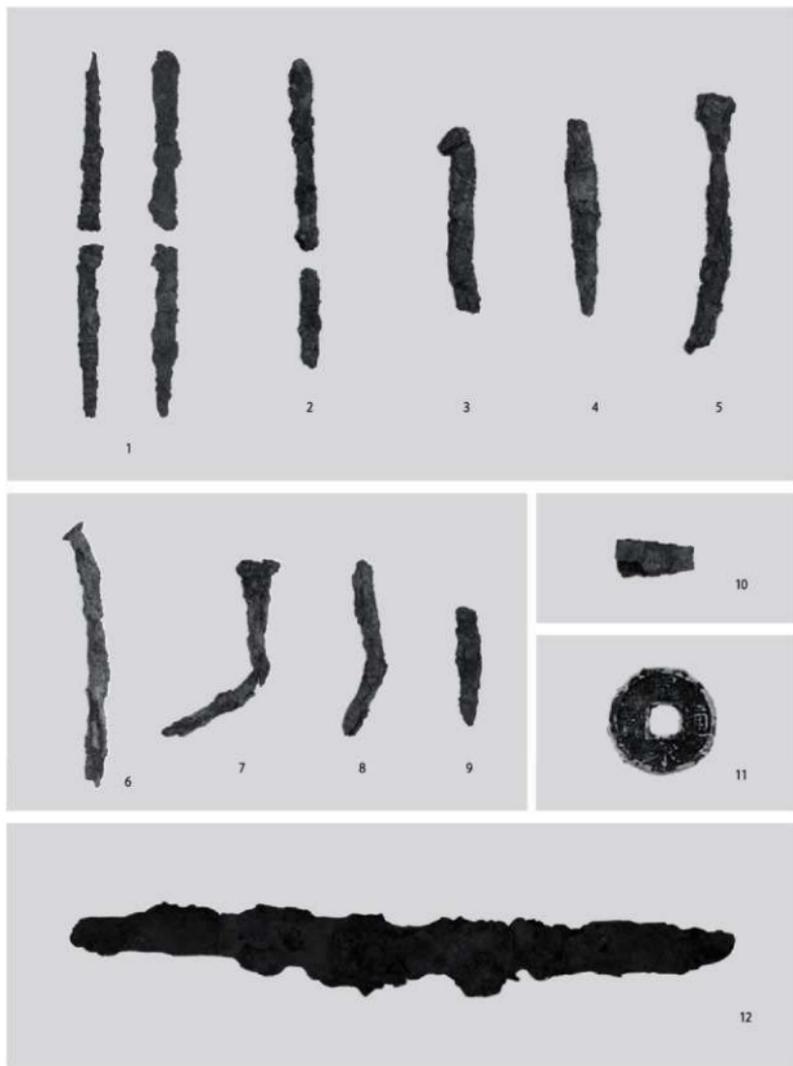
(S4r1/3)



1:S1424 2:S1西 カツ 3:N2南 遺確 4:S1南 カツ 5:S1西 カツ 6:S3西 遺確 7:N4南 遺確 8:S1南 カツ 9:S1西 III層

(S=1/3)

瓦・中世陶器・近世陶磁器



1:S1210 2:S0754 3・4:S1755 5・10:S1755 6~8:N9中 通確 9:S1南 通確 11:N2南 通確 12:961

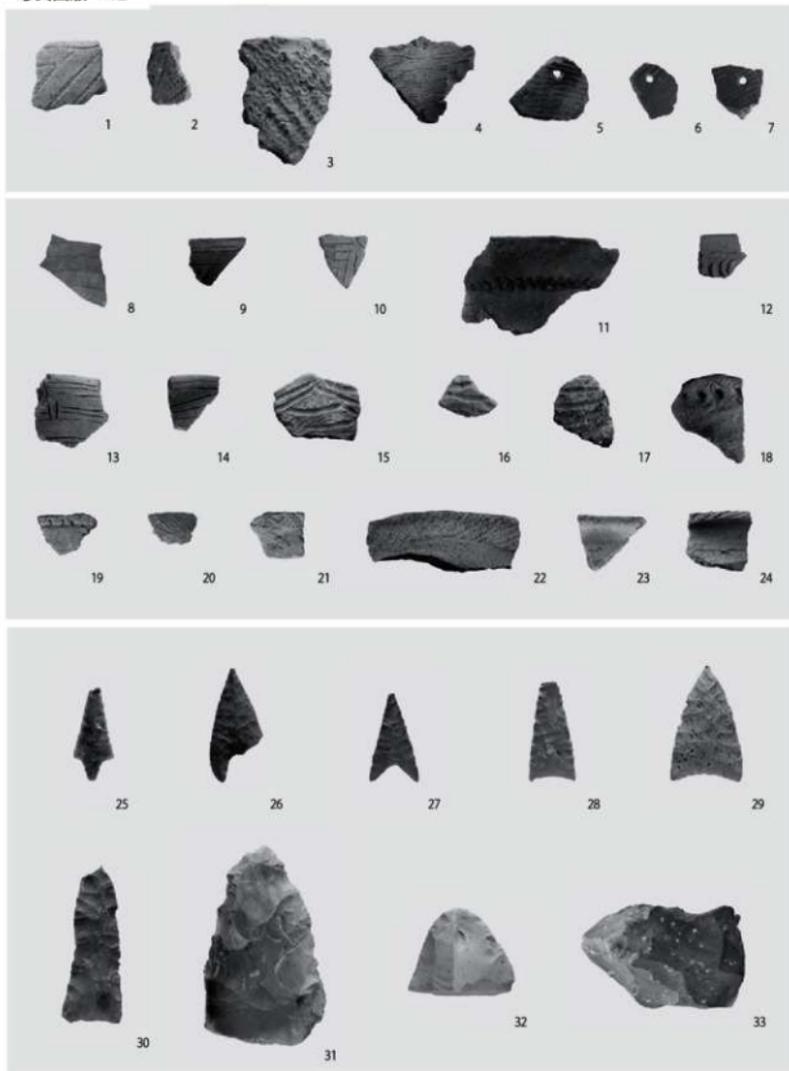
(1~10:S \approx 2/3, 11:S \approx 1/1, 12:S \approx 1/3)



1:N4南 通確 2:SI424 3:SI9南 通確 4:N2南 通確 5:SI601 6・7:SI755

(S#2/3)

転用砥・砥石



1:N9中 排土 2:S1554 3:N9西 表土 4・13・20・23:S1701 5~7:S1223 8:S12 9:N4中 P705 10・15:S1南 遺確 11:S1753 12:S1西 表土
 14:N4中 遺確 16:N9西 遺確 17・19:N2東 遺確 18:S1201b 21:N2南 遺確 22:S1230 24:S9615 25:S538 26・29:S1南 遺確 27:S1209
 28:S1N2南 遺確 30:S1西 遺確 31:N2南 遺確 32:S1609 33:S1西 排土
 (1~24:S≒1/3, 25~33:S≒2/3)

【 解 説 】

かけがえない遺跡を未来へ

私たちの足もとには、昔の人のびとが暮らした家の跡や、そこで使われた土器や石器などの道具が埋まっている場所があります。このように、昔の人のびとの生活の跡が残されている場所を「遺跡」と呼んでいます。

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた蔵王町には、私たちの祖先が残した多くの遺跡があります。当時の人のびとがどのようにして郷土蔵王に住み着き、稲作はいつから始めたのか。彼らは日々の生活をどのように送り、何歳まで生きたのか。興味の尽きないテーマです。

遺跡を調べることで昔の人のびとの知恵に学び、私たちの歴史や文化をよく知ることは、私たちの生活を見直したり、将来を考えるためにとても大切な役割を果たしています。そのためには、長い歴史を経て今に伝えられている大切な遺跡を、未来の子どもの世代へ守り伝えていかなくてはなりません。

遺跡を記録に残すための発掘調査

一度壊れた遺跡は、二度と元に戻すことができません。かけがえない遺跡を未来へ残すためには、そのままで保存することが望ましいのです。ところが、いまの私たちの生活に必要な土木工事などによって、どうしても遺跡が壊れてしまうことがあります。このような時には、工事をする前にそこにどのような遺跡が残されていたのかを調べ、その様子を写真や図面に記録するために、発掘調査を行います。

六角遺跡のある小村崎地区の円田盆地では、水田を使いやすく作り変えるほ場整備工事が計画されました。できるだけ遺跡を壊さずに水田を作り変えるために、地元地権者の皆さんや宮城県大河原地方振興事務所ではたくさんの工夫をしました。それでも、どうしても遺跡が壊れてしまう部分では、発掘調査をして記録を残すことになりました。発掘調査では、たくさんの発掘作業員の皆さんが汗を流しました。このように、たくさんの人の努力によって、六角遺跡の記録を残すことができたのです。

六角遺跡から見てきた郷土の歴史

ここに刊行した「六角遺跡発掘調査報告書」を紐解くと、蔵王の人のびとの歴史であり、さらにはエミシと呼ばれた東北地方の人のびとと大和朝廷とのダイナミックな古代史の1ページを知らせてくれる重要な遺跡だったことが分かります。六角遺跡は蔵王町の東部、円田盆地の北の端から張り出した低くならかな丘の上にあります。六角遺跡の「六角」という地名は、丘の上にある六つの顔をもった「六角地藏」にちなんだものだそうです。さて、その「六角地藏の丘」の歴史をたどってみましょう。

今からおよそ3000年から5000年ほど前の縄文時代、六角地藏の丘のまわりは湿原のような状態でした。水辺には多くの動物が集まったのでしょ、丘のいたるところにシカやイノシシを捕らえるための落とし穴が掘られました。六角地藏の丘は、狩猟場として使われていたのです。落とし穴は深さが2メートル近いもの



発掘作業風景（丸く見えるのは建物の柱の跡です）



発掘作業風景（右側は住居跡、手前は落とし穴の跡です）

もありました。スコップやツルハシのない時代に、いったいどのようにして掘ったのかと思うほどです。同じ頃、高木丘陵とよばれる円田地区の丘の上にはいくつものムラが作られていました。六角地藏の丘で捕らえた獲物を手に、子どもたちの待つムラへ帰る人びとの姿が目に見えそうです。

さて、今からおよそ1500年ほど前の古墳時代になると、六角地藏の丘にもムラが作られました。丘の上のいちばん見晴らしのよい場所に、いくつもの家がならんで建てられたのです。円田盆地の周辺には弥生時代からの遺跡も多く、蔵王町内でも早くから稲作が営まれた地域だったようです。今回の発掘調査で水田の跡は見つかりませんが、天然の湿地を利用した稲作が行なわれていたのかもしれない。

さらに時が過ぎて、今からおよそ1300年ほど前の飛鳥～奈良時代になると、六角地藏の丘にはいくつかの大きな溝が掘られました。この溝は、いったい何のために掘られたのでしょうか。水路ではなかったようです。というのも、溝は丘の上の平らな部分を四角形に取り囲んでいるだけで、どこかへ水を流すようなつくりにはなっていませんでした。発掘現場では何人も調査員が頭をひねりましたが、この溝がどのような目的で掘られたものか、その答えを見つけることはできませんでした。今回発掘せずに保存された場所には、この謎を解く鍵が今もひっそりと眠っているのかもしれない。

ところで、この溝や、この頃の家の跡からは、当時のこのあたりの人びとが用いていたのは少し違ったデザインの土器が出土しました。この土器は、遠く関東地方の人びとの製作技法で作られたものようです。そして土器だけでなく、家の中で調理をしたカマドもやはり関東地方の人びととおなじ造りでした。この頃、東北地方に暮らしていたのは、エミシと呼ばれた人びとです。考古学の最近の研究結果によれば、飛鳥～奈良時代にかけて大和朝廷がその勢力を拡大させるにあたり、エミシの住んでいた東北地方へ関東地方からの移民が送り込まれたことが分かっています。六角地藏の丘にも、移民の人びとのムラが作られていたのでしょうか。そして、この土地の人びととの間には、どのような交流があったのでしょうか。

これまでの古代史研究では、宮城県南部の亶理地方までは比較的早くから大和朝廷に同化していたことが分かっていますが、刈田地方の実態はまだ明らかになっていません。六角地藏の丘に関東地方の人びとが移住してきたことと、丘の上を四角く取り囲む大溝が掘られたことがどのように関係しているのか。今後の古代史研究に一石を投じることになるのかもしれない。

その後、今から1200年ほど前の平安時代になると、六角地藏の丘には二つのムラが作られました。さらに時が過ぎて江戸時代には、何軒かの屋敷が作られたようです。このように、六角地藏の丘には、縄文時代から現在にいたるまで幾層にもわたって人びとの生活の痕跡が残されていることが分かりました。

ここに記録された六角遺跡の考古学的成果は、地域の歴史を解き明かす鍵としてとても貴重なものです。



落し穴跡の調査（深さ2mを超えるものもありました）



住居跡の調査（床に置かれたまま土器が出土しました）

報告書抄録

ふりがな	ろっかくいせき							
書名	六角遺跡							
副書名								
巻・次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	鈴木 雅							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒989-0821 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10 Ⅱ 0224-33-3008 Fax0224-33-3831							
発行年月日	西暦2008年(平成20年)3月21日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	" ' "	" ' "			
六角遺跡	宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字六角地蔵ほか地内	43010	05112	38° 7' 31"	140° 41' 38"	2006.5.15 ～11.24 2007.8.21 ～9.24	約25,800㎡ 事前調査分 約16,700㎡ 確認調査分 約9,100㎡	経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業・円田2期地区)に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
六角遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安 中世 近世	竪穴住居跡 52軒 掘立柱建物跡 29棟 柱列跡 10条 井戸跡 1基 落し穴状土坑 39基 土坑 71基 大溝跡 6条 溝跡 44条 円形周溝跡 1基 性格不明遺構 1基 柱穴 多数	土師器 ロクロ土師器 須恵器 瓦 土製品(ミニチュア土器) 石製品(砥石) 金属製品(鉄鏝・刀子) 縄文土器 弥生土器 石器 中世陶器 近世陶磁器 古銭 (総量コンテナ約35箱分)				
要約	縄文時代の落し穴状土坑群、古墳時代前期埴釜式期・7世紀中頃～後半・8世紀前半～中頃・8世紀末～9世紀中葉の集落跡、中・近世の掘立柱建物跡群などを確認した。7世紀後半～8世紀前半の竪穴住居跡には関東系土師器・関東型カマドを伴うものがある。また、8世紀前半頃とみられる大溝跡による区画が確認された。各時期の遺構の分布状況と占地の様相にはそれぞれ違いが認められ、沢地の埋没など地形の形成過程および当時の人びとの生業形態の変化、あるいは政治的な要因などによって集落が変遷している可能性が想定される。							

蔵王町文化財調査報告書 第6集

六角遺跡

—経営体育成基盤整備事業（県営球場整備事業）に伴う緊急発掘調査—

2008年（平成20年）3月21日 印刷・発行

発行 蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北10

T E L 0224-33-3008 F A X 0224-33-3831

印刷 綱津田印刷

〒989-1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町13-5

T E L 0224-52-5550 F A X 0224-52-3097
